

勇者王ガオガイガーR

SS_TAKERU

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1997年から1998年にかけて、ANN系列で放送されたSFロボットアニメ『勇者王ガオガイガー』。

この物語は、1998年1月31日に放送された最終回『いつか星の海で』を分岐点とするもう一つの続編です。

OVA『勇者王ガオガイガーFINAL』及び現在Web連載中の『覇界王くガオガイガー対ベターマンく』とは別の可能性：パラレルワールドと解釈していただけるとありがたいです。

某HP及びPixivにて連載しておりましたが、HPが諸々の事情から閉鎖された

為此ちらで掲載することにしました。

近日中にP i x i vに掲載した分は削除する予定です。※P i x i v掲載分は削除しました。

拙い出来ではありますが、お楽しみいただければ幸いです。

目次

プロローグ

— EPISODE—00—プロローグ

1

本編

— EPISODE—01—緑と赤そし

20

— EPISODE—02—緑と赤そし

42

— EPISODE—03—勇者王再誕

68

— EPISODE—04—着装(前編)

120

— EPISODE—05—着装(後編)

162

— EPISODE—06—疾走

204

— EPISODE—07—復活

254

— EPISODE—08—飛翔

310

公式外伝

— EPISODE—8.2—異世界

からの迷い人

— EPISODE—8.3—悪魔に

なったザンダクロス

379

— E P I S O D E — 8 . 4 らザンダク

ロス奪還作戦く 411

主題歌&挿入歌

主題歌&挿入歌 461

設定資料集

キャラクター編その1 466

キャラクター編その2 480

メカニック編その1 491

メカニック編その2 551

メカニック編その3 564

最新

メカニック編その4 579

プロローグ

—EPISODE—00〜プロローグ〜

♪ザン！♪（GGGのマーク）

その星は、宇宙に浮かぶ数多の星の中でも有数の輝きを秘めた星だった。

豊かな自然と高度な技術が融合し、文字通りの理想郷が築かれていた。だが、今は違う。

白を基調にして整然と並んでいた美しい建物が、業火に包まれ燃えている。

無数の機動兵器だった物が屑鉄同然の姿で大地に散乱し、それを踏み潰しながら鋼の魔人が破壊の限りをつくす。

逃げ惑う人々も突如出現した人間サイズの魔人によって無残に虐殺されていく。

宇宙より飛来した33の悪魔とそれに従う10万を超える鋼の魔人。

その猛威によって、理想郷は僅か1週間足らずで滅びの時を迎えようとしていた。

滅びの時が迫る中、火の手が上がり始めた王宮。その通路を胸に1人の少女をしつかりと抱きかかえた男が駆け抜ける。

「嫌よー… 離してー！」

「姫様、どうかおわかりください！ 星を護りし3体の聖獣機も敗れ、王子の安否もわからぬ今、姫だけはなんとしてでもこの星から脱出させよ。それが陛下の厳命なのです！」

「父上や母上、兄上……皆を置いて私だけ逃げるなんて絶対に嫌！ お願い！ 引き返して!!」

涙を流しながら、手足を滅茶苦茶に振り回す少女。直後、爆音が木霊し、大きな揺れと共に少し前走り抜けた通路の天井が崩落した。

「王宮の陥落も時間の問題か……」

男は微かに眩き、少女を抱く力を強める。様子を窺いながら前方に進み出したが、暫くしたところで再度爆音と大きな揺れに襲われた。その時――

「父上！ 母上！ 兄上！――」

少女が年相応の小柄な体からは想像も出来ない程の力で、男の腕から抜け出した。そのまま走り出そうとするが――

「姫様！ なりません！」

男がそうはさせなかった。

「お願い！ 行かせて!!」

「姫様……お許しを！」

尚も暴れる少女に男は一言詫び、その胸に拳を入れる。

「うっ……」

「申し訳ありません。ですが、私にはこうするしかないのです……」

男は苦しうに眉を寄せながら、意識を失った少女を抱え、再度走りだした。

王宮の地下格納庫へと辿り着いた男は、そこに係留されていた大型宇宙船へと躊躇いなく乗り込む。

「この星に残された唯一の高速戦闘艦。これなら追っ手も振り切れる筈……」

少女を個室のベッドへ寝かせると、素早くブリッジへと移動し、手早く船を起動させていく。

やがて、メインモニターに地上の光景が映し出された。

「これが、繁栄を極めたアスタリアか……」

地上は文字通り地獄と化していた。大地は見渡す限り焦土となり、生命の鼓動も感じられなかった。

男は悔しさに歯を食いしばりながらも、メインレバーを引いた。直後、足下に振動が伝わり始める。宇宙船が完全起動したのだ。

「……あとは最終ロックを解除するだけだ」

男はそう呟くと船から降り、外部のコンソールを操作し始めた。

少女が目覚めた時には宇宙船の発進準備は全て終わっており、発進まで数分を残すのみとなっていた。

「……は……ッ！ アイアス！」

ベッドから降り、宇宙船のハッチへと走る少女。だが、ハッチは既に硬く閉ざされていた。

「アイアス！ アイアス!!」

ハッチを強く叩きながら、自分をここまで連れて来た男の名を呼ぶ少女。ハッチ一枚隔てた先にアイアスはいた。

「姫様、申し訳ありません。陛下の厳命とはいえ、このまま私だけが逃げるわけにはいきません。生き残った部下達は、今もあの機械の悪魔達と戦っているでしょうし、陛下も……」

そこで言葉をつまらせたが、首を振って少女を見つめた。

「どうか行かせて下さい。私は武人、戦うのが役目なのです。例え敵わずとも……せめて奴らに一太刀……我が儘をお許しください」

片膝を床につくと、アイアスは深く頭を下げた。

言葉を失った少女は、その頬から涙を零す。

「アイアス……」

震える唇から搾り出すように呟いた名前は、掠れてはつきりとは聞こえない。それでも足元の彼は自分を見上げ、真っ直ぐに見つめてきた。そして――

「「「ゾオンダアアアア!!」」」

爆音と共に硬く閉ざされていた格納庫の扉は破られ、機械の悪魔『ゾンダー』の魔の手が迫ってきた。

「姫様……おさらばでございます!!」

アイアスのその言葉に答えるように宇宙船のエンジンに火が灯る。そしてその巨大な船体を空へと浮かべ、飛び立っていった。この星唯一の生き残りである少女を乗せて……。

「姫様……どうか希望を捨てず……生き抜いてください」

宇宙船を見送ったアイアスは、静かに後を向いた。

「「「ゾオンダアアアア!!」」」

そこには数百体ものゾンダーが、アイアスを取り囲むように待ち構えている。

「フツ……」が武人の……死に場所か……1体でも多く、道連れにさせてもらおうぞ!!」

アイアスは腰に装備していた ブラスソード 剣を抜き――

「うおおおおおおおおつ!!」

咆哮と共に突進した。

数時間後、惑星アスタリアの機界昇華は……完了した。

—EPISODE—00

〔プロローグ〕（タイトルコール）

無音の宇宙。その静寂は一瞬で破られた。突如発生したESウィンドウから現れる無数の『城』。真空の宇宙、音など聞こえない筈。しかし、重い音を響かせてゆつくりとゆつくりと動く。

無数に出てくる『城』は徐々に宇宙を埋め尽くしていく。それは煌めく恒星と正反対の紫色の光を放つ巨大戦艦『機界城』である。それらはこの宇宙空間には滑稽なほど不釣り合いに見えた。

今、全宇宙から急速に生命の存在が消えつつある。必然たる絶滅、星の寿命、天変地異……これら生命として避けられない理由ではない。

機界生命体『ゾンダー』の侵食。ありとあらゆる宇宙の生命達が、ゾンダー達に機界昇華され続けていた。

「城達よ」

『機界城』達の間にも、重く厳格な声が響いた。気がつくくと城達を中心に1人の男が座していた。素顔は仮面に隠れ、見る事が出来ない。

「城達よ。我らが蜂起してから既に100以上の銀河を昇華した。全宇宙を掌握する日も近いであろう」

その言葉に機界城はまるで喜んでいるかのように震えた。

声の主は『機界皇帝インフェルノ』。無限の可能性を秘めた宇宙でさえも、その誕生を予測できなかった機界生命体『ゾンダー』。その『ゾンダー』が進化して誕生した『機界新種』。その『機界新種』の頂点に立つ者がこのインフェルノである。インフェルノは甘美な口調で言う。

「忌むべきはマイナス思念を撒き散らし、全宇宙に破滅と混沌を導く者…生命体である。我等は必ずや全宇宙の生命体を機界昇華し、真の平和でこの無限の空間を包むのだ」

インフェルノの声は穏やかであった。それが余計に冷酷な印象を強めている。城達は文字通り信号のように返答した。

「全ては皇帝陛下の意のままに」

インフェルノについて解っている事は2つ。1つは全宇宙の生命体を機界昇華する

という目的を持っている事。2つ目はその目標を達成するのに 十分すぎる『機界城』という戦力を保有している事だった。

『機界城』はインフェルノが昇華した惑星から鉤脈を根こそぎ掘り起こし、それらの鉤物質源から独自に物質を生成し、機動端末『パスター』を埋め込んだ量産型宇宙戦艦である。

『機界城』はそれ自身が意識と高い知能、驚異的な戦闘能力を持ち、機界生命体として独立しているのだ。そして、彼らはインフェルノを宇宙の王として崇め、忠誠を誓っている。また自艦の中にゾンダーメタルプラントを持っており、城から吐き出された無数のゾンダーメタルは、宇宙に住む多くの生命体を苦しめ、破壊し、そして悲鳴ごと飲み込んでいった…。

インフェルノは話を続ける。

「次なる攻撃目標は太陽系第3惑星…地球だ。この星には我等が偉大なる祖先『Zマスタール』を倒した勇者がいる」

城達は黙って話を聞いていた。インフェルノは力強い調子で話を続ける。

「だが、恐れる事は無い！ 確かに我等が祖先Zマスタールは強大な力を持っていた。しかし、我等にはそれを遥かに凌駕する力がある!!」

城達はその声に応えるように震えた。

「マイナス思念に支配され、あらゆる面で我等に劣る生命体に我等が敗れるか？ 否！
断じて否！ 我等こそが宇宙の真の支配者！ 我等こそが神！！ 我等こそがこの大
宇宙に存在する資格を持つのだ！！」

その声に反応し城達は歓喜した。皇帝陛下万歳と言う声も聞こえる。

インフェルノは歓声に答えながらも1基の機界城を呼び寄せた。

「機界城J—55よ」

「ははっ！」

「お前に地球攻略を任せる」

「お任せ下さい！！」

J—55と呼ばれた機界城は自らに大役が与えられた幸運に歓喜した。逆にイン
フェルノは仮面の奥で冷ややかな視線を浴びせていた。

(使い捨ての雑兵が…何を喜んでいる)

インフェルノにとって、機界城等使い捨ての道具に過ぎない。機界城1つで地球を昇
華できればそれで良し、勇者達に打ち倒されれば、新しい機界城を送り込めばいいと考
えていた。

いずれにせよ機界城J—55は指令を受けるとすぐに地球へ向けて移動を開始した。

機界城の接近を最初に察知したのは冥王星探査衛星・G—DXだった。2009年から冥王星周回軌道に入り、NASAに冥王星の様々な情報を送信し続けていたが、ESウインドウの出現を敏感に察知した。

西洋の古城風の戦艦が猛進する様子の映像はすぐにNASAを通じてGGGの本拠地オービットベースに送信された。送信を終えた次の瞬間、G—DXは機界城のビーム攻撃を受け、完全に破壊された。

「火星軌道上のESウインドウより、飛行物体を確認!!」

「飛行物体より素粒子Z0を大量感知!!」

「衛星フォボス、破壊されました!!」

次々とする報告で、メインオーダールームは一気に慌ただしくなった。世界各国のGG支部にも緊張が走る。

ESウインドウから姿を現した機界城は火星の衛星、フォボスとダイモスを破壊した。自らの戦闘能力を誇示しているようだ。火星軌道上の監視衛星も次々と破壊されていく。その光景をモニター越しに見ながら、GGG長官大河幸太郎は苦々しく呟いた。

「ついに来たか…」

覚悟はしていた。5年前、東京に機界新種が出現した時から…ギャレオンと護少年が宇宙へ旅立った時から。

しかし、自らの予想を上回る戦闘能力で、地球から遠くは離れていない火星の衛星をいとも簡単に消し去っている。大河は機界城の驚異的な力に眉を寄せた。額に脂汗が浮かんでいる。しかし、大河は額の汗を振り払い宣言した。

「現時点を持って、飛行物体を…『ゾンダーキャッスル』と認定呼称する!! 火星軌道上の全戦闘衛星を起動! ゾンダーキャッスルを殲滅せよ!!」

「了解。全戦闘衛星を起動します」

大河の言葉を聞いた猿頭寺はキーボードを操作し、火星軌道上に配置された数十機の戦闘衛星を起動させた。エンジンの起動音と共に機体表面に付着していた氷が溶け、戦闘衛星はシャープな容姿を露にする。

戦闘衛星は無人機ながら、荷電粒子砲2門とミサイル4基を装備した高性能の宇宙戦闘機であった。

数十門の砲門が一斉に機界城に向けられ、ビームが発射された。だが、機界城の巨体には傷一つつけることが出来ない。続いて百数十発のミサイルが発射されるが効果がない。代わりに機界城の射出口から無数の人型機動兵器が射出された。

ゴツゴツしたボディと丸い大きな一つ目を持ち、両腕がブレードになっている。まさに破壊と言う機能だけを迫及したような姿と言えた。

「なんと!?! あのような物まで持ち合わせていたとは…」

「射出された人型機動兵器からも素粒子Z0を大量確認!」

「巢を守る兵隊蟻の群れ…さしずめ『ゾンダーレギオン』といったところか…!」

メインオーダールームの衝撃をよそに、ゾンダーレギオン達は戦闘衛星に襲いかかった。戦闘衛星も迎撃する。

閃光と爆発音と爆解した破片が宇宙空間に激しく飛びかった。戦闘衛星の数だけ映し出されたモニター画面が、ひとつ、またひとつと砂嵐の映像に変わる。そしてバトルは10分ほどであっけなく終わった。ノイズと共に命がポツリと呟く。

「戦闘衛星…全機撃墜されました」

誰もが口を開けなかった。火星軌道上では戦力が遠隔操作の戦闘衛星しかなかったとはいえ、これほど戦闘能力に差があるとは。この城が地球軌道上、もしくは地球上に出現したら…。誰もが戦慄せざるを得なかった。

火星軌道上に破壊された衛星の破片が無残に漂っている。その破片を蹴散らすように航行する機界城。中枢であるパズダーの脳裏には、火の海に包まれた地球のビジョンがはつきりと写っていた。

機界城が移動を再開した頃、メインオーダーームでは機界新種に対しての対策会議が行われていた。

「計算の結果、ゾンダーキャッスルがESウインドウを使わず、今のままの速度で進行してきた場合、48時間以内に地球圏へ到達します」

「あと、2日か…」

猿頭寺の言葉に大河は呟いた。機界城そして、ゾンダーレギオンの圧倒的戦力を見せつけられたせいも、言葉にいつもの力強さがない。全体が、暗いムードに包まれかけたその時、凱が口を開いた。

「2日あれば…」

「ん？」

全員の視線が凱にそそがれる。

「2日もあれば迎撃の準備は十二分に整う。そうだろ、長官！ 皆！！」

皆を力づけるような凱の言葉に、周囲の人間も大きく頷く。

「牛山君！ 機動部隊の出撃に要する時間は？」

「SPパックの装着、並びに航行プログラムの調整…その他全てをあわせて、24時間あれば」

「よし！ 現時刻より30時間後をもって、聖獣艦隊全艦を発進！ 月軌道上に防衛ラ

インを形成し、全戦力でゾンダーキャッスルを殲滅する!! 総員準備にかかれ!!」
『了解!!』

大河の号令から約15分後。セカンドオーダールームでは――

「ですから! 先程も申し上げたとおり、現時点におけるGGG機動部隊の攻撃力では、ゾンダーキャッスルのバリアシステム突破は困難であると、これまでに取得されたデータが証明しているのです!」

20代の若者2人が緊急招集された国連安全保障理事会の面々に対し、スクリーン越しに熱弁を振るっていた。

2人の名は月村正樹つきむらまさきと藤宮紫苑ふじみやしおん。互いに天才的な科学者であり、そして獅子王雷牙博

士達『世界十大頭脳』の後継者として選ばれた『新生世界十大頭脳』の一員である。

その類稀なる頭脳は研究開発だけでなく、戦略・戦術面においても優れた能力を発揮していた。

「故に新生世界十大頭脳次席、月村正樹と――」

「末席、藤宮紫苑の両名は、国連安全保障理事会の皆様に対し『GNプロジェクト』の発動承認を連名で要請いたします」

ゾンダーキャッスルの戦闘能力を知り、必要性を強く感じた機動部隊の能力強化。そ

れを実現させる為に正樹と紫苑は奮闘したが―

『君達の要請は至極正当な物であると言う事は、我々も重々承知している。だが…』

GGGと安全保障理事会の間には微妙な温度差が存在していた。

『ガザートスの襲来で受けた世界各国のダメージは、まだ完全には癒えていない』

『これ以上GGGに予算を回す事は、新たな世界恐慌の引き金になりかねないのだよ』

『それに、GGGには新型のディビジョンフリート…聖獣艦隊だったか、それも全艦就航しているし、なにより新たな勇者王がいるではないか』

『完成率8割弱の力で、あのガザートスを撃退できたのだ。あれが本来の力を発揮できる今、生半の脅威では地球を危機に陥れる事など出来はしないだろう』

「…お言葉ですが―」

安全保障理事会の楽観的な考えに正樹が異を唱えようとしたその時―

『静粛に!』

一人の老婦人〓国連事務総長ロゼ・アプロヴァール女史の声が響き渡った。

『双方の言い分はよくわかりました…正樹』

「はい!」

『理事会の言うとおり、今の世界情勢でGGGにこれ以上の予算を回す事は困難と言っ
しかない…:すまないが、現状戦力で何とかやってほしい』

「…了解しました。事務総長」

正樹の返答に笑顔を見せると、事務総長はその視線を安全保障理事会の面々へ移した。

『人間、喉もと過ぎれば熱さ忘れるとはよく言ったものです…ガザートス以上の脅威が存在しないと言う確証もないのに、安全保障理事会のメンバーである貴方達が、そのように樂觀的な考えでどうしますか！』

事務総長の一喝に恐縮する理事会の面々。事務総長は静かに頷くと、議場いっぱい響く声で宣言した。

『それでは、今回の緊急会議はこれで終了とします』

「駄目もとでやってみたが…やつぱり駄目だったね。承認さえ貰えれば、裏技使って20時間で何とかできたのに…」

通信を終えた途端、そんな事を呟く正樹。その表情は決して晴れ晴れとはしていない。い。

「まあ、ガザートス事件の傷跡が完全に癒えていない事は、紛れもない事実ですからね…」

「たしかにな…させて、事務総長の期待に応える為にも…何とかしますか」

「そうですね」

そんな会話を終えると、正樹と紫苑の2人は来るべき決戦に備え、行動を開始した。

決戦の時間が刻一刻と近づく中――

「それじゃあ……僕達は行きます」

宇宙のとある星から地球へ向け旅立とうとする者達がいた。

「途中、インフェルノの軍勢と遭遇するかもしれない……くれぐれも気をつけて」

「私達も細々とした事が片付いたら、一度地球へ向かうつもりです。貴方が話してくれた勇者達に会う為に」

「それまで、元気でな」

「皆も元気でいてください」

仲間達と互いに暫しの別れを惜しむように挨拶を交わすと、彼らは地球へ向けて旅立っていった。

君達に最新情報を公開しよう!!

地球に迫り来る機界城!

立ち向かうは最強勇者ロボ軍団!

そして我らが待ち望んだ新たな勇者王！

地球圏の存亡を賭けた一大決戦が今幕を上げる！！

勇者王ガオガイガー | E P I S O D E 0 1 |

【緑と赤そして青（前編）】

次回もこのURLにネオ・ファイナルフュージョン承認！！

これが勝利の鍵だ！！

『獅子王凱』

勇者王ガオガイガー用語辞典

第1回【ガザートス事件】

本編の2年前（2009年）、宇宙から突如飛来した知的生命体『ガザートス』が、全世界規模で猛威を振るい、GGGによって撃破されるまでの3日間の事。

これにより、全世界で合計17の都市が焦土と化し、2500万人近い人々が犠牲となった。

また人的被害の他、経済的な被害も尋常な額ではなく、2年たった今でも完全復興には至っていない。

その為、GGGや国連軍などの防衛組織の予算も復興の遅れにより一部削減され、ガザートス撃破直後から提唱されているGGGの組織再編成や勇者ロボの強化計画などは殆ど進行していないのが現状である。

本編

—EPISODE—01—緑と赤そして青（前編）—

♪ザン！♪（GGGのマーク）

「機動部隊、最終点検作業終了！」

「EXガオーマシン、最終チェック終了！」

ハンガーの各所から聞こえてくる作業終了報告を聞きながら、牛山は凱が操る新たな機体『ブレイブガオー』の調整に余念がなかった。

ギャレオンが旅立った後、新たな勇者王の核として開発されたこの機体は、化け物じみた性能を持つ反面、複雑な構造を有する部分が多く、整備にいつも手がかかるのである。

「月村博士も、もう少し整備の事を考えて開発してくれたら…」

「牛山部長！ 全作業終了しました!!」

突然の背後からの声に悲鳴をあげかける牛山。だが、それを何とか堪え振り返ると—

「あ、ああ……」苦労様。三沢主任」

ひきつった笑顔を整備部主任の三沢智也みさわともやに向ける。

「どうしたんですか？ 顔、ひきつってますよ」

「い、いや…何でもないんだ」

誤魔化すようにそう言ってハッチを閉じると、スパナを工具箱に放りこみ、顔についてオイルを拭く牛山。

「整備部として、やれる事は全てやりました。あとは…勇者達の勝利を祈るだけです」

「必ず勝つよ、GGGの勇者達は」

三沢の言葉にそう答える牛山の顔に不安はなかった。

—E P I S O D E—01

【緑と赤そして青（前編）】（タイトルコール）

それから10分後、ビッグオーダーームでは作戦会議が開始されていた。

「まず、敵戦力の確認をしておきたいと思います。グラナート、頼む」

「はい」

正樹の言葉と共に1人の少女が立ち上がった。年は14歳ほど、朱色の髪が印象的な美少女である。

少女の名はグラナートⅡカーディフⅡ月村。名前からも解るとおり、正樹の娘であり、メインオーダールームオペレーターの1人である。

彼女と正樹、そしてこの場にはいないルネⅡカーディフⅡ獅子王。この3人の間にはある物語が秘められているが、それはまた別の話。

「まず、ゾンダーキャツスルに関してです」

淡々としたグラナートの声が、ビッグオーダールームに響き渡る。

「全長7200m、最大幅2300m、最大高1650m。外見こそ中世ヨーロッパの古城を模していますが、その実態は恒星間航行機能を有した大型宇宙戦闘空母と考えられます。攻撃力、防御力に関しては――」

ここでグラナートは一旦言葉を切り、手元の装置を操作した。モニターの画面が切り替わり、先程火星宙域で繰り広げられた機界城と戦闘衛星との戦闘が映し出される。

「ご覧のとおりです。これまでに取得したデータからの推測ですが：攻撃力、防御力共に5年前、エジプト及びメキシコに出現した合体原種と同等、もしくはそれ以上であると考えられます」

「更に、敵は人型機動兵器『ゾンダーレギオン』を多数有しています。これはEⅠ-18が使用していたマイクロマシン同様、ゾンダーキャツスルの中枢部が制御しているものと、我々は推測しています」

「ゾンダーレギオンの能力自体は、Z X—05出現時に大量発生したゾンダーロボと同程度と推測されますが、数が多く、大兵力による殲滅戦を仕掛けてくるものと推測されます。正直言って、現戦力でまともにぶつかった場合…かなりの苦戦が予測されます」

補足を加える形で正樹、紫苑の発言が続く。ここでマイクが何かを思い出したように口を開いた。

「Oh！ 雷牙博士、ゾンダーレギオンはゾンダーロボとEntirelyだったら、マイクのディスクXでまとめてやつつけられるもんね！」

ナイスアイデアと言わんばかりのマイクの声に対し、雷牙は苦笑いを浮かべながら「マイク、忘れたのか。ディスクXの在庫はオービットベースやGGアメリカどころか世界中探しても一枚も無いことを。ガザートスとの戦いで使い切って以来、再プレスは行えておらんのだぞ」

と、ツッコミを入れた。

「Oops！ そうだったもんね…」

「今から再プレスをかけようにも時間がなさすぎる。今になつてもガザートスに悩まされるとは、どこまでも傍迷惑な奴じゃよ」

一瞬芽生えかけた希望の芽があつさりと潰え、ビッグオーダールームが沈黙に支配さ

れかける中、凱が口を開いた。

「正樹…何か、策はあるのか？」

凱の言葉に正樹は暫し考え込み、ゆっくりと口を開く。

「策とも言えないような博打なら…一つ。勇者王で、ゾンダーキャツスルの動力部を…叩く」

正樹の作戦。その大筋はこうだ。

まず、フランスの対特殊犯罪組織シヤツセルから派遣された光竜と闇竜を加えたGGの全戦力でゾンダーキャツスルと正面からぶつかり、乱戦に持ち込む事で敵の注意を引きつける。

そして、タイミングを見計らって凱を単独で突撃させ、一点集中でゾンダーキャツスルの動力部を破壊する。上手くいけば、ゾンダーキャツスルを停止させる事が出来る。

言葉にすれば簡単だが、あまりに大胆で危険な賭けでもあった。しかし、今のGGGの戦力を考えるとこれが一番確実でもあった。

そして、この作戦は承認された。

「凱！」

作戦会議が終了し、それぞれが出撃準備に向かう中、正樹は凱を呼び止めた。

「どうした？ 正樹」

「…悪いね、あんな作戦モドキしか用意できなくて…」

「気にするな。今の戦力を考えれば、あの作戦が一番確実なのは皆解ってる」

「まあ、グダグダ言っても仕方がないんだけどさ…『GNプロジェクト』の発動が承認されていけば…もう少しマシな策もあつたんだろうけど…」

「ガザートスの爪跡が予想以上に大きかったんだ。仕方がないさ」

2年前、地球に襲来した知的生命体『ガザートス』は、全世界に大きな被害をもたらした。

その復興に多額の資金を費やした結果、GGGを始めとする防衛機関の予算などがその皺寄せを受ける事となり、ガザートス撃破直後から提唱されたGGGの組織再編成や勇者ロボの強化など、外宇宙からの脅威に対する備えがズルズルと後回しにされてきたのだ。

「あの戦いで中破したブレイブを修復できて、若干改良できたのがせめてもの幸運か…」

「…大丈夫だ！ 俺達に今出来る事を精一杯やれば、必ず勝利を掴む事が出来る！」

「…そうだな。よし！ 俺も今出来る事をやる！ この戦い、絶対に勝とうぜ！ 凱！」

「ああ！」

それから1時間後、GGGは機動部隊と4隻の機動艦艇、通称『聖獣艦隊』を月軌道
上に出撃させた。

『聖獣艦隊』それは、高速汎用射出母艦^{そりゆうおう}“蒼龍王”、超級機甲戦術艦^{すやくおう}“朱雀王”、超
電脳統帥艦^{びやつしおう}“白虎王”、総合重層補修艦^{げんぷおう}“玄武王”以上4隻の新型ディビジョン艦で構
成される新生GGG艦隊である。

「ゾンダーキャツスルを確認！ 艦隊との距離、10000！」

「機動部隊、スタンバイ完了！ いつでも発進できます！」

「朱雀王。全砲門発射準備完了！」

「ボルフォッグより入電、白虎王攻撃準備完了！」

「玄武王。指定ポイントにて待機」

旗艦である蒼龍王のブリッジに牛山たちの声が響く。そして暫しの沈黙の後、大河の
声が轟いた。

「GGG！ 出撃!!」

その声によくように氷竜達が、蒼龍王のリボルバーミラーカタパルトから次々と射出
される。そして、カタパルトからはブレイブガオーが飛び立とうとしていた。

「ブレイブガオー、ALLチェック…グリーン！ 発進準備完了!!」

「ブレイブガオー、発艦許可」

凱の声に命が答え、次の瞬間―

「ブラストオフ!!」

ブレイブガオーが宇宙へ飛び立った。目にも止まらないほどの物凄いスピードで、ゾンダーキャツスルへ突き進んでいく。

その様子はすぐに機界城の目に入った。機界城の中枢であるパスターは小さく眩く。

「人間どもめ…悪あがきを…」

そして、機界城から無数のゾンダーレギオンが射出される。その数は軽く1000体は越えていた。

それを見た凱が、間髪入れずに叫ぶ。

「行くぞー！ フュージョンー！」

雄叫びと共に凱の左腕、『Gの紋章』が輝き、ブレイブガオーが変形を開始する。そして、目に緑の光を宿しその体は変形を完了した。

「ガイー！ ガアーツー！^{エクセリオン} EX!!」

月村正樹が作り出した『ガイガー以上のガイガー』それがガイガーEXである。

「機動部隊、配置完了！」

「敵集団、射程内に入りました！」

準備は全て整った。大河の声が再度響く。

「攻撃開始!!」

次の瞬間、聖獣艦隊の全火力が一斉に火を吹いた。

その圧倒的な火線は、射線上にいたゾンダーレギオンのバリアを突破し、次々と撃破していく。

「ゾンダーレギオン、4割の殲滅を確認!」

「機動部隊、攻撃開始!」

そこへ機動部隊が一気に突撃した。瞬く間に大乱戦となる。

「GFシステム起動!」

凱の声が響くと共に、ガイガーEXの四肢が緑の光を纏う。

「うおおおっ!!」

そのままスラスターを全開にして、前方のゾンダーレギオンへと突進。放たれる怪光線を類稀な機動性で回避しつつ、肉薄すると――

「はあっ!」

緑の光を纏った右拳を叩き込んだ。その拳はバリアを突破し、ゾンダーレギオンの頭部を打ち砕く。

「たあつー！」

そのままの勢いで後ろ回し蹴りを放ち、今度はその胴体を蹴り碎いた。直後、爆発するゾンダーレギオン。

GFシステム。正式名称G—Force fieldシステム。

四肢にGパワーの力場を纏い、格闘攻撃力を飛躍的に上昇させるガイガーEXの特殊装備である。

「お前達一体たりとも、地球へは近づけさせん！」

最大出力でゾンダーレギオンの集団へ突撃するガイガーEX。瞬く間に多くのゾンダーレギオンが物言わぬスクラップへと変わっていった。

ガイガーEXがゾンダーレギオンを次々と倒していく中、機動部隊も激戦を繰り広げていた。

「ウルテクビーム、全斉射！」

超竜神の両腕と両腰に装備された火器から、高出力のビームが連射される。その火線はバリアを一瞬の拮抗の後突破。ゾンダーレギオンを次々と蜂の巣にしていく。

そんな中、辛くも火線を潜り抜けた数体のゾンダーレギオンが超竜神へと突進し、ブレード攻撃を仕掛ける。

「遅い！ ラダートンファー！」

しかし、超竜神は焦ることなく、ブレードをラダートンファーで一気に受け止め、「クレーントンファー!!」

右手に持ったクレーントンファーを渾身の力で見舞った。強烈な打撃を受け、吹き飛ばされるゾンダーレギオン達。

「唸れ疾風！ 轟け雷光！ 双頭龍!!」

撃龍神の両腕から放たれた黄色と緑の2匹の龍は、唸りをあげながらまったく同時に宇宙を突き進む。

当然、バリアを展開して防御を固めるゾンダーレギオン達だが、その頼みのバリアも一瞬攻撃を防いだけで打ち砕かれ、次々と体を貫かれていく。

声にならない断末魔をあげ、次々と爆発、四散するゾンダーレギオン。その爆発により敵側の視界が隠れた瞬間、今度はマイクが叫ぶ。

「ディスクM！ セットオン！」

マイクの胸部が開き、サウンドディスクが装填される。

「ギラギラーンVV！ yeah!!」

キーボードとギターの2連装ギターが奏でるメロディに乗せて放たれたマイクロウェーブが、ゾンダーレギオン達の自由を次々と奪っていく。

「輝け閃光！ 貫け暗黒！ 光と闇の舞い!!」

「マーグキャノン！」

そこへ天竜神、そして蒼龍王に陣取っていたゴルディータンクが同時攻撃を仕掛けた。大量のミサイルとメーザー、そしてビームが自由を奪われたゾンダーレギオン達に容赦なく襲いかかり、次々と撃破していく。

「人間どもめ…悪あがきを……」

手持ちの駒であるゾンダーレギオン達が次々と撃破されていく光景に、パスダーは苦々しく呟いた。

「だが、戦術を改める必要があるようだ…」

それでも機械特有の冷静さで思考を切り替え、ゾンダーレギオン達に新たな指示を下す。パスダー。

直後、ゾンダーレギオンは指示に従い、怪光線を主体にした遠距離戦に攻撃を切り替えてきた。

「ちいっ！」

次々と放たれる怪光線を、スラスター全開で回避する機動部隊。攻守が完全に逆転し

た形になったその時、無数の飛行物体が、機動部隊を庇う様に飛来した。

飛行物体に怪光線が直撃した瞬間、怪光線は鏡に反射するように次々と撥ね返され、ゾンダーレギオン達に襲いかかる。

「少々変則的ですが、F・FミラーSにはこう言った運用法もあるのです」

スクリーンに映るその光景を見ながら、不敵に呷くボルフォッグ。

そのままボルフォッグはF・FミラーSを操作し、再び1枚の巨大なミラーを造りだすと――

「ハイパーリフレクタービーム、発射！」

白虎王最強の攻撃を繰り出した。放たれたビームはミラーに反射され、ゾンダーレギオンの群れへと向かっていく。自身の怪光線を撥ね返され、体勢の崩れたゾンダーレギオンにもはや逃れる術はなかった。

閃光に包まれ、次々と爆発していくゾンダーレギオン。

「ゾンダーレギオン第1陣の殲滅を確認！」

「ゾンダーキャッスルより、第2陣の射出を確認！ 機動部隊との接触まで70！」

「今がチャンス、頼むぜ！ 凱!!」

「任せろ！ EX！ ガオーマシン!!」

正樹の声に答えるように凱が叫ぶと、蒼龍王のカタパルトからステルス爆撃機、口

ケット式戦闘機、ドリル戦車が射出された。ガイガーEX用のガオーマシン『EXガオーマシン』である。

EXガオーマシンの発進と同時に、蒼龍王のブリッジに赤い光が灯る。それは透明のカバーに覆われた赤いボタンだ。

それが明滅するたびに、カバーに真つ赤な『DANGER』の文字が浮かび上がる。

「長官！ ガイガーEXからファイナルフュージョン要請シグナルです！」

「よし！ ファイナルフュージョン、承認!!」

「了解！ ファイナルフュージョン、プログラムドライヴッ!!」

間髪入れず、命がカバーを叩き割る。走り出したプログラムに従い、合体が開始される。

「ファイナル！ フュージョオオオン!!」

ガイガーEXが作り出した電磁竜巻を突き破って、3機のEXガオーマシンがガイガーEXの元を集結した。

同時に、各々のマシンが変形を始め、合体が開始される。

ドリルガオーEXとライナーガオーEXは、2つに分割してそれぞれ両脚と両肩に、ステルスガオーEXは両腕と背面部そして頭部に。そして、電磁竜巻を吹き飛ばし、黒い鋼の巨人が名乗りをあげた。

全ての人々が待ち望んだ新たな勇者王、その名は。

「ブレイブ！ ガオ！ ガイ！ ガアアアアッ！！」

「ガトリングドライバー射出！！」

ブレイブガオガイガーの合体完了と同時に、蒼龍王のミラーカタパルトからガトリングドライバーが射出される。

「座標軸…固定！ ツールコネクト！！」

数秒後、ガトリングドライバーを装備したブレイブガオガイガーが、その先端をゾンダーキャッスルへ向け叫んだ。

「ガトリング！ ドライバー！！」

その声と共にブレイブガオガイガーの左腕から放たれた空間湾曲エネルギーが、多数のゾンダーレギオンを巻き込みつつ展開して行く。

そして、ゾンダーキャッスルに空間湾曲エネルギーが激突し、ブレイブガオガイガーからゾンダーキャッスルへ一直線の道が完成した。

「いくぞお！！」

湾曲空間の中心を通り、ゾンダーキャッスルへと突撃するブレイブガオガイガー。湾曲空間に巻き込まれなかったゾンダーレギオンが、すぐさま迎撃体制をとるが――

「やらせるかあー！」

超竜神達の一斉攻撃がそれを阻む。その間にブレイブガオガイガーは、ゾンダーキヤツスルへの接近に成功した。

「フアントムリング!!」

凱の叫びと同時に胸部のシャッターが展開し、内部からエネルギーリングが飛び出す。

ブレイブガオガイガーの標準装備『フアントムリング』。これはスターガオガイガーが装備していた物と異なり、エネルギー粒子で構成されているため、5年前のようにリングを破壊される事はない。

「ブロウクン! フアントオームツ!!」

フアントムリングを撃ち抜く形で、ブレイブガオガイガーが右前腕を射出した。光輝く黄金の流星となった右前腕は、一直線にゾンダーキヤツスルに向かっていき、そのバリアと接触する。

目も眩むばかりの閃光が、ゾンダーキヤツスルのバリア表面で炸裂し、そして—

「貫徹え!」

凱の咆哮と共にブロウクンフアントムはバリアを突破した。そのままゾンダーキヤツスルの外壁を突き破り、風穴を開ける。

「ぐぎやあああつ!!」

苦悶の声を上げるパスター。更に風穴を開けられた部分から爆発が起き、ゾンダーキヤツスルの巨体が揺らぐ。

その隙に右腕を再接続したブレイブガオガイガーは、自身のセンサーをフル稼働してゾンダーキヤツスルを探查する。直後、高いエネルギー反応を示す部分を発見した。

「そこが動力部か！」

『凱！ ブレイブの新必殺技で一気に決めちまえ!!』

「ああ！ G S N E X T — R I D E、レベル9!!」

その瞬間、ブレイブガオガイガーのエネルギーレベルが一気に跳ねあがる。

G S N E X T — R I D E。それは弾丸Xに搭載されていたG S ブースターを改良、小型化して追加した新型のG S — R I D Eである。

弾丸X使用時の反省から、G S ブースターには改良が施され、稼働レベルがある程度調整できるようになっていた。

稼働レベルはレベル1から10の10段階に分けられているが、レベル10で一定時間以上稼働させると弾丸X使用時と同じ運命が待っている。すなわち、エネルギー枯渇による死だ。

「天地…轟鳴！」

G S N E X T — R I D Eの出力を限界ギリギリまで上げたブレイブガオガイガーは、

両腕を一度顔の前で交差させ、腰に構えた。直後、その胸にGパワーの光が集まり始める。

「ブレイブガオガイガーの胸部に、通常の10倍以上の超高密度Gパワーを感知！ 更にエネルギー値は上昇中!!」

「なんだと!?! 月村君、凱はなにを……」

「出ますよ、勇者王の新たななる必殺技が……」

「必殺技!?!」

周囲の疑問をよそに正樹は勝利を確信した顔で、蒼龍王のモニターを見つめていた。

「見せてくれよ……凱」

「喰らえ！ ブレイブ！ ハアアアツト!!」

叫びと共にブレイブガオガイガーの胸から放たれる緑の矢。それは一直線にゾンダーキヤツスルへ向かい、バリアへと直撃する。

次の瞬間、緑の矢はバリアを突破。外壁を貫き、動力炉を吹き飛ばし、ゾンダーキヤツスルに新たな風穴を開けた。

「ば、馬鹿なっ!」

その言葉が、パスター最後の言葉となった。動力炉を失った事でエネルギー供給を絶

たれ、機能を停止する。パスダー。

パスダーの機能停止により、ゾンダーレギオンも電池の切れた人形のように動かなくなる。

その光景に蒼龍王のブリッジも一気に沸き立つ。

「やった!!」

『ブレイブハート』か…凄まじい威力だな」

「Gパワーを集中させる事で生み出した光の矢を撃ちだす……あれで貫けぬ物はまず無いじゃろう」

「まあ、細かい事は凱達が帰還してからにしましょう」

「……帰還はもう少し延びそうですよ」

紫苑の言葉に全員の視線がスクリーンに向かう。そこには――

「ゾンダーキャツスルが…再生を始めてる!?!」

僅かずつだが、再生を進めているゾンダーキャツスルと、それに攻撃を仕掛ける勇者達の姿が映し出されていた。

「動力炉は間違いないく吹き飛ばした…なのに何故…」

そこまで眩き、正樹はひとつの可能性を思い立った。すぐさまキーボードを操作し、ゾンダーキャツスルを再度スキャンする。すると微弱なエネルギー反応が数箇所見つ

かった。

「サブシステム…メインのエネルギ―反応で、サブシステムの反応が隠蔽されていたんだ…くそつ、俺とした事が…」

サブシステムの存在を見抜けなかった自分に言いようのない悔しさを感じる正樹。

「悔やむのは後からでもできる。今は自分の成すべき事に集中するんじや、正樹君！」

そんな正樹を叱咤する雷牙。世界十大頭脳の地位を譲渡したとはいえ、まだまだ若い正樹達を教え、導いていく。雷牙はそう心に決めていた。

「…はい！」

そんな雷牙の言葉に、正樹はすぐに思考を切り替える。そしてキーボードを再び操作し、凱達への情報伝達を再開した。

「おのれ…人間ども!!」

メイン動力炉を失った事で半狂乱と化したのか、ロクに照準もつけないまま全身のビーム砲を乱射する機界城。サブ動力炉のみの状態では本来の威力に遠く及ばないとはいえ、圧倒的な数の火線が機動部隊へ降り注ぐ。

パスターからの指示が途絶え、周囲に漂うゾンダーレギオンが次々とビームに貫かれていく中、機動部隊は辛くも火線を掻い潜っていくが、回避するのが精一杯で反撃する

事が出来ない。

「このままでは、ゾンダーキャツスルのメイン動力炉が再生してしまう…」

ビームを避け続ける凱の表情にも焦りの色が見え始める。その時―

『援護するぞ！ GGGの勇者達!!』

聞き覚えのある声が通信で飛び込んでくると同時に、突如出現した数十発のミサイルがゾンダーキャツスルに襲い掛かった。

「空間転移型ミサイル!? まさか!」

攻撃の放たれたであろう方向へ視線を走らせる凱。直後、視界に飛び込んできた2つの機体に思わず声を上げた。

「やはり、アレはジェイアーク! それに…ギャレオン!!」

君達に最新情報を公開しよう!!

激闘の最中、地球へ帰還したギャレオンとJアーク。

だが、ゾンダーキャツスルとの激闘は、単なる序章に過ぎない。

強大な力を持つ新たな敵が、機動部隊を追い詰めていく。

果たして我らがGGGは、この戦いに勝利する事が出来るのか!?

勇者王ガオガイガー ― EPIISODE 2 ―

『緑と赤そして青（後編）』

次回もこのURLにネオ・ファイナルフュージョン承認!!

これが勝利の鍵だ!!

『ネクストガオガイガー&ネオキンググジエイダー』

勇者王ガオガイガー用語辞典

第2回『新生世界十大頭脳』

ガザートス事件の終焉直後、獅子王雷牙博士ら『世界十大頭脳』から、その称号を受け継いだ10人の若き天才科学者達を人々は賞賛を込めてこう呼ぶ。

現時点では、GGGに所属している月村正樹及び藤宮紫苑の2名が確認されている。

— E P I S O D E — 0 2 〈 緑と赤そして青（後編） 〉

♪ザン！♪（GGGのマーク）

『援護するぞー！ GGGの勇者達!!』

聞き覚えのある声が通信で飛び込んでくると同時に、突如出現した数十発のミサイルがゾンダーキヤツスルに襲い掛かった。

「今のは!？」

攻撃の放たれたであろう方向へ視線を走らせる凱。直後、視界に飛び込んできた2つの機体に思わず声を上げた。

「アレはジェイアーク！ それに…ギャレオン!!」

— E P I S O D E — 0 2

【緑と赤そして青（後編）】（タイトルコール）

「反中間子砲、全砲門開け!!」

「リョウカイ」

ジェイアークのブリッジにソルダートJとトモロ0117の声が響き渡り―

「目標！ 前方敵戦艦！ 撃てえ!!」

直後、ジェイアークの砲塔から強力な反中間子ビームが発射される。

出力不足の為か、バリアを展開していない機界城の外壁が、放たれた幾筋もの光条の数だけ貫かれ、爆発していく。

「ぎゃあああああつー!」

大きなダメージに苦悶の叫びを上げたパスターは、ジェイアークの艦砲射撃から逃れる為、機界城を一時後退させた。

その隙に合流する勇者達。早速通信回線が開かれる。

『凱兄ちゃん!!』

懐かしい声と共に飛び込んできた顔に凱は少なからず驚きを覚えた。

「護！ 帰って…きたんだな」

『うん!』

『久しぶりだな、サイボーグ…いや、もうサイボーグではないのだったな…凱』

「J! やはり生きていたのか…」

『当然だ! 貴様との決着をつけるまで、私は死なん!!』

「相変わらずだな…お前は」

一瞬、周囲に流れる和やか(?)な空気。だが、それも機界城からの雨のようなビームに打ち砕かれた。

「おのれ…人間ども!!」

再生を終え、機動部隊、そしてジェイアークにビームを乱射する機界城。

「話は後だ!! まずはこのデカブツを叩くぞ!!」

「」「オウ!!」「」

凱の声で体勢を立て直す機動部隊。それを横目に戒道少年が護に問い掛けた。

「ラティオ。彼等に君の新たな力を見せる良いチャンスのようだね」

「戒道達もね」

「ああ…」

互いに笑みを交わす2人。

「それじゃあ…いくね」

その言葉が終わるか否か、ジェイアークのブリッジから消える護。次の瞬間、護は浄解モードとなり、ギャレオンの近くに浮かんでいた。

「いくよ! ギャレオン!」

答えるように吠えたギャレオンが、護の体を鼻先で押すようにして、後ろから放

りあげた。

「フュージョン！」

声と共に護の体はギャレオンの中へと吸い込まれ、そのままギャレオンが変形を開始する。そして、目に緑の光を宿しその体は変形を完了した。

ウイクトリー
「V！ ガイ！ ガー！！」

機体の大きさはガイガーと変わらない。だが、両腕に装備されたブレード、背面部の大型ブースターなどで印象は大きく異なっていた。

「護……」

「凱兄ちゃん……僕もGGGの隊員だよ！」

「そうだな……護、一緒に戦おうぜ！！」

「うん！！」

次の瞬間、2人は反対の方向へ飛んだ。一瞬の間を置いて2人がいた空間をゾンダーキヤツスルの放ったビームが薙ぎ払っていく。

「砕け散れ！ 勇者ども！！」

そう言いながらパスダーはVガイガーに狙いを定め、ビームを発射した。ビームは正確にVガイガーに突き進む。

「護、避ける！！」

だが、Vガイガーはその場から一步も動こうとせず、両腕に装備されたブレードを展開すると構えを取った。

「レーザーチャージングブレード！」

声と同時にブレードが光り輝き、光の刃となる。そして――

「はあっ！」

次の瞬間、凱達は我が目を疑った。気合と共に振り下ろされたブレードによって、ビームが切り裂かれたのだ。切り裂かれた事でビームの進路が変わり、Vガイガーには掠りもしない。

「ちよこざいな真似を!!」

怒りに震えるゾンダーキャツスルは再びVガイガーに向けてビームを乱射する。

「そんなもの！」

そう言うとうとVガイガーは、両腕のブレードと素早い動きでビームを回避し、そして弾いていく。

雨のように降り注ぐビームを防ぎながら、Vガイガーは蒼龍王のブリッジに通信を送った。

『長官さん。お願いがあるんです!』

「何だね、護君。私にできる事なら協力は惜しまないよ」

『じゃあ、これをお願いします！』

その瞬間、蒼龍王のコンピュータへデータが送信される。

「これは…ファイナルフュージョンのプログラムか!？」

『新しいファイナルフュージョン…ネクストフュージョンを行うには、ファイナルフュージョン同様、承認が必要なんです。だから—』

「そう言う事ならば!! …卯都木君。ネクストフュージョン…承認!!」

新しい承認に若干興奮気味で指示を下す大河長官。

「了解! …ネクストフュージョン…プログラムドライブ!!」

間髪いれず、命がプログラムを実行する。

「ラティオ、ネクストガオーマシンヲ切り離スゾ」

次の瞬間、ジェイアークの船底に繋がっていた機体が切り離され、Vガイガーへ向けて飛び立った。

機体は途中で更に4機に分離し、己の主の下へと向かっていく。

「重戦闘機とドリルタンク、それに2機の小型戦闘機。これが新しいガオーマシンか!」

「ネクスト! …フュージョン!!」

ビームを凌いだVガイガーから緑色の霧が吹き出し、竜巻に変わる。

その中に4機の新ガオーマシン、ネクストガオーマシンが突入し、Vガイガーの元に集結した。

同時に各マシンは変形を始め、合体が開始される。重戦闘機は両肩と背面部に、ドリルタンクは分離して両腕に、そして2機の小型戦闘機はそれぞれ右足と左足にそれぞれ結合する。

そして、電磁竜巻を少しずつ吹き飛ばし、頭が現れる。頭の次に肩、胴、足。やがて全身が現れる。

ブルーをメインカラーとしたボディに赤いショルダー。そして、白銀のフェイスマスク。

繊細さの中に力強さを持った巨人が名乗りをあげる。その名も。

「ネクスト！ ガオ！ ガイ！ ガアアアッ!!」

「こちらも続くとするか…フュージョン!!」

叫びと共に、ジェイバードへ吸い込まれていくソルダートJ。

「ネオジェイバード、プラグアウトツ！ メガフュージョン!!」

ジェイキャリアーが折れ曲がり、胴体を形作る。同時にジェイバードが3つに分離し、頭部と両腕部になってそれぞれジェイキャリアーと結合する。

そしてカメラアイに光が灯り、圧倒的なパワーを持ったジャイアントメカノイドが咆

哮をあげる。

「ネオ！ キング！ ジェイダアアアツ!!」

機体の大きさは、キングジェイダーと殆ど変わらない。が、細部が少しずつつ違っている。

「皆、一斉攻撃だ!!」

凱の号令をきつかけに、勇者達が一斉攻撃を開始した。

「了解しました！ ウルテクビーム、全斉射!」

超竜神の両腕と両腰に装備された火器から放たれた高出力のビームが—

「唸れ疾風！ 轟け雷光！ 双頭龍!!」

撃龍神が放った龍の形をした荷電粒子エネルギーが—

「輝け閃光！ 貫け暗黒！ 光と闇の舞い!!」

天竜神が放った大量のミサイルと高出力のメーザーが—

「ハイパーリフレクタービーム、発射!」

ボルフォッグの叫びと共に白虎王が放つ強力なビームが—

「ブラウクン！ ファントオームツ!!」

「10連メーザー砲！ 反中間子砲！ 同時斉射!!」

「ブラウクン！ スマッシュャー!!」

そして、ブレイブガオガイガーが放った必殺の鉄拳。ネオキングジエイダーが放つメーザーと反中間子ビーム。ネクストガオガイガーが放った必殺の鉄拳が、一斉にゾンダーキヤツスルに襲いかかる。

次の瞬間、ゾンダーキヤツスルのバリアは脆くも崩壊した。

「ば、馬鹿なっ！」

パスダーの叫びを打ち消すように、バリアが崩壊したゾンダーキヤツスルへ、勇者達の攻撃が一気に襲いかかる。

「ギアアアアアアアッ!!」

閃光、そして大爆発。ゾンダーキヤツスルは跡形もなく消し飛んだ。

その光景に再度沸き立つ蒼龍王のブリッジ。

「やった!!」

「地球は、救われた!」

口々に安堵と喜びの声をあげる面々。しかし、その雰囲気は一瞬で破られた。

『まだ終わってないよ! パスダーが!!』

護の言葉に一斉にモニターを見つめる大河達。そこには、辛くも破壊を免れたパスダーが写っていた。

「パスター!!」

「心弱きモノどもよ…我を倒したくらいでいい気になるな……」

「なんだと!!」

「我は尖兵に過ぎぬ…偉大なる皇帝陛下が降臨なされれば貴様等など!!」

「皇帝だと! そいつは何者だ!!」

「皇帝陛下の御力を持つてすれば……」

凱の質問にパスターは答えない。ただひたすらうわ言のように同じ台詞を繰り返している。

「隊長、もはや何を聞いても無駄です。一気に止めを!」

「……ああ……」

超竜神の言葉に凱が頷き、再度フアントムリングを展開した瞬間!!

「貴様等に我は倒させぬ! 消える時は皇帝陛下の御力で!!」

パスターはESウインドウを展開し始めた!

「逃がすか!!」

「皆、僕に任せて!!」

追いかけてようとする凱達を止める護。

「護?」

「これで、一気にカタをつける!!」

唸りとともに緑色の閃光に包まれるネクストガオガイガー。両腕を交差させ、一気に左右に広げるとあの技の名前を叫ぶ!!

「ヘル! アンド! ヘブン!!」

ネクストガオガイガーの両腕に異なる2種類の光が輝く!

「や、やめろ…」

その光に畏怖の叫びをあげるパスダー。

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ…」

呪文の詠唱と共に両腕を徐々に合わせていく。そして両手が合わさった瞬間、神々しい光が周囲を包む。

「ウイータツ!!」

次の瞬間、凄まじい光の奔流が一直線にパスダーに向かっていき、直撃する!

「ギヤアアアアアア!!」

光が消えた瞬間、パスダーは跡形もなく消滅していた。

「凄…」

「お見事です…護隊員」

次々と感嘆の声をあげる凱達。

その映像に、蒼龍王のブリッジに張り詰めていた空気が、今度こそ和らぐ。

「…何とか…になりましたね」

「うん…何とかなつたねえ」

正樹と紫苑も安堵の表情で言葉を交わす。

「よし、機動部隊全機帰還せよ。牛山君、ジエイアークを繫留できるスペースはあるかね？」

「はい、第55ブロックなら繫留可能です」

「だそうだ。J、どうする？」

「…断る」

「Jさん…」

「我々是我々でやらせてもらおう」

「そうか…」

「と、言いたい所だが…」

「え？」

「今回の敵はバラバラに戦って勝てるような相手ではない。ありがたく使わせてもらう。アルマもそれでいいか？」

「この船の主はJ、君だ。君の決定なら僕は従うだけさ」

「それでは、戒道くん。君達も我々と一緒に戦ってくれるのかね？」
「出来るだけ努力はさせていただきます」

大河長官の問いに、滅多に見せない笑みを浮かべて、戒道は答えた。

「それにしても…護。そのネクストガオガイガーは一体誰が…」

「うん、それはね」

話を始めようとした次の瞬間、護は強烈な悪寒を感じた。

今まで感じた事がないほど強大なパワーを持ち、かつ異質なゾンダーの気配。たまらない不快感と不安が、強烈に護の胸を締め付ける。同じような事は凱と戒道にも起きていた。

「うっ……な、何か……来る！　すごく……すごく邪悪なものか！」

「なんですって!？」

「敵の新手か!？」

「いや、普通のゾンダーじゃない。ゾンダリアンや…原種とも違う…だが…」

だからだと脂汗を流しながら、凱が呟く。そのただならぬ凱の様子を、モニター越しに見つめる命。

「か、戒道……この気配……」

「ああ。すさまじく邪悪な気配だ……僕も初めて感じる」

戒道は、言いながら厳しい視線をその気配の方へ向けた。

「これほどのパワー……いったいどんな奴なんだ」

異変はブリッジでも感知された。異常を告げるサイレンがけたたましく鳴り響く。

「何事だ！」

「オービットベースの前方500kmの地点に、ESウインドウ開きマス！」

「そんな近くにか!!」

「今までに感知された事が無い程の巨大な物です……」

「何が出てくるんだ……」

緊迫した雰囲気に含まれるブリッジ。機動部隊も一斉に攻撃態勢にはいる。

「ESウインドウの拡大……停止しました」

「み、見て……」

命の言葉に、全員の視線がモニターに集中する。そこからゆつくりと現れたのは。

「人？」

「モニター最大望遠！」

最大まで拡大されたモニターに移されていた映像。

それは白銀の仮面と闇のように黒いマントのせいで正確な姿は確認できないが紛れ

もなく人であった。

「信じられん……」

大河も驚きに目を見開いたままで言葉を発した。

「我が名は機界皇帝インフェルノ……」

「機界皇帝？」

「GGGの勇者諸君……そして『星間連合』の勇者達よ。先程までの戦闘は一部始終見せてもらった……。見事なものだ……」

インフェルノは淡々と話を続ける。その姿は隙だらけだ。今、攻撃すれば99……いや、100%撃破できる。

しかし……。

「あいつに飲まれてるとでも言うのか……」

「動けん……」

凱も、Jも、そして機動部隊の全ての勇者達が全くと言っていいほど動けなかった。

「役立たずとはいえ、我が方の戦艦一隻を沈めたのだからな……」

そう言うインフェルノは、右手を無造作に突き出した。

「こちらを礼をさせてもらおう……」

次の瞬間インフェルノの右腕から小さな波紋が放たれた。波紋は非常にゆっくりと、そして一直線にオービットベースへと向かっていく。

「ッ!! 皆、逃げて!!」

何かに気づいた護の悲痛な叫びを聞き、大河は咄嗟に指示を下す。

「オービットベースへ通信! 出力最大で、プロテクトシールド緊急展開!!」

「了解!!」

直後、ヴン、と言う音とともにオービットベース全体にプロテクトシールドが展開される。

「愚かな…」

波紋がプロテクトシールドに接触する。数秒の沈黙。響き渡る轟音と閃光。そして爆発。

「ば、馬鹿な…プロテクトシールドが、こうも簡単に…」

「被害状況は!!」

正樹と紫苑が猛烈なスピードでキーボードを操作する。そして導き出された結果に、紫苑と正樹は、ほぼ同時に絶望的な声をあげる。

「第8、9、25、47ブロック大破!! 爆発はどんどん広がっています!」

「メイン動力炉出力21%にまでダウン! 絶望的です…」

「もう1発来ます!!」

次の瞬間、再び起こる爆発と閃光。そして轟音。

「大気循環システム、ならびに第1、第3、第4サブ動力炉機能停止!!」

「第12、15、24ブロックの空気流出、止められません!!」

大河はギリッと歯噛みして言った。

「生存者を全てヘキサゴンに集めるんだ…」

「長官…それは……」

「現時点を持ってオービットベースを放棄する! 総員へ退避命令!!」

隊員達は愕然として大河を見た。大河は苦渋の表情を浮かべて指示を下す。

「何をしている! 急げ!!」

爆発を繰り返すオービットベースを見ながら、インフェルノは邪悪な笑みを漏らした。

「どうやら、終わりのようだな…脆いものだ」

その時、オービットベースからヘキサゴンが分離し、地球へと降下していく。

「脱出用ユニットか…無駄な足掻きを…ひとおもいに楽にしてやろう!」

そう言うインフェルノは再び波動を放とうとする…が。

「やらせるか!! ウオオオオオッ!!」

怒りの叫びをあげながら、インフェルノに殴りかかるブレイバオガイガー！

「喰らえ!!」

だが、その拳はインフェルノの寸前で、まるで見えない壁に阻まれたかのように、ピクリとも動かなくなる。

「なんだと!!」

「無駄な事を…」

そう呟いたインフェルノが、軽く右手の指でブレイバオガイガーの拳を弾いた瞬間、ブレイバオガイガーの右拳は粉々に砕け散り、その巨体は数百m以上吹き飛ばされた。

「うわあああああつ!!」

「消えろ」

そこへ放たれる追い討ち。強力なエネルギー波が、ブレイバオガイガーの頭部に向かって走る。その時—

「させるかあ!」

超竜神が両者の間に割って入った。防御を固め、その体自体を盾にエネルギー波を防ごうと構える。

超竜神の両腕とミラーシールドを消し飛ばし、さらにその胸部をわずかに抉って、消

尽するエネルギー波。だが、息を付く暇もなくインフェルノは再度攻撃を仕掛けようと手を翳す。

「唸れ疾風！ 轟け雷光！ 双頭龍!!」

「輝け閃光！ 貫け暗黒！ 光と闇の舞い!!」

そこへ、撃龍神と天竜神の同時攻撃が、インフェルノに向かって放たれる。

「…フン」

だが、それらもインフェルノが鬱陶しげに左腕を軽く払っただけで、まるで見えない壁にでも当たったかのように跳ね返され、撃龍神達に襲い掛かった。

「ぐわああああっ!!」

「きやああああっ!!」

跳ね返された自らの攻撃を受け、吹き飛ぶ2体。咄嗟に防御はしたものの全身に大きなダメージが刻まれる。

「今のは!?!」

「はつきりとは確認できませんでしたが…恐らく、空間を湾曲させたものと思われます…」

「そんなことができるとは…」

「これが機界皇帝の力…」

その信じがたいパワーに誰もが言葉を失う。その沈黙を破るように護が叫ぶ。

「これならどうだ！ ヘル！ アンド！ ヘブン!!」

再びネクストガオガイガーの両腕に異なる2種類の光が輝く！

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォオ…ウイータツ!!」

凄まじい光の奔流が一直線にパスダーに向かっていく。

「……………」

インフェルノはバリアを展開し、身じろぎひとつしない。だが、今までの攻撃ではバリアを張らなかつた事を考えれば、その差は非常に大きかつた。

「この程度の力では我は倒せん！」

バリアを展開したまま、インフェルノは右腕を前に突き出した。次の瞬間、突き出した右腕から、強力な波動が放たれる。

聖なる緑の光。

邪なる紫の光。

巨大な2つの力が、真正面から激突し、凄まじい光が巻き起こる。

「物凄い光だ!!」

「どつちが勝つてるんだ！」

強烈な光が治まった後、凱達が見た光景。それは。

「互角……!?!」

「いや、護が押してる!!」

凱の言葉どおり、ネクストガオガイガーの放つ緑の光が、インフェルノの放つ紫の光をじりじりと押し戻し始めている。

「うおおおおおつ! ハイパアアアモオオオツドツ!!」

護が、雄叫びとともに力を込めるとGの輝きがいつそう強くなり、肩アーマーが変形し、放熱フィンが展開。

そしてフェイスマスクが左右に開き、凛々しい口元が露になる。

「お前なんかには絶対に負けない!!」

緑の光は、さらに紫の光をインフェルノの方へと追いやつていく。だが、凱達が勝利を確信したその瞬間、インフェルノの左腕がゆっくりと上がり凄まじい閃光が迸る。

「インフェルノの左腕に巨大なエネルギーな反応が!」

「なにっ!?!」

ボルフオッグの言葉に凱達が息を飲んだ次の瞬間。

「調子に……乗るなあ!!」

叫びとともにインフェルノの左腕からも波動が放たれる。

「ぬうあああつ!!」

2つの波動は、急速にヘル・アンド・ヘブン・ウィータの光を押し返していく。

「ま、負けるもんか…!」

必死になって波動を押し戻そうとする護。しかし、波動は凄まじい勢いで護に迫る。

そこへ—

「護! 力を貸すぜ!!」

「ラティオ!!」

「助太刀するぞ!!」

ブレイブガオガイガーとネオキングジェイダーが駆けつけた!!

「はあああああつ!!」

叫びと共に2体のエネルギーレベルが、一気に限界ギリギリまで跳ね上がる。そしてブレイブガオガイガーは、両腕を腰に構え、ネオキングジェイダーは、左足を後ろに下げ、右腕を突き出した。

「喰らえっ! メガ! ジクオースツ!!」

「貫けっ! ブレイブ! ハアアアツト!!」

その瞬間、雄叫びと共にネオキングジェイダーの右腕から放たれた火の鳥が、ブレイブガオガイガーから放たれた光の矢が、一斉にインフェルノに向けて襲いかかる。そして、数秒の拮抗。

「うおおおおおおおおおつ!!」

凱が、Jが、護が吼えた。

次の瞬間、強固なバリアを貫いて、火の鳥がインフェルノの右腕を、光の矢がインフェルノの左足を吹き飛ばす。

「…ぐはっ!!」

初めてインフェルノが悲鳴をあげた。そして聖なる緑の光が、インフェルノの全身を飲み込んでいく。

光が消えた時、インフェルノは完全に消滅していた。

「…や、やったの?」

「やったのか…」

「そのようだな…」

「勝った…勝ったんだ!!」

歓喜の表情を浮かべる護。凱が、Jが、超竜神達がお互いに頷きあう。

だが、その時間も長くは続かなかった。

〈…私の影を倒した事がそんなに嬉しいか…〉

「っ! この声は…」

「インフェルノ…」

地獄の底から響いてくるようなインフェルノの声に全員が凍りつく。

「なかなか面白いゲームだったよ。これなら暫くは退屈せずにすみそうだ…」
「なんだと！」

「へまた、戦える日を期待しているぞ…それまでせいぜい腕を磨いておくがいい」
「そう言う」と凱達の頭の中に響いていた声は消え去った。

「機界皇帝…インフェルノ…」

「恐ろしい奴だ…」

「……戦いはこれから……。だから…」

「護？」

次の瞬間、護は意識を失い、ネクストガオガイガーはブレイブガオガイガーに倒れかかった。

「おい、護……護！ しっかりしろ！ 護!!」

凱の呼びかけに護は答えない。代わりに聞こえてきたもの。それは――

「寝息？」

「眠ってるのか…」

「無理ありません…あれだけの力を放出したあとなのでですから…」

「ボルフォッグの言葉にその場にいた全員が大きく頷く。」

「よし、俺達も帰還しよう。J、一緒に来てくれ」

「それは構わんが…あのオービットベースとかいう基地は破壊されたのだぞ。何処へ帰還すると言うのだ？」

Jの疑問に凱は自信に満ちた表情で答える。

「ついてくればわかるさ」

君達に最新情報を公開しよう!!

Zマスター、そして新種との戦いから5年後。再び地球は狙われた。

迫りくる機界皇帝の尖兵!!

燃え盛る炎の中、ついに3体目の勇者王が覚醒する。

今、君は新たな伝説の幕開けを目撃する。

勇者王ガオガイガー — EPISODE 3 —

『勇者王再誕!!』

次回もこのURLにネオ・ファイナルフュージョン承認!!

これが勝利の鍵だ!!

『ガオガイガー』

勇者王ガオガイガーR用語辞典

第3回 『ネオ・デイビジョンフリート』

マスター戦及び機界新種戦で、壊滅的被害を受けたデイビジョンフリートの後継として開発された機動防衛艦の呼称。通常は『ネオ・デイビジョン』と略される。

デイビジョンフリート同様4隻が建造されており、それぞれに東西南北を守る聖なる獣『四神』の名が与えられている。またの名を『聖獣艦隊』。

— E P I S O D E — 03 ～勇者王再誕!!～

♪ザン!♪ (GGGのマーク)

ゾンダーキヤツスル、そして機界皇帝インフェルノの影武者との戦いから1日。

先の戦いの後、突然意識を失った護は、Gアイランドシティ内の病院に搬送され、緊急入院。そのまま静かに…だが、確かな寝息をたて、眠り続けていた。

ベッドサイドには連絡を受け駆けつけた勇、愛、そして華が座っている。数時間前まではレイコ、末男、数納の3人もいたが、今は帰宅していた。

「護くん…」

華はそう言うのと護の手をギュツと握り締めた。溢れようとする涙をこらえながら、ぐつと唇を噛む。

「華ちゃん…」

愛が、震えるその体をそつと抱きしめ、頭を撫でる。

「先生も仰っていたわ。今は少しパワーを使いすぎたから充電しているだけで、力が戻ったらちゃんと目覚めるから心配いらなくて…」

「ママ…」

いたわるように華の頭を撫で続ける愛に、勇が声をかける。

その勇を見上げて、愛は優しく微笑んだ。

「パパ、信じましょ。護ちゃんを…護ちゃんは、きつと目を覚ますわ」

「うん、そうだね。僕達が信じてあげなきゃ、親として失格だね」

「私も信じてます…護君、絶対目を覚ますって…」

そう言うのと、3人は互いに頷いた…その時。

「う、ううん」

3人が一齐にベッドに視線を戻すと目を覚まし、笑顔を見せた護がいた。

「お父さん…お母さん…」

「護ちゃん!」

「護…よく、よく帰ってきたな!」

本当に嬉しそうに…そして泣きそうになりながら抱き合う3人。

「護くん…」

小さな声に、3人が声の方に一齐に振り向いた。そして、そこに立つ華の姿を見ると、勇と愛は互いに頷きあいベッドから離れると華に道を開けた。

「華ちゃん」

「護くん!」

華は、感極まったように護の胸の中へ飛びこんだ。嘔りつくようにその首に抱きつき、火がついたように泣き始める華。

その頭を優しく撫でながら、護は囁くように言った。

「ただいま…華ちゃん」

—EPISODE—03

【勇者王再誕!!】（タイトルコール）

護が目覚めてから1時間後、護の元には華、勇、愛の3人を始め、凱や命達、あわせで10名ほどの男女が集まっていた。

「それにしても…護が倒れた時は本当にビックリしたが…何事もなくて安心したよ」

「ゴメンね。凱にいちゃん。あの時、急に眠たくなって…」

「まったく、人騒がせなところはちっとも変わってないな」

凱の呟きに周囲は笑いに包まれる。一緒に笑いながら護はある事に気づく。

「そう言えば、凱にいちゃん」

「どうした？ 護」

「戒道はどうしたの？」

「ああ…彼は」

「「戒道（くん）!?! だってえええ!!」」

護の言葉に華、レイコ、末男、数納4人の声が一斉にハモった。

「どういう事なの？ 護くん！」

「戒道が…ここに居るの？」

「どういう事なんだ？」

「正直に答えなさい!!」

「え、えーと。だから、その…」

詰め寄る4人に思わず怯む護。その時。

「僕なら、ここに居る」

静かな声に全員の視線がドアへ向けられる。そこには黒のTシャツにデニムの上下、そしてJジュエルのペンダントを身に付けた戒道少年の姿があった。

5年ぶりに見る成長した戒道の姿に、華達4人は驚きを隠せない。

「久しぶり…だね」

「あ…ああ、久しぶり」

「本当に戒道だ…」

「い、今までどうしてたのよ？」

「そうだよ！ 東京タワーで行方不明になってから、皆ずっと……ずっと心配してたんだよっ！」

「ごめん……」

以前は見せなかった、はにかんだような笑みを浮かべる戒道。

「あの時……僕は本当のことを全て思い出したからね。」

「本当の事を全て……？」

「ああ」

「あ、戒道……」

「いいんだ。皆には全てを知ってほしいから」

そう言うのと戒道は話を始めた。戒道は、自分が生体兵器であることを隠そうとはしなかった。その説明を始めた時護は止めようとしたのだが、いずれは説明しなくてはならない事だから、と言って彼はそれを制した。

戒道の話に華たちは、ただただ驚いているばかり。

「じゃあ、戒道もマモルと同じ力があるんだ」

末男の言葉に、戒道は頷いた。

「正確にはラティオ……天海君の持つ力を元にして作られたのが、『Gストーン』、その技術を応用したのが『Jジュエル』であり、『アベルの災い』と呼ばれた僕らなんだ」

「よく解んない…」

「そんな事どうでもいいよ。戒道君が何者であろうと、私達の友達だって事は変わらな
いじゃない」

華の言葉に護達は大きく頷く。

「…ありがとう…皆」

その時、護は戒道の目に少しだが、光る物が流れるのを見逃さなかった。

それから2日後。無事に退院した護は1人、GGGの新たな基地へと向かっていた。

先の戦闘でオービットベースを破壊されたGGGは、GGG日本支部として再建が進
められていたベイタワー基地を、当面の仮住まいとして使用していた。

名称も『エクセルベース』と改められ、GGG本部としての機能付加も急ピッチで進
められている。

街中の電話ボックスに偽装されたシークレットエレベーターを降り—

「こんにちは—」

元気の良い挨拶とともに、久しぶりにメインオーダールームの扉をくぐる護。すると

パン！パン！！

「「お帰りなさい！ 護（くん）！！」」

幾つものクラッカーによる破裂音と歓声が護を迎えた。

「うわっはあ！」

盛大な歓迎に思わず感嘆の声を上げる護。そこには護を出迎えるように多くの人が待っていたのだ。

「退院おめでとう、護君。元気な姿を再び見れて、嬉しい限りだ」

全員を代表して、大河が護に声をかける。

「また、よろしくお願いします！」

そんな大河に一礼する護。どこか懐かしい雰囲気メインオーダールームに漂う。

「この基地も未完成で大した事は出来ないが、護君の地球への帰還、そして退院を祝って……とりあえずは乾杯だ」

大河の言葉で、すぐさま全員にカップが配られる。中身は当然、命特製のコーヒーだ。

「それでは、護君の退院を祝って！」

「「乾杯！」」

大河の一声に全員がカップを掲げる。そして、穏やかな雰囲気の中、談笑が始まった。護も壁際で一人コーヒーを飲んでいて戒道を見つけ、凱達との談笑の輪に加える。

「そう言えば戒道。Jさんの姿が見えないけど、どうしたの？」

「ああ、Jは今宇宙にいる」

「宇宙に？」

「軌道上で哨戒をやってもらっているんだ。この前の戦いで衛星が幾つか破壊されて、監視網に穴が開いてしまったからな」

「すぐに代わりの衛星を上げられれば良いんだけど、予算の都合でなかなかね…」

「Jは『良い暇つぶしになる』と言っていた…」

護達が談笑を続けている中、正樹と紫苑の2人も―

「うん、ミコツちゃんのコーヒーには、やっぱり碧屋のケーキが一番だな」

「ええ、まつたくですね。しかし、命さんのコーヒーは美味しいですけど…火麻参謀がいたら、『こういう時は酒だろ?』って、ぼやいていたでしょうね」

「たしかに。今頃ニューヨークで、くしゃみでもしてたりして」

命特製のコーヒーを味わいながら、そんな話をしていた。

懸命な読者の方は、既にお気づきであると思うが、火麻激参謀は現在、国連事務総長ロゼIIアプロヴァール女史の要請により、ニューヨークへと出向している。

その為、前回の戦いには参加していなかったのである。

2人の前に凱が護を連れてきたのは、そんな時だった。

「GGGの新メンバーを紹介するよ。右が月村正樹。左が藤宮紫苑。2人とも凄腕の科

学者さ」

凱の紹介が終わると同時に、正樹と紫苑はカップを置き、まずは紫苑が右手を差し出す。

「はじめまして。GGG医療部部长、並びに第2研究開発部副部长の藤宮紫苑です。よろしく」

「よろしくお願いします」

ガツチリと握手を交わす護と紫苑。紫苑に続いて、正樹も護に右腕を差し出す。

「GGG参謀部部长、並びに第2研究開発部部长の月村正樹だ。よろしく頼む」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

握手を交わしたあと、護と凱を交えて談笑を再開する正樹達。久しぶりの穏やかな時間を誰もが楽しんでいた。

次の日、護は朝からバスに乗り、ある場所へと向かっていた。その目的地は『私立創星学園』。護、そして戒道が明日から通う予定の私立学園だ。場所は勇から聞いて知っている。今日は日曜日だが、少しでも早く学校の様子を見ておきたかったのである。

「わっはあ…」

バスを降りた護は、目の前に広がる光景に思わず声をあげた。海岸沿いの広大な敷地に立ち並ぶ様々な施設。

中高一貫校であると勇が言っていたが、ここまで広いとは考えていなかった。護は校門を通り、舗装された道路を通って少し先にある校庭まで行ってみようと歩き出した。すると、道路の脇の芝生から威勢の良い声が聞こえていた。

「ハッ！ ハッ！ セヤッ!!」

声の主は長身の青年だった。185cmはあるだろうか。黒のスポーツウェア姿で拳法の演舞を行っている。

「凄く…綺麗な動き…」

護は青年の演舞に見とれていた。地球を旅立つてから5年の間、護は宇宙で様々な戦士に出会ったが、ここまで美しい演舞を行える者は、そう多くはなかった。

青年は更に演舞を続ける。時には流れる水のように緩やかに、時には荒れ狂う風のように激しく、変幻自在の演舞を繰り広げる。

「ハアアア…セイッ！」

そして、青年が演舞を終えた時、護は思わず拍手をしていた。その音に気づき、青年は護の方へ振り向いた。

「あ…おはようございます」

「おはようございます」

護に爽やかな笑顔で挨拶を返す青年。

「見かけない顔だけど…君、転校生？」

「はい！ 明日からここに通うことになった天海護です！」

「天海、護…」

護の名前に聞き覚えがあるのか、暫し考え込む青年。

「もしかして、凱さんが言ってたマモル君って、君の事？」

「えっ!? はい、そうですけど…」

突然の質問に驚き、ちよつと間の抜けた返事をする護。

「あ、そうなんだ！ 君が！ くう…ラッキー!!」

ガッツポーズを決め、喜ぶ青年。護はただキョトンとするばかり…。

「あの、凱にいちやんを知ってるんですか？」

「ああ、俺の両親…獅子王麗雄博士の部下だったんだ」

「部下…だった？」

「うん。5年前、木屋で…」

「あ…ごめんなさい！」

迂闊な事を聞いた事に気づき、慌てて謝罪する護。だが、青年は言った。

「気にしないで、もう5年も前のことだからさ」

「はい…」

「あ、自己紹介がまだだったね。俺は高等部3年の長瀬唯斗^{ながせゆいと}。よろしく！」

「そう言うと唯斗は右腕を護に差し出した。

「あ、よろしくお願ひします！」

ガツチリと握手を交わす2人。その時、2人は妙な感覚を同時に覚えた。

「えっ!？」

「あっ!？」

同時に声をあげる2人。

「どうか…した？」

「い、いえ…(なんだろう…この感じ)」

「そう、ならいいんだ…(何なんだ? この感覚は…)」

初めて感じる感覚に2人は一瞬戸惑ったが、また何事もなかったように話し始めた。

「そう言えば、天海君って…」

「護でかまいません」

「そう…じゃあ、護君。この学園の事は、もう誰かに聞いたりした？」

「いえ、あんまり…」

「そっか、じゃあ俺が案内してあげるよ」

「いいんですか？」

「ああ、どうせこれから暇だし」

「…じゃあ、お願いします」

「任された」

唯斗に付いて歩き出した次の瞬間――

「ッ!!」

護は背中に強烈な悪寒を感じた。インフェルノの物に比べれば弱いが、かなり強烈なゾンダーの気配である。

「ゾンダー!!」

「え?」

「すみません! 僕、行かないと…失礼します!」

そう言うのと護は瞬時に浄解モードに変わり、飛び去った。

「護くん! ちよつとまつ…」

引き止めようと手を伸ばした途端、激しい眩暈に襲われ、思わず膝を突く唯斗。頭の中で光が弾け、見た事もない景色が残像のように浮かんでは消えていく。

「何だ、この景色…俺は、何を…」

護がゾンダーの気配を感知する数分前、メインオーダールームでは、凱、正樹、紫苑の3人がティータイムを利用して、昨日護から聞いた話を仲間達に話していた。

「地球を旅立って2ヶ月を過ぎた頃、護は…人間によく似た異星人に…遭遇した」

「正確には幾つかの星系…何種類かの異星人の集合体だったんですが、彼等もゾンダー…正確には機界皇帝インフェルノ率いる機界33新種の軍勢に苦しめられていて、護君は自らが持つGパワーでゾンダーを退けた…」

「そして、彼らは護君に協力を求めた…まあ、当然の成り行きだな」

凱の言葉を補足する形で紫苑、続いて正樹も口を開く。

「それからどうなったの？」

「護は彼ら、組織の名前は『せいかんれんごう星間連合』と言うそうだが、彼等にGストーンを与えた。彼等は地球よりも優れた科学文明を持っていた為、Gストーンを大量生産して戦力を整え、ゾンダーへの反撃を開始した」

「ちなみに、ギャレオンもVギャレオンに強化・改造され、護君が操るVガイガー、ネクストガイガーにも星間連合のテクノロジーが随所に盛り込まれています」

すかさず紫苑が凱の言葉に補足を加える。

「戦況は…さすがに序盤は苦しんだらしい。護も先頭に立って戦ったそうだ」

「辛かったでしょうね、護君」

「ああ…だが、戦いが始まって3カ月後…大体4年半ほど前のことだが、突如、キングジエイダーが出現した事で戦局は大きく変わった」

「キングジエイダー…」

命の言葉の後、メインオーダーームは暫しの沈黙に包まれ、そこにいた全員がコーヒーを一口飲み、フツと一息つく。

「じゃあ続けます。キングジエイダーはZマスターとの最終決戦の際、Zマスターの内
部でザ・パワーを開放。Zマスターを絶対崩壊に導きましたが、自身もその爆発に巻き
込まれ、行方不明になっていました。で、合ってますよね？」

「うむ」

紫苑の言葉に大きく頷く雷牙。

「護くんの話ではその際、膨大なエネルギーの流れが時空の歪みを生み出し、キングジエイダーはそれに吸い込まれた…半壊状態ながらも、何とかその歪みから抜け出したキングジエイダーでしたが、出た先は…」

「星間連合とインフェルノの軍勢との戦いの真つ只中。というわけか」

「ええ、空間を飛び越えた際、半年ほど未来へ飛んでしまったようです」

大河の言葉に紫苑は頷きながら答える。

「星間連合はキングジェイダーを保護し、船の修復、ついでに強化も行った」

「それがネオジェイアーク。そしてネオキングジェイダーと言う訳か…」

雷牙の言葉に今度は正樹が頷く。

「Jは護曰く『命を助けてもらった借りを返す為、そして33新種を殲滅する為』に星間連合に参加。一騎当千の働きをしたそうです」

「Gストーンの物量に勝り、戦力の面でも、護君のネクストガオガイガー、そしてネオキングジェイダーという強力な助っ人を得た星間連合は徐々にゾンダーを圧倒。2ヶ月前の決戦で遂に完勝した」

「だが、そこで倒したのはインフェルノの持つ軍勢のホンの一握り、氷山の一角に過ぎなかった」

「そして、インフェルノは目標をこの地球に変更し、進軍を開始した」

「その事を仲間からそれを聞いた護、そしてJたちは危機を知らせるため、地球へと戻ってきた。と、護から聞いた話はこれで終わりです」

凱の言葉の後、暫しの間沈黙が場を支配した。だが、その支配も長くは続かない。異常を告げるサイレンがけたたましく鳴り響く。

「何事だ!!」

大河の声に命が答える。

「長官！ 護君からの緊急連絡です！」

護からの緊急連絡、それはゾンダー関係の事が殆どである。メインオーダーームは一気に緊張に包まれた。

ビッグオーダーームへ移行する間も、猿頭寺とグラナートがキーボードを叩きながら、淡々と報告を行う。

「監視衛星、月方向より地球へ接近する物体を確認。形状などからゾンダーキャツスルと推定されます」

「ゾンダーキャツスルが、このままの速度で進むと…あと30分ほどで地球が射程圏内に入ります」

「軌道上を哨戒中のネオジエイアークから電文。『先行し、城を攻撃する』との事です」
「つたく、氷竜達がまだ動けないってのに…敵さんは容赦ないよ」

2人の報告に思わず呟く正樹。

『ガザートス事件』の皺寄せを受ける形で行われたGGGの予算削減は、交換用パーツの備蓄量などに大きな影響を及ぼした。

それでも、オービットベースにはある程度の備蓄があったのだが、そのオービットベースが破壊されてしまったので、先の戦いでダメージを受けた勇者達の修理は、思うように進んでいなかった。

「玄武王に搭載していた資材をかき集めて、ブレイブは何とか修理出来ましたけど、氷竜達は応急修理しか出来ていませんからね…」

「仮に修理が出来ていても、武器がないんだ。まさか素手で戦わせる訳にもいかないだろう」

今、GGGにある交換用パーツは、十分な数ではない各ビークルロボの装甲板や動力部関係のパーツくらいである。

雷竜の電磁荷台や光竜のメーザー砲といった武装を始めとする、特定のビークルロボにしか必要のないパーツに関しては、現在一切備蓄がない。その為、勇者ロボの殆どは今、ほとんど丸腰に近い状態だった。

「とにかく、J-1人を戦わせるわけにはいかない。長官！俺もブレイブで—」
「僕も行くよ!!」

凱の言葉を遮るように響く声。凱が思わず声の方向に視線を送ると—
「僕も行くよ、凱にいちちゃん」

そこには護の姿があった。その目からは確固たる意思が感じられる。

「護…：そうだな、一緒に戦おうぜ!!」

「うん!」

「よし! ブレイブガオガイガー、及びネクストガオガイガーの2機は至急発進し、ネオ

ジエイアークと合流！ ゾンダーキャッスルを殲滅―」

その時、大河の声を遮るようにサイレンが再度けたたましく鳴り響いた。

「千葉県野島崎沖120kmで重力異常を検知！ これは、ESウインドウです！」

「なんだと!?!」

「現地からの映像、出ます！」

紫苑の声と共に現場の映像がモニターに映し出される。そこには、ESウインドウから続々と出現するゾンダーレギオンの姿があった。

「ゾンダーレギオン！ そうか、ゾンダーキャッスルは囲だったのか…」

「宇宙からはゾンダーキャッスル、ESウインドウからはゾンダーレギオン…まさに泣きっ面に蜂って奴だね」

「長官、ネオジエイアークから再度電文『地上の状況探知、増援は無用』との事です」

「となると、宇宙の方はJさんに任せて、凱さんと護君は千葉へ向かった方が得策ですね」

「同感だね。それにゾンダーキャッスルは、今の所1隻しかいない。1対1の勝負なら、ネオジエイアークの負けはない」

紫苑、そして正樹の言葉を聞いた大河は、一瞬の沈黙の後―

「作戦変更！ ブレイブガオガイガー、及びネクストガオガイガーの2機は、蒼龍王、朱

雀王と共に発進し、ゾンダーレギオンを殲滅せよ!!」

高らかにそう宣言した。

大河の指示から数分後、エクセルベースから2隻の船、高速汎用射出母艦“蒼龍王”と超級機甲戦術艦“朱雀王”が分離し、海上に浮上。そのまま現場へ向けて発進した。

同じ頃、ネオジエイアークはゾンダーキャツスルとの戦いを開始しようとしていた。

「各ミサイル装填、反中間子砲、全砲門開け!!」

「リョウカイ」

Jの指示に答え、トモロが迅速に攻撃準備を整えていく。

「目標！ 前方敵戦艦！ 反中間子砲、撃てえ!!」

そして、ネオJアークの砲塔から強力な反中間子ビームが発射され、戦いの火蓋が切って落とされた。

ネオJアークから放たれる幾筋もの光条と、ゾンダーキャツスルから放たれる幾筋もの光条とが交差し、互いの目標へと向かっていく。それを片方は悠々と回避し、もう片方は強靱なバリアで無効化する。

ゾンダーキャツスルが射出した無数のゾンダーレギオンを、ネオジエイアークは小型ミサイルの一斉発射で、まとめて吹き飛ばす。両者一步も譲らぬ戦いは続いていく。

一方、ゾンダーレギオン殲滅に出撃した凱達も、千葉市の手前数kmの地点で壮絶な空中戦を繰り広げていた。

「GFシステム起動！」

凱の声が響くと共に、ブレイブガオガイガーの四肢が緑の光を纏う。

「うおおおっ!!」

そのままスラスターを全開にして、前方のゾンダーレギオンへと突進。放たれる怪光線を類稀な機動性で回避しつつ、肉薄すると――

「はあっ！」

緑の光を纏った右拳を叩き込んだ。その拳はバリアを突破し、ゾンダーレギオンの頭部を打ち砕く。

「ドリルニー！」

そのままの勢いで膝のドリルを叩き込み、今度はその胴体に風穴を開けた。直後、爆発するゾンダーレギオン。

それを見た他のゾンダーレギオンは距離を取ろうとするが――

「ブロウクンマグナム!!」

間髪入れずに放たれた勇者王の鉄拳が、それらを纏めて薙ぎ払っていく。

「全武装展開、マルチロック！」

ネクストガオガイガーの全身に装備された火器が、それぞれ目標を捉えていく。そして—

「フルブラスト！ いっけえええっ!!」

次の瞬間、それらが一気に放たれた。無数の火線に十数体のゾンダーレギオンが貫かれ、爆発していく。

「貴様ら皆、ここで打ち砕く!!」

「街には一体も近づかせない!!」

凱と護の叫びが轟く中、戦いは続いていく。

「……何か妙だねえ……」

モニターに映し出される戦況を見ながら、そう呟く正樹。

「月村君、何か腑に落ちない点でも？」

「ええ、ちよつと気になるんですよね。奴らが本当に本命なのか？ つて事が」

「……どういう意味かね？」

「いや、最初は俺も奴らが本命だと思ったです。でも、奴らが本命だとするならば……出てくるのがあまりにも早すぎるんですよねえ……」

「正樹さんの言うとおりです。仮にあいつらを本命とした場合、戦略的に見て、こちらが何らかのアクションを起こした後に、不意を突く形で出してくるのがベストなんです」
「人間の指揮官ならば、進軍のタイミングを間違える可能性もあります。ですが、そんなミスを機界生命体が犯すとは、到底思えません」

正樹の言葉に揃って同意の意見を述べる紫苑とグラナート。

「つまり、このゾンダーレギオンの群れも囿に過ぎず、これから本当の本命が出てくるのでは？　そう言う事かね？」

「ええ、そう言う事です。俺や紫苑、グラナートの考え過ぎでなければ…」

次の瞬間、異常を告げるサイレンがビッグオーダールームに三度鳴り響く。

「Gアイランドシティ郊外に巨大生命体が出現！　現地の映像、出ます!!」

紫苑の声と共に現場の映像がモニターに映し出される。そこでは、蜘蛛と人間を組み合わせたようなグロテスクな怪物が市街地へと進んでいた。

「コイツは…」

「明らかにゾンダーレギオンとは違います。恐らく…」

「機界33新種の1体…」

「…現時点を持って、あの機界生命体をゾンダーナーセント、ZN-01と認定呼称する！」

「こっちの戦力が全て出撃した後には現れるとは…正樹さんの予測が現実になりましたね…」

「このままじゃ、Gアイランドシティが好き勝手に荒らされちまう…ミコツちゃん！
凱達を呼び戻せる？」

「通信は送ったけど、すぐには無理みたい。向こうもゾンダーレギオンが残ってるし…」
「ネオJアークのほうも同様です。ゾンダーキャツスルが更に1隻出現…暫くは膠着状態ですね…」

「くそっ！ 何か無いのか…奴を倒せなくてもいい。何か時間を稼げるような…」
髪の毛を掻きながら、必死に考える正樹。その時—

「リュシフェル…」

このエクセルベースで眠る機体が、不意に脳裏へ浮かんだ。

「そうだ、ここにはあれがあった！ 長官！ 『リュシフェルガオー』を出撃させます！」
突然の正樹の言葉に、少なからず驚きを見せる大河。

「月村君、あの機体はパイロットが決まっていないのでは？」

「はい…ですが、遠隔操縦で飛ばす事は出来ます。凱達が戻るまでの時間稼ぎくらいなら！」

「……うむ。リュシフェルガオー、出撃承認！」

「了解！」

大河の承認を受け、正樹はすぐさまキーボードを操作する。

「リュシフェルガオー…全封印解除。システムを遠隔操作に切り替え！ …リュシフェルガオー！ 起動!!」

正樹の声が響いた直後、エクセルベースの格納庫で眠る機体『リュシフェルガオー』が目覚めます。同時に格納庫のゲートが開き、誘導用のランプが灯る。

「発進!!」

声と同時にリュシフェルガオーは空へ飛び出し、そのまま現場に急行する。白い機体が青い空に良く映えていた。

「クククツ、ここのも簡単に策に嵌まるとは…」

G アイランドシティへゆつくりと近づきながら、不敵に呟く機界生命体。

邪魔な勇者は出払い、自らを阻むものは何も無い。ゆつくりと街の破壊を楽しもう。

リュシフェルガオーが轟音を上げて上空に現れたのは、そう思った矢先の事だった。

「それ以上やらせるか!!」

メインオーダールームでの正樹の叫びと共に、両翼の付け根部分に装備された25m m機関砲で攻撃するリュシフェルガオー。しかし、バリアに阻まれ、機界生命体の体に

傷一つつける事が出来ない。

機界生命体も鬱陶しげに4つの目から怪光線を放つが、リュシフェルガオーもそれを回避する。そんな攻防が数分続いたが――

「本当に五月蝍い蝍だ！」

遂に、機界生命体の怪光線がリュシフェルガオーに直撃した。機体のバランスが崩れ、みるみるうちに高度が落ちていく。

「くうっ！　市街地にだけは落ちるなよ!!」

正樹の必死の操作により、市街地への墜落は避けられた。だが、それが限界だった。数秒後、創星学園の校庭に不時着するリュシフェルガオー。

「なんとか、市街地には落ちずにすんだか……」

「猿頭寺君、彼女に連絡を、リュシフェルガオーの回収に向かわせてくれ」

「了解」

「5分ちよつとか。もう少し時間稼ぎしたかったが、これからどうする……」

正樹の呟きはメインオーダールーム全体の空気を表していた。

その頃唯斗は、校庭に不時着したリュシフェルガオーに向けて走っていた。

「パイロット、助けないと！」

そう言いながら機体に辿り着くと、あつという間に機首により登り、コクピットの中を覗き込む。

「誰もいない。無人機なのか…よかった」

安心した唯斗はキャノピーに手を置き、ホッと一息つこうとした。だが、突然キャノピーが開き――

「えっ?」

頭からコクピットへ吸い込まれた。

「うわっ!」

直後、鈍い音が響き、悲鳴を漏らす唯斗。

「いつ…てえー。何でいきなりキャノピーが開くんだよ…」

ぶつくさ言いながらも体勢を立て直し、シートに座る唯斗。珍しそうに周りを見渡す。

「凄い、これがGGGのメカニックか…」

そう言いながら、唯斗が何気なく操縦桿に触れた瞬間、機体から強烈な光が迸る。

「ハ、これは…」

それと同時に唯斗の脳裏へ先程同様、見た事もない景色が浮かんで消えていく。

「一体、何なんだ…」

次の瞬間、唯斗の心にある言葉が浮かび上がってきた。唯斗の意思とは関係なく、口からその言葉が紡ぎ出される。その言葉とは。

「フュージョン」

その言葉の直後、機能を停止した筈のリュシフェルガオーが再起動し、一気に天空へと舞い上がった。

そして、そのまま変形を開始、戦闘機からロボットへと変わると同時に、2つの目が緑の光を宿し変形を完了した。

リュシフェルガオーが変形を完了した直後、その現場に1台のバイクが到着した。バイクの名前は『Gストライカー』。

極限まで流線型にこだわった濃紺のボディラインが特徴的で、最高速は370kmにもなる。今搭乗している女性のために設計された特別モデルである。

女性の名前はルナ。ヘルメットからしなやかな金髪が伸び、目を覆ったマスクの為に素顔は見えないが、双眸の部分から澄んだ瞳がのぞいている。

そして、彼女の服は全て黒で統一されていた。ボディラインを強調したレザーーツも、ロングブーツも、そして、上から羽織っているロングコートも。

「リュシフェルガオーが…」

G ストライカーから降り、変形したりユシフェルガオーにルナが近づこうとした瞬間、マスクに内蔵された通信機が作動した。

『ルナ君っ、いまどこかね？』

「現場です長官。そちらに画像は送られていると思いますが…」

『うむ、リユシフェルガオーが…』

「はい。パイロット、資格者がいたという事ですね」

リユシフェルガオーを操ることはそう簡単な事ではない筈。声は冷静だったが、意外な事態にルナは驚きを隠せなかった。大河もそれを察したように、興奮と困惑を抑えて言った。

『そのとおりだ。しかも選ばれたのは、普通の青年のようだ』

普通の青年。大河の言葉にルナは唇を噛みながら、慎重に言葉を紡ぐ。

「とにかく、今は信じるしかありません。コクピットの映像をこちらにまわしてください。ここから私とその青年と話してみます」

ルナのマスクのアイスクリーンに、コクピットにいる唯斗の映像が送られた。

その頃唯斗は、コクピットの中で現在の状況を整理していた。

「今、俺は墜落してきた戦闘機のコクピットにいる。それから操縦桿に触れたら、頭の中

が真っ白になって…気がついたら、こんな風になってて…つまり、今俺はロボットの中心にいる。」

『正解よ』

コクピット内に響く女性の声に、唯斗は思わず周りを見渡した。

「え、なに…ここが見えてるの?」

『ええ。今、貴方が乗っているのはGG機動部隊所属のメカノイド『ネオガイガー』のコクピットなの』

「ネオ、ガイガー…」

『そう。さぞ驚いたでしょうけど、それはお互い様。でも、こうなったからには今からやって貰わなくちゃならないことがあるの』

「あー、それって…あそこに見えている化け物と戦えつてことですか?」

『そういうこと。わかっているみたいね』

「それはまあ、ずつと見てましたから」

『やってくれる?』

「…いいですよ」

ルナの要請を唯斗はアツサリと了承した。説得にてこずると思っただけに、少々肩透かしを食らった気分になるルナ。

『随分、アツサリと決めるわね』

「だって、俺が動かさなきゃいけないんでしょ？ これ」

『ええ、そのネオガイガーは操縦者を選ぶ機体…凱隊長が既にブレイブガオガイガーを操っている以上、今のGGGには、貴方以外にそれを操れる人間が存在しないわ』

「なるほど。これが俺にしかできない事だったら、俺…やります」

『ありがとう。あ、それとネオガイガーはもう貴方に連動しているわ』

ルナの言うとおり、唯斗の動くままにネオガイガーは動いた。

「なるほど…こりゃいい」

『ネオガイガーに搭載された戦略コンピュータ『Lucifer』が、状況に応じて必要な情報を貴方に教えてくれる。あとは、戦闘システムを完全起動させて』

「起動って、どうするんですか？」

『目の前に点滅しているボタンがあるでしょう？ それを押してみて』

言われるまま唯斗がボタンを押すとパネルの一部が開き、掌サイズの白い携帯ゲーム機のような物が出てきた。

「はい、ありますけど…」

『それはGコマンドー。いい？ それのジョグダイヤルを回してモードを『BATTLE』

』に切り替えて』

「はいー！」

『それをボイスコード入力後にコマンド送信端末に差し込んで！ ボイスコードはブレイブ・インよ!!』

「わかりました！ ブレイブ！ イン!!」

叫びとともにGコマンドをコマンド送信端末に差し込む唯斗。戦闘システムが完全起動したネオガイガーの全身から緑の光がこぼれ、エネルギーが漲っていくような感覚を唯斗に与える。

「それじゃあ…いきます!!」

そのまま唯斗。いや、ネオガイガーは大地を蹴り、機界生命体へ向かって飛翔した。

「頼んだわよ」

ルナもまたGストライカーを起動し、猛スピードで現場へと向かった。

「クククツ、今からこの街は火の海となる。私の手によって！」

恍惚の声を上げながら最大出力の怪光線を放つ為、充電を始める機界生命体。

「さあ、歓喜の時間の幕開けです!!」

そして、街へ向けて怪光線が放たれようとした、まさにその時！

「させるかあ!!」

機界生命体の上空に到着したネオガイガーが、そのまま重力に身を任せながら落下し、その後頭部に強烈な蹴りを喰らわせた。

「又オツ！」

他に戦力がいないと思いつみ、バリアを解除していた機界生命体は、その蹴りをまともに喰らい、顔を地面に埋める形で倒れこんだ。更に最大出力の怪光線が暴発し、爆発する。

「ギヤアアアアア！」

「ぞまーみろ!!」

ネオガイガーは、蹴りの反動を利用した前方宙返りを決めつつ見事に着地し、そのままクラウチングスタートの構えを取ると――

「いくぜえー！」

機界生命体が立ち上がった瞬間にあわせてダッシュ、そのまま体当たりをしかけた。
「ぐっ、まだ邪魔者が――」

思わぬ敵に出現に虚を突かれた機界生命体は、この体当たりもまともに受けてしま
う。

「うおおおおつ!!」

ネオガイガーは、そのまま機界生命体に掴みかかり、全てのスラスターを全開にして、

機界生命体を市街地から遠ざけていく。

「ネオガイガー、市街地から埠頭の方へ移動中!」

「市街地の被害を防ぐ為か。どうやら、こちらが指示するまでもないようだな」

命の報告に微笑を浮かべる大河。モニターが、ネオガイガーと機界生命体を追って、めまぐるしく切り替わる。

「うおおおおりやあ!!」

埠頭まで来たネオガイガーは、そのままの勢いで海へ機界生命体を押し倒し、素早く距離を取った。

「つしやあ! ここのなら暴れても被害は出ない! かかつてきやがれ! 蜘蛛野郎!!」

「クククツ、面白い事を仰る方だ…先ほどは不意をつかれましたが、同じ手は効きませんよ」

そう言いながら立ち上がる機界生命体。その顔には他人を見下すような笑みが浮かんでいる。

「二応、名乗らせていただきます。私はスパイダス、偉大なる機界皇帝、インフェルノ様にお仕えする32の新種が1つ! 貴方を地獄へ送る死神です…さあ、覚悟しなさい!!」

そう言い放ち、4つの目から連続で光線を放つスパイダス。

「おおっと!!」

ネオガイガーは咄嗟の横っ飛びで光線を回避、それと同時に、唯斗は機体のスペックを呼び出す。

画面に映し出されたネオガイガーの簡易図は、両側頭部と両肩の装甲、そして両腕と両太腿、左腰が点滅しており、更に武装の名が現れる。

「片っ端から試していくか…まずは、Gクレツセント!!」

唯斗の声と共に、ネオガイガーの右腕が左肩装甲を掴むと、装甲の一部が切り離され展開、同時に鋭い刃が飛び出す。

「いっけえ!!」

小型のブーメランとなった肩装甲『Gクレツセント』を気合と共に投げつけるネオガイガー。

刃の部分が高熱を帯び、赤熱化したGクレツセントは、独特の軌道を描きながらスパイダスに迫り、背中の蜘蛛の足を一本切り落とす。

どうやらスパイダスはバリアを展開していないようだ。しかし、切り落とされた蜘蛛の足はすぐに再生してしまう。

「ちいっ! 威力が低いか…なら、これはどうだ!!」

Gクレツセントを収納したネオガイガーは、頭部の『17.5mmC I W S』を連射

した。放たれた弾丸は、スパイダスの全身を風穴だらけにしていくが、その風穴は開けられる端から再生し、塞がっていく。

「くそっ！ 罅が明かねえ！」

そんな叫びと共にネオガイガーは跳躍し、両腕の『グレネードランチャー』を連射しながら、スパイダスと距離をとる。

放たれたグレネードはスパイダスを炎で彩るが、決定打には至らない。

「残った武器は2つ、効いてくれよ！」

次の瞬間、ネオガイガーの両太腿のパーツが一部展開、中に収納されていた大型ハンドガンが、飛び出すようにして両手に握られる。

「Gプラスター!!」

気合と共に2丁の大型ハンドガンⅡ『Gプラスター』を発射するネオガイガー。だが、スパイダスはバリアも張らず、余裕の表情だ。しかし—

「ぐおっ！」

Gプラスターから放たれた弾丸を受けた瞬間、スパイダスが苦悶の声を上げた。更にその体が僅かによろめく。

「効いてる……よし—」

効果があった事で更にGプラスターを連射するネオガイガー。しかし—

「無駄ですよ！」

その弾丸の全ては、スパイダスの展開したバリアに防がれてしまう。

「くそっ！ バリアか!!」

「少々、貴方の事を見くびっていました。ですが、その銃もはや弾切れ……」

「くっ……」

スパイダスの言葉どおり、Gブラスタアの残弾は0だった。舌打ちをしながらGブラスタアを両太腿内部に収納するネオガイガー。

「これで、ファイナレです！」

次の瞬間、スパイダスの背中足の足が伸び、鞭のようにネオガイガーに襲い掛かる。装備された火器が通用しないネオガイガーに、もはや打つ手はないかと思われた。しかし！

『ガイガースラッシャーを使うのよ!!』

「ガイガースラッシャー、これかあ！」

ルナからの通信に従い、ネオガイガーが左腰の『鞘』から抜刀した。

それはロングソードタイプの『剣』だった。刀身から放たれる光が、かなりの業物である事を感じさせる。

「でやあ！」

白刃一閃。気合と共に振るわれたガイガースラッシャーは、ネオガイガーに襲いかかった蜘蛛の足全てを見事に斬り裂いた。

「なに!? もしかして、これが必殺武器なのか!？」

ガイガースラッシャーの凄まじい切れ味に、感心したような声を上げる唯斗。そして、その顔に余裕の表情が浮かぶ。

「つしゃあ! 勝負はこれからだぜ、化け物!!」

そう言う唯斗は、ガイガースラッシャーを正眼に構えた。

「そんなナマクラで…私を斬れるとお思いですか?」

「当然だ!!」

「たいした自信だ…ですが、そんなナマクラ一本では私を倒すどころか、私の糸すら切れませんよ。もつとも、私の糸は特別製でしてねえ。伸縮自在、強度抜群、弾力充分の逸品です。そんなナマクラで切れるような代物では…」

「ペラペラ喋りやがって、相当自信があるようだな?」

スパイダスの言葉に、半ば呆れた感じで反論するネオガイガー。

「当然です! 貴方達のような下等生命体に、この宇宙の支配者たる我等機界33新種の力を打ち破れる筈がない!!」

「あつ、そう。じゃあ、試してみるか!!」

そう言うと同時にスラストターを全開にして、スパイダスに突進するネオガイガー。

「真正面から来るとは、命知らずですねぇ!!」

ネオガイガーの突進を嘲笑いながら、口から無数の糸を放つスパイダス。糸はそれぞれが生き物のように動きながら、ネオガイガーに絡み付こうと押し寄せる。

「でやりやあああつ!!」

だが、ネオガイガーは、ガイガースラツシャーを縦横無尽に振り回し、その糸全てを切り裂いていく!

「なんだとー!」

思わず驚愕の声を発するスパイダス。その隙にネオガイガーは一気にスパイダスに肉薄し—

「もらったあー!」

ガイガースラツシャーの逆袈裟切りで、スパイダスの左腕を切り落とした。オイルを噴出しながら、宙を舞うスパイダスの左腕。

「凄いわね。この短時間であそこまで動けるなんて…」

目の前で繰り広げられる光景に思わず眩くルナ。

「馬鹿な…私の糸が、腕が切られるとは…おのれ、このままでは…済まさんぞ! 貴様

この世から消してやる!!」

瞬時に腕を再生させたスパイダスは、先程までの口調とは一変、怒りを前面に出して暴れだした。

「喰らえ！」

スパイダスの目と口から、今までとは比較にならない程の強力な怪光線が乱射される。

「ちいっ！」

咄嗟の横つ飛びで避けるネオガイガーだが、回避に精一杯で反撃する事が出来ない。

「何か、何かないか。こいつを倒す為の方法が——」

その時、唯斗の脳裏に1つの単語が浮かび上がる。

「ッ！ これは、そうか！ こいつが、ネオガイガーが俺に教えてくれる。こいつを倒す、最適の手段を!!」

そう言う時唯斗は空に右手を掲げ、力の限り叫んだ。

「来い！ ネオ・ガオーマシン!!」

唯斗の声と同時に、エクセルベースからステルス爆撃機、ロケット式戦闘機、ドリル戦車が現場に向けて飛び出した。リュシフェルガオー同様、エクセルベースに封印されていたネオガイガー用のガオーマシン『ネオ・ガオーマシン』である。

「長官！ ネオガイガーから、ネオ・ファイナルフュージョン要請シグナルが出ています

！」

「なんだと!!」

命の言葉に流石の大河も驚きを隠せない。

「ZN―01、スパイダスを倒すなら、現時点ではそれが最善の策。じゃが…リスクが大
きすぎる」

「雷牙博士、仮にネオ・ファイナルフュージョンを実行したとして、成功の確率は？」

「プログラムは完璧、シミュレーションでも問題なし。じゃが、実戦で…しかもこの状況
じゃからのお…まあ、20%と言った所かのう」

「20%か…」

その時、今まで沈黙していた正樹が口を開いた。

「長官、やってみましょう」

「月村君…」

「確かに、これは賭けです。失敗すれば俺達の負け。ですが、彼はいきなりフュージョン
に成功し…しかも、この短時間であそこまでネオガイガーを使いこなしている。素質は
充分にあります」

『私も月村博士と同意見ですわ』

「ルナ君！」

『上手くは言えませんが、彼ならやってくれる。そんな気がします』

数秒の間沈黙に包まれるビッグオーダールーム。それを打ち破ったのは、やはりこの男であった！

「やってみよう」

「長官！」

「勇者とは、平和を愛する勇気ある心を持つ者だ！ ならば、彼も立派な勇者。私は新たな勇者の可能性を信じる!!」

「ネオ・ガオーマシン現地到着!!」

「よし！ ネオ・ファイナルフュージョン、承認!!」

「了解！ ネオ・ファイナルフュージョン、プログラムドライブツ!!」

間髪入れず、命がカバーを叩き割る。

「よっしゃあ!!」

叫びとともに上空へと飛び上がるネオガイガー。それを見たスパイダスは、怪光線を放とうとネオガイガーを睨み付ける。

「邪魔はさせないっ!!」

ルナは咄嗟にGストライカーに装備されたロケットランチャーで攻撃した。スパイダスのボディにロケット弾が次々と炸裂する。

「ぐわあー！」

スパイダスが悲鳴をあげている間にプログラムが実行され、合体が開始される。

「ネオ！ ファイナル！ フェージョオオオン！！」

叫びと共に展開された電磁竜巻を突き破って、3機のネオ・ガオーマシンがネオガイガーの元に集結。それと同時に、各々のマシンが変形を始め、合体が開始される。

ネオ・ドリルガオーとネオ・ライナーガオーは2つに分割してそれぞれ両脚と両肩に、そしてネオ・ステルスガオーは両腕と背面部そして頭部に。そして、電磁竜巻を吹き飛ばし、白い巨人が名乗りをあげた。その名は。

「ガオ！ ガイ！ ガアアアアツ！！ アアアアアルツ！！」

「ネオ・ファイナルフェージョン、成功です！！」

「なんと…」

「やってくれたよ…」

「うむ、やはり彼も勇者だった！！」

ガオガイガーRはファイティングポーズを取り、スパイダスを睨み付ける。

「待たせたな、始めようか！」

「合体したからといって、私に勝てるとも思っているのか？」

「ああ、思ってるけど…それが何か？」

挑発交じりに放ったその言葉がスパイダスを沸騰させた。

「貴様、一瞬でスクラップにしてやる!!」

叫びとともにスパイダスは、腕を振り上げ襲いかかった。スピード、威力共に強烈な物であることは一目で解る。だが、ガオガイガーはその場から一步も動こうとはしない。

「死ねえー!」

叫びを上げながら、スパイダスはガオガイガーに腕を振り下ろす。そして、そのまま直撃……しなかった。

紙一重のところでもガオガイガーは上体を逸らし、スパイダスの攻撃を回避したのである。

「おのれ、小癩な真似をー!」

スパイダスは先程以上のスピードで攻撃を繰り返して来る。だが、その攻撃はあと一步のところでもガオガイガーに届かない。

「何故だ! 何故、私の攻撃が届かない!」

焦りを隠せないスパイダス。自分は機界33新種が1つ。宇宙を支配する存在。だが、今自分の目の前にいる生命体は自分を畏怖しようとしなければかりか、自分の攻撃を紙一重ではあるが、かわし続けている。

「こんな筈では、こんな筈では!!」

「隙有り!」

次の瞬間、ガオガイガーRの強烈なストレートが、カウンター気味にスパイダスの顔面へ炸裂した。

「ぐほお!」

顔面が拳の形に陥没し、オイルを噴出しながら海へと吹き飛ぶスパイダス。

「よくも、よくも私の顔に傷を…」

「ん?」

「許さん、許さんぞおおおつ!!」

顔面を殴られ、更に逆上したスパイダスは、立ち上がると同時に再びガオガイガーへと突進する。

ガオガイガーRも、それを待ち構える形で構えを取る。

「フアントムリング!!」

叫びと同時にガオガイガーRの胸部が展開し、エネルギーリングが飛び出す。

「ブロウクン! フアントームツ!!」

次の瞬間、フアントムリングを撃ち抜く形で、ガオガイガーRが右腕を射出した。射出された右腕は一直線にスパイダスに向い、再度顔面に直撃した。

「ぐわああああっ!!」

突進をアツサリと迎撃され、再び海へと吹き飛ぶスパイダス。

それを見たルナはガオガイガーRに呼びかける。

「今よ！ あいつの核を摘出して!!」

「摘出、そうか！ この機体もガオガイガーなら！」

声と同時にガオガイガーRは両腕を交差させ、一気に左右に広げ構えを取る。

「ヘル！ アンド！ ヘブン!!」

叫びと同時にガオガイガーRの両前腕部は高速回転を開始。

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ…」

反発力に逆らってガオガイガーRが両手を合わせた瞬間、ガオガイガーRの両腕が紅蓮の炎に包まれる。更に巨大なEMTフィールドが発生し、スパイダスの体をその場に縛り付けた。

「うおおおおおっ!!」

それをめがけ、ガオガイガーRの白い巨体が突貫。

「でやあああああっ!!」

装甲をぶち抜き、体から無数のパイプを引き千切って、必殺の両腕が新種核を抉り抜く。

「ぎやあああああつー！」

核を挟り出され苦悶の叫びを上げるスパイダス。次の瞬間、核を失ったスパイダスの体に火がつき巨大な火柱と化した。瞬く間に全身が炭化し崩れていく。

その火柱をバツクにガオガイガーRは自分の両腕を見つめていた。

「さつき、俺の両腕は炎に包まれていた。炎のヘルアンドヘブン…よし！ あの技の名前は『バーストヘルアンドヘブン』だ!!」

ガッツポーズを決めながら喜ぶ唯斗。そこヘルナからの通信が入る。

『ご苦労様。よくやってくれたわ』

「いえ、ところで、これってゾンダーなんですか?」

『そうね。何から話せばいいのかしら』

「…えーと、まずーついいですか?」

『何かしら?』

「お姉さんは、誰なんですか?」

唯斗の言葉にルナはフツと苦笑しながら言った。

『ゴメンなさい。自己紹介をしてなかったわね。私はGGG参謀部所属、機動部隊副隊長のルナよ』

「ルナさんですか…俺は長瀬…長瀬唯斗です」

『ええ、よろしくね。長瀬君』

「いえ、こちらこそよろしくお願ひします」

2人がそんな会話を交わしているとー

「ガオガイガーR!? 誰が操縦しているんだ?」

そんな声と共にブレイブガオガイガーとネクストガオガイガーが、ガオガイガーのすぐ近くに降り立った。

「凱さん! お久しぶりです!!」

高らかに響く唯斗の声。聞き覚えのあるその声に凱、そして護は驚きを隠せない。

「唯斗さん!」

「唯斗君!? まさか、唯斗君なのか?」

「はい!」

「どうして、どうして君が、ガオガイガーRに乗っているんだ?」

「それは、成り行きと言うか、なんとと言うか…とにかく、詳しい話は後で…まずはこれを…何とかしてもらえます?」

そう言つて、右手の新種核を差し出すガオガイガーR。

「あ、ああ…護、浄解を頼む」

「う、うん!」

フュージョンアウトした護は瞬時に浄解モードへ変わり、スパイダスの核へと向かっていくと、浄解を開始する。

「クーラティオー！ テネリタース：セクティオー！ サルース……コクトウーラ!!」

詠唱の終了と同時に、新種核の表面に波紋が走る。眩いばかりの緑の光が、護の両手からほとぼしり、新種核が何度も波打ちながら変形をはじめめる。緑の光が核を埋め尽くす。そしてそれが晴れた時、新種核は一枚の石板へと変貌していた。

「石板か……」

『凱、聞こえるか?』

「どうした、正樹」

「まずはご苦労さん。その石板はこっちで調査するから、持って帰ってきてくれ」

「わかってる」

『それと、長瀬……唯斗君だったよね?』

「あ、はい」

『君も一緒に来てくれないか? 色々聞きたいこともあるし……』

「あ、わかりました」

「よし……皆、帰還するぞ」

凱の声と共に、3体の勇者王はエクセルベースへ向け、飛び立った。

勇者達がその場を離れるのを見計らったかのように、一隻の大型クルーザーが埠頭に接近し、停泊した。その甲板に立つ1人の少年。細い体に整った顔立ち。透きとおるような銀髪。いわゆる『美少年』である。

「ふーん、ガオガイガーRか…スパイダスをあそこまで一方的に倒すなんて、結構やるね」

少年は飛び立った勇者達を作り出した飛行機雲を見上げながらそう呟いた。

「どう思う？ ザイノス、ウルフェス、ステインクス」

自分以外誰もいない筈の甲板に少年は甲高い声で呼びかける。次の瞬間、少年の眼前の空間に切り裂かれたような穴が開き、そこから3人の男女が姿を表した。

「ボク、3人の観想を聞きたいなあ〜」

甘えるような少年の言葉に、右端に立つ長身の男性が口を開く。

「所詮スパイダスは、人数合わせで入れられた補欠。口だけは達者な未熟者に過ぎん…そんな奴に圧勝したからといって、真の実力を見抜く事など出来ん」

その言葉に続くように真ん中に立つ細身の美女が、その長い栗色の髪を指で触りながら口を開く。

「ウルフェスは相変わらず慎重ですわね。でも、城や雑兵との戦いで、カインの遺産やア

ベルの残せし災いが、相当の実力を持つ事は充分にわかりましたわ。ザイノス、あなたの意見は？」

「まあ、ゲームの障害としてはちようどいいかもな」

ザイノスと呼ばれた筋肉質の男性は、ぶつきらぼうにそう答えた。

「そうだね。この星でのゲームは楽しくなりそうだよ。本当にね……」

少年はそう言うと、これ以上無いような冷酷な笑みを口元に浮かべ、再び空を見上げた。

「ずっと退屈だった……今度は楽しめるといいな……」

〈機界四騎士よ……〉

突如、空から響き渡る声。それは、4人の精神に直接響く声だった。

「インフェルノ様！」

声をあげ跪いた少年に倣い、後ろの3人も跪く。その次の瞬間、4人の前に機界皇帝インフェルノが姿を表した。

君達に最新情報を公開しよう!!

3体目の勇者王、ガオガイガーRの活躍で勝利を手にしたGGG。

しかし、その戦いはほんのプロローグに過ぎなかった。

本格的な侵攻を開始する機界33新種。

彼等が言う『ゲーム』の正体とは？

全てが謎に包まれたまま聖戦の幕が今開かれる。

勇者王ガオガイガー | E P I S O D E 0 4 |

『着装（前編）』

次回もこのURLにネオ・ファイナルフュージョン承認!!

これが勝利の鍵だ!!

『Gクラステクター』

勇者王ガオガイガー用語辞典

第4回『碧屋』

2年前、キッチンHANAの近くにオープンしたケーキ屋。

それほど大きな店ではないが、近隣の女の子は勿論、遠方からもわざわざ訪れるお客が居るほどの名店。

GGGの隊員にもファンが多く、命や正樹は常連客である。

— E P I S O D E — 0 4 〱 着 装 (前 編) 〱

♪ザン！♪ (GGGのマーク)

「機界4騎士よ…ゲームの準備はどうなっている？」

恭しく跪く4人の前で、インフェルノが呟くように言った。

「はい、雑兵100体、城2隻、そしてスパイダスを囿に使い、我等26体、青の星へ無事潜入いたしました」

そう答えるのは、あの少年である。残りの3人はただ黙って跪いていた。

「スパイダスはどうなった？」

「新たに出現した勇者王によって倒されました。残念ながら」

「そうか」

「まあ、スパイダスは我等の足元にも及ばない未熟な存在。この結果は当然と言えば当然かと…」

「…余裕だな」

「お任せ下さい」

そう答える少年の目は、自信に満ち溢れていた。

「期待しているぞ」

「「ははっ！ 全ては皇帝陛下の意のままに!!」」

4人が畏まると、インフェルノは一瞬にして姿を消した。どうやら立体映像だったようだ。

「さて、と」

少年が3人の方を向く。

「まずは、誰が行く？」

「俺に決まってるだろう!!」

「いえ、私が参りますわ」

「俺が行こう…」

3人は同時に声をあげた。どうやら順番を譲る気はないようである。

「しかたないね。いつもどおりアレで決めよう」

そう言うのと少年は指を鳴らした。再び空間が切り裂かれ、その狭間から1人の女性が出てきた。白いドレスを身に纏った黒髪の美女で、年は20代前半に見える。

「来たね、ローゼス」

「お呼びですか？ ドラグス様」

ローゼスという名前の美女は丁寧な口調で少年…いや、ドラグスに答える。

「いつもどおり、アレを頼みたいんだけど」

「御意」

そう言うのと右手を天に掲げるローゼス。三度空間が切り裂かれ、4本の剣が取り出される。

「いつもどおり、刀身に彫られた数字で順番を決める。いいね？」

「おう！」

「はい」

「…」

それぞれ剣を持ち、同時に引く。

「決まったようだね」

「そのようですわね」

力のない声を放ったステイングスの剣に彫られた数字は『2』。

「俺が一番手だな」

優越感を滲ませながら、ザイノスが剣を掲げた。その剣に彫られた数字は『1』。

「そう言う訳で、一番手はザイノスだね」

「まかせておけ!!」

そう言うのと、ザイノスは場を下がっていった。

「不覚ですわ」

「そう気に病む事ではないと思うが…」

落胆するステインクスに声をかけるウルフェス。続いてドラグスも声をかける。

「そう、君が引いた剣の数字は『2』。ザイノスがしくじれば出番は回ってくる。しくじればだけどね…」

「それも、そうですわね。では、私も準備に入らせていただきます」

そう言い残し場を下がるステインクス。既にザイノスの敗北を決めつけている。

「…ふっ」

それを眺めながら、ウルフェスは己の手に握られた剣を弄んだ。それに彫られた数字は『3』。

「悪いね。ウルフェス」

「いつもの事だ。大した事ではない」

「まさか、僕達がこの剣に細工をしていて、必ず『3』と『4』を引くようにしているなんて、あの2人は夢にも思っていないだろうね」

「もしも知っていれば、あのようには振舞えまい…」

「それもそうだね。ところで、ウルフェス」

「なんだ？」

「この戦い、どう見る？」

「断言は出来んが、もしかすると…：私たちの出番もあるかもしれんな」

「やっぱり、君もそう思ったんだね」

「真に強き者と戦う事、それだけが私を満足させる」

「僕は面白ければ、どうでもいいんだけど…」

そう言うとき2人は互いに視線を交わし、静かな…：だがはつきりとした笑みを浮かべた。

—EPISODE—04

【着装（前編）】（タイトルコール）

クルーザーでのやりとりとほぼ同じ頃、唯斗は凱と護に連れられ、メインオーダーームに足を踏み入れていた。

「すっげー…」

自分が予測していた通り、いやそれ以上の未来的な設備を呆然と見回す唯斗。その時、大河が笑顔でこう言った。

「メインオーダーームへようこそ。長瀬唯斗君」

「あ、えつと…よ、よろしくお願いします!!」

「うむ、元気がつ礼儀正しくてよろしい!」

「あ、ありがとうございます」

大河の言葉になんとか返事を返す唯斗。相当緊張しているようだ。そんな唯斗に雷牙が歩み寄る。

「久しぶりじゃの。唯斗君」

「雷牙博士! お久しぶりです!!」

「なんと、博士のお知り合いだったのですか?」

「知り合いも何も…長官も覚えておるじやろう。長瀬敬介、織恵両博士の事を」

「それはもちろ…まさか!!」

「そう、唯斗君は2人の息子じゃ」

「そうだったのですか…」

雷牙の言葉に驚きを隠せない大河。そんな2人を横目に紫苑が正樹に小声で話しかける。

「正樹さん。長瀬敬介博士、織恵博士と言えば…」

「ああ、今は亡き麗雄博士の『右腕』と『左腕』とまで賞されていた天才科学者夫妻。木星決戦時に麗雄博士同様亡くなられたが、もしもご存命なら新生世界十大頭脳のトップ

3にはいることは確実だった」

「ええ、麗雄博士曰く『もしもこの2人がいなかったら、確実に3年は超AIの完成が遅れていた』。それほど頭の脳の持ち主だったと伺っています」

「俺も何度か教えを受けた事があるが、科学者としても人間としても立派な方々だったよ。もつと、教えて頂く事があつたのにな…」

そう言うと、フツと目を細める正樹。昔の事を思い出しているのだろうか…。

一方、唯斗は――

「あの、凱さん。さっきのルナさんって人はどこに…」

2人のそんな会話を聞きながら、凱に質問をしていた。すると――

「はい、ど」

見事なタイミングでドアが開き、ルナが姿を表す。

「長官、ただいま戻りました」

「現場指揮ご苦労さまです」

「紹介するよ。この人がGGG機動部隊副隊長のルナさん」

ルナが護と唯斗の前に進み出た。

「さっきはご苦労様。改めてよろしくね。天海護君、長瀬唯斗君」

「はい、よろしくお願ひします」

「よろしくお願いします」

護も唯斗もルナの姿を見るのは初めてだった。護が思わず凱に問いかける。

「凱兄ちゃん。ルナさんは何でマスクなんか被ってるの？」

護のその言葉に虚を突かれたような表情になる大河、凱、ルナ、正樹、雷牙。だが、凱は一瞬で動揺を抑え、こう答えた。

「それは、聞かないでくれ」

「どうして？」

「ああ、ある事情があつてな」

凱の言葉に、護も唯斗もそれ以上追求する事もなかった。次に唯斗が口を開く。

「それで、さつきの化け物は一体何なんです？　なんか、新種がどうか言つてましたけど」

「あれは、機界33新種さ」

そう言つて、唯斗に機界33新種についての説明を始める凱。

「という訳で、唯斗君が操ったガオガイガーRは、対33新種の中核を背負う事も出来るほどの能力を秘めている訳だ」

「1つ、いいですか？」

「なんだい？」

「あの時、俺はネオガイガーを操ろうなんて考えてませんでした。あの時はいきなりコクピットが開いて、それで…」

「ここで、ルナが口を挟んだ。」

「それは、ネオガイガーが貴方を選んだのよ」

「俺を…選んだ？」

「そう、さつきも言ったけど、ネオガイガーは操者を選ぶ機体。今まで私を含む多くのGG隊員が、ネオガイガーを操ろうとしたけど出来なかった。ただ1人、凱隊長を除いてね」

「でも、何で俺なんですか？ 俺って普通の人間ですよ!？」

「そんな唯斗の言葉に、今まで黙っていた正樹も口を開く。

「まあ、その理由は正直言っただけ、全く不明だ。だが…」

「だが？」

「唯斗君は、リュシフェルガオーとフュージョンできる。これは紛れも無い事実だ。そう言う訳なんで、ちよつと協力してもらえるか？」

「何をですか？」

「ちよつとした検査をさせてくれ。血液検査とか…まあ、そんな所だ。もちろん強制じゃないから、拒否してくれてもかまわない」

「…いえ、お願いします。何で勇者王を操れたのか、俺も気になってますから」
「そうか。じゃあ、ついて来てくれ。紫苑、悪いがヘルプよろしく」

そう言うと、正樹は紫苑と唯斗を連れて、メインオーダールームを後にした。

数十分後、動揺した正樹の声がメインオーダールームに響く事など、この時誰一人として予想していなかった。

「何があつたんだ、正樹!!」

そんな声とほぼ同時にメデイカルルームに飛び込む凱。若干遅れてルナ、護、戒道、大河、雷牙の順で続く。

「…」

そんな凱とは反対に、無言で持っていたカルテを差し出す正樹。

「これは?」

「唯斗君の血液を採取した後、軽い気持ちで身体能力も検査してみたんだが…とにかく読んでみる」

正樹のその言葉に、その場にいた全員の視線がカルテに集中する。

「身長185cm、体重72kg…」

「その辺はいい。もっと先、身体能力の項目だ」

「ああ…」

正樹の言葉を受け、再び視線を動かす凱。次の瞬間、彼の声は数オクターブ上昇した。「握力、1.3t!?!」

凱の声、そしてその内容に、その場にいた正樹と唯斗、紫苑以外の全員が己の耳を疑った。

「そんなもんで驚くな。続きを読んでみる」

「背筋力4.0t、ベンチプレス2.1t、100mタイム6.2秒…正樹」

「言っておくが、計測機械はお前専用設計した奴を使っている。数値に間違いはない」「これだけの身体能力、オリンピックに出れば金メダルを独占できるわね」

ルナのそんな呟きに、誰もが首を縦に振る。

「それだけの能力に加えて、唯斗君の筋組織はスプリンターの機動性、ヘビー級ボクサーの瞬発性、体操選手の柔軟性、マラソンランナーの持久性を併せ持っています…はつきり言って、サイボーグだった頃の凱さん並の身体能力です」

「サイボーグの時の凱兄ちゃん並!?!」

紫苑の補足説明に、驚きを隠せない護。そんな護を横目で見つつ、紫苑は更に言葉を続ける。

「唯斗君の身体能力、記録をチェックしたんですが、少なくとも1ヶ月前までは常識的な

レベルです。高校生としてはトップクラスですけどね」

「すなわち、この1ヶ月で身体能力が劇的に上昇したわけだ…唯斗君」

「はい」

「何か、心当たりはないか。この1ヶ月で劇的にパワーアップするような体験をしたとか、何かの事件に巻き込まれたとか」

「そう言われても…今日の事くらいしか…それに、さっき突然パワーアップしたとしたか、思えないんです」

「そうだよなあ…となると、やっぱりアレしか考えられないか」

「正樹、何か解ったのか？」

凱のその言葉で、全員の視線が正樹に集中する。

「これは、あくまでも推測に過ぎないが…唯斗君が劇的にパワーアップした理由は、Gストーンにある」

そう言う正樹は、ゆっくりと言葉を選びながら、自らの仮説を語り始めた。

「皆もわかっているとおり、Gストーンは使用者の闘争心とか勇気といった、ポジティブな感情に感応する事で、莫大なエネルギーを生み出す奇跡の宝石だ…ここまではいいな

？」

「ああ」

「そして今回、リユシフェルガオーに搭載していたGストーンは、唯斗君の勇氣に感応し、莫大なエネルギーを生み出した。そのエネルギーは、ネオガイガーやガオガイガーRに強大な力を与えると同時に、唯斗君自身にも力を与えた」

「…たしかに、今思い出してみると、ネオガイガーやガオガイガーRを操縦している時は、こう…全身に力が漲つてる感じでした」

唯斗のそんな言葉に、正樹は確信を得たように頷き、再び口を開いた。

「そんなGストーンの恩恵は、唯斗君が操縦席にいる間だけ。その筈だったが、ここで予想外の事態が起きた」

「予想外の事態？」

「そう、一時的に強化されただけで、操縦席から降りれば元に戻る筈だった唯斗君の身体能力。それが、何らかのきっかけから強化されたままの状態になってしまった…俺はそう考えている」

「現段階ではそう考えるのが一番妥当でしょうね。僕は正樹さんの仮説を支持します」

正樹の仮説に賛同の意思を示す紫苑。その時―

「大河長官。お願いがあります」

正樹の仮説を無言で聞いていた唯斗が口を開いた。

「何かね？」

「もし、許されるのなら俺を、GGGに入れてください!!」

「唯斗君…」

沈黙が部屋を支配する中、それを打ち破るように大河が口を開いた。

「一つだけ聞かせてくれ。何故GGGに入りたいのかね？」

「さつきルナさんにも言いましたけど、勇者王を、ガオガイガーを操る事が俺にしかできないなら、それで何かを護れるのなら、俺はそれをやりたいんです。お願いします!!」

再び沈黙に支配される室内。だが、大河が再度その沈黙を破った!

「長瀬唯斗君!!」

「は、はい!!」

大河は、その美声を部屋中に響かせて宣言した。

「君の特別隊員としてのGGG入隊を、ここに承認する!」

「あ、ありがとうございます!!」

「ようこそGGGへ! 新たな勇者よ!!」

今ここに、新たな勇者が誕生した。

唯斗のGGG入隊から数時間後。メインオーダーームでは—

「ちよつと待ってくれよ! たったこれだけしか予算が出ないなんて、なんかの冗談だ

ろう!？」

正樹が国連から送られてきた書類を手に、悲痛な声をあげていた。

オービットベースの破壊に始まった、ここ数日の事件は、世界に震撼を与えた。

ただちに国連は緊急会議を召集。驚異的なハイペースで討議が行われた結果、GGGの組織再編成や勇者ロボの強化などが決定した。

人材育成の期間がまったくない為、人員は各分野のエキスパートを若干名補充する以外、現在のスタッフをそのまま採用しているが、今までよりも迅速、確実な活動が可能になった。また、一部スタッフは役職名が変更されている。

そして、勇者ロボ強化の為、追加予算が捻出された訳だが…。

「必要額の20%弱…これじゃ氷竜達の修理したらそれで御仕舞い、スツカラカンだよ…」

その額は正樹達の予想を大きく下回る額だった。

「今の国連の状態を考えれば、これだけの額を出してくれただけでも、奇跡に近いんですけどね」

「せめて、必要額の半分は出ると思ってたんだけどなあ、これじゃ強化なんて夢のまた夢だよ」

そう言って2人して頭を抱える正樹と紫苑。如何に2人が新生世界十大頭脳と言え

ど、予算がなければどうする事も出来ない。

「どっかに福の神でもないもんかねえ〜」

半ば自虐気味に正樹がそう呟いた時―

「正樹君、それに紫苑君宛に通信だよ」

「通信…誰からだい？ ミコツちゃん」

「新生世界十大頭脳筆頭、ファングつちみかどⅡ土御門博士から」

『福の神』は彼らの元に舞い降りた。

『やあ、正樹に紫苑。元氣そうで何よりだよ』

スクリーンに映る落ち着いた雰囲気きずなの青年。彼こそが音響科学の天才にして、新生世界十大頭脳筆頭を務めるファングⅡ土御門博士である。

「元氣と言えば、一応元氣だが―」

『予算の件で悩んでいる。違うかい？』

「…知ってたのか」

『まあ、国連にも知り合いは多いからね』

「ああ、なるほど。で？ 今日けふは世間話するつもりで、通信送ってきたのか？」

『まさか、資金援助だよ』

「資金援助？」

『ああ、詳細はそつちにメールで送った』

フアングのその言葉に、自前のノートパソコンを開き、メールソフトを起動させる正樹。

「フア、フアング…これって」

フアングから送られたメールを開いた途端、言葉を失う正樹。そこには300人近い科学者の名前と、それぞれの出資額が記載されていた。

『君と紫苑以外のU・S・Nメンバー全員から、一口300万\$で出資を募った。皆、快く出資してくれたよ。勿論、僕も出資させてもらった』

「…やつぱり、持つべきものは友達だね。国連からの追加予算とこれをあわせれば、必要額の7割に届く…水竜達の強化改造、どうにか形になりそうだ」

そう言うと、予算内に必要経費を納めるべく、プランの絞込みを始める正樹。そんな正樹を横目に見ながら紫苑は――

「フアングさん、ありがとうございます。おかげで助かりました」

スクリーン越しのフアングに深々と頭を下げた。

『大した事はしていないさ。これで地球防衛がより堅固な物になるのなら、十分に価値のある出資だよ』

そう言つて笑顔を見せるフアング。

「フアング、この借りは近いうちに必ず返すからな」

『それじゃあ、今度日本に行つた時にでも、美味しい和食をご馳走してもらおうかな』

「任せろ、寿司にすぎ焼き、天ぷら。鰻に河豚。胃袋がパンクするまで喰わせてやるよ」

『楽しみにしているよ。じゃあ、また近いうちに』

「おう、またな」

その日の深夜。

「うん…うん、へえ〜」

一人の女性が、自分の車の横に立ち、携帯で話しあつていた。自分を見つめる者がいるとも知らずに。

そして、その者は舞い降りた。女性へと向かつて…。

「それでね—」

そこまで言いかけて、その者に女性は気付いた。そして…。

次の日の早朝。夢の中にいた唯斗は突然、無機質なアラームの音に起こされた。

「う、うくん、何だ？ 目覚まし、じゃないよな…」

半分寝ぼけた唯斗が辺りを見回すと机の上に置いていたGコマンダーからその音が出していた。

「Gコマンダー……って、まさか!!」

一気に目が冴えた唯斗が、慌ててGコマンダーを手に取ると、Gコマンダーの上部右にあるボタンが赤く点滅していた。

「……を押さつて事?」

そう呟きながら唯斗はボタンを押した。すると。

『おはよう、長瀬君』

「ル、ルナさん!? あ、おはようございます」

『朝早くにごめんなさい』

そう言われて唯斗が時計を見てみると、午前5時を少し過ぎた所だった。

「いえ、いつもこの時間帯に起きてますから」

『そう、悪いけど、エクセルベースに来てくれないかしら?』

「何かあつたんですか?」

『ええ、学校の方には、こちらから連絡を入れておくわ』

「あ、大丈夫です。今日から3日間休校にするって、昨日の夜連絡がありました」

『休校?』

「はい、昨日の騒ぎが原因で」

『こう言ったら不謹慎だけど、好都合だわ』

「たしかに。わかりました。すぐに行きます」

『そんなに焦らなくてもいいわ。まだこっちも情報を収集してる状態だから』

「そうですか」

『そうですね。9時にそっちに迎えを出すわ』

「あ、自分で行きます。道はもう覚えましたから」

『そう、じゃあ後で会いましょうね』

そう言うどルナからの通信は切れた。

「さてと、走ってくるか」

そう言うど唯斗はスポーツウェアに着替え、朝の日課であるランニングに出発した。

ルナからの通信から約4時間後。唯斗は宇宙開発公団ビル近くの駐車場に来ていた。

「ここか」

乗ってきたバイクから降り、近くの電話ボックスに歩き出す唯斗。

「誰も、いないな」

近くに誰もいない事を確認して電話ボックスに入った唯斗は、受話器を取り、ひとつ

ひとつ確認しながら、前以て教えられた10桁のコードを入力した。

入力を終えた瞬間、電話ボックスはシークレットエレベーターに姿を変えた。瞬く間にエレベーターは地下深くに降下していき、暫くすると地下とは思えない広い空間に止まった。

「よし、ついたつと」

エレベーターから降り、通路を暫く歩くと扉が見えた。

「あそこか」

扉の前まで歩くと、扉の上部にあるスピーカーから電子音の音が聞こえた。

『名前と所属、職名を仰ってください』

唯斗は、昨日凱に教えてもらったとおりの返事をしてみた。

「長瀬唯斗、所属はGGG、職名はありません」

『声紋等諸調査完了しました。お通りください』

「ご苦勞様です」

そして、扉は開かれた。

唯斗がメインオーダールームに到着した時には、全員が既に集合していた。

「護、唯斗君。平日なのに来てもらってすまなかつたな」

「いえ、ルナさんには話しましたが、今日から3日間学校は休みになりましたからかまいませんよ。凱さん。」

「そうか、そう言ってくれと助かるよ」

「さて、本題に入ろうか。皆、これを見てくれ」

そう言うのと正樹はキーボードを操作し、メインスクリーンにGアイランドシティの地図や、複数の事件現場などを映し出した。

「昨日の夜10時から11時までのわずか1時間の間に、若い女性ばかり8人何者かに殺された。しかも、ただの殺しじゃない。被害者の死因は全員、体から急激に大量の血液を抜き取られた事によるショック死だ」

その事実には騒然となるメインオーダールーム。続いて紫苑が口を開く。

「補足しておきますと、被害者に目立った外傷は殆どありませんでした。唯一あったのは首筋に2つの噛み傷だけです」

「吸血鬼を地で行ってますね…」

「ああ、パニックを避ける為、マスコミには報道自粛を要請しているが、犯人はほぼ間違いない新種だね」

正樹の言葉の後、全員の視線が自然に護と戒道へと向けられる。だが。

「昨日はあの戦いの後、何も感じなかった。戒道は？」

「僕も同じだ：新種の気配らしき物はまったく感じなかった」

「護君や戒道君が感知できないのでは、こっちのZセンサーも感知できませんね」

ポツリと呟く猿頭寺。それに続くように再び紫苑が口を開く。

「恐らく、敵は自らの能力を抑える事で、護君や戒道君の探知を掻い潜っているものと思われまます。新種が本気になって行動したならば、被害はこんな物じゃすまない筈ですからね」

「じゃあ、敵が能力を開放して行動を開始すれば、護君達の探知が可能になるって事ですよね。でも、それだと…」

「被害の拡大は避けられないって事だ。厄介だな…」

そう凱が呟いた次の瞬間、護と戒道は背中に強烈な悪寒を感じた。かなり強烈なゾンドアの気配である。

「ゾンドア！」

2人の叫びと重なるように異常を告げるサイレンがけたたましく鳴り響く。

「Gアイランドシテイ、シヨツピングエリアで素粒子Z0を大量感知！ 反応から、新種と見て間違いありません!!」

「なに!!」

「シヨツピングエリア、まさか！」

そう言うのと護は、メインオーダールームを飛び出した。

「護君！」

咄嗟にその後を追いかける唯斗。間一髪、上昇寸前のシークレットエレベーターにスライディングで滑り込む。

「唯斗さん!?!」

「ギ、ギリギリセーフ……かな？」

無言で頷く護。

「そんなに焦って、どうしたんだい？」

ズボンの埃を払いながら、笑顔で問いかける唯斗。顔を真っ赤にしながら護は答えた。

「もしかしたら、華ちゃんが……そこにいるかもしれないんです」

「華ちゃん……ああ、中等部の初野華さんのことだね」

再び無言で頷く護。

「昨日、電話があったんです。学校が休みになったから一緒に買い物に行かないか？」

「……」

「デートのお誘いか……それで？」

「でも、朝になって凱にいちちゃんから電話があったから……」

「断った…の？」

再び無言で頷く護。

「あくなるほど。それで初野さん一人で行ってる可能性があると思ったわけだ」

「…はい」

「充分にありえるな…」

唯斗が更に言葉が続けようとした時、シークレットエレベーターが地上に到着し、2人は外に出た。

「よし、護君、行くよ!!」

「え？」

「まさか、走っていく気かい？」

そう言うと唯斗は自分のバイクを指差した。

「あ…」

「乗っていくだろ？」

「お願いします!!」

その頃、ショッピングエリアは混乱の巣窟と化していた。突如現れた人と蝙蝠を足したような異形の怪物が手当たり次第に破壊活動を開始したのである。

人々の絶叫が周囲に響き渡る。

「た、助けてくれえ!」

ひとときわ高く絶叫が轟く。声の主である中年の男性の前には怪物が舞い降りていた。

「た、助け!」

絶叫はそこで止まった。怪物の右腕が唸り、その男性を殴りつけたからだ。

男性の頭部は柘榴のように弾け、頭部を失った体は血の噴水を吹き散らしながらそのまま地に倒れた。

ついでもう一人、近くにいた男性が頸骨を粉々に碎かれ、同じように地に倒れる。

風に血の匂いが混じり、怪物は狂った笑い声を轟かせた。

「ヒャーハツハツハツハツ!! 下等生物ども、せいぜい逃げ惑え! 俺様が一人残らず狩ってやるからよお!!」

そんな声を聞きながら華は必死で走っていた。

「怖くない…怖くない、怖くない、怖くない」

そう呟きながら必死で走る華の視界に、一人の少女が映る。

「ママ…どい、ママ」

どうやら迷子のようなだ。華はその子に駆け寄ると優しく問いかけた。

「ママとはぐれちゃったの?」

泣きながら頷く少女を華は優しく抱きしめこう言った。

「だいじょうぶだよ。私が一緒にお母さんを探してあげる」

「ほんと？　ありがとう、お姉ちゃん」

そう言つて、満面の笑顔を見せる少女。華も笑顔で答える。だが、その笑顔も長くは続かなかつた。

「見つけたぜ」

異形の怪物がいつの間にか2人のすぐ近くに迫つていたのである。

「あ、ああ……」

咄嗟に少女を庇うように抱きしめる華。

「すぐ楽にしてやるよ。死になあ!!」

怪物が右腕を振り上げ、2人に迫る。

(護君……)

次の瞬間、まばゆい光にあたりは包まれた。少女を抱きながらギユツと目をつぶる華。

「ギヤアアアアツ!!」

苦痛に満ちた怪物の声に恐る恐る目を開く華。そこに映つたものは右肘から先を失

い倒れこんだ怪物、そして。

「大丈夫？ 華ちゃん」

「護君!!」

華の前には、護が立っていた。光輝く翼を開いたまま華を優しく見つめている。

「天使さんだあ」

少女はいつの間にか泣きやみ、瞳を輝かせながら護を見つめている。

「テメエ、ふざけた真似してくれたなあ!!」

声と共に怪物は勢いよく立ち上がり、護を睨み付ける。護も睨み返す。

じつと睨み合いを続けている2人の間に、異様な緊張感が広がっていく。

「その紋章…：そうか、お前がラテイオだな!!」

「機界33新種、華ちゃんに手を出す事は…：僕が許さない!!」

両手をいっぱい広げて、護は言った。怒りの表情を剥き出しにし、緑のオーラに包まれたその姿は、まさに断罪の天使のようである。

「俺様の名はバトラス！ 腕を吹っ飛ばしたくらいで、いい気になるなよ!!」

次の瞬間、あつという間に再生するバトラスの右腕。

「死ねえ!!」

叫びとともに突進するバトラス。護は華と少女を背中に庇いながら、迎え撃とうと構

えた。その時!!

「ちよつと待ったあ!!」

その声にバトラスは動きを止め、声の方向を睨みつけた。バトラスの目に映った物。それは、猛スピードで自分に向かって来るバイクだった。

「唯斗さん!?!」

「喰らえ!!」

叫びと同時にアクセル全開のウイリー走行でバトラスに体当たりを仕掛ける唯斗。

「そんなもの!」

当たると思っているのか。バトラスはそう言いたげな表情でバイクをかわした、筈だった。

「甘いぜ!!」

体当たりが回避された次の瞬間、唯斗は咄嗟に前輪を地面に付けたかと思うと――

「おりやあ!」

前輪ジャックナイフターを軸にしたターンを行い、後輪をバトラスに叩きつけた!!

「ぐわあ!!」

これには不意を突かれたのか、後輪を顔面に喰らい吹き飛ばすバトラス。

「どうだ!!」

そう言うと唯斗はバイクから颯爽と降り、ファイティングポーズをとった。

「唯斗さん！」

「パーティーには間にあつたかな？」

「はい!!」

「おい、その蝙蝠野郎！ そんなもんじゃねえだろ!!」

声高にバトラスを挑発する唯斗。その声に答えるようにバトラスは立ち上がった。

「下等生物の割には、味な真似をするじゃねえか」

「お褒めいただき光栄の至り、今度はそちらからどうぞ」

「その減らず口、永遠に使えなくしてやる!!」

怒り狂った叫びと共に唯斗へ突進するバトラス。

「マジかよ!？」

唯斗は咄嗟に近くに落ちていた拳大のコンクリート片を掴むと、小さく鋭いモーショ
ンで投げつけた。剛速球が唸りをあげてバトラスに迫る。

「ぬおっ!!」

コンクリート片が下腹部にめりこみ、苦悶の声をあげるバトラス。

驚異的な身体能力を持つ唯斗が投げつけたコンクリート片は、軽く時速300kmを
超えていた。それがまともに命中すれば、いかに高い防御力を持つ新種と言えどダメー

ジは大きい。

「この程度の、ダメージ!!」

体を『く』の字に曲げながらも、体勢を立て直し、再び唯斗に突進しようとしてバトラスが顔を上げたその時、今度は顔面にコンクリート片が炸裂した。

「ぐはっ!!」

流石にこれには耐え切れなかったのか。数m吹き飛ばされ、地面に倒れるバトラス。

「す、すごい」

護の呟きに唯斗はサムズアップで答える。

(しかし、あんな安っぽい挑発に乗るとはなあ…)

あの程度の挑発にバトラスが乗るとは、唯斗は正直思っていなかった。だが、バトラスは一瞬で沸騰した。

(相当プライドが高いようだな。まだその気配はないが、こういう類の奴って逆上すると、何するかわからないんだよなあ…)

「……のくせに…」

「んっ」

唯斗が再びバトラスの方を向くと、いつの間にかバトラスが立ち上がっており、ぶつぶつと何かを呟いていた。

「…のくせに、下等生物のくせに、下等生物のくせに…生意気なんだよ!!」
怒りの叫びと共にバトラスの体からエネルギーが溢れ出す。

「案の定キレやがったか。護君!」

「は、はい!」

「俺が囮になる。その間に初野さんとその子を安全な場所まで連れて行くんだ」

「そ、そんな! 唯斗さん1人じゃ」

「大丈夫! 俺はサイボーグだった頃の凱さんと、同等の力があるって正樹博士が言っていた。凱さん達が来るまでの時間稼ぎくらいはできるよ!!」

あつけらかんと答える唯斗。だが、護は不安を隠し切れずに食い下がる。

「で、でも」

「護君、俺だってGGGの勇者だ。俺を信じてくれ!!」

「…わかりました。華ちゃん。大丈夫?」

「うん、でも護君。なんで長瀬先輩が…」

「詳しい事は後で話すから、僕にしつかり捕まって!」

護の言葉で、華と少女は護にしつかりと抱きついた。

「それじゃ、行くよ!!」

声と同時に護は2人を安全な場所へと連れて行く為に飛び立った。

「逃がすかよ!!」

それを見たバトラスも背中中の羽根を羽ばたかせ、護を追いかけようとするが――

「お前の相手は俺だ!!」

咄嗟に唯斗はバトラスに飛びつき、1 m程浮かび上がったバトラスを地上に引き摺り下ろした。

「テメエ、邪魔するな!!」

「やなこった! どうしてもって言うなら、俺を倒してから行きな!!」

「そんなに死にたいのか。なら、望みどおりにしてやるよ!!」

バトラスの言葉に再びファイティングポーズをとる唯斗。だが、バトラスの行動は予想と大きく外れていた。

「ゾンダーシード!!」

そう言うとバトラスは右腕を唯斗に向けた。すると右腕から無数の黒い種子状の物体が唯斗に向け、撃ち出される。

「おおっと!!」

咄嗟に横っ飛びでその物体を避ける唯斗。爆弾か何かかと唯斗は思ったが爆発も何もしなかった。

「不発か?」

「出でよー！ ゾンダーソルジャー!!」

その叫びと同時に、物体がグネグネと蠢き人型を形成していく。

「何?」

そう、バトラスが撃ち出した種子状の物体は攻撃の為ではなく、ゾンダーソルジャーと呼ばれる機動兵器の基となる物だったのだ。

身長2m、針金のような体と大きな1つ目。ゾンダーレギオンを細身にして縮小したような形だ。レギオンとの体型以外の違いはただ1つ。レギオンは両腕がブレードになっていたが、ゾンダーソルジャーは右腕がブレード、左腕はマシンガンになっている。

「!!!ゾオンダアアアア!!!」

天に向かって咆哮するとゾンダーソルジャーは一斉に動き出した。

「嘘だろお」

その光景に唯斗は思わず呟いた。30体を越すゾンダーソルジャーが一斉に同じ動きをする光景は、シニール以外の何物でもない。

「よーし!! お前ら、そいつの始末は任せた! 俺はラティオを始末する!!」

そう言い残し、護を追う為に飛び去るバトラス。

「待て!!」

唯斗も追いかけてようと走り出すが――

「「「ゾオンダアアアア!!」」」

叫びとともにゾンダーソルジャーが、一斉にマシンガンを発射した。銃弾の嵐に晒される唯斗。

「やば!!」

咄嗟に物陰に隠れて攻撃をしのぐが、これでは身動き一つできない。

「くそっ! どうすりゃいいんだ!!」

唯斗が何とか突破口を開けないかと考え始めた時、何やら異様な音が近づいてきた。それは地響きであった。

「な、今度はなんだよ!!」

地響きの正体を知った時、唯斗は仰天した。巨大なトレーラーが、猛々しくサイレンを鳴らしながら突っ込んで来たのである。

「「「ゾオンダアアアア!!」」」

ゾンダーソルジャー達は一斉に方向転換し、今度はトレーラーに攻撃を開始した。だが、その巨体を覆う装甲はとてつもなく強固で、銃弾をことごとく弾き返していく。それどころか、その巨体でゾンダーソルジャーを次々と跳ね飛ばしていく。

そしてトレーラーは唯斗の前で徐行しつつ停車し、後部のハッチを開いた。

「唯斗君乗って!!」

「ま、正樹博士!？」

ハッチから出てきた正樹に驚きを隠せない唯斗。そんな唯斗に正樹は再び声をかける。

「早く!!」

「あ、はい!!」

その声に促され、唯斗は飛び込むようにトレーラーに乗り込んだ。

「すっげー…」

トレーラーの車内を見回しながら、呆然と呟く唯斗。トレーラーの内部は、メインオーダールームを縮小したような近代的な設備で埋め尽くされていた。

「これこそ、GGGが誇る移動指揮車両『Gキャリアー』さ」

「Gキャリアーか…カッコイイなあ、こう言うのはやっぱり男の浪漫ですよね」

「唯斗君、なかなかわかってるねえ。っと、脱線はここまで。唯斗君、これを使うんだ」

そう言う正樹は、近くに置かれていた2つのトランクの内、1つを開いた。

「これは、鎧ですか？」

そのトランクには、白銀色に輝く特殊装甲が収納されていた。その輝きに目を奪われる唯斗。

「Gクラステクター、アルティメットアーマーの正統な後継型として開発した特殊装甲だ。本来は凱用に開発したんだが、唯斗君用にもう一つ作ってみた」

「すつげえ、これがあれば外の奴らなんかには負けないぜ！」

「いやいや、Gクラステクターはあくまでも防御の装備。これに見合う武器を装備してこそ、勇者は更なる高みに辿り着くわけだよ」

「と、言う事は」

「勿論、得物も準備してますとも！」

そう言うが早いのか、もう一つのトランクを開く正樹。そこには少し変わった形状をしたロングソードタイプの長剣が収められていた。

「ロングソード、ですね」

「ウィルブレード。俺が作った武器の中でも、傑作の1つにあげられる逸品だよ」

正樹のその言葉に、唯斗はすぐさまウィルブレードを手に取り、鞘から抜こうとした。だが――

「あれ？ この剣、鍵でもかかっているんですか？ 全然ビクともしない」

唯斗の力を持つてしても、ウィルブレードを鞘から抜く事は出来なかった。

「あ、肝心な事を言うの忘れてた。そいつを抜くには『契約』が必要なんだ」

「契約……ですか」

「ああ、唯斗君のDNAをコイツに登録するんだ。そうすれば、コイツは君を主として認める」

「なるほど、DNAの登録はどうすれば？」

「唯斗君の血液をコイツのここ、赤い宝玉に垂らせば良い」

そう言つて、小さなナイフを唯斗に渡す正樹。唯斗はそのナイフで左掌を軽く切り、流れ出たその血をウィルブレードに垂らした。すると――

「DNA recognition. Please teach your name. My master」[DNA認識。名前を教えてください。我が主よ]」

女性の声でウィルブレードが喋りだした。突然の事に、文字通り目が点になる唯斗。

「喋った……この剣、喋るんですか？」

「ああ、ウィルブレードはAI搭載によつて、意思を持たせた武器『インテリジェントアームズ』だ」

「インテリジェントアームズか、GGGの科学力つて本当に凄いな」

自分の想像を超えるGGGの技術に、ただただ感心する唯斗。そこへ――

「Please teach your name. My master」[名前を教えてください。我が主よ]」

再び、ウィルブレードが唯斗の名を聞いてきた。

「あ、ごめん。俺の名前は唯斗。長瀬唯斗だ」

「My master's name was registered. [我が主の名前を登録しました]」

「よし、これで契約完了。ウイルブレードは唯斗君、君だけの武器になった」

「ありがとうございます、正樹博士」

そう言うと唯斗はウイルブレードを鞘から抜き――

「これからよろしくな、ウイルブレード」

鋭く輝く刀身を見つめながら、相棒にそう呟いた。

「Only here [こちらこそ]」

「さて、これで準備完了な訳だが…唯斗君に1つ言つときたい事がある」

「何ですか?」

「その博士つてのはやめてくれないかな…むず痒くなる。さん付けしてくれればそれでいい」

「わかりました、正樹さん」

唯斗はウイル・ブレードを鞘に収めながら、照れくさそうにそう言った。

「それでOK。さあ外の雑魚どもを蹴散らして来なさい!!」

「はい! …あ! 正樹さん、護君――」

「大丈夫！ 皆まで言うな!!」

「え？」

「もう最強のメンバーが向かってるでね」

「最強のメンバー。あ、なるほど」

唯斗は納得した表情で頷き―

「長瀬唯斗、出撃します!!」

声と共に、外へと飛び出した。

「!!!」ゾンダアアアアア!!!「!!!」

外へ飛び出した唯斗を迎えたのは、ゾンダーソルジャーの一斉射撃だった。

「甘い!!」

だが、唯斗はそれを横っ飛びで回避すると、持っていたトランクを上へと蹴り上げた。

上空を滞空するように回転するトランク。そして―

「着装!!」

唯斗の叫びに反応し、トランクが爆発したように展開すると、内蔵していた白銀の装甲が一気に射出された。

射出された装甲は、唯斗へと向かって行き、その体に装着されていき―

「イーク！ イイイップ!!」

その掛け声を合図として、装甲の各所からガスが抜け、身体に密着すると戦闘形態への移行を完了した。

この瞬間、Gクラステクターはただの装甲ではなく、勇者の纏う白銀の鎧へと変化したのだ。

「さて、と」

戦闘体勢を整えた唯斗は、手にしていたウイルブレードを左腰に装着し――

「さっきまでのお返しだ。お前ら全員、覚悟しやがれ!!」

勢い良く抜刀。ゾンダーソルジャーの群れと戦闘を開始した。

君達に最新情報を公開しよう!!

勇者達との戦いの中、その真の姿を現したバトラス。

あらゆる物を切断する不可視の刃が、大地を、ビルを、そして勇者達をも切り裂いていく。

だが、どんなに傷つこうとも、勇者達に敗北の文字はない!

3体の勇者王よ、力を合わせて敵を討て!!

勇者王ガオガイガー ― E P I S O D E 0 5 ―

『着装（後編）』

次回もこのURLにネオ・ファイナルフュージョン承認!!

これが勝利の鍵だ!!

『ウィルブレード・バイパーフォーム』

勇者王ガオガイガー用語辞典

第5回『U・S・N』

正式名称、U^国n^際a^際i^際t^際e^際d・S^科c^科i^科e^科n^学t^学i^学s^者t^者・N^速a^速t^速i^速o^合n^合s。

機界31原種の地球襲来をきっかけに、科学技術の更なる発展の為、国境、人種、言語の壁を越えて誕生した科学者集団で、現在所属している科学者はおよそ300人。

10代後半から30代前半の若き天才達が、日々科学技術の研究に励んでいる。

また、新生世界十大頭脳を襲名している科学者は全員、この組織の創立時からのメンバーでもある。

— E P I S O D E — 0 5 〱 着 装 (後 編) 〱

♪ザン!♪ (GGGのマーク)

「いくぜっ!」

Gクラステクターに身を包み、ウィルブレードを手にした唯斗が、その声と共に真正面から突撃する。

ゾンダーソルジャーのブレードによる攻撃を、驚異的な動体視力と反応速度を活かした見切りで次々と回避し—

「でやあ!」

ウィルブレードで次々と斬り捨てていく。瞬く間に3体のゾンダーソルジャーがスクラップへと姿を変える。

「The enemy seems not to have the reproduction ability」[敵は再生能力を持っていないようです]

「そのようだ、このまま一気に蹴散らす!」

「It consented」[了解しました]

そう言うが早いか、再度突撃を行ない、更に2体を斬り捨てる唯斗。すると、残った

ゾンダーソルジャーは戦術を変更してきた。それぞれがバラバラに距離を取り、マシンガンを発砲してきたのだ。

「ちいっ！ アームバックラー展開！」

咄嗟に、左腕に装備されている防御用装備『アームバックラー』を起動する唯斗。瞬時にシャッターが展開して、形成された円形の盾で頭と胸を庇いながら、弾丸を回避していく。

「This shield can withstand the direct hit of heavy machinery cannon」このシールドは、重機関砲の直撃にも耐える事が出来ます」

「要するに、この位の攻撃じゃ傷一つつかないって事か。だが、こっちの射程外から攻撃されたんじゃ、どうしようも…」

「It is in case of the attack method」攻撃する方法ならあります」

「え？」

「Call me 『Viper form』」唱えてください『バイパーフォーム』と」

「わかった、ウィルブレード！ バイパーフォーム!!」

「System change」システムチェンジ」

次の瞬間、ウィルブレードはその姿を変えた。刀身が7つに分かれ、そのそれぞれが鋼線で繋がれた状態。俗に『蛇腹剣』と呼ばれる姿へと！

「なるほど、これならリーチは倍以上に伸びる！」

そう言った唯斗が、ウィルブレードを鞭の様に振るうと、刀身が一番近くにいたゾンダーソルジャーに巻きつき、次の瞬間その体をズタズタに切り裂いた。

「うわあ、凶悪」

「You, re too kind」「恐れ入ります」

そんな会話を交わしながら、ゾンダーソルジャーとの戦闘を続ける唯斗。敵の数は確実に減り続けていた。

—EPISODE—05

【着装（後編）】（タイトルコール）

唯斗がゾンダーソルジャーの群れと戦闘を続けていたその頃、バトラスは護達に追いついて…いかなかった。突如出現した3人の戦士達によって、完璧に足止めされていたのである。

その3人とは凱、J、そしてルナ。正樹が口にした『最強のメンバー』である。

「ラディアントリップパー!!」

Jは叫びと共にその必殺剣を振るい、バトラスに迫る。

「おのれ!!」

Jを迎撃すべくその豪腕を振るうバトラス。しかし—

「遅い遅い! 遅すぎる!!」

その攻撃は決して遅くはなかった。しかし、J自慢の超高速移動の前では牽制にすらならない。

「でやあ!!」

剣光一閃!! 切断されたバトラスの左腕が、血ならぬオイルの尾を引いて宙に飛ぶ。

「ギヤアアアア!!」

苦悶の叫びをあげるバトラス。そこへ追い討ちをかけるように、ルナが手にした大型ハンドガンを構える。

「ファイア!」

大型ハンドガンから連射された光弾が、容赦なくバトラスに襲い掛かり、無数の傷を刻み付けた。声こそ出さないが、バトラスの顔が苦痛に歪む。

「これはオマケよ!!」

追い討ちをかけるようにルナは、ロングコートに仕込んでいたクナイを3本抜き、一

気に投げつけた。クナイは見事なコントロールで、全てバトラスの胸部に突き刺さる。

「フ、フン！ こんなちやちな物が効くとでも…」

虚勢を張るバトラス。たしかにクナイが刺さった事によるダメージは、先程までの攻撃に比べれば微々たる物だった。しかし！

「ぐわあ!!」

突然クナイが爆発し、再び苦悶の叫びをあげるバトラス。そう、あれは只のクナイではなく高性能のクナイ型爆弾だったのだ。

「あら、ごめんなさい。痛かったかしら？」

爆発により深く抉れた胸を抑えるバトラスに、無慈悲極まりない台詞をぶつけるルナ。

「か、下等生物があ!!」

ルナの台詞により再び逆上したバトラスに対し、今度は凱が迫る。だが、凱は他の2人と大きく異なる事が1つだけあった。

凱の体は黄金に輝く特殊装甲。Gクラステクターに包まれていたのである。

「調子に、乗るなあ!!」

雄叫びと共にバトラスは切り落とされた左腕と、抉れた胸を一瞬で再生すると凱に向けて突撃した。

「くらえ!!」

声と共に豪腕を振り下ろすバトラス。巨大なハンマーにも例えられるような拳が、凱の顔面に迫る。

「死ねえ!!」

バトラスの拳が炸裂する寸前、凱の右腕が動いた。流れるような動きでその豪腕を受け流すと、その勢いを利用した胴回し回転蹴りをバトラスの顔面に叩きこみ――

「ぐほっ!!」

体勢を整えるが早いか、再度間合いを詰め――

「はあっ!!」

正拳突きを5発連続でバトラスの胸部に叩き込んだ。

凱の驚異的な身体能力をGクラステクターによって増幅した今の状態で放たれるパンチ、その衝撃は30t以上にもなる。それを5発連続で喰らったのだ。如何に新種といえども、ただで済む筈がない。

事実、バトラスの胸には拳の痕が5つ、深々と刻み付けられ、体内を構成する生体マシンのもそれを保護する骨格ごと粉碎されていた。

「あ、が、ぐあ……」

声にならない声を搾り出しながら、体内の再生を開始するバトラス。だが、それを

黙って見ている凱ではない。無造作に右手でバトラスの頭部を掴むと、一気に地面に叩きつけ―

「ぐはっ!!」

間髪入れずにバトラスの腹へ、渾身のサッカーボールキックを見舞った。

「ぐへあー!」

口から吐瀉物代わりのオイルを吐きながら、宙を舞うバトラス。数秒後、何かが潰れるような音と共に頭から地面へと落下し、そのまま動かなくなる。

十数秒の間、沈黙が周囲を支配した。

「動きませんね」

「死んだか」

「いや、まだだ!」

凱のその言葉どおり、ヨロヨロと起きあがるバトラス。

「こ、このくらいのもで…お、俺を倒したつもりか!!」

精一杯の虚勢を張るが、その足元はふらつき、ダメージが大きい事をはっきりと示していた。

「おとなしく、寝てなさい!!」

ルナが残っていたクナイ型爆弾全てを抜き、一気に投げつける。そして、バトラスの

全身に突き刺さった瞬間、それらは一斉に爆発した。

「ギャアアアアアア!!」

今までで最大級の叫び声をあげ苦しむバトラス。爆発により胸を大きく抉られ、更に左腕、右脇腹、そして顔面の右半分を吹き飛ばされたのだ。そのダメージは想像を絶する。

「お、おの…れ」

吹き飛んだ体を再生させながら、弱々しいうめき声をあげるバトラス。誰が見ても彼の敗北は決定的と思われた。

「かくなるうえは…」

次の瞬間、バトラスは背中中の羽根を飛ばたかせ、逃亡を図る。

「お、覚えていろー!」

捨て台詞を吐きながら空中へ飛び上がり、加速しようとした次の瞬間!!

「フツ、遅いと言っただろう!!」

バトラスの飛行速度をはるかに上回るスピードでJが立ち塞がった!!

「な…」

「落ちろ!!」

Jの強烈なキックをまともにくらい、地上へと落下するバトラス。それを睨みながら

Jが叫んだ。

「とどめだ！ 凱!!」

「まかせろ！ ウィル！ マチエツト!!」

叫びと共に凱の左腰に備え付けられた鞘から大型のマチエツト銃が勢いよく飛び出し、右手の中にすっぽりと収まる。

「はあああああつ!!」

マチエツトを構え、バトラスに向かって凱が走る。

「こ、ここうなれば、貴様だけでも」

半狂乱状態のバトラスも右腕を振り上げ突進した。しかし、その動きは精彩を欠き、盲目的な突進に過ぎなかった。

「死ねえ!!」

振り絞るような叫び、大気の悲鳴と共に豪腕が振り下ろされ、凱の頭部を粉微塵に打ち砕こうとした。寸前、凱の右手のマチエツトが煌く。

大気が裂けた。圧倒的なスピードで振り上げられたマチエツトは真空の刃を伴い、バトラスの右腕を一瞬で切り裂いた。

「はあつ!!」

次の瞬間、凱はすれ違いざまにバトラスの胴を――

「でやあつー！」

更にターンして頭部を一気に切り裂いた。

「そんな、馬鹿ー」

バトラスの呻き声はそこで止まった。凱のマチエツトによって、バトラスの体は頭部から真つ二つに、腰から上下にそれぞれ両断されたのである。4分割されたバトラスは、地響きを立てながら地面に倒れ、直後大爆発を起こした。

「やりましたね！ 凱隊長」

「流石だな、凱」

勝利に沸く凱達。だが、その喜びは長くは続かなかつた。

「バトラス、ゲームオーバー」

何処からともなく響く冷たい眩き。

「ツ！ 何者だ!!」

全神経を集中して周囲を見回す凱達。その声の主はすぐに見つかった。

「女？」

「私は機界33新種、ローゼス」

その声の主は、あのクルーザーにいた美女、ローゼスであった。

「プログラム再構成、無差別破壊モードに移行」

そう言つて左腕を天に掲げるローゼス。次の瞬間、空間が切り裂かれ、そこから今倒したバトラスを巨大化したようなロボット。そして新種核が出現した。

「あれは、新種核だど!!」

凱達の驚きをよそに新種核は残骸と化したバトラスの元へと向かい、バトラスの残骸を吸収した!!

「エビル、フュージョン」

ローゼスの声が冷たく響き渡り、バトラスの残骸を吸収した新種核は、巨大ロボットへ飛び、そのままロボットと一体化した。

「破壊と混沌の使者よ。この地に災厄をもたらしたまえ……」

そう言いながらローゼスは空間に溶け込み、そして消えた。

「待て! くそっ!!」

「奴の事は後回しだ。まずはあのデカブツを何とかするぞ。凱!!」

「わかつてる! 来いっ! ブレイブガオーツ!!」

「召還! ネオJアーク!!」

2人の声に答え、眠っていた2機が目を覚ます。ブレイブガオーは海中の射出口から、ネオJアークはエクセルベースから分離してそれぞれの主の元へと飛び立った。

凱とJ、2人の勇者がそれぞれの愛機を呼ぶ少し前、唯斗はゾンダーソルジャーとの戦いに終止符を打とうとしていた。

「うおりやあー！」

気合と共に振るわれるウィルブレードは、正面にいたゾンダーソルジャーの腰に打ち込まれ、一瞬の内に両断する。

「あと、1体！」

「ゾンダーアアア！」

最後の1体となったゾンダーソルジャーは、狂ったように左腕のマシガンを乱射するが、唯斗のアクロバティックな動きの前には、牽制にもならない。そして――

「これでラスト！」

放たれた突きに頭部を粉碎され、ゾンダーソルジャーは永遠にその動きを止めた。

「ふうっ、任務完了！」

『ご苦労さん、唯斗君。凱達のほうも無事に……終りそうにないねえ』

「どういう意味ですか!?! 正樹――」

唯斗はそれ以上の言葉を出す事ができなかった。巨大ロボット化したバトラスが視界に入ったからだ。

「……こういう事か……」

『唯斗君！』

「は、はい！」

『今、エクセルベースから、ブレイブガオーとネオJアークが発進した！ 唯斗君もー』
「わかりました!!」

正樹の声を遮る形でそう言うと、唯斗はGコマンダーを取り出し、天空に掲げて叫んだ。

「リュシフェルガオー！ ス克蘭ンブル!!」

唯斗の声とGコマンダーのシグナルに答え、リュシフェルガオーも目を覚まし、緊急発進した。

それと同じ頃、護も巨大ロボット化したバトラスの出現を目撃していた。

「僕も行かなくちゃ、華ちゃん、その子をお願い」

「護君、気をつけてね」

「大丈夫だよ。僕は1人じゃないから」

そう言いながら華の頬にそっと口づけする護。それとほぼ同時にギャレオンが飛来する。

「じゃあ、いってきます」

華の頬からそつと唇を離し、微笑みながらそう言うのと、護はギャレオンの元へ走りだした。

「フュージョン!!」

護と一体化し、変形を開始するVギャレオン。

「V! ガイ! ガー!!」

飛び立つVガイガーを見ながら、顔を真っ赤にした華は眩いた。

「いつてらっしやい…護君」

「燃えろ! 燃えろ!!」

巨大化したバトラスは、目から破壊光線を放ち、街を火の海に変えていく。そこへブレイブガオー、ネオJアーク、Vガイガー、リュシフェルガオーがほぼ同時に到着した。

「それ以上の街を破壊、許しはしない! フュージョン!!」

雄叫びと共に凱の左腕、『Gの紋章』が輝き、ブレイブガオーが人型に変形する。そして、目に緑の光を宿しその体は変形を完了した。

「ガイガアーツ! EX!!」

「俺も続くぜ! フュージョンツ!!」

唯斗の声に続いてリュシフェルガオーも瞬時に人型へと変形し、その両目に緑の光を

灯す。

「ネオ！ ガイ！ ガーツ!!」

唯斗に続き、今度はJが叫ぶ。

「フュージョン！ ネオJバード、プラグアウトツ!!」

声と同時にネオJアークからネオJバードが分離し――

「スタンドアツプ!!」

瞬時に人型へと変形する。

「ネオ！ ジエイダー!!」

次の瞬間、ネオジエイダーが変形を完了したのを見計らったかのように凱、護、そして唯斗が叫んだ。

「EX!」

「ネクスト!」

「ネオ!」

「「ガオーマシン!!」」

3人の声に答え、エクセルベースから全10機のガオーマシンが出撃した。

「長官！ ガイガーEX、Vガイガー、ネオガイガーから要請シグナルです!」

「うむっ！ ファイナル！ ネクスト！ ネオファイナルフュージョン、承認ツ!!」

「了解！ ファイナルフュージョン！」

「NEXT FUSION！」

「ネオファイナルフュージョン…」

「「プログラムドライブツ!!」」

大河の承認とほとんど同時に、命とスワンの拳、そしてグラナートの手にしたハンマーが、それぞれのセーフティーカバーを叩き割る。

「ファイナル！」

「ネクスト！」

「ネオ！ ファイナル！」

「「フュージョオオオオオン!!」」

ガイガーEXが、Vガイガーが、そしてネオガイガーがそれぞれ発した電磁竜巻の中に、それぞれのガオーマシンが突入した。同時に、各々のマシンが変形を始め、合体が開始される。そして、電磁竜巻を吹き飛ばし、3体の鋼の巨人が名乗りをあげた。

「ブレイブ！ ガオ！ ガイ！ ガアアアツ!!」

「ネクスト！ ガオ！ ガイ！ ガアアアツ!!」

「ガオ！ ガイ！ ガアアアツ!! アアアアルツ!!」

今ここに3体の勇者王が降臨した!!

「うん、プログラムドライブの分担、上手くいっているようだね」

モニターに写る3体の勇者王の勇姿を眺めながら、1人呟く正樹。

ネオキングジェイダーとネクストガオガイガー、そしてガオガイガーRの参戦によって、GGGの戦力は大幅に増強された。

しかし、それは合体時に行われるプログラムドライブの回数が3倍になる事も意味しており、今までのように命1人の入力作業では、迅速な対応が不可能となっていた。

それを解消する為に、正樹はプログラムドライブの分担を提案。命、スワン、そしてグラナートの3人でプログラムドライブを分担する事で、迅速な対応を可能にしたのだった。

ちなみに、ネクストガオガイガーはスワンが、ガオガイガーRはグラナートが担当し、ブレイブガオガイガーは今までどおり、命が担当する。

その頃、凱達は次なる動きを見せていた。

座標系をブレイブガオガイガーと同調させた蒼龍王のリボルバーミラーカタパルトから、デバイディングドライバーが射出され――

「うおおおっ！」

ブレイブガオガイガーも、スラスターの出力を全開にして急上昇。

「座標軸、固定！ ツールコネクト!!」

デイバイディングドライバーを装備したブレイブガオガイガーは、体を反転させ、今度は地表に向かって急降下した。

「デイバイディング！ ドライバー!!」

瞬く間に直径数km、高さ数百mの巨大な戦闘フィールドが形成される。

地割れに巻き込まれる形で落ちていく、バトラス。デイバイディングドライバーを分離しつつ降り立ったブレイブガオガイガーに続いて、ネクストガオガイガー、ガオガイガーR、ネオジェイダーが戦闘フィールドへ飛びこんだ。

全員が戦闘フィールドに降り立ったのを見て、ブレイブガオガイガーはバトラスへ視線を向け叫んだ。

「かかってこい！ 新種!!」

その声に答えるように、バトラスが猛スピードで襲いかかる。

「さつきはよくもやってくれたなあ……100倍にして返してやるぜ!!」

声と同時に、両腕に装備された鋭い鉤爪を展開し、物凄い勢いで振り下ろすバトラス。「プロテクトウォール!」

ウォールリングを装備した左腕を突き出し、ブレイブガオガイガーはプロテクトウォールをフルパワーで展開した。強固な防御フィールドに阻まれ、バトラスの攻撃は

届かない。

更にブレイブガオガイガーは勢いを緩めることなく、そのままバトラスとの間合いを詰め―

「喰らえ!」

声と同時に高速回転させた右腕を、バトラスの顔めがけて叩きこんだ。

「ぐはっ!」

口から苦悶の叫びを、顔面から異音を発しながら、バトラスはもんどりうった。

地上を転がりながらも3回転目に跳ね起きる。オイルが血のように噴き出してバトラスの顔を赤黒く染めていた。

「くそっ、こっくなったら!」

そう言うのとバトラスは両手を天に掲げ、エネルギーを集中し始めた。

「出でよ! ゾンダーレギオン!」

バトラスがそう叫んだ次の瞬間、上空にESウィンドウが出現し、そこからゾンダーレギオンが飛来した。その数約30体。

「お前達、やってしまえ!!」

バトラスの声に応えるように、ゾンダーレギオン達はブレイブガオガイガー達に向けて怪光線を一齐発射した。

「プロテクトシールド！」

同時に左腕の前に突き出し、プロテクトシールドを展開するブレイブガオガイガーとガオガイガーR。2体の勇者王の展開する強固な結界は、敵の攻撃を完璧に防ぎ、弾き飛ばした。

防がれ、弾き飛ばされた光線は、地面に激突し大量の土煙を巻き起こした。それによりほんの数秒だが、ブレイブガオガイガー達の視界が塞がれる。

その一瞬の隙を突き、背中の翼を展開し空中へと舞い上がるバトラス。

「お前達！ そいつらのお相手をしてさしあげろ！」

そう言うバトラスはデイバイディングフィールドを抜け、ビジネスエリアの方角へ飛び去った。

「逃がすか!!」

追いかけてようとブレイブガオガイガーが飛び上がった瞬間!!

「ゾオンダアアア!!」

叫びとともに凄まじいスピードで1体のゾンダーレギオンが突進してきた。不意を突かれた為、反応が遅れるブレイブガオガイガー。だが—

「ゾ、ンダア…」

ゾンダーレギオンはブレイブガオガイガーへは迫り着けなかった。何故なら、その速

度を上回るスピードでガオガイガーRが立ち塞がり、ドリルニーで迎撃したからである。

高速回転するドリルによって、顔面を無残に抉られるゾンダーレギオン。

「雑魚は、引つ込んでな！」

そう言いながらガオガイガーRは、頭部を失ったゾンダーレギオンを掴み、前方の群れに向けて投げつけた。超高速の凶器が激突し、数体のゾンダーレギオンが吹き飛ばされる。

「助かったぜ！ 唯斗君！」

「凱さん！ 護君！ Jさん！ 早く奴を追ってください！ ここは俺が引き受けます！」

「唯斗君……」

「早く！」

「……わかった！ 頼んだぜ！！」

そう言うとブレイブガオガイガー達は、バトラスを追う為に飛び去った。

「ゾオンダアアアア！！」

それを迎撃する為に、近くにいたゾンダーレギオンが怪光線を放とうとするが――

「ブラウクン！ マグナム！！」

ガオガイガーRが放ったプロウクンマグナムに全て薙ぎ払われる。

「言つただろう。お前等の相手は俺だあ！」

唯斗の言葉にゾンダーレギオンはガオガイガーRに向け、一斉に襲いかかった。

「いくぜ!!」

ガオガイガーRは鮮やかに攻撃をかわし、拳を放ち、蹴りを見舞った。瞬く間に数体のゾンダーレギオンがスクラップに変えられる。

「どうした! もう終わりか!!」

声高にゾンダーレギオンを挑発するガオガイガーR。完璧にこの状況を楽しんでいる。

その言葉に応えたかどうかはわからないが、残ったゾンダーレギオンは一箇所に集結したかと思うとその形を崩し、一つに纏まり始めた。

そして次の瞬間、それは1体の巨大なゾンダーレギオンに変化した。

「ゾオオオオンダアアアアアアアア!!」

ガオガイガーRの3倍以上の巨体となり、邪悪な咆哮を響かせる合体ゾンダーレギオン。

「嘘だろお…」

そんな唯斗の呟きとほぼ同時に、合体ゾンダーレギオンの全身から鋼鉄の触手が生

え、一斉にガオガイガーRへ襲いかかる。

「ちいつ!」

間一髪でかわすガオガイガーR。放たれた触手は地面に突き刺さり、次々と穴を開けていく。

「ゾオオオンダアアアー!!」

放った触手を体内に戻したゾンダーレギオンが、また触手を放出しようとした。

「させるかあ!!」

だが、それより早くフルパワーでジャンプしたガオガイガーRが――

「たあああつ!!」

620tの全重量を乗せた拳を顔めがけて叩きこんだ。しかし――

「ゾオオオンダアアアー!!」

「なに!」

その瞬間、唯斗は驚愕に目を見開いた。紫色に輝くバリアは、ガオガイガーRの渾身の一撃を、まったく寄せ付けなかったのだ。続けて唯斗は、ドリルニーを見舞う。だが、通常のゾンダーバリアなら、やすやすと貫くドリルが、バリアに阻まれて空転する。

「ぬうううつ!」

無理矢理ドリルをバリアの内側に捻じ込もうと、ガオガイガーRは背面のスラスタ―

を全力で噴射するが、合体ゾンダーレギオンのバリアはびくともしない。

「合体ゾンダーレギオン、損傷率0%！ まったくの無傷デス！」

「バリアの強度が、ゾンダーレギオンのものとは比べ物にならないぐらい上がってる！ 生半可な攻撃では、こいつは貫けんぞ！」

「…なら、これはどうだ！」

バリアを展開したまま、身じろぎ一つしない合体ゾンダーレギオンから、ガオガイガーRは大きく間合いをとった。そして右腕を突き上げ、唯斗が叫ぶ。

「ブrouクン！ マグナアアムツ!!」

次の瞬間、ガオガイガーRが突き出した右腕が、爆音とともに撃ち出された。

高速回転で威力を高めた必殺の拳が、唸りを上げて合体ゾンダーレギオンに迫る。だが。

「ゾオオオンダーアアア!!」

強固なバリアは、ブrouクンマグナムの侵入を、1cmたりとも許すことはなかった。数秒の後、攻撃継続限界に達したブrouクンマグナムが、弾き返されるように宙に舞う。

「マジかよ…」

右腕を再接続したガオガイガーRは、再び合体ゾンダーレギオンに向かって構えを取る。長期戦になるかもしれない。唯斗の脳裏をそんな想いがよぎった。

「ゾオオオンダアアアー!!」

再度、全身から鋼鉄の触手を放とうと身構える合体ゾンダーレギオン。その時――

「ファイアー!」

声と共に放たれた光弾が、次々と合体ゾンダーレギオンのバリアに着弾した。

「今のは?」

そう言いながら、光弾が飛んできた方向に目をやる唯斗。そこには――

「The hit is confirmed. However, damage is not admitted in the target」命中を確認。しかし、目標に損傷は認められず」

「そのようね、厄介なバリアだわ」

「I think so」[同感です]」

そこにはあの大型ハンドガンを手にもGストライカーに跨るルナの姿があった。

「ルナさん!」

「援護するわ! 長瀬君」

「お願いします! つと!」

次の瞬間、ガオガイガーRとルナに無数の触手が襲いかかった。ガオガイガーRはホバー移動で、ルナもGストライカーを駆って触手を避けながら、通信をかわす。

『長瀬君、奴のバリアは合体した事で格段に防御力を上げているわ』

「はい、ブロウクンマグナムでも駄目でした。だから今度はファントムを―」

『駄目、きつとファントムでも弾かれるわ』

「じゃ、じゃあ…」

『大丈夫、ファントム以上の貫通力を持つ攻撃がRにはあるわ』

「ファントム以上の!?!」

『そう、奴のバリアに楔を打ち込んでやりなさい!!』

「楔…そうか!!」

ルナの言葉によって何かに気付いた唯斗は動きを止め、右腕を腰に構えた。

「ファントムリング!!」

叫びと同時にガオガイガーRの胸部が展開し、エネルギーリングが飛び出す。

「ブロウクン! ファントムオームツ!!」

ファントムリングを撃ち抜く形で、ガオガイガーRが右腕を射出した。

光輝く黄金の流星となった右腕は、一直線に合体ゾーンダーレギオンに向かっていく。

それと同時にガオガイガーRも走り出す。

「プラス!」

走りながらガオガイガーRは、もう一つの鉄拳を撃ちだした。それはまるで引き寄せ

られる様にして右腕と一体化する。

「ブロウクン！ バースト!!」

2つの鉄拳が合わさる事で生み出された圧倒的なまでの拳圧は、一瞬でバリアを粉碎し、合体ゾンダーレギオンを殴り倒した。だが、ガオガイガーRの猛攻は止まらない。

「一気に決めるぜ！」

両腕を接続したガオガイガーRは、倒れている合体ゾンダーレギオンの右足を両手で掴み、そして吼えた。

「うおおおおおっ!!」

次の瞬間、ガオガイガーRは100mを越す巨体をジャイアントスウィングの要領で振り回し、一気に投げ飛ばした。灰色の巨人がクルクルと宙を舞う。

「とどめだ！ 雷帝！ 招来!!」

叫びと同時にガオガイガーRの右前腕部は高速で回転し、やがて青白い稲妻を纏っていく。

「サンダー！ ウィィィィップ!!」

次の瞬間、ガオガイガーRの右腕から稲妻の鞭が放たれ、直撃を受けた合体ゾンダーレギオンは数秒の後、爆発した。

「よっしや!!」

『お見事、流石ね』

「ありがとうございます。じゃあ、凱さん達を追いかけます！」

『私もすぐに追いかけるわ。頑張つてね』

『Mr. Nagase who prays for fortune of war

「御武運をお祈りします。Mr. 長瀬』

「はい！ えーつと…」

『ウイルブラスター、私の大切な相棒よ』

『Nice to meet you「お会いできて光栄です」』

「ああ、よろしく！ それじゃあ、ルナさん。また後で！」

そう言うと、凱達のもとへ跳び立つガオガイガーR。それを見たルナも――

「私達も急ぐわよ、ウイルブラスター」

「Roger「了解」」

移動を開始した。

その頃、凱達はビジネスエリアでバトラス、そしてバトラスが呼び出した数十体のゾンダーレギオンと対峙していた。

「正樹、非難状況は？」

『ご安心を。今のビジネスエリアには、民間人は1人もいないよ』

「そうか。2人とも、聞いたな」

「うん」

「手加減は無用、という事だな」

「そう言う事!」

「なにをゴチャゴチャ言ってる! お前達、奴等を地獄へ送ってやれ!!」

「ゾオンダアアア!!」

バトラスの声に應えるように、ゾンダーレギオンが一斉に吼えた。

「フン、行くぞ! プラズマ・ウイング!!」

ネオジェイダーの背面から、赤く輝く孔雀の羽のような翼が広がる。そして右腕を構えると、ジェイダーはゾンダーレギオンに向かって突進した。

まっすぐ突っ込んでくるネオジェイダーを迎え撃つように、1体のゾンダーレギオンが先行し、目から怪光線を放つ。怪光線はネオジェイダーめがけて一直線に襲いかかる。

だが、その時すでに、ネオジェイダーはゾンダーレギオンの視界から姿を消していた。

「遅い! メガ! プラズマソード!!」

超高速移動で右側面に回りこんだネオジェイダーの右腕から、赤い刃が迸る。次の瞬

間、ゾンダーレギオンは胴体を両断され、爆発した。それが合図となったように、残りのゾンダーレギオン全てが一斉に襲いかかった。

約3分後。そこにいたゾンダーレギオンは、全てがスクラップに変えられ、地面に積まれていた。この3人にとつては準備運動程度之感覚である。それでも3分かかったのは数が少々多かつたからである。

バトラスはあたり一面にスクラップと化した手下がばら撒かれる光景に、数分前まで抱いていた『数の優勢』という思いを早々と打ち碎かれた。彼は喘ぎ、慌てて両手を上げる。

「だ、だだ、第3陣！ 出でよ！ ゾン！」

再びゾンダーレギオンを召還しようとした寸前、バトラスは上空に強烈な気配を感じた。そして見た。こちらに向けて飛んできたガオガイガーRが自分に向け何かを放とうとしているのを…。

「ブロウクン！ マグナアアムツ!!」

射出された右腕は一直線にバトラスに向い、その顔面に直撃した。バトラスはゾンダーレギオンを召還する事にエネルギーと意識を集中していた為、避ける事もバリアで防ぐ事も出来なかつた。

「反則だあ…」

ブロウクンマグナムをまともに喰らい、顔面を抉られながら後方へ吹っ飛んだバトラスはそう呟いた。まさか、増援を呼ぶ最中に攻撃される事など夢にも思わなかった。ふらつきながらも立ち上がったバトラスは、ガオガイガーを睨みつけ、こう言った。

「なんと卑怯な奴だ…貴様、それでも勇者か!!」

「やかましい! テメエみたいな悪党に、卑怯だ何だと言われる筋合いはねえ!!」

バトラスのエゴイスティックな抗議を唯斗は笑い飛ばした。唯斗から見れば街を破壊し、沢山の人々を傷つけた虐殺者が何を言うかという感じである。

「殺してやるぞ…」

「あ…悪いんだが、もう少し気の効いた台詞を吐いてくれ。在り来りすぎていちいち覚えていられないんでね」

「だ、黙れ! い、言わせておけばあつ!」

バトラスは吼えた。憤怒と憎悪は限界をこえ、理性は蒸発し、激情だけが煮えたぎった。体からエネルギーが溢れ出し、爆発寸前となる。そして両手を振りあげ、左右の掌底を同時に凱達に向ける。

突然、バトラスは立ちすくんだ。両手を振りあげたまま動かなくなったのだ。爆発にそなえて身構えたJや唯斗が不審の表情になる。

数秒後、バトラスは突然動き出した。全身に不気味なオーラを纏いながらゆつくりと

近づいてくる。

「ブロウクンマグナム!!」

咄嗟に身構えたブレイブガオガイガーがブロウクンマグナムを放った。だが!

「無駄だ!!」

バトラスはそう言い放つと、目に見えない何かを口から放射した。それは空間を揺るがしながら一直線にブロウクンマグナムに向かっていく。

次の瞬間、凱達は信じられない光景を目にした。バトラスを直撃し、容赦なく吹き飛ばす筈だったブロウクンマグナムが、バトラスが放った何かにぶつかった瞬間、真っ二つに切り裂かれ、爆発したのだ。

「ブロウクンマグナムが!?!」

「嘘だろお……」

「今度はおまえらの番だ!!」

そう言うバトラスは再び口から何かを放射した。その何かは一直線にブレイブガオガイガーに迫る。

「ちいっ!」

これに当たったらずい。右腕を失った事で十二分にその事を理解しているブレイブガオガイガーは、スラスターを全開にしてその攻撃を緊急回避しようとした。

だが、目に見えない攻撃を回避する事はそう簡単ではない。右の肩と翼を豆腐のように切り裂かれ、ブレイブガオガイガーは背面から炎を吹いて地に倒れ伏す。

「ぐあああつー！」

「凱!!」

「凱兄ちゃん!!」

倒れたブレイブガオガイガーに駆け寄るネオジエイダーとネクストガオガイガー。ガオガイガーも駆け寄ろうとした瞬間、唯斗は悪寒に首筋を撫でられた。

「くうっー！」

反射的に後ろを向いてプロテクトシールドを展開する。次の瞬間、目に見えない『何か』が湾曲空間に激突した。

「危なかった…」

振り向くのがあと一瞬でも遅かったら、自分が切り裂かれていたかも知れない。そう考えると背筋に寒気が走る唯斗。

そんな光景に邪悪な笑みを浮かべるバトラス。

「ヒャーハツハツハツ！ どうした！ さつきまでの威勢は！ まあ、俺様の切り札であるソニックビームを、お前ら如きが見切れる訳も無いがなあ!!」

そう言いながらもバトラスは、無差別に何かソニックビームを放射し続ける。それ

によって周囲のビルも次々に切り裂かれ、崩れ落ちていく。

「くそつ、調子に乗って好き勝手やりやがって!」

思わず悪態をつく唯斗。回避が困難である以上防御に徹するしかない。ガオガイガーがプロテクトシールドを展開して防ぎ続けてはいるが、今や形勢は完全に逆転していた。正樹からの通信が飛びこんできたのはそんな時だ。

『凱、聞こえるか?』

「正樹か?」

『ああ、敵もとんでもない隠し球を持ってやがったね』

「あれは一体何なんだ? ソニックビームとか言ってるが」

『まあ、簡単に言えば超指向性の原子分解攻撃。ZX-112、肋骨原種が有していた能力の応用版だね。あれに当たったら最後、勇者王ブレイブガオガイガーでも真つ二つだ』

「それで、何か対策は?」

全力でプロテクトシールドを展開しながら、正樹に訊ねる唯斗。

『対策はただ一つ。元を潰すしかない』

「元を潰す?」

『そう、ソニックビームを避けるのが難しいなら、発生源を潰せば良い』

「なるほど、それでその発生源は何処なんですか?」

『ちよつと待つてくれ。そつちにスキャン映像を送る』

そんな正樹の言葉から数秒後、4人のコクピットに映像が送られた。

「喉か！」

『そう、奴らの体の造りは人間とよく似ている。ソニックビームも奴の声を変化させたもの。よつて、奴の喉を潰せばソニックビームは撃てなくなる。だけど、問題は…』

「誰が潰すか…だな？」

『そう、奴の喉を潰すつて事は、奴に近づかなくちゃいけない。それはすなわち…』

「ソニックビームに身を晒さなければならぬ」

『そう言う事…』

「…私が行こう」

数秒の沈黙の後、Jが名乗りをあげた。

「私のスピードならば、奴のソニックビームも回避できる」

「いや、俺が行きます」

今度は唯斗が名乗りをあげた。

「唯斗さん…」

「何を言っている。お前は私ほど速くは動けないだろう。ソニックビームの直撃を受け

るぞ」

「大丈夫です。スピードが遅くてもソニックビームを何とかする方法を思いつきました。それに、Jさんはここで待っていた方が良いと思うんです」

「どういう意味だ？」

「奴の性格を考えたら、最後にとる行動は恐らく…」

「そうか！」

「なるほどな」

「…そう言う事か」

唯斗の言葉に、それぞれ納得したような声を出す3人。

「その為に、私はここにいた方が良いという訳か？」

「ええ、確証はありませんけど…」

数秒の沈黙の後、再び口を開くJ。

「わかった、やってみろ」

「はい！」

「唯斗さん…」

「護君、防御を頼む!!」

「は、はい！」

護の声の直後、ネクストガオガイガーの肩が展開し、フィールド発生器が姿を見せる。

「プロテクトフィールド展開っ!!」

次の瞬間、広範囲の空間湾曲バリアがネクストガオガイガーを中心に展開される。それを見たガオガイガーRは、プロテクトシールドを解除すると――

「おい! 蝙蝠野郎! テメエの攻撃なんか、全然怖かねえんだよ!!」

と、声高に挑発した。

「なんだと…」

「嘘だと思ふんなら、俺目掛けて撃つてみるんだな。ただし、一発で仕留めろよ!」

そう言ううとガオガイガーRは、真正面からバトラスに向かつて行く。

「唯斗さん!」

「馬鹿が、真正面から来るとは…そこまで死にたいなら、望みどおりにしてやる!!」

そう言ううとバトラスはガオガイガーRに狙いを定め、ソニックビームを放とうとした。その時――

「うおりゃあ!!」

ガオガイガーRがバトラス目掛けて何かを投げつけた。いつの間に拾っていたのであろうか、それは砂利状になったアスファルトや、切り裂かれて倒壊したビルの破片といった街の残骸だ。

猛スピードで投げつけられた残骸は、無数の凶器となりバトラスの顔面、特に目を強

襲。

「ぐあつー！」

一瞬だが、バトラスから光を奪い去った。そして、バトラスが視力を回復したその時には――

「よう」

ガオガイガーRはバトラスの懐に飛び込んでいた。

「し、しまったー！」

慌ててソニックビームを放とうとするバトラスだったが、ガオガイガーRがそれを許す訳が無い。

前腕部を高速回転させる事で威力を高めた右ボディを、容赦なくバトラスのボディに喰らわせ――

「ぐほお……」

『く』の字に体を折り曲げたバトラスの頭を両手でしっかりと掴むと、そこへドリルニーを叩き込んだ！

高速回転するドリルによって、原形を留めない程無残に抉られていくバトラスの頭部。

「あ、が、あ……」

すぐさま再生を開始するバトラスの言葉はそこで途絶えた。ガオガイガーRが右腕でバトラスの首を締めあげにかかったのだ。

数秒後『グシヤツ』『ポキィツ』という音が周囲に響く。バトラスの喉が握り潰され、更に首を押し折られたのだ。これで暫くの間ソニックビームを放つ事はできない。

ガオガイガーRは声も出さず、手足をかき回すだけのバトラスを無造作に投げ捨てた。受身も取れずに地面に叩きつけられるバトラス。

「つしやあー！」

「す、すい…！」

「あの時、唯斗はソニックビームを『避ける』とも『防ぐ』とも言わなかったが、まさかあんな方法を取るとはな」

「撃たれた後で避けるのが難しいなら、撃たせなければ良い…発想の転換、流石だよ」

咆哮をあげる唯斗に三者三様の感想を抱く凱達。そして――

「さて、これから奴の取る行動は…」

唯斗の呟きとほぼ同時にバトラスは立ち上がった。口を開き何かを言おうとするが、喉がまだ再生できていない為か、声にならない。

次の瞬間、バトラスは逃げ出した。ブレイブガオガイガー達に背を向けて宙に浮き上がり、加速しようとした瞬間。

「ッ!!」

強烈な気配がバトラスを突き刺した。思わず振り返ったバトラスの目に映った者：それは光の翼を持つ天空の勇者ネオジェイダーだった。

「唯斗の言ったとおりだったな。最後の武器であるソニックビームを封じられれば、貴様は逃げ出す。だが、逃がしはしない!!」

そう言うネオジェイダーは両腕を振るい、必殺の剣を出現させた。

「ダブル！ メガプラズマソード!!」

ネオジェイダー必殺の剣がバトラスの翼を容赦なく切り裂いた。

声にならない叫びをあげながらバトラスは宙を泳いだ。泳ぎながら落下していく。その光景を見ながら唯斗が叫んだ。

「今です！ 凱さん!!」

「任せろ!!」

叫びと同時に凱はGSNEXT-RIDEの出力を限界ギリギリまで上げると両腕を腰に構えた。

「貫け！ ブレイブ！ ハアアアット!!」

叫びと共にブレイブガオガイガーの胸から緑色の矢が飛び出す。この瞬間、すでに勝敗は決していた。

「うん、GGG：予想以上の力を持つてる。久しぶりに本気で楽しめるな」

暗い室内でドラグスがソファーに座り、1人壁に映し出された映像を無邪気に見つめていた。壁に映し出された映像。それは先程の闘いであった。

そこへ空間を切り裂きローゼスが現れた。ローゼスはドラグスに恭しく一礼すると口を開いた。

「ドラグス様。バトラスが倒されました」

「知ってるよ。ここで見てたから」

「これで、ザイノス様の持ち駒は6つとなりました」

「6つか。このペースだと案外早く終るかもね」

「はい」

そう言うのとドラグスとローゼスは互いに微笑みを交わした。

君達に最新情報を公開しよう!!

Gアイランドシテイを駆け抜ける黒き風!

その圧倒的な速さは、GGGを苦しめる!

だが、我等が勇者達に限界は無い。

今こそ白き風となり、邪悪を討て!!

そして今明かされる唯斗の秘密とは？

勇者王ガオガイガーR — EPISODE 06 —

『疾走』

次回もこのURLにネオ・ファイナルフュージョン承認!!

これが勝利の鍵だ!!

『Gチエイサー』

勇者王ガオガイガーR用語辞典

第6回『グラナートのハンマー』

ガオガイガーRのファイナルフュージョン実行時に、グラナートが使用する金槌。

両方が槌状になった所謂両口玄能と呼ばれるタイプ。重量は約270g。

正樹自らが素材を厳選し、グラナートの手にピッタリ合うサイズで製作した。

普段は、グラナートが座っているデスクの横に置かれた柵の最上段に収められている。

— E P I S O D E — 0 6 〈 疾 走 〉

♪ザン！♪（GGGのマーク）

長瀬唯斗は春の街を家に向かい駆けていた。我が家の玄関に辿り着き、厚いドアを開けて『ただいま』と叫ぶ。すると…。

「お帰りなさい！ 兄様!!」

待ち構えていたかのようにリビングから1人の少女が駆け寄って来た。年は13歳ほど、ショートカットとセミロングの中間に位置する長さの髪をして、繊細な目鼻立ちがくつきりとした線を形づくっている。多くの男性が魅力を感じる美少女である。

彼女の名は長瀬響輝^{ながせひびき}。唯斗の5歳下の妹だ。

「ただいま、響輝」

自分を迎えてくれる妹に笑顔でそう答え、家にながろうとしたその時、唯斗は異様な気配を感じた。

ゆつくりと肩越しに振り向く。本当は振り向きたくなど無かったが、説明不可能な何かの力が唯斗をそうさせたのだ。

玄関が消えていた。

どす黒い空間が広がって、そこを更に闇が満たしていく。その光景に息を飲む唯斗。その時。

「助けて、兄様！」

「響輝！」

妹の声に慌てて振り向く唯斗。だが、そこに響輝の姿は無い。それどころか、自分の周囲は全て闇に覆われていた。闇は次第に唯斗を包み込んでいく。

「響輝、どこだ！ 何処にいるんだ!!」

あらん限りの声を出して妹の名を呼ぶ唯斗。だが、見えるのは無限の闇だけだ。

「助けて兄様。怖いよ……」

「響輝！」

「い、いや……助けて、助けて！ 兄さまあああつ!!」

「響輝!!」

自らの声で跳ね起きる唯斗。その瞬間、闇は飛び散り、周りの空間も元に戻っていた。

「……夢？」

肩で息をしながら汗を拭いた唯斗は、前髪を手で掻き揚げながらこう呟いた。

「響輝、俺は手にいれたよ。お前を助ける為の力を……」

—EPISODE—06

【疾走】（タイトルコール）

ZN—02、バトラスとの戦いから3日が過ぎた。

「いつてきまーす！」

「はい、いつてらっしや〜い」

護と勇の声が、朝の天海家に響く。にこやかに微笑んで手を振る愛に見送られ、おろしたてのブレザーを着た護と、スーツをきっちり着た勇は自宅のドアをくぐった。

「護、途中まで乗せていつてやろうか？」

「いいよ、バス停すぐそこだし！」

「そうか？　じゃあ、気をつけて行くんだぞ」

「お父さんもね！　それじゃ行つてきます！」

大きなかばんを肩から下げて、護は車に乗りこむ勇に手を振った。同じように手を振り返すと、勇は車のエンジンをかける。

走り去る車を見送った護がバス停へ向けて歩き出した。

ちょうどその頃、エクセルベース・長官室では、正樹が大河にある事柄に関する報告

書を提出していた。

それを一読した大河は、暫しの沈黙の後―

「ここに書かれている事は、事実なのかね？」

と、正樹に質問した。その顔は何時に無く緊張している。

「確率、98.741%。事実と見て…ほぼ間違いありません」

「この事を知っているのは？」

「今の所は、私と長官だけです。あとで参ぼ…じゃない、副長官と雷牙博士。それと凱には話しておこうと思っています。ですが、他のメンバーには…」

「……………暫く黙っていたほうが良いだろう」

「はい、特に…護君には」

一方、護は創星学園に無事に到着していた。何故かバスではなく、バイクに乗っての登校であるが。

バイクから降りた護は、ヘルメットを取り、バイクの運転手に頭を下げた。

「乗せてくれて、ありがとうございました。唯斗さん」

「お礼なんかいいよ。偶然通りがかったただけだからさ」

そう、バス停に向かっていた護は、偶然バイクで通学中の唯斗と出会い、そのまま唯

斗のバイクに便乗してきたのだ。

「じゃあ、中等部の校舎まで案内するよ。この前はあんな事になって、案内できなかったし」

「あ、ありがとうございます」

そんな事を話しながら歩き出す2人。少し歩いた所で戒道とも合流し、校舎へと向かっていく。

その光景を少し離れた所から見つめる1人の男がいた。180cmを超える長身と優しい顔立ちが特徴的なかなりの美形である。

「……………」

男の右手には3枚の写真が握られており、それにはそれぞれ護、戒道、唯斗の3人が写されている。

「護衛対象である長瀬唯斗、天海護、ならびに戒道幾巳を確認。これより創星学園臨時講師、影山史狼かげやましろうとして校内での護衛任務を開始する」

そう呟いた男が右手を軽く振ると、写真は一瞬で炎に包まれ、灰も残さずに消滅する。そして男は、何事もなかったように学園内に姿を消した。

この男、仮の名を影山史狼。GGGに協力する謎の人物である。彼はこの戦いにおいて大きな役割を果たす事になるが…それはまだ遙か先の事である。

謎の男影山史狼が、創星学園の中に消えてから約2時間後、メインオーダールームでは少し早めのティータイムが始まっていた。

「うん、美味しい。流石に紫苑の淹れた紅茶は天下一品だな」

ティーカップに注がれた紅茶を一口啜り、満面の笑みを浮かべる正樹。見れば、凱や命、スワンも同様の笑顔を浮かべている。

「ありがとうございます。まあ、それなりにこだわってますからね」

正樹の言葉に自信に満ちた顔で答える紫苑。

余談ではあるが、紫苑の紅茶へのこだわりは並々ならぬものがある。

茶葉だけでなく水や茶器、更には砂糖やミルクに至るまで納得いく物を厳選し、その日の気温や湿度によって、お湯の温度や淹れ方まで変えると言う凝りようである。

その為、絶品のコーヒーを入れる命、日本茶ではGGG随一と言われる牛山と並んで、GGG女性隊員からの羨望を集めていたりするわけだが、それはまた別の話。

「そう言えば、正樹さん」

「ん？」

「さつき、イヤスさんとマリアさん、それとフアングさんから連絡がありました。勇者口ボ各機、それぞれの目的地に無事到着。だそうです」

「そうか、氷竜達もつくばの方に移動したし、Jさんは火星宙域まで足を伸ばしての哨戒任務中。ここも寂しくなったねえ」

そう言いながら、お茶請けのクツキーを齧る正樹。

国連からの追加予算、そしてU・S・Nメンバーからの融資で、なんとか資金を調達した正樹達は、早速機動部隊の能力強化計画、通称『GNプロジェクト』を発動した。資金の関係上、計画の見直しを余儀なくされたものの、それでも原種クラスの敵であれば、十分に對抗できるだけの能力強化を施せる。

正樹を始めとする新生世界十大頭脳メンバーは、そう確信していた。

「正樹君、ちよつと聞きたいんだけど」

「何だい？ ミコツちゃん」

『GNプロジェクト』について、私達は詳しく知らないわけだけど…やっぱり、氷竜達は外見からガラツと変わったたりするの？」

「うんにゃ、予算の都合もあるし…外見はそう変わらないねえ。変わるのはむしろ…中身の方かな」

「ブレイブやR、それからネオデビジョン艦に搭載している新型GSライド『GSNE XTRIDE』と、新型ウルテクエンジン『ウルテクドライブ』の装備、新型装甲材への換装に、駆動系の強化…これを各勇者ロボ共通の改修項目にしています」

「武装の方も、基本的に今の装備のバージョンアップでいく事になってる…予算があれば、他にも色々やりたかったんだけどねえ〜」

カップ片手にしみじみと呟く正樹。自分が設計した多種多様な『カッコイイ武装』を装備させるつもりだっただけに、今回の予算不足による計画変更はかなりシロツクだったりする。だが―

「僕としては、予算が削減されたのは『ある意味』幸運でしたね」

紫苑の思いは正樹と少々異なっていた。

「…どういう意味かな？ 紫苑君」

なにやら含みのある言い方の紫苑に対して、視線を送る正樹。すると紫苑は―

「だって、予算が余ったりしたら…正樹さん、何するか解らないですから」

正樹へのツツコミを開始した。

「ブレイブが良い例じゃないですか。僕達に何の相談もしないまま、ブレイブハートを放てるようにするなんて」

「そ、それは…悪かったと、思ってるよ。うん…」

「今回の『GNプロジェクト』だって、予算が余ったら色々付け足すつもりだったんでしょっ？」

「え、あ、いや…その…はい」

「まあ、正樹さんが付け足す物に無駄な物はありませんけど……付ければ良いってのもありませんし」

「……………もつともです」

紫苑の淡々とした突っ込みにただただ小さくなってしまう正樹。

「正樹君、相変わらず紫苑君には弱いんだね」

「正樹を言い負かせる数少ない逸材だからな。色んな意味で貴重だよ。紫苑は」

そんな光景を見ながら、小声で会話する獅子王夫妻。

こうして、メインオーダールームでのティータイムは過ぎていくのだった。

それから約2時間後、Gアイランドシティ郊外にある廃工場へ男4人、女1人合計5人の男女が集まっていた。

彼らは何かを話し合っているようだ。だが、その内容は聞き取ることができない。その時――

「おい！　そこで何してんだ！」

そんな声と共にバイクに乗った5人組の男が現れた。ここを根城にしている不良グループだ。

「ここはなあ、俺らがアジトに使ってんだ！　何勝手に入ってんだよ！　ああ!？」

リーダー格の男が彼らを睨みながらいちやもんをつけ始めた。だが、彼らはそれを無視するように出口へ歩き始める。

「なんだ、その態度はおめえらよお？　なんか文句あんのかあ!？」

「痛い目あわねえとわかんねえのか!」

それを良く思わなかったのか、男達は持っていたナイフを抜きながら彼らに駆け寄っていく。その次の瞬間、それは起きた。

彼らの中の1人、黒いレザーの上下に身を包んだ短髪の女がいきなり振り返ったかと思うと、男の1人を蹴り飛ばしたのだ。

蹴り飛ばされた男は数十m先にある壁に激突し、地面に落ちた。

そして、口から血を流し……動かなくなる。

「え?」

目の前で起きた光景が理解できず、一瞬思考が停止してしまう男達。それが彼らの命取りとなった。

女は棒立ちとなった男達に次々と攻撃を繰り出していく。

1人はハイキックで首を押し折られた。

1人は強烈な突きで頭部が吹き飛んだ。

1人は貫き手で心臓を抉り出された。

仲間が心臓を抉り出された瞬間、唯一生き残っている男が我に返った。

「う、うわああああああつ!？」

目の前の惨劇に半狂乱となり、恐怖の悲鳴をあげながらバイクへ戻り、猛スピードで走らせる。

それを見た女は、その姿を豹と人間を合わせたような怪人へと変えると、驚異的なスピードでバイクに乗った男を追い掛けた。

バイクはものの数秒で追いつかれ：数秒後、絶叫が周囲に響いた。

その場に残された4人は：ただそれを見届け、そしてその場を去っていった。

廃工場での惨劇とほぼ同じ頃、午前中の授業を終えた護達は、昼食を取る為に学園内のテラスに移動していたが――

「一杯だね……」

「ごめんね、護君、戒道君。私が先生に呼ばれたりしたから……」

「気にしなくてもいいよ、華ちゃん。昼休みは長いんだから」

「そうだよ。暫く待つか、別の場所へ移動すればいいだけだ」

「うん……」

ほんの10分足らずの間にテラスは満員となっており、暫く待つ事になってしまっ

いた。

「公園の方に行ってみようか。あっちなら空いてるかも」

「そうだね」

「そうしよう」

護の提案で3人が移動を開始しようとしたその時――

「護君！」

護を呼ぶ声が聞こえた。護が声の方に視線を走らせると、そこには――

「唯斗さん！」

「長瀬先輩！」

4人がけのテーブルに1人である唯斗の姿があった。

「昼飯食う約束していた奴らが全員急用出来てね……よかつたら、座る？」

唯斗の言葉に3人は同時に頷いた。

「……いただきます」

食前の挨拶をキチンと済ませ、それぞれの弁当を食べ始める護達。護、戒道、華の弁当は、それぞれに見合った大きさの弁当であったが――

「唯斗さんのお弁当……すごいですね」

ただ一人、唯斗の弁当だけが一線を画していた。

五段の御重にギッシリと詰められたご飯やおかず。例えるならば行楽に来た家族が食べる弁当。そんな表現が相応しいであろう。

「いやあ、元々俺って痩せの大食いだったんだけど…最近、それに拍車がかかってね」
照れくさそうにそう言いながら、弁当を胃に収めていく唯斗。

「前は三段の御重で足りてたんだけど、今はこの五段で…腹八分って所なんだよね」
「は、腹八分…」

唯斗の言葉に啞然となる護達。だが、唯斗はそれに気付かず話し続ける。

「ちようど食欲が増した時期がさ。リュシフェルに乗り込んだ時と重なるから、正樹さんに聞いてみたんだよ。そしたら…」

「そ、そしたら？」

「『強化された身体能力を維持する為に、体が大量のカロリーを欲している。だからじゃないか?』だってさ」

「あ、なるほど…じゃあ、大変ですね。ご飯の準備とか」

「それでもないよ。10年近く自炊してれば、色々コツも掴めちやったりするし」

「唯斗さん、自炊してるんですか!？」

「してるんですよ。こう見えても、料理には結構自信あるんだなあ」

そんな事を話しながら、昼食を続ける護達。やがて食事を終えた4人は――

「そういう訳で、『ミラ☆ツイ』ってのは、物凄く良い作品なんだよ。護君」

「は、はあ……」

「そうだよ護君。アレは見たほうが良いよ。見ないと絶対に損だよ」

「初野さんに同感だね。僕も昨日、偶然アレを見たんだけど……良い作品だ」

「そ、そうなんだ……」

「物は試し、騙されたと思って見てみなよ。そういう訳でコレ」

「コレは……」

「第1期が全話収録されたブルーレイセット。返すのはいつでもいいから」

「あ、ありがとうございます……」

他愛のない雑談(?)に花を咲かせていた。だが――

「12:30定時報告。護衛対象3名に異常なし……」

あの影山史狼が、超遠距離から3人を監視している事には気付いていなかった。

その日の夜。Gアイランドシティでは、あの豹の怪人が、罪もない人々を路地裏に引きずり込み、惨殺を繰り返していた。

そして、今も2人の酔っ払いが路地裏へ引きずりこまれ――

「ぎやあああつ!!」

1人が鋭い爪で切り裂かれ、そしてもう1人も…

「うぎやあああつ!!」

断末魔の叫びを上げ、物言わぬ骸と化した。

「…ふん」

爪についた血を振り落とし、その場を立ち去ろうとする怪人。そこへ—

「見つけたぞ—」

鋭い叫びと共に、数台の車両がけたたましくサイレンを鳴らしながら怪人を取り囲むように停車した。

「…誰だ」

興味なさげに己を取り囲む者達へ問う怪人。それに答えたのは—

「GGGだ! 大人しくして貰おうか…機界33新種!!」

一般のGGG隊員とはややデザインの違う、諜報部専用の制服に身を包んだ20代後半の男だった。それと同時に10人ほどの諜報部隊員が、アサルトライフルやサブマシンガンを手にはから降り、それぞれ配置に付く。

男は部下達が全員配置に付いたのを確認すると—

「撃てえ!!」

発泡を許可した。耳を劈くような轟音と共に無数の弾丸が怪人に襲い掛かる。だが

「…無駄な事を」

呟きと共に怪人はバリアを展開し、弾丸を受け止めていく。

「銃弾じゃ効果が無い！ グレネードを使え!!」

男の指示ですぐさまグレネードランチャーが用意され、怪人に銃口を向けられる。

「撃てえ！」

次の瞬間、数発のグレネード弾が怪人へ放たれる。だが、怪人は—

「シャアッ！」

着弾の寸前、驚異的なジャンプ力で近くのビルの屋上へ跳び上がり、姿を消した。

「しまった！」

すぐさま、追いかける隊員達。だが、彼らが屋上に到着した時には怪人は姿を消していた。

「…メインオーダールーム。こちら、諜報部第3小隊長池田です。33新種を発見、戦闘に入りましたが…逃げられました」

『了解しました。引き続き、付近の搜索をお願いします』

「了解」

通信を終えた池田小隊長は通信を終えると――

「行くぞ!!」

他の隊員達と共に搜索活動を開始した。

「それじゃあ、行つてきます!」

「いつてらつしやい。護ちゃん」

「気をつけてな」

「うん!」

勇と愛に見送られながら家を後にする護。目の前には紫苑が運転する黒いスポーツカーが待機している。

「お待たせしました、紫苑さん」

「夜遅くにすみませんね。護君」

「新種が出てきたんですから、仕方ないですよ」

申し訳無さそうな紫苑の言葉に、笑顔で答える護。

「ラテイ……いや、天海君の言うとおりだ……」

と、そこへ現れる戒道。まさに『いつの間にか』という表現がふさわしい登場である。

「戒道!」

「すまない、遅くなった」

「いえ、とにかく乗ってください」

紫苑の勧めで乗車する護と戒道。それから直ぐに紫苑は、夜の街へ車を走らせた。

G アイランドシティ全体が新種の恐怖に包まれ、紫苑が護達を迎えに車を走らせていた頃、あるビルの屋上には――

「パンジャスの進行状況はどうなっている?」

「今のところは順調だ。このペースでいけば余裕を持ってクリアできるだろう」

あの廃工場にいた4人の男とローゼスの姿があった。

『制限時間内に60の獲物を己の爪で斬殺する』これがパンジャスの課したルールだったな」

「時間を半分残して、仕留めた獲物は34…何事もなければ十分達成可能なペースだが…GGGが出てきたようだ」

「雑魚ばかり殺していても面白くあるまい。やはり少しは手ごたえのある敵がいなければな」

目下に広がるG アイランドシティの街並みを見ながら、口々に呟く男達。その様子は文字通り『ゲームの観客』そのものであった。

一方、護と戒道、そして紫苑は、愛用のバイクで新種捜索に参加していた唯斗と合流していた。

「しかし…蜘蛛、蝙蝠と来て、今度は豹か…特撮番組の怪人じゃないんだから…」

誰に言うでもなくそう呟く唯斗。その体は既に『Gクラステクター』に包まれ、腰には『ウイルブレード』が鞘に収められて装備されている。戦闘準備は万全だ。

「護君。新種の反応…どう？」

「駄目です…まだ何も感じません。戒道は？」

「僕も同じだ…どうやら敵は能力を抑えて行動しているようだ…」

「そっか…」

護と戒道の言葉に唯斗がため息をつきかけたその時、Gクラステクターに内蔵された通信機に通信が飛び込んできた。

『ここ、こちら第5小隊！ 捜索中の新種と遭遇！ 戦闘に入りました！ 直ちにぞうえ…ぎやああつ！』

「ツ…こちら長瀬、応答してください！ もしもし…もしもし！ ……くそっ!!」

第5小隊が全滅した事を悟り、近くの標識に拳を打ちつける唯斗。護と戒道が同時に叫びを上げたのはそんな時だった。

「新種だ!!」

「何だって!!」

「反応が少しずつ強くなってる…こっちに近づいてるんだ!!」

「どっちから来る?」

「西からです!」

「こっちのセンサーにも反応が出ました。このままならあと27秒で新種と遭遇します」

「了解…返り討ちにしてやります!」

声と共にウィルブレードを抜刀する唯斗。やがて、新種が目視出来る距離まで接近してきた。

「行くぜ!!」

声と共に怪人めがけて走りだした唯斗は、100mを僅か3.5秒で走るその脚力で新種へ迫り—

「喰らえっ!!」

気合と共にウィルブレードを横一文字に振るった。振るわれた刃は寸分変わらず新種の胴に直撃し、大きなダメージを与える……筈だった。

「うわあああっ!!」

しかし、悲鳴を上げながら吹き飛んだのは、なんと攻撃を仕掛けた唯斗の方だった。数回地面を転がり、跳ね起きる唯斗。

「一体どうなってるんだ…」

体勢を立て直した唯斗は、ウィルブレードを構え直し、新種を睨みつける。だが―

「…我が名はパンジャス。下等生物如きが我が前に立つな…」

そう言い残すと新種Ⅱパンジャスは再び逃走した。

「あ、待て!!」

咄嗟に追いかけようとする唯斗。だが、パンジャスのスピードは驚異的で、一瞬の内
に唯斗達の視界から姿を消してしまう。

「なんてスピードだよ…」

敵の驚異的なスピードに思わず感嘆の声を上げる唯斗。そこへ―

『敵に感心してどうすんの…』

と、若干呆れ気味の通信が飛び込んできた。Gキャリアーの正樹からである。

「あ、正樹さん…」

『まあ、その気持ちもわからなくも無いがな…奴の最高速度は分析の結果、軽く320km
mは出ている』

「さ、320km!?! 新幹線以上じゃないですか!」

正樹の口から出た言葉に驚きを隠せない唯斗。

『ああ、並のマシンじゃ追いかけることすら出来ん…Jさんが宇宙にいる今、太刀打ちできるのは、ルナちゃんが乗ってるGストライカーくらいだな』

「る、ルナちゃん!？」

正樹の言葉に再び驚く唯斗。だが、正樹はそれを無視し、話を続ける。

『とにかく、そつちに合流するよ。奴に対抗する手段が無い訳じゃないからね』

「は、はあ…」

『じゃあ、また後で』

そこで通信は切れた。だが、唯斗はその場に呆然と立ち尽くし…そしてひと言だけ呟いた。

「正樹さんって……やつぱり、凄い人だ…」

それから数分後、唯斗達のもとにGキャリアーが到着した。同時にGキャリアーの後部ハッチが開き、正樹が顔を出す。

「お待たせ! さあ皆、Gキャリアーの中へ!」

「え? あ…はい!」

正樹に促され、Gキャリアーの中に入る唯斗達。

そこにあつたのはバイクだった。しかも、ピカピカの新車である。

「すげえ……こんなバイク見たことないですよ。これって……」

「Gチエイサー。こんな事もあるうかと……そう、こんな事もあるうかと。密かに作つておいたスーパーバイクだ」

「密かにつて……正樹さん、何時の間にこんな物を……」

「いやあ、前々からポケットマネーを使つてコツコツと……ね。それで新種が出てきたもんだから、一部改造を加えてここに堂々御披露目つて訳」

「凄いですね……これ何kmくらい出るんですか？」

感心しながら、自信満々の顔の正樹に返事をしつつ、バイクを見回す唯斗。

「こいつの最高速度は340km、瞬間的になら355kmまで出せる」

「つて……ことは？」

「コイツならあの新種と張り合える。いや、圧倒できる!!」

正樹の声の後、互いに笑みを交わす2人。その笑顔は勝利を確信した会心の笑顔だ。

搜索活動を行っていた課報部から通信が飛び込んできたのはその時だった。

『第3小隊より通達！ 現在、搜索中の新種と戦闘中。周辺の全小隊ならびに機動部隊に救援を求められたし。繰り返し返す――』

「唯斗君！」

「わかってますー！」

すぐさま唯斗はGチエイサーに跨るとエンジンを起動させー

「凱達も向つてるし、俺達もすぐに追いかけるー！」

「はい!!」

フルスピードで発進した。

諜報部第3小隊とパンジャスとの戦闘は、第3小隊の圧倒的不利に進んでいた。

銃弾はバリアで防がれ、まったくの無力。効果があると思われるグレネードは、パンジャスのスピードの前に狙いをつける事すらままならない。

1人、また1人と殺されていき……残るは池田小隊長ただ1人となった。

「うわああ?!」

パンジャスによって投げ飛ばされ、地面に激突した池田小隊長。その衝撃で動けなくなつたところに、パンジャスが迫る。

「…死ね」

「くっ…」

必死に起き上がろうとする池田小隊長だが、ダメージが大きく体が動かない。徐々にパンジャスが近づく。その時――

「待ちやがれえ！」

1台のバイク。唯斗が操るGチエイサーが、猛スピードで接近してきた。

「喰らえ!!」

叫びと同時にアクセル全開のウイリー走行で、体当たりを仕掛ける唯斗。

「…そんなもの」

当たる訳が無い。そう言いたげな表情でバイクを避けるパンジャス。しかし――

「甘い!」

体当たりが回避された次の瞬間、唯斗は咄嗟に前輪を地面に付けたかと思うと――

「おりゃあ!」

前輪ジャックナイフターを軸にしたターンを行い、後輪をパンジャスに叩きつけた!!

「ぐほっ!!」

これには不意を突かれたのか、後輪を顔面に喰らい吹き飛ぶパンジャス。

「どうだ!!」

パンジャスが吹き飛んだのを確認した唯斗はGチエイサーから降り、池田小隊長を助け起こした。

「大丈夫ですか?」

「ああ…助かったよ」

唯斗の声に返事を返す池田小隊長。口調こそ軽いが、その声から余裕は感じられない。

「あとは、俺に任せてください！」

それを察した唯斗は、池田小隊長を後ろに庇うとウィルブレードを抜刀し—

「たしか、パンジヤスとか名乗ってやがったな…さつきみたいにはいかないぜ…かかって来い！」

と、パンジヤスを挑発した。だが—

「……………」

パンジヤスはその挑発に乗ることなく、無言で逃走した。

「だあ！ だから、正々堂々と勝負しろよ!!」

再び逃走したパンジヤスに悪態をつく唯斗。すぐさまGチェイサーに跨り—

「だがな…今度は逃がしやしないぜ!!」

追跡を開始するのだった。

『機界33新種は現在、驚異的な速度で埠頭方面へ向かっています』

「了解！ Gキャリアー、直ちに急行する!!」

無線を返し、すぐさま現場へとGキャリアーを走らせる正樹、そして護達。

別ルートで凱達も向っている。新種の包囲網は確実に狭まっていた。

その頃、唯斗とパンジャスは――

「……………」

「逃がすかあ!」

埠頭へと続く道路を舞台に、壮絶なデッドヒートを繰り広げていた。

自らを大きく蛇行させ、階段を一気に飛び降り、様々な障害物を飛び越えて、なんとかGチエイサーを振り切ろうとするパンジャス。

しかし、Gチエイサーも階段を一気に駆け降り、様々な障害物をいとも簡単に飛び越えていく。

「いける…このバイクならいける!!」

Gチエイサーはあらかじめ引かれた線の上をなぞるかのようになり、ぴつたりとパンジャスの後ろを追走する。

「…下等生物が!」

湧き上がる苛立ちを押さえきれず、思わず呟くパンジャス。

今まで数え切れないほどの獲物をこの『速さ』で仕留めてきた。誰もがこの『速さ』の前に成す術なく死んでいった。

だが、数分前に下等生物と蔑んだ筈のこの男は、いつの間にか自分と互角の速さを得て、生意気にも自分の背後を走り続けている。それがパンジャスには許せなかった。激しい怒りがパンジャスの心を徐々に支配する。

「殺す！」

埠頭まで2kmを切った所で、パンジャスは遂にその走りを止めた。Gチエイサーも同様に急停止する。

「どうした？ 追いかけてこはもう御仕舞いか？」

「殺す！」

「殺すって…もう少し、マシな言い方は無いのかよ。そんな在り来たりの台詞なんて、いちいち覚えていられないんだけど…」

「殺す！ 殺す！ 殺すううううつ！！」

唯斗の軽口で更に逆上したのか、半ば狂乱状態となり、唯斗へ飛びかかるパンジャス。次の瞬間—

「フアアア！」

声と共に放たれた光弾が、空中のパンジャスへ襲い掛かった。

「ぐぎやあああああつ！！」

光弾に全身を打ちのめされ、苦悶の叫び声をあげながら、無様に落下するパンジャス。

「It hits all bullets. It is splendid」[全弾命中。お見事です]」

「ありがとう、ウィルブラスター」

それと同時に攻撃の主ルナの操るGストライカーが後方から接近し、Gチエイサーの横に停車する。少し前から密かに後を付いて来ていたのだ。

「ナイスタイミングです。ルナさん」

「私とウィルブラスターのコンビなら、この位簡単よ」

「流石ですね」

そんな会話を交わしながらも、倒れたままのパンジャスに視線を送り続ける2人。すると――

「下等生物が……ふざけた真似を！」

怒りに満ちた声と共に、パンジャスが立ち上がった。怒りと殺意に満ちた視線で2人を射抜きながら、呪詛の台詞を吐き始める。

「2人纏めて殺し――」

だが、その台詞はGストライカーの体当たりによって、あっさりと中断させられた。衝突の衝撃を何とか堪え、Gストライカーにしがみつくのがやつとのパンジャス。

「少しの間、そのままでもいいからうわよー！」

言うが早いか、ルナはGストライカーのスピードを上げ、埠頭へと向かう。唯斗のGチェイサーも後に続く。

その頃、埠頭の北端では、凱達と合流した正樹達が、その時を待っていた―
「見えた!」

正樹の声に全員が視線を送ると、そこには埠頭へ猛スピードで迫るGチェイサーとGストライカーの姿が。

唯斗達も正樹達の姿を確認すると、それぞれのマシンを急停止させる。

パンジャスだけが急停止の反動に耐え切れず、無様に吹き飛び、地面に墜落する。

「ぐっ…：下等生物どもに…：これほどの屈辱を…：」

何とか立ち上がる。パンジャスの目に映ったのは、それぞれの武器を構えた凱、唯斗、ルナの姿。

「下等生物、下等生物って…：お前、人間舐め過ぎなんだよね!」

「人間の力、たつぷりと見せてやるぜ!」

「今の内に降参した方が、身の為よ!」

「ふ…：ふざけるな! この下等生物どももおおっ!!」

3人の言葉で完全な狂乱状態になったパンジャスが、3人に襲い掛かる。だが、それ

はあまりに無謀と言うものだった。

「シヤアアアツ!!」

数十人の罪無き人々を惨殺したパンジャスの鋭い爪が唯斗に迫る。だが、唯斗はその爪をウィルブレードで受け止め――

「でやあつ!」

逆ながら空きのボディへ蹴りを叩き込む!

「ぐほお!」

強烈な衝撃に体を『く』の字へ曲げながら、10m近く後ずさるパンジャス。何とか、体勢を立て直す――

「はあああつ!!」

間髪入れずに凱と唯斗の同時攻撃が放たれた。

パンチ、キック、そしてマチエツトとブレードの同時斬撃。まるで長年のコンビのようにピッタリと息の合った動きで、パンジャスを攻める2人。

そして、2人が離れると――

「たあああつ!!」

今度はルナが攻撃を仕掛けた。

流れるような動きで、上段回し蹴りを連続で叩き込む。半ばサンドバック状態で蹴りを受け続けるパンジヤス。更にルナは、ウィルブラスターの銃口をパンジヤスの腹部に押し付け―

「ファイア!」

容赦なく引き金を引いた。銃口から光弾が放たれる度に、パンジヤスの体には風穴が開き、そこから体内の生体マシンやオイルが噴出していく。

「あ、が、ぐあ…」

声にならない声を搾り出しながら、ヨロヨロと後ずさり、体内の再生を開始するパンジヤス。だが、それを許すルナではない。

「止めを刺すわよ。ウィルブラスター!」

「Yes, Master」

「システムチェンジ! バスターフォーム!!」

「System change」

次の瞬間、ウィルブラスターは姿を変えた。収納していたセンサーユニットを展開、更に折りたたまれていた銃身を追加した長距離戦闘形態『バスターフォーム』へと!!

ルナは変形を完了したウィルブラスターの銃口をパンジヤスへ向け―

「これで終わりよ! ファイア!!」

その引き金を引いた。次の瞬間、今までとは比べ物にならない程強力な光弾が放たれ、パンジヤスを飲み込んだ。

「うぎやあああああつ!!」

強力なGパワーの塊である光弾を喰らったパンジヤスは、断末魔の叫び声を上げながら倒れ、直後大爆発を起こした。

「お見事です、ルナさん」

「ありがとう。でも、私とウィルプラスターのコンビなら、この位簡単よ」

「そうでしたね」

燃え続けるパンジヤスの残骸を見ながら、そんな会話を交わすルナと唯斗。だが――

「新種だ!!」

穏やかな雰囲気も護と戒道の声で一気に吹き飛んだ。

「パンジヤス…ゲームオーバー」

そして、何処からともなく響く冷たい眩き。

「この声は!!」

全神経を集中して周囲を見回す凱達。その声の主はすぐに見つかった。

「機界33新種、ローゼス!!」

そう、声の主はあのローゼスであった。

「…………プログラム再構成…無差別破壊モードに移行」

そう言つて左腕を天に掲げるローゼス。次の瞬間、空間が切り裂かれ、そこから今倒したパンジャスを巨大化したようなロボット。そして新種核が出現した。

それを見た唯斗は、すぐさまウィルブレードを『バイパーフォーム』に変え—

「巨大化なんかさせるか!」

ローゼスへ攻撃を仕掛けた。風を切る音と共に刃の鞭がローゼスに迫る。だが—
「無駄だ」

そう呟いたローゼスが右腕を軽く振るうと、その攻撃はあつさりと弾き飛ばされ—
「うわっ!」

それどころか、攻撃を仕掛けた唯斗自身も強烈な衝撃波に吹き飛ばされてしまう。

「お前達はまだ、私と戦う時ではない…」

冷たくそう言い放つローゼスの背後で、パンジャスの残骸を吸収した新種核は巨大ロボットの元へ飛び、一体化した。

「…破壊と混沌の使者よ。この地に災厄をもたらしたまえ…」

そしてローゼスはそう言い残すと、空間に溶け込み、そして消えた。

「待て! くそっ!!」

「奴の事は後回しだ。唯斗君、まずはアイツを何とかするぞ!!」

「了解です！」

「来いっ！ ブレイブガオーツ!!」

「リュシフェルガオー！ ス克蘭ブル!!」

「ギャレオーンツ!!」

それぞれの主の声に応え、3機のメカがエクセルベースから飛び出した。

埠頭から市街地へ移動しようとするパンジャスに、3体のメカノイドⅡガイガーEX、ネオガイガー、Vガイガーが立ち塞がる。

「ゾンダーレギオン！」

パンジャスもESウインドウを開き、ゾンダーレギオンを召喚した。その数30体。すぐに大乱戦が始まった。

「GFシステム起動！」

凱の声が響くと共に、ガイガーEXの四肢が緑の光を纏う。

「うおおおっ!!」

そのままスラスターを全開にして、前方のゾンダーレギオンへと突進。放たれる怪光線を類稀な機動性で回避しつつ、肉薄すると――

「はあっ！」

緑の光を纏った拳を左右連続で叩き込んだ。その拳はバリアを突破し、ゾンダーレギオンの胴体に拳の跡を刻みつけていく。

「たあっ！」

そのままの勢いで上段回し蹴りを放ち、今度はその頭を蹴り碎いた。直後、爆発するゾンダーレギオン。

『凱、ステルスとライナーの修理が終わってないから、ブレイブにはなれない。そのつもりで』

「わかってる！」

先のバトラスとの戦いで中破したライナーガオーEXとステルスガオーEX。

資材不足の為に修理できずにいたが、昨日になってようやく資材が到着。修理が開始されていた。

その為、この戦いには投入できないのである。

『Jさんは火星軌道まで哨戒に行ってるし、新種は唯斗君と護君に任せて、バックアップに回った方が良くもね。今回は』

「ああ、2人になら安心して任せられる！」

正樹からの通信に答えながら、更に3体のゾンダーレギオンを撃破したガイガーEX

は、5体目の目標目掛けて突進した。

「はあっ！」

スラスタ全開で目の前のゾンダーレギオンに突撃するVガイガー。迎撃の為にゾンダーレギオンが放った怪光線を易々と回避すると――

「レーザーチャージングブレード！」

声と共にVガイガーの両腕に装備されたブレードを光の刃に変え――

「でやあっ！」

気合と共に振るった。一瞬の間を置き、胴体を斬り裂かれたゾンダーレギオンが爆発する。

それを見た別のゾンダーレギオンが距離を取ろうと後退するが――

「ブレードキャノン！」

Vガイガーはブレードの柄に装備されたビームキャノンを連射。その火線はバリアを一瞬の拮抗の後突破。ゾンダーレギオンを蜂の巣にしていく。

「Gクレツセント！」

声と共に、ネオガイガーの右腕が左肩装甲を掴むと、装甲の一部が切り離され、小型

「な……」

突然の事態に、パンジヤスが状況を理解するのに一瞬の間を要した。そして、その一瞬が最悪の結果を招く事となる。

地面から飛び出してきたのは、それぞれ前面に鋭いドリルを装備した2機の戦闘車両。ネオドリルガオーとストライクガオーだった。飛び出した2機はそのまま一直線に宙を舞い、パンジヤスの腹部に激突する。

「げほっ……」

無防備状態での激突に苦悶の声を漏らすパンジヤス。そこへ追い討ちをかけるかのように、2機はそれぞれが装備するドリルを回転させる。

「うぎやあああああつ!!」

高速回転するドリルに容赦無く腹部を抉られ、悲鳴をあげるパンジヤス。同時に2機はパンジヤスから素早く離れ、第2陣に攻撃を任せた。

第2陣として飛来したのは、ネオステルスガオー、ネオライナーガオー、ウイングガオー、ソニックガオー、ブリッツガオーの5機だ。

ウイングガオーは、機首の大型ビーム砲と機体上部の2連装反中間子砲で、ソニックガオーとブリッツガオーは両翼のポッドから放つマイクロミサイルで猛攻撃を仕掛けた。瞬く間にパンジヤスの全身が炎で彩られる。

そこへ追い討ちをかけるように、ネオステルスガオーとネオライナーガオーが最高速で体当たりを仕掛けた。

「ぐほあっ！」

口から苦悶の声を漏らしながら、地面を転がるパンジャス。同時にVガイガーとネオガイガーが一気に飛びあがる。

「長官！ Vガイガー、ネオガイガーから要請シグナルです！」

「うむっ！ ネクスト！ ネオファイナルフュージョン、承認ッ！！」

「了解！ NEXT FUSION！」

「ネオファイナルフュージョン……」

「プログラムドライブッ！！」

大河の承認とほとんど同時に、スワンの拳とグラナートの手にしたハンマーが、それぞれのセーフティーカバーを叩き割る。

「ネクスト！」

「ネオ！ ファイナル！」

「フュージョオオオオオオン！！」

その咆哮と共に、Vガイガーとネオガイガーが発した電磁竜巻の中へ、それぞれのがオーマシンのが突入した。同時に、各々のマシンが変形を始め、合体が開始される。そして、電磁竜巻を吹き飛ばし、2体の鋼の巨人が名乗りをあげた。

「ネクスト！ ガオ！ ガイ！ ガアアアアッ！！」

「ガオ！ ガイ！ ガアアアアッ！！ アアアアアルツ！！」

名乗りを終えると同時に大地へ降り立った2体の勇者王は、パンジャスとの激闘を開始した。

「反中間子砲！」

最初に動いたのはネクストガオガイガーだった。背面部の2連装反中間子砲を展開し、反中間子ビームを連射する。

「遅い！」

矢継ぎ早に放たれる反中間子ビームを、次々と回避していくパンジャス。すると――
「マイクロミサイル、発射！」

今度は両脚のミサイルポッドから放たれた無数のマイクロミサイルが、パンジャスへ襲いかかった。

「この程度！」

当たるとは無い。そう言わんばかりの動きで、マイクロミサイルを全て回避する。パンジャス。だが―

「この程度の攻撃で仕留められるなんて、思っていないよ」

それは護の予想範囲内だった。

「そう言う事!」

マイクロミサイルを回避したパンジャスの目の前に、突如現れるガオガイガーR。弾幕を隠れ蓑にして、密かに接近していたのだ。

「でやあつ!」

護達の真の狙いに気付いたパンジャスが何かを言うよりも早く、ガオガイガーRの拳がパンジャスの顔面に叩き込まれた。

「ぐほあつ!」

鼻を潰されたパンジャスの口から苦悶の音が響き、同時に折れた牙が飛び散る。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアツ!」

ガオガイガーRの攻撃は止まらない。マシンガンのように放たれる突きのラッシュが、パンジャスを滅多打ちにしていく。

完全にサンドバック状態となり、殴られ続けるパンジャス。そして―

「オラアツ!!」

渾身の右アッパーがパンジャスの顎に炸裂した。顎を完全に潰され、粉々になった牙やオイルを周囲に撒き散らしながら、宙を舞うパンジャス。そこへ――

「ハアアアツ!!」

駄目押しと言わんばかりに、ガイガーEXが渾身の力を込めた蹴りをがら空きのボディへ叩き込んだ!

「ゲボオツ!」

蹴りを食らった直後、何かが潰れるような音と共に地面へと落下するパンジャス。

「げ、ぶ……があ……」

原形を留めない程グシャグシャに潰された顔を、そして大きなダメージを負った体を再生させながら、ヨロヨロと立ち上がるが、唯斗達がそれを黙って見逃す筈が無く――

「再生なんか、させるかよ!」

止めを刺す為に、ガオガイガーRが飛びかかった。

再生途中のパンジャスを再度殴り倒し、核を抽出する。

誰もが、数秒後に繰り広げられるであろう光景を容易に想像できた。だが――

「っ!」

止めの鉄拳を振り下ろす寸前、唯斗は言いよの無い悪寒に首筋を撫でられた。それと同時にパンジャスの両手から光が迸る。

「ちいっ！」

反射的にガオガイガーRが回避運動に入ったのと、パンジャスが光の迸る右手を振り上げたのは、ほぼ同時だった。

「……………危なかった」

そう呟きながら、パンジャスと距離を取るガオガイガーR。そのヘッドギアは一部が破損し、左側の鍬形が半ばから切り落とされていた。あと一瞬でも回避が遅れていたら、この程度のダメージではすまなかっただろう。

「下等生物ども……褒めてやるぞ」

再生を終えたパンジャスが、ニヤリと笑いながら構えを取る。その両手からは光が迸り、光の刃を形成していた。

「私に……この切り札を使わせるのだからなあ！」

次の瞬間、光の刃を振るい、ガオガイガーRに斬りかかるパンジャス。2振りの光の刃が唸りを上げてガオガイガーRを襲う。

「舐めんな！」

自らを斬り裂こうと襲い掛かる光の刃を、ガオガイガーRは紙一重で避け続け――

「でやあっ！」

攻撃の合間に生じる僅かな隙を突いて、パンジャスのボディに蹴りを叩き込み距離を

取る。

「マイクロミサイル、発射！」

そこへネクストガオガイガーが、マイクロミサイルの連射で追い討ちをかけるが――
「無駄だ！」

パンジャスは左手の五指から光線を放ち、全てのミサイルを撃墜する。

「剣だけじゃなく、飛び道具もありかよ……」

忌々しげに呟く唯斗。正樹からの通信が飛びこんできたのはそんな時だった。

『皆、聞こえるか？』

「正樹、あいつの両手はどうなっているんだ？」

『一言で言ってしまうえば、全距離対応のマルチウエポンつてところだな。両手の指一本一本が高出力のビーム砲であり、指先を揃える事で高出力のビームソードになる』

「なるほど、見下してた相手にボコボコにされたもんだから、慌てて切り札投入ってわけか」

『身も蓋も無い言い方だけど、そうなるね』

「どつちにせよ、切り札が何か解れば戦いようはある！」

「ええ、切り札の一本位で俺達に勝とうなんて、大間違いだつて事を教えてやりましょう！」

そう言うが早いか、パンジャスへ突撃するガイガーEXとガオガイガーR。

「馬鹿め、真正面から来るとは…蜂の巣にしてくれる！」

次の瞬間、ガオガイガーRとガイガーEXに無数の火線が襲いかかった。一発でも食らえば、大ダメージは避けられない。そんな怒涛の攻撃を掻い潜り、パンジャスに肉薄する2体。

「シャアアアツ!!」

それに反応し、パンジャスも光の刃を両者へ振り下ろす。次の瞬間――

「な…馬鹿な！」

パンジャスは己の目を疑った。何故なら、己の切り札として絶対の自信を持っていた光の刃。それが、目の前の目標に届く寸前で受け止められていたから。

「二度に2つの白刃取りは無理でも！」

「1つずつなら、何とかなる！」

数秒後『グシャツ』『ボキィツ』という音が周囲に響く。ガオガイガーRが、渾身の力でパンジャスの右腕を押し折ったのだ。

声にならない叫びを上げるパンジャスを無視して、ガオガイガーRは左腕も押し折る。そして――

「今だ！ 護!!」

凱の声と共に2体がパンジャスから離れると――

「フルブラスト！ いっけえええっ!!」

ネクストガオガイガーが、その全身に装備された火器を開放した。背面部に装備された『2連装反中間子砲』。

両腕に装備された2連装レーザー砲『ツインレーザーキャノン』。

両足に装備された『マイクロミサイルポッド』と『パルスレーザー砲』。

それら全てが一斉に火を噴き、圧倒的な火線が豪雨のようにパンジャスの元へ降り注いだ。瞬く間にパンジャスの周囲の地面が大きく抉れ、大爆発を起こす。

「ぐおおお……」

爆発が収まった時、爆発の中心部には体のあちこちを吹き飛ばされ、苦悶に満ちた呻き声を上げるパンジャスがいた。

「止めだ！ 護君!!」

「はい!」

間髪いれずにネクストガオガイガーは両腕を交差させ、一気に左右に広げるとあの技の名前を叫ぶ!!

「ヘル！ アンド！ ヘブン!!」

ネクストガオガイガーの両腕に異なる2種類の光が輝く!

「ゲーム・ギル・ガン・ゴー・グフォ…」

呪文の詠唱と共に両腕を徐々に合わせていく。そして両手が合わさった瞬間、神々しい光が周囲を包む。

「ウィータツ!!」

次の瞬間、凄まじい光の奔流がパンジャスへ放たれ、そこで勝負は決した。

激闘に終止符が打たれた直後。あの廃工場には、あの男達4人とローゼスの姿があった。

「敗れたか…パンジャス」

「速さだけが取り柄の奴だったからな。ある意味当然の結果だろう」

会話を交わす5人の表情からは、倒された仲間への憐れみなど一欠けらも感じられない。あるのはただ、弱者への侮蔑のみ。

「次のプレイヤーは？」

「…俺だ」

「ゲームのルールは？」

「すでに決めている…」

そう言うのと、一枚のカードをローゼスへ投げ渡す男。今、新たなゲームが始まろうと

していた。

君達に最新情報を公開しよう!!

来日した獅子の女王の前に立ちふさがる謎の影

その恐るべき能力に一度は敗れる獅子の女王

だが、敗れたままの彼女ではない!!

愛する者の生み出した新たな力で、今こそ逆襲のスタートだ!!

勇者王ガオガイガー — EPISODE 07 —

『復活』

次回もこのURLにネオ・ファイナルフュージョン承認!!

これが勝利の鍵だ!!

『ウィルスナイパー01&02』

勇者王ガオガイガー用語辞典

第7回『私立創星学園』

護達が通う中高一貫の私立学園。

創立3年と歴史の浅い新設校ではあるが、全国トップクラスの施設と豊富な講師陣を有しており、学業・スポーツ・芸術の各分野で優秀な成績を残している。

校舎はGアイランドシティ郊外にあり、護の家からだとバスでおよそ20分の距離。

— E P I S O D E — 0 7 〈復活〉

♪ザン!♪ (GGGのマーク)

エクセルベース。宇宙防衛勇者隊GGGの本部であるこの海底基地には、様々な施設が存在している。

地下第三層に存在するトレーニングルームもその一つである。

ここにはありとあらゆるトレーニングを可能にする為、各種機材が揃えられているのだが、その豊富な機材を使って黙々とトレーニングに励む者達があった。

「94…95…96…」

巨大なウェイトを何枚も取り付け、とても常人には持てない重さとなったバーベルを使い、黙々とベンチプレスに励む唯斗。

「97…98…99…100!!」

「お疲れ様、唯斗君」

規定の回数を終え、バーベルを降ろした唯斗に声をかけながら、タオルを差し出す凱。
「あ、ありがとうございます」

差し出されたタオルを受け取り、汗を拭きはじめる唯斗。

「1枚100kgのウェイトを左右10枚ずつ、2tにもなるバーベルを軽々と…大したもんだ」

「まだまだ、凱さんにはとても敵いませんよ」

「いや、このペースで鍛えていけば、俺なんてすぐに追い抜くさ。で、今日はどうする?」
「当然、挑戦させていただきます」

—EPISODE—07

【復活】(タイトルコール)

十数分後、トレーニングルームには護や戒道、正樹など多くのギャラリーが詰め掛けている。中には仕事を何とかやりくりして迄見学に来る者や—

「今日までの対戦成績は、凱隊長の6戦6勝! だが皆さん知っての通り、長瀬隊員の実力も相当な物だ。番狂わせの可能性は十分にある。さあ、張った張った!」

「:よし、凱隊長に10000円!」

「俺も凱隊長に10000円!」

「俺は…長瀬隊員に30000円!」

2人の勝敗で賭けを行なっている者達もいる。

そんなギャラリーの喧噪を尻目に、オープンフィンガーのグローブとヘッドギアを付け、リングに上がる2人。

「ルールはいつも通り、5分間の1ラウンド勝負。打撃、投げ、間接技、何でもありで、どのような形であろうと相手からダウンを奪った方の勝ちだ」

「はい、お願いしますー！」

2人は空手の試合前のように、相手へ頭を下げ、構えをとる。僅かな間を置いてゴングが鳴り、組手が始まった。

「先手必勝ー！」

先に動いたのは唯斗の方だ。

「ハッー！」

一気に間合いを詰め、鋭い左ジャブを5連続で繰り出す。だが、凱はそれをいとも簡単にいなし、5発目のジャブを弾くと同時にカウンターの右ストレートを放つ。

「ッー！」

顎狙いの一撃を避けきれないと判断した唯斗は、咄嗟に頭を動かし、その拳を額で受ける。

ガッッ！

鈍く大きな音をたてて、唯斗の体が僅かによろめく。凱はそのまま追撃をかけようと

するが、一瞬早く唯斗が距離を取る。

「痛ったあ……ああ、顎に喰らってたら終わってた……」

額の痛みを振り払うように軽く頭を振り、構え直す唯斗。

「顎を打ち抜くつもりだったけど、よく受けたね唯斗君。良い反応だ」

「俺も、開始30秒で終わるつもりはありませんからね」

凱の言葉にそう返すと、唯斗は軽い爪先立ちの状態でリズムを取り、ステップを踏み始めた。そのまま凱の周囲を回り――

「ハッ!」

今度は、鋭い右の足刀蹴りを3連続で繰り出した。だが、凱はこの攻撃も容易くないな

し――

「ハアッ!」

3発目の足刀蹴りに続けて唯斗が放った左の上段後ろ回し蹴りをスウエーバックで避け、カウンターの左を叩き込む!

パァン!

乾いた破裂音が響き、再度後退する唯斗。

「まだまだ!」

咄嗟に凱の拳を受けた事で、痺れの残る右掌を軽く振り、握り直す唯斗。そのまま、凱

への攻撃を再開する為、三度間合いを詰め―

「ハアアツ！」

踏み込みと共に振りかぶった右拳を真正面から叩き込んだ。だが、その一撃は凱が顔の前に配置した左腕によって難なく受け止められ、それをきつかけに攻守が交代した。凱は素早く唯斗の拳を払い、右の手刀を放つ。

「なんのー！」

唯斗の反応もまた素早いものだ。左腕でそれを受け止め、反撃の前蹴りを放つ。しかし、凱はそれを読んでいたかのように両腕を交差し、蹴りの出始めを抑える。

「なっー！」

そして次の瞬間、蹴りを抑えられた事で生じた僅かな隙を突き、凱は唯斗にお手本のような一本背負いを決めていた。それと同時に勝負の終わりを告げる、ゴングが鳴り響く。

「…また、勝てなかったか……」

リングに背中を打ち付けた痛みにも顔をしかめながら、組み手と読みあい、2つの敗北の味を噛みしめる唯斗。

こうして、凱と唯斗の組手は終わりを迎えるのだった。

それから30分後。トレーニングルームと同じ地下第三層にある隊員専用の大食堂に凱達の姿はあった。

一度に300人以上が食事をできる巨大な食堂の一角に陣取り、注文した料理が次々と運ばれるのを待っていた訳だが――

「「「「……………」」」」

なぜか、その場に座っている凱達の目は『点』になっていた。ただ一人唯斗を除いて……。

「えーと、注文……合ってるよな？」

「ああ……凱が大盛り牛丼の卵つきとサバの味噌煮、それと味噌汁。ミコツちゃんが好きだねうどん、紫苑が天ざる、護君がミックスサンドとオレンジジュース。戒道君がカルボナーラ。俺が塩ラーメンと餃子。そして唯斗君が……」

そこまで言って正樹の言葉は止まった。唯斗の目の前に並ぶ料理を見て、喋る気が無くなったのだ。

ちなみに、唯斗の昼食は……特盛りのカツ丼と同じく特盛りの親子丼、大盛りのチャーシュー麺、コロッケが2人前に、メンチカツと野菜炒めがそれぞれ3人前……そして――

「お待たせしました。ショートケーキとレアチーズケーキ、それとティラミスにウーロン茶のジョッキです」

ウエイトレスが注文されていた最後の品々を唯斗の前に運び、全ての料理が揃った。「いただきますーす!」

ウキウキした声と共に目の前の料理に箸を進める唯斗。その箸の動きは凄まじくも華麗で、大量の料理が瞬く間に消えていく。

「…お、俺達も食べようか?」

「そうだな…」

暫く唯斗の食事を呆然と見つめていた凱達だったが、正樹の言葉で我に帰り、食事を始めた。

「しかし…唯斗君」

「はい?」

正樹の言葉に顔を上げる唯斗。しかし、食べるという行為を止めはしない。

「いくら、強化された身体能力を維持する為とは言え…そんなに食べて太らないのか?」
「俺、元々痩せの大食い以太りにくい体質なんです。それに…」

「それに?」

「飯に太ったとしても1回フュージョンしたら、3kg位体重落ちるんで大丈夫です」

「なるほど…羨ましい体質だねえ。あ、そういえば、ルナちゃんも大食いだけど太らないな」

「え、ルナさんもそういう体質なんですか？」

正樹の言葉について箸を置く唯斗。

「お、唯斗君。ルナちゃんの名前に反応するとは…もしかして、ルナちゃんに惚れちゃったりとか？」

「そうじゃないですよ。ただ…」

「ただ？」

「…ちよつとイメージが湧かないだけです」

そう言う唯斗は、残っていたカツ丼を一気にかきこみ、ケーキとウーロン茶を手早く胃に収めると—

「それに俺、恋愛とかまだ早いと思ってますし」

と言つて席を立った。

「あ、唯斗君」

「凱さん、トレーニングルームにいますから、何かあつたら呼んでください」

「あ、ああ…」

凱は更に何かを言おうとしたが、何も言えずに唯斗を見送るだけだった。

「凱兄ちゃん…」

「どうした？ 護」

「うん…唯斗さんの事なんだけど…」

「唯斗君がどうかしたのか？」

「唯斗さんって…器用だし、凄く良い人だと思うんだ…でも、何て言うか…」

「どこか、人と距離を置いている。自分の境界線の内側には踏み込ませない。そんなところが…と、言いたいんだろ？」

「うん…」

凱の言葉に頷く護。それを見た凱はフツと溜息をつき―

「皆には話しておく必要があるな…唯斗君の過去を…」

と言い、一瞬の間を置いて話し出した。

「唯斗君は妹さんを失っているんだ…」

「妹さんを？」

「ああ、自分の目の前でな…」

凱の口から出た事実言葉に護達。だが、凱をあえてそれを無視し、話を続ける。

「元々、唯斗君は横浜の出身なんだ…」

「ちよ、ちよつと待った…横浜って、まさか……」

凱の口から出た『横浜』と言う地名に過敏に反応する正樹。命も声こそ出さないものの顔が真っ青になっている。

「そう…唯斗君も、E11-01落下の被害者なんだ」

「ここまで言うのと、凱は一旦言葉を切り—」

「俺も父さんから聞いた話だから、全てを知っているわけじゃない…」

と前置きした上で、再び話し始めた。

「あの事件があった夜、唯斗君の御両親である長瀬敬介博士、織恵博士は、父さんと一緒に研究の真つ最中で、唯斗君と妹の響輝ちゃんは2人で留守番をしていたそうだ。そして2人が眠りについた深夜…」

「あの、忌まわしい事件が起きた…」

凱の言葉に続くように続くように呟く正樹。その顔は緊張感にあふれている。

「ああ…あの事件で横浜は、文字通り地獄になった…唯斗君の自宅周辺も火の海となり、その時たまたま起きていて1階にいた唯斗君は、寝ている響輝ちゃんを助けようと2階に向った…だが」

「だが？」

「唯斗君の目の前で、響輝ちゃんは炎に飲み込まれたんだ…」

「そんな…」

「じゃあ、響輝ちゃんはもう…」

「恐らく…な」

正樹の言葉に曖昧に答える凱。それを不審に思った正樹は――

「恐らく？ 随分と歯切れの悪い言い方だね」

と、凱に詰め寄った。数秒の後、再び口を開く凱。

「…遺体が見つかってないんだ……」

「遺体が？」

「どういうこと？ 炎に巻かれて…その、燃え尽き…ちやつた…つて事？」

「それは有り得ません。通常の火災で発生する温度は、高くても精々800℃。こういう言い方は、問題があるかも知れませんが、人間が燃え尽きるには…温度が低すぎます」
護の言葉を即座に否定する紫苑。それに続くように凱が呟く。

「響輝ちゃんが炎に巻かれる寸前、唯斗君は見たそうだ…」

「見た？ 何を？」

凱の言葉に疑問の声を上げる正樹。だが、正樹を初めその場の全員が気がついていない。誰もがそれが思い違いであることを望みながら…だが、その思いは凱の言葉で打ち砕かれてしまった。

「…パスターを……」

凱が唯斗の過去を語っていたその頃、当の唯斗はトレーニングルームでサンドバッグ

を殴り続けていた。息もつかせぬ連打に300kg近い特注のサンドバッグが宙に浮く。

「……………」

無言でサンドバッグを殴り続ける唯斗の心は、嵐のように荒れていた。

(あの時…俺が下へ降りてさえないなければ…)

目の前で妹を失った悲しみ―

(あの時…あと10秒、いや5秒でも早く響輝の元に行っていたら…)

妹を助けられなかった自分への苛立ち―

(あの時…俺が、俺がもつと強かったら!!)

例えようもない怒りと苛立ちと悲しみが唯斗の心をかき乱す。

「うわあああああああああつ!!」

叫びと共に放たれた一撃に、鎖が千切れたサンドバックは5m近く宙を舞い床に落下する。

「俺は…」

肩で息をしながらサンドバッグを見つめる唯斗。暫くの沈黙の後、再び口を開く。

「俺は…力を手に入れた。響輝、俺はお前を必ず助けだす…たとえ、この世界全てのゾンダーと戦う事になっても……」

その夜。勤務時間を終えた凱は、帰宅前に正樹の研究室へ立ち寄っていた。

「珍しいねえ。凱がここに来るなんて」

そう言いながら、紅茶の入ったカップを凱に渡す正樹。

「ああ、ちよつとな…」

カップを受け取りながら口を開く凱。その表情はどこか冴えない。

「…唯斗君の事かな？」

「ああ…正樹、お前は どう思う？」

「どうって？」

「いや、月村正樹個人として見た場合、長瀬唯斗という人間はどう見える？」

「そうだねえ…」

凱の質問に正樹は一瞬上を向き―

「まだ、出会って10日かそこらしか経ってない俺が言うのもどうかと思うけど…好感を持てる人間だと思うね…ただ」

「ただ？」

「こう、ピンツと張り詰めた糸って言うか…余裕が有りそうだけど無いというか…とにかく、そんな感じがするねえ」

「そうか……」

正樹の言葉が、まるで予想通りの言葉であるかのように頷く凱。

「どうやら、考えている事は同じみたいだね」

「ああ、唯斗君はゾンダー、機界生命体にさらわれた妹さんを助け出す。この思いで戦っている……」

「もしも、この思いが最悪の展開で裏切られたら……」

「その時、唯斗君は……」

この凱の眩きと共に黙り込む2人。そして暫しの沈黙の後――

「だけどさ、凱」

正樹が口を開いた。

「なんだ？」

「もし、唯斗君が倒れそうになったら、俺達が支えれば良いんじゃないかな？」

「…そうだな」

正樹の言葉に頷いた凱は、紅茶を一気に飲み干し――

「そういえば、正樹」

と、話題を変える事にした。

「なんだ？」

「そういえば、明日だったよな…」

「ああ、明日だね。迎えは仁君にお願いしているよ」

「お前が行かないとは…珍しいな」

「やる事があるんでねえ」

そう言いながら背後の作業台を指差す正樹。

「それは？」

「これか？　これはね」

凱の問いかけに正樹はウキウキとした顔で、作業台に乗せられたトランク、自らの発明品について説明を開始した。その日、凱の帰宅はいつもより2時間遅くなったという。

翌朝。羽田空港を出発する1台のスポーツセダン。その車中には、3人の男女の姿があった。

「C, etait un long voyage de 12 heures, c
, etait un plaisir. Bienvenue au Japon
mademoiselle Noir, mademoiselle Shishio
u」12時間の長旅、お疲れさまでした。日本へようこそ。Ms. ノワール、Ms. 獅

「王子」

運転席に座る男の名は綾瀬仁。あやせじんGGGの組織再編成に伴い、諜報部の新たなチーフとして、内閣調査室から引き抜かれた凄腕の諜報員である。

「早朝にも関わらず、迎えに来てくださってありがとうございます。Mr. 綾瀬」

仁の流暢なフランス語による問いかけに、後部座席に座っていた2人の女性の内、パピヨン・ノワールは笑顔で答え—

「……………フン」

ルネ・カーディフ・獅子王はつまらなさそうに鼻を鳴らし、窓の外を見つめていた。そんなルネの様子に、苦笑しながら呟く仁。

「正樹さんが迎えに来れなくて、ご機嫌斜めですね」

「なっ、ま、正樹は関係ない！」

直後、あまりにベタな反応を見せるルネ。

「あと15分もあれば、エクセルベースに到着します。もう少しだけ我慢してください」
 そんなルネを宥めつつ車を走らせる仁。やがて車はGアイランドシティに入り、このまま何事もなくエクセルベースへ到着するだろう。車中の誰もがそう思った時、事件は起きた。

「うわあああああつ!!」

信号待ちで停止した車の近くに、突然中年男性が悲鳴と共に落ちてきた。地面に叩きつけられ、僅かな呻き声を残して動かなくなる男性。

「きやあああつ!!」

瞬時に現場はパニックに包まれ、悲鳴が響く中、人々が蜘蛛の子を散らすように逃げ回る。

その状況にルネと仁は同時に、パピヨンもやや遅れて車の外へ飛び出した。

「……………駄目です。もう、手の施しようが…」

男性の死亡を確認したパピヨンが悲しげに顔を伏せるのを尻目に、ルネは周囲の索敵、仁も索敵と並行しての警察及びGGGへの連絡を行い、そして――

「見つけた! 左の白い雑居ビル、その屋上!」

ルネが犯人らしき男を発見した。5階建ての雑居ビルの屋上に立つその男は、地面に倒れた男の死体を微笑を浮かべながら見つめ…そして、背中を向けて立ち去ろうとしている。

「逃がすか!」

「ルネ! 待って!」

パピヨンの制止の声を振り切り、ビルの屋上目掛けて一気にジャンプするルネ。立ち去ろうとした男の前に降り立ち、その進路を塞ぐ。

「アンタ、あんな真似してどういうつもり？」

「……………ゲームの邪魔だ、そこを退け…」

男は陰湿な感じのする声でそう言うと、常人離れた跳躍力で後方へ跳んで、ルネと距離を取り—

「退かないのなら…お前も殺す」

蝗と人間を足したような怪人に変身した。そう、この男は新種だったのだ。それを見たルネも—

「イーク…イーッブツ!!」

戦いに挑む為、凜々しい咆哮をあげた。直後、ルネの顔にサイバースコープが展開し、更にエネルギーアキュメーターが集束。同時に放熱機関であるインタークーラーコアトが展開。戦闘形態が完成する。

「(こんな事になるなら、銃を預けたりするんじゃないよ!) ハアアアツ!!」

諸々の事情から手持ちの銃火器類を全て、別ルートで来日するポルコートに預けていた事に、内心舌打ちしながら目の前の新種に突撃するルネ。

バキイ!

直後、戦車の装甲板をも凹ませるパンチが新種の顔面に直撃。更に左右の連打をポ
デイへ放ち—

「ハアアアッ!!」

渾身の力を込めた上段回し蹴りを、新種の右側頭部に叩き込んだ! だが――

「効かないなあ……」

ルネの怒涛のラッシュを受けても、新種は平然としていた。多少の傷を負ってはいるが、それもすぐに再生していく。

「な……」

自分の攻撃がまったく通用していない事に愕然とするルネ。一旦距離を取ろうとするが、その為に生まれた僅かな隙を新種は見逃さない。

「ククッ……」

陰湿な笑みを浮かべながらルネに肉薄し、そのボディにパンチを叩き込む新種。強烈な衝撃にルネの体が『く』の字に曲がり――

「ぐ……ごほっ!」

口から大量の血が吐き出され、ルネの胸元を汚した。

「どうした……この程度で倒れられては、面白くないなあ……」

そう言いながら、今度はルネの顔面を殴りつける新種。その一撃でサイバースコープは粉々に砕け散り、ルネの意識も一瞬遠のく。そのまま倒れそうになるが――

「この程度で終わりの訳……ないだろう?」

新種はそれを許さなかった。左手でルネの髪を掴んで、無理やり立たせると、残った右手でルネのボディを執拗に殴り始める。

そして、ボディへの打撃がちょうど10発を数えた時―

「終わり……だ」

半ば意識を失ったルネを一気に投げ飛ばした。ルネの体が一瞬間に舞い、すぐに地上目掛けて落下を始める。

受身も取れない状態でこの高さから落下すれば、如何にサイボーグと言えどもただではすまない。

数秒後に聞こえるであろう断末魔を想像し、陰湿な笑みを浮かべながら、地上を見下ろす新種。だが―

「な、なんだと……」

その笑みは一瞬で消えうせた。地上にはいつの間にか白いマットが敷かれ、そこに落下した事でルネのダメージは最小限に抑えられていたのだ。

「護衛キットNo. 16、高所落下時対応用瞬間展開式エアマット。これをトランクに積んでいて助かりました」

そう呟きながらルネの無事を確認し、安堵の表情を浮かべる仁。その様子を見た新種は―

「余計な事を…」

苛立ち混じりにそう吐き捨て、地上へ飛び降りた。すぐさまルネに止めを刺すべく動き出すとするが、仁が立ち塞がる。

「女性に対しての狼藉…ここまでです。M s. ノワール、M s. 獅子王をエクセルベアスへ…あの外道は私が足止めします」

そう言いながら、ネットに横たわるルネを抱きかかえ、車内へ運ぶ仁。その動きには一部の隙もなく、新種も迂闊に手出しが出来ずにいる。

「了解しました。M r. 綾瀬、決して無理はしないように」

そう言い残すと最高速度で車を走らせ、エクセルベースへ直行するパピヨン。その場には仁と新種だけが残った。

「下等生物が…死にたいようだな」

「ご冗談を、貴方如きに殺されるほど弱くはありませんよ」

「貴様…栄光ある機界33新種が1つである、このバダスを侮辱するか!!」

仁の言葉に一瞬で激情し、咆哮と共に突進するバダス。仁は、その突進をかわすと「時間稼ぎ…させてもらいます!」

バダス目掛けて右腕を振るった。直後、右腕の延長線上で何かが煌き、バダスの体に絡みついたかと思うと、一瞬で縛り上げた!

「ぬおっ！」

突然動きを封じられ、驚きを隠せないバダス。やがて、己を縛る物の正体に気がついた。

「わ、ワイヤーだと！」

「そう、太さ0.1mm、髪の毛並の太さですが、その強度は折り紙つき。たとえば北極熊が相手であろうと動きを封じる事ができます」

そう言いながら右腕に填めた腕時計から伸びたワイヤーを巧みに操り、バダスを締め上げる仁。

「この程度で…動きを止めたつもりかあ！」

しかし、バダスが咆哮と共に力を込めると、四肢を拘束していた筈のワイヤーは次々と千切れ飛び、瞬く間にバダスは動きの自由を取り戻してしまふ。

「雑魚が…死ねえ!!」

そして、仁目掛けて再度突進するバダス。

「この程度…な訳がないでしょう！」

だが、それは仁の想定内だった。バダスの一撃を後方に跳んで回避しながら、懐から白いピンポン玉を取り出すと――

「ここからが本番です！」

それをバダスへ投げつけた。次の瞬間、バダスの至近距離で炸裂する大音響と閃光。ピンポン玉の正体は、小型の音響閃光弾スタングレネードだったのだ。

「ぬおっ!!」

突然の大音響と閃光に、視覚と聴覚を封じられるバダス。人間をはるかに凌駕する再生能力で、感覚の回復を図るが――

「その一瞬の隙が、命取りです!」

回復に要するホンの数秒。仁にはそれで十分だった。

懐から今度は青と赤のピンポン玉を取り出し、青い方をバダスに投げつける。次の瞬間、破裂したピンポン玉からぶちまけられた粘着剤がバダスの全身を覆い、その動きを封じる。そして、続けて投げられた赤いピンポン玉がバダスに命中した次の瞬間!

「ぐわあああああつ!!」

テルミット反応によって発生した数千度の炎がバダスの全身を包んだ。全身を激しく焼かれ、のた打ち回るバダス。いくら再生能力で回復するとはいえ、全身に大火傷を負って平気なわけがない。

そして、全身の再生を終え、バダスが立ち上がった時には、仁は姿を消していた。

「ど、ど、ど……ど……へ消えた!」

慌てて周囲を見渡すバダス。数秒後、背後の気配に気づいたバダスが後を振り向くと

「遅いですよ」

そこには、やや大型のダーツを構えた仁の姿があった。バダスが動こうとするよりも速く放たれたダーツは、一直線にバダスの胸部へ突き刺さる。そして—

「ぐわあ!!」

刺さったダーツが爆発し、苦悶の叫び声を上げるバダス。そこへ更に2本のダーツが連続で突き刺さり、爆発する。

「うぎゃあああつ!!」

右肩の一部と、左脇腹を吹き飛ばされ、またしてもた打ち回るバダス。だが、その体は徐々に再生していく。

(解ってはいましたが、この位の攻撃じゃ決定的なダメージは与えられませんね…)

再生していくバダスを眺めつつ、心の中で呟く仁。

(あと数分は時間を稼ぎたいところですが…)

スーツに仕込んであるダーツや手投げ弾の残りを確認しつつ、次の手を考える仁。その時—

「無事か? 仁!!」

その声と共にGチェイサーを駆る凱と唯斗、Gストライカーを駆るルナが現場へ到着

した。

「お早い到着、助かりましたよ。凱隊長」

安堵の溜息と共にそう呟く仁。その顔には余裕の笑みが浮かぶ。

「綾瀬さん、正樹さんからGクラステクターを預かってきました」

「ありがとうございます」

そして、唯斗からトランクを受け取ると仁は――

「はあっ!」

声とともにトランクを一気に投げ上げる。上空を滞空するように回転するトランク。

そして――

「着装!!」

仁の叫びに反応し、トランクが爆発したように展開すると、内蔵していた漆黒の装甲が一気に射出された。

射出された装甲は、仁へと向かい、その体に装着され――

「イークイップ!!」

その掛け声を合図として、装甲の各所からガスが抜け、身体に密着すると戦闘形態への移行を完了した。

「さて、こっちは準備万端だけど……どうする?」

ウィルブレードを抜き、その切っ先をバダスに向けてそう問いかける唯斗。そして――
「潔く降参してくれると……ありがたいただけどねえ」

続けて放たれたこの一言が、バダスの脳裏から『撤退』の2文字を掻き消した。

「……ゾンダーシード!!」

バダスの声と共にバダスの右腕から無数の黒い種子状の物体が凱達に向け撃ち出された。そして――

「出でよ……ゾンダーソルジャー!!」

その叫びと同時に物体がグネグネと蠢き、人型を形成していく。そう、ゾンダーソルジャーの出現である。その数およそ50。

「……ゾオンダアアアア!!」

出現したゾンダーソルジャーは、天に向かって咆哮すると一斉に凱達目掛けて進行を始めた。

「あーらら、怒っちゃった」

「唯斗君、奴を怒らせる為に、わざとあんな事言ったね」

「……やっぱり、わかりました?」

「わかるさ。もつとも、あそこまで怒りを露にすることは思わなかったけどね」

「この前、バトラスとか名乗ってた新種が、簡単な挑発でキレたのを思い出したんです。」

奴ら、挑発に耐性がないみたいなんですよね」

「なるほど…それじゃあ、この程度の連中はさつきと片付けようか！」

「同感です!!」

唯斗のその声をきっかけに、ゾンダーソルジャーとの大乱戦が始まった。

凱達がゾンダーソルジャーの群れとバトルを開始したその頃、戦場から少し離れた地点に停車したGキャリアーの中では、正樹が戦況を見守りながら、キーボードを叩き続けていた。

2分割されたスクリーンは、戦況と同時に――

「…ずいぶん派手にやられたね。普通の人間だったら、軽く10回は死んでるよ……」

奥のベッドに横たわり、パピヨンの治療を受けているルネのダメージを映し出していた。

「まあ、今回はサイボーグである事が幸運だったかもな……ルネ」

「…うるさい」

正樹の声に反応するルネ。どうやら少し前から目覚めていたようだ。

「起きてたか…調子はどうだい？ お姫様」

「良い訳ないだろ…」

正樹の軽口にくれっ面で答えるルネ。そんな仕草に正樹は苦笑いを浮かべ―

「まあ、それだけ返せれば…大丈夫だな」

と、言うのと再びキーボードに向おうとした。だが―

「お、おいルネ！ 何する気だ!!」

ベッドから起き上がろうとするルネに仰天し、パピヨンと共に慌てて止めに入った。

「ルネ、そんな状態で何をする気ですか?」

「あいつに…借りを返すんだよ」

「借りを返すって…今のお前じゃ新種には対抗できないんだぞ。さつき解つただろう?」

「悔しいでしょうけど、今は傷を治す事が先決です」

「そんな事…関係ない」

「え?」

「あいつは…私のこの手で…倒す!!」

苦痛に顔を歪めながらも正樹とパピヨンに思いをぶつけるルネ。その言葉を聞き、暫し考え込む正樹。

「…どうしてもやるのか?」

「…ああ」

「……………わかった。パピヨンさん、鎮痛剤の投与とGSジェネレーター調整をお願いします」

意を決したかのように正樹は立ち上がり、パピヨンにルネへの投薬を頼みながら、近くに置いていたトランクを開いた。直後、真紅の輝きが室内を包む。

「これは？」

真紅の輝きの正体、メタルレッドの強化装甲に目を奪われるルネ。思わず正樹に問いかける。

「これは？」

「Gクラステクター・セイバータイプ。さつき最終調整を終えたばかりだけど、こんな事もあるかと持ってきておいた。ルネが使用する事を前提に、策敵能力と火器管制能力を重視した設計にしてる。それからこれが――」

そう言うのと正樹は作業台にかけられたカバーを一気に取り去った。姿を現す数々の武器。

「俺からのもう一つのプレゼント『ウィルスナイパー』シリーズさ」

正樹の口から紡がれる新たな武器の説明を聞きながらも、じつと自分のGクラステクター、そしてウィルスナイパーを見つめるルネ。その目は勝利を確信しているかのよう
に強く輝いていた。

一方、凱達とゾンダーソルジャーとの大乱戦は、終盤を迎えていた。

「ファイア！」

声と共にウイルブラスターを3点バーストで撃ちまくり、前方のゾンダーソルジャーを次々と倒していくルナ。

物言わぬスクラップと化したゾンダーソルジャーは、どれも額、喉笛、鳩尾の3ヶ所を寸分の狂いなく撃ち抜かれていた。

「Hit rate 100%. It is splendid」[命中率100%、お見事です]

「ありがとう、ウイルブラスター」

ウイルブラスターの言葉に笑顔で応えるルナ。その時―

「ゾオンダアアアア!!」

1体のゾンダーソルジャーが、ルナの背後から攻撃を仕掛けてきた。振り下ろされたブレードは、無防備なルナの背中を大きく斬り裂くかに思われた。

だが、そのブレードはルナを斬り裂く事はなかった。ルナは背後からの攻撃をまるで見えているかのように回避すると―

「後から攻撃してくるなんて、紳士的とは言えないわね！」

流れるような動きでロングコートに仕込んでいたクナイを抜き、投げつけた。クナイは見事なコントロールで、ゾンダーソルジャーの頭部に突き刺さり―

「Bomb♪」

ルナの声と同時に爆発。頭部を失ったゾンダーソルジャーは地面に崩れ落ちた。

「行くぜ行くぜ行くぜえー!」

そんな声と共に、ウィルブレードを振り上げ、敵集団目掛けて真正面から突撃する唯斗。

「はあああつ!!」

袈裟斬り、右薙、そして唐竹。目にも止まらぬ3連斬で、目の前にいたゾンダーソルジャー3体を一気に斬り捨てるが―

「ゾオンダアアアアア!!」

攻撃後の隙を突こうと、1体のゾンダーソルジャーが背後から襲い掛かってきた。唯斗は咄嗟にウィルブレードを逆手に持ち替え―

「甘い!」

気配を頼りに背後へ突き立てた!!

「ゾ、ンダア…」

腹部を貫かれ、オイルを血のように噴き出しながら崩れ落ちるゾンダーソルジャー。その光景に、周囲のゾンダーソルジャーは一斉にマシンガンでの攻撃に切り替えようとするが—

「させるかよ！ ウイルブレード！ バイパーフォーム!!」

「System change」[システムチェンジ]

それよりも早く、唯斗が動いた。バイパーフォームに変形したウイルブレードで放つ渾身の一撃を—

「刃龍！ はりゆう 一閃つ!!」

咆哮と共に前方の敵集団目掛けて繰り出した!! 強烈な斬撃は攻撃範囲内にある物全てを薙ぎ払い、多くのゾンダーソルジャーを一瞬で物言わぬスクラップへと変えた。

「Seven defeating. It is splendid」[7体撃破。お見事です]

「ああ、我ながら良い攻撃だった」

「My Master. There is one question」[マスター。1つ質問が]

「なんだい？」

「What is the cheer ahead?」[先程の掛け声は一体?]

「ああ、特に意味はないよ。その場のノリで言ってみただけ…カッコいいだろ？」

「I have not understood the concept yet. However, if my master is good, I think it is good then」私はまだその概念を理解できません。しかし、マスターが良いのなら、私もそれで良いと思います」

「そっか、じゃあこれからも使っていくから」

「Roger. It registers as a proper noun」了解。固有名詞として登録します」

「はあああああつ!!」

ウイルマチエツトを手に、気合いと共に突進する凱。立ち塞がるゾンダーソルジャーを次々と切り捨てていく。

「ゾオンダアアアア!!」

少し離れた場所にいたゾンダーソルジャー達は狂ったように左腕のマシガンを乱射する。だが!

「甘いー!」

凱は華麗な空中前転で弾丸の嵐をあつさりとかわし、反対方向に着地すると再び突進

した。

「ゾンダアアアア!!」

ゾンダーソルジャーもすぐさま反転し、再びマシンガンを乱射する。

「無駄だつて言ってるだろう!!」

だが、凱は声と共にウィルマチェットで自身に直撃する弾道のみを弾きながら、さらに接近。そしてゾンダーソルジャーの元へとたどり着いた瞬間!

「はあああつ!!」

袈裟切りで1体、更に返す刀でもう1体を切り倒した。そして3体目には—

「でやあつ!!」

強烈な飛び回し蹴りを叩き込んだ!!

「ゾ、ンダア……」

顔を蹴り碎かれ、無様に吹き飛ぶゾンダーソルジャー。数秒後、何かが潰れるような音と共に頭から地面へと落下し、そのまま動かなくなった。

「隊長達……ノリにノッていますね……」

凱達の猛進撃を横目に呟く仁。そこへ1体のゾンダーソルジャーが突進してきた。

「来ましたか……」

仁は両太股のホルスターに収められた自らの得物を抜き、構える仁。その得物は一對のトンファアだ。

「ウィルブレイカー、その威力…試させてもらいます」

突進してくるゾンダーソルジャーに対し、自らも突進する仁。そのスピードは凱や唯斗に劣らない。

「ゾオンダアアアア!!」

眼前に迫るゾンダーソルジャーのブレードを紙一重で避け—

「はあっ!!」

ウィルブレイカーでゾンダーソルジャーの顔面を打ち砕く。その動きには一切の無駄がない。そして—

「私のカードは、これだけではありませんよ」

そう言った刃が無造作に腕を振るうと、彼の周囲にいるゾンダーソルジャーが一体、また一体と細切れになり倒れていく。

ゾンダーソルジャーも装備しているブレードや、マシンガンで攻撃しようとするのだが—

「甘いですよ」

ブレードもマシンガンも、攻撃しようとした瞬間にはバラバラになっていた。そし

て、ゾンダーソルジャーの体に何かが巻きついた。バダスの動きを止める時に使った極細のワイヤーだ。

「これで終わりです」

次の瞬間、ゾンダーソルジャーは文字通りバラバラになり、その機能を停止した。

「なんなんだ……こいつらは……」

ゾンダーソルジャーが次々と倒されていく目の前の光景をバダスは受け入れる事が出来なかった。地球人を脆弱な存在と信じて疑わない彼にとって、凱達の強さはあまりに『異常』だったのだ。

「今の内に……逃げたほうが良さそうだ」

そう呟き、その場から背を向けるバダス。

「ああ！ 逃げる気かよ！ てめえ!!」

背後から唯斗の怒声が響くが、無視して逃走しようと飛び上がった。その時!!

ダダダン!

「ぐはっ!!」

胸部に強い衝撃を受け、バダスは地面に叩きつけられた。

「な、なんだ……今のは……」

起き上がりながら衝撃を受けた方向を睨むバダス。そこにいたのは――

「凄い威力だね……これ」

右手に持った大型ハンドガンを感じしながら見つめるルネだった。その体はGクラステクター・セイバータイプに包まれ、背後にはGキャリアーが控えている。

「死にぞこないが……何をしに来た？」

「決まってるだろ……あんたに借りを返しに来た。それだけさ」

「ククク……死に来るとはいい度胸だ。そんな鎧など粉々に破壊してやる!!」

陰湿な笑みを浮かべながらルネに突進するバダス。だが、ルネは――

「さっきの私とは……違うんだよ!!」

大型ハンドガンを瞬時に構え直し――

ダダダダダダダダダダン!

フルオートで発砲した。無数の弾丸がバダスに襲いかかる。

「馬鹿め! そんな物、我が肉体に吸収すれば良いだけの事!!」

そう言いながら自ら弾丸に突っ込んでいくバダス。だが、彼はとんでもない勘違いをしていた。ルネの持つ武器が『ただの』武器であると……

「ぐはあああああつ!!」

今度は全身に銃弾を浴び、先程以上の苦悶の叫びを上げるバダス。そこへ――

ドグオン！

先程とは異なる大口径の弾丸が襲いかかった！

「ぐほあー！」

大口径弾の直撃を受け、吹き飛ぶバダス。地面を数回転がり立ち上がったその体には、無数の弾痕が刻まれている。しかもその傷跡がいつこうに再生しない。

「な、何故だ！　なぜ再生しない…何故吸収できない…！」

全身を襲う凄まじい痛みながら声を絞り出すバダス。それに対しルネは—
「あんたつて…もしかして馬鹿？　私がわざわざ普通の武器使うと思つてたの？」

と、嘲った。

「この『ウィルスナイパー02』は、上下2つの銃口から口径の異なる2種類の弾丸を発射できる複合拳銃。もちろん、使用する弾丸はGパワーをコーティングした特製の逸品…あんたららにとつては文字通り『銀の弾丸』さ…！」

そう言うトルネは、ウィルスナイパー02を左太股のホルスターに収納すると—
「そして、こつちがウィルスナイパー01。こつちの威力も味わってもらおうよ！」

右太股のホルスターから、大型のブレードと大口径リボルバーが一体化した複合兵器『ウィルスナイパー01』を抜き、ゆつくりとバダスへと近づいていく。

「調子に乗るなよ…この下等生物があ!!！」

そんなルネの姿を余裕と受け取ったのか、怒りに表情を歪ませながら突撃するバダス。次の瞬間、強烈な一撃がルネの頭部へ振り下ろされる！だが――

ズバツ！

その腕がルネへと届く事はなかった。圧倒的なスピードで振り上げられたウィルスナイパー01のブレードが、バダスの腕を切断したのだ。

切断されたバダスの右腕が、血ならぬオイルの尾を引いて宙に飛ぶ。

「ギヤアアアアア!!」

右腕を斬り落とされた痛みにも絶叫するバダス。その隙を見逃さなかったルネは、手にしていたウィルスナイパー01の先端をバダスの腹部に押し付けた。直後――

ズババババババババババババツ!!

「みぎやあああああつ!!」

全身を焼き尽くすかのような高圧電流に、悲鳴を上げるバダス。更にルネは容赦なくウィルスナイパー01の引き金を引く。

ドグオン！ドグオン！ドグオン！

銃口から大口径弾が放たれる度に、バダスの体には風穴が開き、そこから体内の生体マシンやオイルが噴出していく。

「あ、が、ぐあ……」

声にならない声を搾り出しながら、ヨロヨロと後ずさるバダス。その姿に、数十分前まで見る事が出来た余裕は、微塵も感じられない。

そこへ、ウイルスナイパー01をホルスターに収めたルネが―

「さっきの借り…まだ返しきれてないよ!!」

強烈なボディブローをバダスに叩き込んだ。強烈な衝撃にバダスの体が『く』の字に曲がる。

「まだまだあ!!」

ルネのラツシユは止まらない。バダスの腹に、顔面に、強烈なパンチやキックを叩き込んでいく。そして―

「でやあ!!」

渾身の右ストレートをバダスに叩き込んだ!!

「グハアアアツ!!」

パンチを顔面にまともに受け、吹き飛ぶバダス。地面を転がりながらも何とか立ち上がるが―

「か、下等生物相手に、ここ…までの、ダ、ダメージを受けるとは…」

それがやつとで、もはや動く事もできない。それを見たルネは、両足のホルスターからウイルスナイパー01と02を抜き―

「くらいな!!」

引き金を引いた。

ダダダダダダダダダダ!

ドグオン!ドグオン!ドグオン!

2つの銃が同時に火を噴き、無数の弾丸がバダス目掛けて発射された。瞬く間に全身を蜂の巣にされるバダス。

「こ、こんな筈では——」

そこでバダスの言葉は途切れ、爆発四散した。ルネの完全勝利である。

「凄いですね。あれが『獅子の女王』か……」

ルネの戦いぶりを感心しながら見つめる唯斗。だが、次の瞬間――

「バダス……ゲームオーバー」

何処からともなく響く冷たい呟き。その直後。

「この声は……機界33新種、ローゼス!!」

唯斗の声に答えるように姿を現すローゼス。

「……………プログラム再構成……破壊モードに移行」

そう言つて左腕を天に掲げるローゼス。次の瞬間、空間が切り裂かれ、そこからバダスを巨大化したようなロボット。そして新種核が出現した。

新種核は残骸と化したバダスの元へと向かい、バダスの残骸を吸収した!!

「エビル…フュージョン」

ローゼスの声が冷たく響き渡り、バダスの残骸を吸収した新種核は巨大ロボットの元へ飛び、ロボットと一体化した。

「…破壊と混沌の使者よ。この地に災厄をもたらしたまえ…」

そう言いながらローゼスは空間に溶け込み、そして消えた。

凱達はローゼスが完全に姿を消したことを確認すると、すぐさま—

「来いっ！ ブレイブガオーツ!!」

「リュシフェルガオー！ ス克蘭ブル!!」

と、各自のマシンを召還した。

凱達が各自のマシンを召還してから数分後。

デイバイディングドライバーによって作られた戦闘フィールド内には、ブレイブ、ネクスト、Rの3大勇者王とバダス、そして50体近いゾンダーレギオンが降り立っていた。

「敵さんも数揃えましたね…」

バダスの周囲で無数に蠢くゾンダーレギオンを見ながら、溜息混じりに呟く唯斗。そ

こへ聞こえてくる正樹からの通信。

『それじゃあ、唯斗君と護君で雑魚の群れの対応をお願いしますよ』

「はい！」

「了解です！」

『凱は、雑魚には構わず、一直線にZ N—04に向かってくれ』

「わかった！」

『雑魚掃除が片付いたら、唯斗君達も凱の援護を頼む』

「はい！」

「よし、2人とも行くぞ!!」

凱の声をきっかけに、3体の勇者王は勇者達はゾンダーレギオンの群れ、そしてバダスへと突進した。

「ブロウクン！ ファントオームツ!!」

「反中間子砲…発射!!」

ガオガイガーRが放つ必殺の鉄拳と、ネクストガオガイガーの背面に装備された連装キャノン砲。この2つによる息もつかせぬ攻撃で、周囲に群がるゾンダーレギオンを1体、また1体とスクラップに変えていく。

胸部より射出したフアントムリングを右腕に装着すると、そのまま合体ゾンダーレギオンの懐へと飛び込み―

「ブロウクン！ フアントオームツ！！」

アツパーカットのモーションから右腕を射出した。

光輝く黄金の流星となった右腕は、攻撃の為にバリアを解除していた合体ゾンダーレギオンの顎を一瞬で打ち砕き、その巨体を宙に浮かせる。

「まだまだあー！」

ガオガイガーRの猛攻は止まらない。左腕を高速回転させ、旋風を纏うと―

「旋風強襲！！ ストーム！ トオルネエエドツ！！」

咆哮と共に、それを解き放った。

旋風は瞬時に竜巻へと変わり、合体ゾンダーレギオンを直撃。一気に上空へと運んでいく。そして、最高高度に到達した所で、唯斗が叫んだ。

「護君！ 今だ！！」

「は、はい！ 全武装展開、マルチロック！」

その声に答えてネクストガオガイガーの全武装を展開する護。そして―

「いっけえええっ！！」

次の瞬間、それらが一気に放たれた。無数の火線に全身を貫かれ、爆発する合体ゾン

ダーレギオン。

「勇者王2体がかりで相手してやったんだ。地獄で自慢しな……なんてね」

ジョークめかした唯斗の決め台詞は、先程までの凄まじい攻撃の後では薄ら寒く聞こえるのであった。

ゾンダーレギオンとの戦いが終わりを迎えた頃、バダスの戦いも終盤を迎えようとしていた。

「……………」

無言で睨み合うブレイブガオガイガーとバダス。一見、拳を交えていないようだが、ブレイブガオガイガーが無傷なのに対し、バダスは全身傷だらけである。

「シャアアアツ!!」

声をあげながら、ブレイブガオガイガーへ突進し、突きのラツシュを繰り出すバダス。そのスピードはすさまじく、2本しかないバダスの腕が10本以上に見えるほどだ。だが――

「……………」

ブレイブガオガイガーは、突きのラツシュをその場から動く事無く、両手だけを使っ

て全て捌いていく。そして――

「はあっ！」

「ぐほあ！」

カウンターで放たれたブレイブガオガイガーの鉄拳を顔面に受け、無様に吹き飛ばす。地面を転がりながらも体勢を立て直し――

「喰らえっ！」

その2つの目から反撃の怪光線を放つ。

「プロテクトオール！」

だが、その怪光線もブレイブガオガイガーの展開した防壁に阻まれ――

「はあああ……はあっ!!」

凱の気合と共に弾き返される。

「うぎやあああっ!!」

弾き返された怪光線が直撃し、再度吹き飛ばすバダス。先程からこの繰り返しだ。バダスの攻撃は全て捌かれるか、弾き返され、ダメージだけが蓄積していく。

(下等生物に、……までの屈辱を味合わされるとは……)

心の中でそう呟きながら、バダスが再度立ち上がるとそこには――

「凱さん、雑魚掃除が終わったんで、手伝いに来ました」

ガオガイガーRとネクストガオガイガーが、ブレイブガオガイガーに合流していた。
「ぬ、ぐぐぐぐ…」

顔にハッキリと焦りの色が浮かぶバダス。ブレイブガオガイガー1体でここまで苦戦していたというのに、更に2体の勇者王が加わっては、更なる苦戦は確実だ。
(な、なんとかこの場を切り抜けなければ…)

この状況を切り抜けようと、自身の頭脳を総動員するバダス。しかし—
「何考えてるか知らないけど、お前が俺達に勝つ確率なんて、西から昇った太陽が、東に沈む位ありえないんだから、潔く降伏すれば？」

唯斗が発したこの一言が、またしてもバダスから正常な判断力を奪った。

「……………許さん…」

「ん?」

「貴様らだけは…貴様らだけは…潰す…どんな手を使っても叩き潰してやる!」
憤怒の表情を浮かべ、全身からエネルギーを漲らせながら、声を荒げるバダス。そして—

「螺子1本、オイル1滴残さず…消滅させてやるうううっ!!」

天へ向けてバダスが吼えた次の瞬間、上空にESウインドウが発生した!!

「ESウインドウ!?!」

「地上で開くなんて、無茶苦茶な事しやがって！」

「あそこから…何が出てくる…」

徐々に大きさを増していくESウインドウを睨みながら、いつでも次の行動に移れるよう構える3体の勇者王。そして、ESウインドウの拡大が頂点に達したその時！

「あれは！」

「ゾンダーキャツスル…」

「マジかよ…」

ESウインドウから姿を現したのは、ゾンダーキャツスルだった。はるか外宇宙から並列空間を通り、ゆっくりと、だが確実にこちら側の空間への移動を完了していく。

「ヒヤハハハハハッ！ 見たか！ この機界城を使って、貴様らまとめて…いや、この街全てを灰に変えてやる！ そうすれば、俺の勝ちだ！ ヒヤーハッハッハッハッ！！」

狂ったように笑いながら、勝利を確信するバダス。だが――

〈…バダス〉

「ド、ドラグス…」

脳裏にその声が響いた瞬間、その笑みは凍りついた。同時に、九分九厘こちら側への移動を完了していたゾンダーキャツスルが、ビデオを巻き戻すように向こう側の空間へと帰っていく。

「ゾンダーキャツスルが…退いていく…」

突然の事態に、呆然とゾンダーキャツスルを見送る事しか出来ない凱達。同じようにバダスも―

〈バダス…ゲームのルールを破るなんて、どういふつもりだい？〉

脳裏に響くドラグスの声に、その動きを縛られていた。

「る、ルール違反なのは…ひゃ、百も承知…だが、こうしなければ、こ、この戦いには…」
 〈勝てない…そう言いたいのかい？〉

「そ、そうだ…ルール違反のペナルティは必ず受ける。だから、頼む…見逃してくれ…」
 心底怯えた表情で、脳裏に響くドラグスの声へ懇願するバダス。だが―

〈……………駄目だね〉

「ど、ドラグス!!」

ドラグスは、その懇願を一蹴した。その宣告に絶望の声を上げるバダス。次の瞬間、龍と人を組み合わせた外見の巨大ロボットが、バダスの目前に現れ―

「ルール違反は、死をもって償って貰うよ」

その声と共に突き出した右手から膨大なエネルギー波を放った。

「ど、ドラー―」

エネルギー波に飲み込まれ、文字通り一瞬で蒸発するバダス。

「な…」

「一体どうなってるの…」

「アイツも、新種って解釈で良いんです…よね?」

目の前で起きた予想外の展開に、もしかしても呆然となる凱達。すると――

「はじめまして、GGGの勇者達。僕は機界四騎士筆頭ドラグス。以後、お見知りおきを」

ドラグス自らが名乗りを上げ、気取った仕草で深々と頭を下げた。それに反応し、咄嗟に構える3体の勇者王。

「ああ、勘違いしないで。僕がここに現れたのは君達と戦う為じゃない。ルール違反をしたバダスに、ペナルティを与えに来た…ただ、それだけさ」

「ルール違反!? どういう意味だ!!」

「そのままの意味さ。僕達機界33新種は、機界昇華を行う際にあるゲームをする。その星に住む知的生命体を標的にした…この星の言い方に合わせるなら、殺人ゲームだね」

「な…」

ドラグスの言葉に絶句する凱達。それを尻目にドラグスは話し続ける。

「そのゲームを一定回数クリアした者は完全体となり、その星全体にゾンダー胞子を撃

ち込んで、機界昇華を完了する」

「ゲームの内容は、プレイヤーの裁量で自由に決められるんだけど…機界城を直接、星の地表に送り込んで、無差別攻撃する…そんなのは禁じ手にしているのさ」

「…一応聞いておく。禁じ手にしている理由は？」

「簡単だよ。面白くないからさ。そんなやり方は機界城に埋め込まれている端末にもできる。僕は進化した機界生命体だからね。単なる作業として機界昇華を行ったりしない、もつと知的かつ優雅にやりたいのさ」

「てめえ…」

ドラグスの言葉に怒り心頭といった様子の唯斗。今にもドラグス目掛けて飛び掛りそうな雰囲気だ。

「おっと、長話をしてしまったね。そろそろ消えさせてもらうよ」

そう言うが早いか、ローゼス同様空間に溶け込むようにして姿を消し始めるドラグス。次の瞬間—

「僕の順番はまだまだ先だ。楽しいゲームが出来る事を期待しているよ」

そんな言葉とバダスの新種核を残し、ドラグスは完全に消え去った。

「…機界四騎士筆頭ドラグス…底が見えない、恐ろしい奴だ…」

「……どんな奴だろうと倒すだけです…」

「唯斗さん……」

「改めて解りました……ゾンダーは絶対に倒さなくちゃいけない敵だつて事が……」

「デイバイディングフィールドに転がっていた新種核を掴み、そう呟く唯斗。そこへ浄解モードの戒道が飛来し――」

「テンペルム！ ムンドウース……インフィニ……トウーム……レディーレ!!」

「浄解の呪文を唱え、新種核を石板へと変える。こうして、予想外の展開を迎えながらも、バダスとの戦いは終わりを告げた。」

「戦闘終了後、ルネは紫苑とパピヨンの手によって半ば強制的に入院させられていた。バダスとの戦いで受けた傷が思いのほか、重症だった為だ。」

「まったく、こんな状態で戦闘に参加するなんて……正気の沙汰とは思えませんね」

「カルテに目を通してながら、半ばお説教するようにルネへ話しかける紫苑。
「だから、悪かったつて言ってるだろ……」

「そんな紫苑の話にウンザリした様子ルネ。既にこんなやり取りが15分以上続いているのだから無理もない。」

「いいえ！ 今回という今回は言わせてもらいます」

「だが、紫苑はまだまだ辞めるつもりはないようだ。ルネが長期戦を覚悟したその時――」

「ルネー」

メデイカルルームのドアが開き、残務整理を終えた正樹が駆け込んできた。少し遅れてグラナートも歩いて入室する。

「正樹さん：メデイカルルームでは静かに」

そう言いかけて、紫苑は口を閉じた。正樹に注意しても無駄だと思った事と、久しぶりであろう親子の時間を邪魔してはいけないと思ったからだ。

カルテをデスクに置き、そつとメデイカルルームを後にする紫苑。

そのまま、一息つこうと食堂へと向かうのであった。

君達に最新情報を公開しよう!!

平和な街を地獄へと変える魔弾。

それは新たな殺人ゲームの幕開けだった。

空を自在に翔る新種を迎え撃つ我らがGGG!

命を弄ぶ悪魔に正義の鉄槌を叩き込め!!

勇者王ガオガイガー | EPISODE 08 |

『飛翔』

次回もこのURLにネオ・ファイナルフュージョン承認!!

これが勝利の鍵だ!!

『ポルコート・ヌーヴォー』

勇者王ガオガイガー用語辞典

第8回 『魔法姉妹ミラクル☆ツインズ』

2010年3月に、謎の敏腕プロデューサー『木村雅月』の総指揮で某大手放送局が制作したTVアニメ。ファンの間では『ミラ☆ツイ』の愛称で呼ばれている。

『天道寺愛美（CV：田村ゆかり）』と『天道寺光姫（CV：水樹奈々）』の姉妹が正義の魔法少女に変身し、異世界から人間界征服を企む悪の大魔法帝国と戦う熱血魔法バトルアニメ。全51話。

勧善懲悪をメインに押し出しながらも、深い人間ドラマや謎解き、ギャグ等が絶妙なバランスで融合しており、放送開始直後から『燃えて笑って感動できる奇跡のアニメ』と、老若男女を問わず大ヒット。平均視聴率47.2%、最高視聴率53.2%を記録する怪物番組となった。

また、同年7月には劇場版が公開され、その年の興行成績1位を獲得。OPテーマ『奇

跡の魔法（歌：由村ゆかり&水樹奈々）』、EDテーマ『Brave Magic（歌：JAMP Project featuring 奥井雅美）』、更にはDVDやなりきり玩具、フィギュアなどの関連商品も脅威的な売り上げを記録し、社会全体に大きな経済効果をうんでいる。

2011年3月からは続編の『魔法姉妹ミラクル☆ツインズRevolution』マジカルシスターズが放送中。

— E P I S O D E — 0 8 〈 飛翔 〉

♪ザン！♪（GGGのマーク）

『ウィルスナイパー』。それは月村正樹博士が、ルネIIカーディフII獅子王隊員の為に開発した必殺武器の総称である。

現在判明しているのは、大口径リボルバーとブレード、更に高出力スタンガンを組み合わせた複合兵器『ウィルスナイパー01』と、上下2連の銃口から異なる2種類の弾丸を発射可能にした複合拳銃『ウィルスナイパー02』。

月村正樹博士が開発した『ウィルスナイパー』は全部で5つ。残る3つは未だ秘密のベールに包まれている。

残る3つが明らかになる時、再び『獅子の女王』が勝利の鍵となるのは間違いないであろう。

— E P I S O D E — 0 8

【飛翔】（タイトルコール）

ドグオン！

ドグオン！

エクセルベースの地下第三層にある射撃練習場で続けざまに響く銃声と、撃墜されるターゲットドローン。

ZN—04バダスとの戦いの後入院していたルネが4日ぶりに復帰し、射撃訓練を行っているのだ。

「次！」

ルネの声と同時に射出される新たなターゲットドローン。

ダン！

ダダダン！

それら全てをルネの新たな愛銃『ウィルスナイパー02』から放たれる5.2mm×28弾が素早く撃ち撃ち抜いていく。そして—

「ターゲットの全機撃墜を確認。訓練終了です。お疲れ様でした」

訓練評価を行っていたグラナートの声で、訓練は終了した。

「ラナ、評価はどう？」

「命中率は100%。しかし、ドローン7機に対して明らかな撃ち過ぎが認められます。

その点を差し引いて…S—マイナスですわね」

オーバーキル

「厳しいね。少しくらいオマケはない？」

「ありません。こういう事はキチンとしないと意味ありませんから…」

ルネとグラナートがそんなやり取りをしていた頃、総合重層補修艦「玄武王」の整備ブロックでは――

「なるほどね…うん、事情はわかったよ」

「何とか…ならないでしょうか？」

2日前に来日したポルコートが、正樹となにやら密談を交わしていた。

「結論から言うと…君の望みを叶える事は難しいかな。如何せん予算が足りなさ過ぎる」

「そう…ですか」

「期待に応えられなくてすまないね…でも、100%は無理でも、50%なら叶える方法があるよ」

そう言つてニヤツと不敵な笑みを浮かべる正樹。この男がこんな笑みを見せるのは、必ず何かとんでもない事を考えている時である。

「ねえ、ザイノス…蒸し返すみたいで悪いけど、バダスの件で少しいいかな？」

それから2日後。アジトとして居る大型クルーザーで、ビリヤードに熱中していたドラグスが不意に発した一言は、周囲の空気を完全に凍りつかせていた。

「あ、あの…愚か者が、ど、どうかしたか？」

ドラグスの穏やかな口調の裏に隠された物を鋭敏に感じ取り、慎重に言葉を紡ぐザイノス。なお、ステインクスとウルフェスは、ただ黙って2人を見つめている。

「うん、愚か者本人は、僕が直々に肅清した訳だけど…あれは君の配下だよな？」

「あ、ああ…」

「上司としての監督不行き届きで、君にも責任を取ってもらおうかな…」

「せ、責任を…」

「そう、例えば…ゲームの権利を剥奪するとか…ね」

「ド、ドラグス！」

ドラグスの言葉に、文字通り顔面蒼白となるザイノス。ゲームの権利剥奪、それは機界33新種にとって最大級の屈辱を意味する。困惑や焦りで全身が震えだすザイノス。

次の瞬間—

「いやだな…冗談に決まっているじゃないか」

満面の笑みと共にそう言い放つドラグス。

「じよ、冗談…」

「そう、冗談。バダスがあんな愚行に走るなんて、君も想像できなかっただろうし……君の責任を問うつもりはないよ」

「そ、そうか……ドラグス、性質の悪い冗談はやめてくれ」

そう言うのと、冷や汗を手で拭いながら退室するザイノス。その背中からは心底安堵した様子が感じ取れる。

「さっきのザイノスの顔、見せ物としてはなかなかでしたわ。でも、本当に権利が剥奪されていれば、私の出番が早まったのに……」

「大丈夫だよ。今のままで行けば、ザイノスが手持ちの駒を全て失うのは……そう先の事じゃない」

「その時は、お前に出番が回ってくるわけだ」

「そうですわね。ああ、その時が楽しみですわ」

心底待ち遠しそうに呟くステイングス。一日も早いザイノスの敗北を彼女は願わずにいられなかった。

「……ヴェスパス」

クルーザーの甲板で、一人海を見ながら呟くザイノス。すると――

「お呼びですか？ ザイノス様」

ラッパ―風の服装に身を包んだドレッドヘアの青年が、文字通り音もなく現れ、ザイノスの背後に跪いた。

「次のゲーム、お前に出てもらう」

ザイノスの言葉を、跪いたまま無言で聞いているヴェスパスという名の男。

「これ以上の敗北は許されん…必ず、ゲームをクリアするのだ」

「お任せを…我が魔弾の前に敵はありません」

軽薄そうな笑みを浮かべたまま姿を消すヴェスパス。再び、新種の殺人ゲームが始まろうとしていた。

新種の新たな殺人ゲームが始まろうとしていたその頃、エクセルベース・メインオーダールームでは—

「—と、言うわけで2週間後、ここで新生世界十大頭脳全員が一堂に会しての、地球防衛技術会議が開かれる事になった」

大河がスタッフに伝達事項を伝えていた。

「いよいよか…なんだかんだで10人全員揃うのも久しぶりだねえ。たまに会う時必ず1人か2人抜けてるし…なあ、紫苑？」

「そうですね…」

正樹の問いかけに対し、書類に目を通しながら答える紫苑。

「ちなみに、10人全員が揃うのは2年半ぶりです。あと、前回の議題は『GNプロジェクト』でしたね」

そのような状態でもキツチリと補足を加えるところは流石である。

「だが、この機会を新種が見逃す筈がない…何らかの手を打ってくる可能性は、十分にあるな…」

「十分どころか、100%打ってくるんじゃないの？俺が新種なら迷わずそうするね」

「だからこそ、警備がしやすいところが、会議場選ばれたんですよ。ここなら、大概の事態は対処できます」

「もし、この10人の内1人でも失われるような事態になれば、人類にとって計り知れない打撃となる。諸君らも最善を尽くしてほしい！」

部屋中に響く大河の声に、その場にいた誰もがしつかりと頷くのだった。

高度3000mの高空、普通なら存在する物の無い筈の空間に、その男Ⅱヴェスパスはいた。

眼下に広がる夜の繁華街。人々が一時の快楽にその身を委ねている光景を、軽薄そうな笑みを浮かべたまま見つめているが、その視線は氷のように冷え切っている。

「さあ、狩りの…開始だ」

次の瞬間、ヴェスパスは蜂と人間を掛け合わせたような異形の怪物へと姿を変え、その右腕を突き出した。

「まずは10匹…」

そう呟き、自らの右腕から細長い針のような物を超高速で撃ち出すヴェスパス。数瞬間の間をおき、1人…また1人とその針に撃ち抜かれていく。

「見たか、ローゼス。俺の腕前を」

自らが撃ち出した『針』が全て命中した事を確認したヴェスパスは、パニックと化した繁華街の一角を見つめながら、虚空に呼びかけた。すると、何も無いはずの虚空から薔薇の花弁を撒き散らし――

「……見事な物だな」

ヴェスパスの行った無差別殺人をまるで採点するかのような台詞と共にローゼスが現れた。

「ああ、この星で最初にゲームをクリアするのは俺だ！」

ローゼスの言葉にヴェスパスはそう答えると、背中の4枚の羽を飛ばたかせ飛び去った。それを見届けたローゼスも――

「GGG……最大の障害をクリアできればの話だな…」

と眩き、再び虚空へと消え去った。

「遅くなりました！」

声と共にメインオーダールームに駆け込む護と唯斗。既に主だったメンバーは集合しており、早速会議が開始される。

「今日の夜8時から9時、わずか1時間の間に計6ヶ所…60人もの市民が、新種によると思われる無差別攻撃によって殺害された。これ以上の被害は、なんとしてでも防がなくてはならない!!」

大河の言葉に続くように正樹が口を開く。

「皆、まずはこれを見てくれ」

そう言うのと正樹はキーボードを操作し、メインスクリーンの画像を切り替えた。そこに映っていた物は――

「針…ですか？」

「そう、太さ6mm、長さ5cmの超特大版だけどね…」

「なんて大きさだ…針というよりも釘、いや弾丸だな…」

凱の眩きは、その場にいる全員の思いでもあった。

「これが今回の事件の凶器だ。被害者は全員、脳天から大腿部に抜けるような形で、頭の

「真上からこれで貫かれた」

「真上から、こんな物喰らったら…即死ですよ」

「目撃者の話を集計した所、最初に風を切る音と共に、空からこれが撃ち込まれたそうだが…」

「風を切る音と共に空から撃ち込まれた…高空からの遠距離狙撃…しかも弾丸は超音速か…」

「その証言を元に、周辺を徹底的に調べた結果…上空3000mでこんな物が見つかった」

正樹の声とともに、再度切り替わる画面。全員の視線が画面に集中する。

「宇宙開発公団の気象衛星からの映像だ。偶然、Gアイランドシティ上空を通過していたおかげで撮影できた」

「…コイツが犯人か」

「ああ、この映像をギリギリまで拡大して、3Dスキャンしたのが…これだ」

画像が三度切り替わり、あのヴァスパスの姿が映し出される。

「……………今度は蜂か…」

「蜘蛛、蝙蝠、豹に蝗と来て、今度は蜂…新種は地球の生物をモチーフにでもしてるんですか？」

「さあ、その辺に關しては目下調査だ：今はこの蜂野郎に好き勝手させない事が先決だよ」

「しかし、敵が空にいる以上、有効な手段はあるのか？」

「あ、Jさんなら空を飛べるし、なんとかできるんじゃない？」

「だが、J1人に行かせる訳にもいかない：」

「それに、敵は超音速の飛び道具持ち：いくら高速で飛行できるJさんでも、超音速の攻撃を何時までも回避する事は難しいだろう？」

「そうだ！ ルナさん、ウイルブラスターのバスターフォームで撃ち落とすっていうのは？」

「ウイルブラスター、やれそう？」

「I am sorry. It is outside the effective range 「申し訳ありません。有効射程外です」

ウイルブラスターの言葉の後、沈黙に支配されるメインオーダールーム。

「正樹、何か手はないのか？」

「……………あるよ。唯斗君と同じような方法だがね」

「撃ち落とすって事ですか？ でも、ウイルブラスターでも届かないんじゃない？」

「もつと射程の長い攻撃を使えば良いって事だよ：こんな事もあるうかと、そう！ こ

んな事もあろうかと！」

若干興奮気味にキーボードを操作し、スクリーンの映像を切り替える正樹。そこには――

「アストンマーチンに…ポルコートのAIユニット!?」

1台のアストンマーチン・DBSV12とポルコートのAIユニットが映し出されていた。

「正樹、どういう事なんだ?」

「ポルコートの強い希望だ。リオン・レース獅子の女王が乗る車として相応しい力が欲しい…とね」

「ポルコート、アンタ…」

「変形機構を取り戻せれば、それが一番だったんだが…予算の都合で不可能だったからね。代わりに新しい車体を用意したわけだ。特殊装備満載のね」

「月村君、ポルコートは出撃できるのかね?」

「ええ、AIユニットを搭載して、最終調整を行えばすぐにでも…」

大河の問いに不敵な笑みと共に答える正樹。その顔は自信に満ち溢れていた。

エクセルベースで新種対策会議が行われていた頃、あるビルの屋上には――

「ヴェスパスの奴、なかなか頑張っているじゃないか」

「今のところは順調だ。このペースでいけば余裕を持ってクリアできるだろう」

ローゼスと3人の見慣れない男の姿があった。

『己の針を使って、1ヶ所につき10の獲物を撃ち殺す。これを繰り返して、制限時間内に120の獲物を仕留める』これが今回ヴェスパスが自らに課したルール」

「現時点で仕留めた獲物は60…残り半分の獲物は明日、日中に行うそうだ。人間どもに更なる恐怖を与えるためにな」

「ほう、なかなか面白い趣向だな」

「だが、GGGが動き始めているようだぞ…奴らの事だ、相応の対策を取ってくるだろうな」

「フン、そのくらいの事はヴェスパスだって承知の上だ。まあ、お手並み拝見といこうじゃないか…」

目下に広がるGアイランドシティの街並みを見ながら、口々に呟く男達。その様子は文字通り『ゲームの観客』そのものであった。

翌日、凱達は機界新種殲滅の為、Gアイランドシティに集結していた。

『正樹、俺達は準備完了だ』

「OK、ルネの方もあと数分で準備が完了する」

凱からの通信に画面を睨み、キーボードを叩きながら答える正樹。その顔は真剣そのものだ。

「さあて、リーダー起動。最大範囲で索敵開始！」

Gキヤリアーに搭載されているリーダーを起動し、周囲の索敵を開始する。

「紫苑とラナの分析が正しければ、敵は北東から来る筈だ」

そう呟きながら、昨晚の紫苑達とのやり取りを思い出す正樹。

「正樹さん、敵の行動パターンの分析が出来ました」

「見せてくれ……ああ、星形多角形の一筆書きか」

「はい、敵は最初に無差別殺人を行った地点を起点に、一筆書きで星形多角形を描くように進み、新たな無差別殺人を行っています」

「この条件を基に、敵が次に無差別殺人を行う場所を割り出しました……ここです」

「よし、敵の現れる場所が解れば、いくらでも手は打てる……あとは、敵がいつ現れるか……だな」

「恐らく、夜の間は出てこないでしょうね……」

「……その根拠は？」

「これまでに出現した新種の性格です。自分達の力に自惚れ、人間の力を軽視している。」

そんな連中が最後まで夜の闇に紛れて行動するとは、到底思えません」
「なるほどね。という事は、敵は日中に来る…か」

「紫苑の予想通り、敵はあれから来なかった…日は大分高くなった。さあ、いつ出てくる…」

「新種だ!!」

正樹の思考を打ち切ったのは、共にGキャリアーに乗り込んでいた護と戒道の叫びだった。

「来たか!」

そう言いながら、レーダーに視線を走らせた正樹は、そこに映し出された情報を確認した瞬間、マイクを掴み叫んだ。

「北東から、高度3000m、時速520kmで接近する物体を確認! 敵さんのお出ましだあ!!」

「来たか…皆、作戦開始だ!!」

そう言うが早いのか、近くに停車していたGチェイサーに飛び乗り、エンジンを起動させる凱。

Jも自慢の高速移動で道路に飛び出し、唯斗、仁、そしてルナもそれぞれのマシンに

跨る。

『皆！ 敵が放つ針を—』

「10発避けろ、でしょ？　今までの行動から考えて、敵は一度に10発までしか針を撃たない。いや、撃てない」

「故に、我々が囷となり、敵の針を全弾撃ちつくさせる。そして—」

「針を撃ち尽くした時に生まれる隙をルネが突く！　だろ？」

『そう言う事!!』

通信機越しに威勢良く響く正樹の声。凱達はその声に答えるように、Gチエイサー、Gストライカーのエンジンを目一杯吹かし、道路に飛び出した。

その頃、ヴェスパも地上の様子に気がつき—

「来たか、今日最初の獲物は貴様らだ！」

そう吼えると地上に狙いをつけ—

「死ねえ!!」

罪も無い人々を一瞬で死に追いやったあの針を射出した。

『唯斗君！　右後方!』

「ちいっ!」

通信機から響く正樹の声に反応し、咄嗟にハンドルを切る唯斗。数瞬後、ヴェスパス

の放った針が地面に着弾した。ドン！という音と共にアスファルトにめり込む針。穴の深さは軽く50cmは超えている。

「なんて威力だよ…」

つい数秒前まで自分がいた場所に開いた穴を見つめながら、呆然と呟く唯斗。こんな物が直撃したら、いかにGクラステクターに護られている自分達でも、ただではすまない。

「唯斗君、動きを止めるな！ 狙い撃ちされるぞ!!」

「はい!!」

凱の言葉に慌ててGチェイサーを走らせる唯斗。凱の言うとおり、止まっていたら格好の的である。

「残り9発…意地でも避けきってやる!」

その頃、ルネは—

「正樹、配置についたよ」

凱達のいる地点から、1km程離れた場所で準備を整えていた。

『わかった、凱達が頑張ってるから、もう少しそこで待機していてくれ』

「了解」

正樹との通信を終えたルネは、後ろを向き―

「ポルコート…今回の作戦、アンタが鍵なんだからね」

新しい車体に生まれ変わったポルコートを見つめながら呟いた。

「わかっているよ、ルネ。あんな薄汚い害虫は、サツサと地獄へ落ちてもらわないと…30mmリヴォルヴァーカノン、展開」

ポルコートの声と共に後部トランクが開き、内部に収納されていた30mmリヴォルヴァーカノンが展開され、発射体勢を整える。

徹甲焼夷弾
「API装填、仰角7度修正…目標、ロックオン…」

「頼んだよ、ポルコート…」

「遅い遅い！ 遅すぎる!!」

自慢の高速移動で、針をかわすJ。

「方向とタイミングさえ判れば！」

「かわせない攻撃じゃない！」

「針は、あと5発！」

「意地でも避けきってやる！」

各々のバイクを手足のように操り、縦横無尽に地を駆ける凱達。

正樹的的確な指示も手伝い、ウエスパスの針は1発、また1発と減っていった。
「何故だ…」

一方、ヴェスパスの顔には焦りの色が浮かんでいた

これまで幾多の星で、数え切れないほどの命を奪い続けていた。この地球でも多くの命を奪い去った。だが—

「何故だ…何故、こいつらは…こいつも簡単に俺の針を避けられる！」

今まで、百発百中を誇ってきた自分の針が悉く回避されている。しかも、今放てる針はあと1発しか残っていない。

「何故だ、何故だ、何故だあ!!」

その事実を受け入れることが出来ず、混乱に襲われるヴェスパス。だが—

「…ん?」

視線に『それ』を捉えた時、ヴェスパスの顔は邪悪な笑みに歪んだ。

「そうか、あれか…」

ヴェスパスはそう呟くと、凱達を無視し、『それ』めがけて飛翔した。

「逃げる気か! てめえ!!」

自分達と反対方向に飛び去ったウエスパスに気がつき、悪態をつく唯斗。

だが、凱は—

「あの方向…まさか！」

ヴェスパスの進行方向から何かに気づいたのか、通信機に向かって有らん限りの声を振り絞る。

「正樹！ 奴の狙いはGキャリアーだ!!」

「奴の狙いがここ!?!」

スピーカーから響く凱の声に驚きの声を上げる護。戒道も声こそ出さないものの、警戒の表情を浮かべている。

しかし、正樹は凱の声にも顔色一つ変えず—

「…あと、7秒つてところかね」

と、ヴェスパスの接近を冷静に分析していた。

一方、Gキャリアーの上空まで飛来したヴェスパスは、ゆっくりと狙いをつけると—
「これで、終わりだ」

狂気的笑みに顔を歪ませると—

「死ねえっ!!」

最後の1発を発射した。その時!

「甘いよ、ピンポイントプロテクトシールド、展開!!」

正樹の言葉と共に、針の着弾予測地点に防御空間が張り巡らされ、針を完全に防御す

る。

ピンポイントプロテクトシールド。

車体の一部分にプロテクトシールドを展開し、攻撃を防御するGキャリアーの特殊装備である。

「なっ……」

予想外の展開にそう言ったきり、言葉を失うヴェスパス。周囲への警戒も忘れ、思わず棒立ちになってしまふ。

そして、それを見逃す正樹ではない。素早くマイクを掴み、叫ぶ。

「ルネー！ 今だあ!!」

次の瞬間、風を切る音と共に背後から飛来した弾丸がヴェスパスの右肩に命中し燃焼、右腕全体を炎に包んだ。ヴェスパスが痛みを表現する間も無く、今度は胸に2発弾丸が命中する。

「あ……が……」

自分に何が起こったのか、それすら認識できないまま地表に落下していくヴェスパス。その全身が炎に包まれながら地面に叩きつけられ、数瞬後爆発した。すると――

「ヴェスパス……ゲームオーバー」

それをまるで待っていたかのように、Gキャリアーの周囲に響く冷たい眩き。そして

「…………プログラム再構成…破壊モードに移行」

左腕を天に掲げ、姿を現すローゼス。

次の瞬間、空間が切り裂かれそこからヴェスパスを巨大化したようなロボット。そして新種核が出現した。

「まずいね…」

巨大化したヴェスパスをスクリーン越しに見ながらそう呟く正樹、その顔には冷や汗が浮かんでいる。

「距離は300mつてところか…全速後た、いや、180度方向転換！ 全速でここから離脱だ！」

正樹の声と共に道路をUターンし、最高速度で走り出すGキャリアー。だが、ヴェスパスがそれを見逃す筈もなく—

「逃がすか！」

咆哮と共に右腕を突き出し、針の発射体勢に入る。だが、それは放たれる事はなかった。なぜなら—

「Gブラスター！」

そんな声と共に、連続でヴェスパスの足元に着弾する弾丸。ガイガーEX達が駆けつけたのだ。

「プラズマブローメラン!!」

間髪入れずにネオジェイダーが攻撃を放つ。プラズマをJパワーで収束し、形成されたブローメランは高速で回転しながらヴェスパスに迫り、その右脇腹を切り裂いた!

「ぐはあ!」

攻撃はまだ終わらない。

「GFシステム起動!」

今度はガイガーEXが四肢に緑の光を纏い、ヴェスパスの懐に飛び込むと――

「はあああああつ! はあつ!!」

ボディに左右の連打を、顔面に胴回し回転蹴りを叩き込んだ!

「ぎゃああつ!」

顔と腹に強烈な打撃を受け、吹き飛ぶヴェスパス。数十m先のビルに突っ込み、動かなくなる。

「いやはや、良いタイミングで現れてくれる…」

安堵の表情を浮かべながら、スクリーンを見つめる正樹。3体の勇者の勇姿に、正樹は勝利を確信していた。

「さあて…覚悟してもらおうか!!」

抜刀したガイガースラツシャーを右肩に担いだ体勢で、ヴェスパスを睨みつけるネオガイガー。その圧倒的とも言える迫力は、その場面だけを見ればどちらが悪党かわからないほどだ。

「チエツクメイト!」

そう言うが早いか、ヴェスパスに迫るネオガイガー。問答無用でガイガースラツシャーを振り下ろす!

ガキイ!

アスファルトを砕き、深々とめり込む刀身。寸前でヴェスパスは上空に退避したのだ。

「現れよ! ゾンダーレギオン!」

次の瞬間、上空のESウインドウから出現するゾンダーレギオン。その数約50体。

「やってしまえ!!」

ヴェスパスの号令の元、一斉に襲い掛かるゾンダーレギオン。だが—

「プラズマブローメラン!!」

ネオジェイダーが気合と共に放ったプラズマブローメランが、目の前の5、6体を一気

に薙ぎ払い―

「はあああつ!!」

両腕に装備された鉤爪『ガイガーフアング』を展開したガイガーEXが、向かってくるゾンダーレギオンを次々と殴り飛ばす。そして―

「でえええいつ!!」

気合と共にゾンダーレギオンを斬り捨てるネオガイガー。50体のネオゾンダーロボは瞬く間に物言わぬスクラップへと変わり、道路に山積みとなっていく。

「悪いんだけどさあ…俺達倒したかったら、桁2つくらい増やしてこいよ!!」

地面に倒れたゾンダーレギオンの頭を容赦なく踏み潰し、啖呵を切るネオガイガー。その迫力にヴェスパスは―

「ゾ、ゾンダーレギオン!!」

慌てて、ゾンダーレギオンの増援、約200体を呼び出し、その全てを一斉に嚇けると―

「後は任せただぞ!」

自分は一目散に逃走した。すぐに追いかけてやうとするガイガーEX達だが、ゾンダーレギオン達が立ち塞がる。その時!

「反中間子砲!!」

ネオジエイダーの両足から放たれた幾筋もの光線が、一気にゾンダーレギオンを吹き飛ばす。

「よし、凱！ 唯斗！ お前達は奴を追え！」

「J!?!」

「こいつらは所詮鳥合の衆！ 私一人で十分だ！」

そう言うが早いか、両腕からメガプラスマソードを展開し、ゾンダーレギオンに切りかかるネオジエイダー。瞬時に5体のゾンダーレギオンが斬り捨てられる。

「わかった…唯斗君。奴を追うぞ！」

「はい！」

唯斗の声と同時に2体は飛び立った。ヴェスパスを追う為に…。

「とりあえずは、ここまで来れば大丈夫かな…」

戦闘区域から離脱したGキヤリアーの中で、正樹は安堵の溜息をついた。それとほぼ同時にVギアレオンが飛来する。

「じゃあ、行つてきます！」

「頑張れよ！」

「はい！」

正樹のサムズアップに答え、ギャレオンの元へ走りだす護。
「フュージョン!!」

直後、護と一体化し、変形を開始するVギャレオン。

「V! ガイ! ガー!!」

変形完了と同時にVガイガーは飛び立った。ネオガイガー達と合流するために。

その頃、ガイガーEXとネオガイガーは湾岸地帯の上空でヴェスパスに追いついていた。

「おのれ、勇者どもー!」

高速で飛行しながら、ネオガイガーへ右腕を向け、針を発射するヴェスパス。

「おっと!」

だが、高い機動性を誇るネオガイガーはそれを回避すると――

「おらおらおらあ!」

両腕をヴェスパスに向けグレネードを連射した。4発のグレネードが次々とヴェスパスに着弾し、その体を炎で彩る。

「はあああつ!」

同時に、ガイガーEXがウルテクドライブを最大出力にして、一気に高空へ舞い上が

りー

「はあっ！」

落下の勢いをプラスして威力を増した蹴りをヴェスパスの顔面に叩き込んだ！

「ぐはあ!!」

口から生えた牙や鼻を無残に碎かれ、地表へ落下していくヴェスパス。

「凱兄ちゃん！ 唯斗さん！」

そこへVガイガーが戦列に加わった。3体は右手を掲げー

「EX！」

「ネクスト！」

「ネオ！」

「「ガオーマシン!!」」

更なる姿に変わる為、ガオーマシンを召還した。

「長官！ ガイガーEX、Vガイガー、ネオガイガーから要請シグナルです！」

「うむっ！ ファイナル！ ネクスト！ ネオファイナルフュージョン、承認ッ!!」

「了解！ ファイナルフュージョン！」

「NEXT FUSION！」

「ネオファイナルフュージョン…」

「「プログラムドライブツ!!」」

大河の承認とほとんど同時に、命とスワンの拳、そしてグラナートの手にしたハンマーが、それぞれのセーフティーカバーを叩き割る。

「ファイナル!」

「ネクスト!」

「ネオ! ファイナル!」

「「フュージョオオオオオン!!」」

ガイガーEX、Vガイガー、そしてネオガイガーがそれぞれ発した電磁竜巻に全10機のガオーマシンが突入する。その時!!

「合体などさせるかあ!!」

倒れていたヴェスパスが起き上がり、左腕から小型の針を弾幕のように連射した。それによりライナーガオーEX、ネオステルスガオー、ネオライナーガオーが撃墜されてしまう。

「「しまった!!」」

「ファイナルフュージョンが…」

「妨害された…」

予想だにしない事態に騒然となるメインオーダールーム。だが、そんな中でも大河は冷静だった。

「攻撃を受けたガオーマシンの被害状況は！」

的確に指示を下し、今最も必要な情報を問う。しかし、その答えは決して良いものはなかった。

「ライナーガオーEX、ネオステルスガオー共に損傷率25%オーバー！ ネオライナーガオーの損傷率は…30%を超えています！」

「いかん！ そんな状態では、とても再合体などできん！ 合体の衝撃でバラバラになっってしまうぞ!!」

「くつ、ネオジエイダーは！」

「現在、ゾンダーレギオンの大群と交戦中！ 膠着状態で、暫くは身動きが取れません!!」

決して良いとはいえない戦況に、顔を歪ませる大河。

一方、正樹は—

「合体妨害とは…タブーを犯すな!!」

スクリーン越しに繰り広げられる光景に思わず声を荒げていた。だが、すぐに落ち着きを取り戻し、マイクを掴む。

「凱! 唯斗君! ガオーマシンのダメージはかなりのものだ。残念だが、そのまままで戦ってくれ!」

「だ、そうです」

通信機から響く正樹の声に、思わず凱の方を向いてしまう唯斗。

「仕方ない…いくぞ! 唯斗君!!」

「は、はい!!」

その瞬間、ガイガーEXとネオガイガーはウルテクドライブの出力を上げ、宙に舞った。そして、攻撃を受けていない残りのガオーマシンを呼ぶ。

「ステルスガオー! ドリルガオー!」

ガイガーEXは背面にステルスガオー、両腕にドリルガオーを装着し、『ガイガーEX・ステルスガオー・ドリルガオー同時装着モード』に――

「来い! ネオステルスガオー!!」

ネオガイガーは、背面にネオステルスガオーを装着し、『ネオガイガー・ステルスガ

オー装着モード』になるとー

「でやあああつー！」

まず、ガイガーEXが両腕に装備したドリルを構え、ヴェスパスに突撃した。超高速回転する2本のドリルがヴェスパスに迫る。

「馬鹿め、そんな物が通じるか！」

だが、通常のゾンダーバリアなら、やすやすと貫くドリルが、バリアに阻まれて空転する。

「ぬうううッ……！」

バリアを貫こうとスラスターの出力を最大にするが、バリアはびくともしない。その時ー

「凱兄ちゃん！ 離れて!!」

声と共にネクストガオガイガーが、背面部に装備された反中間子砲を連射した。

「無駄だー！」

その全てはバリアに防がれてしまったものの、疲弊させるには十分だった。

「くらええつー！」

間髪いれずネオガイガーが、最高速でヴェスパスの懐に飛び込みー

「はあああつー！」

加速の勢いで威力を増したガイガースラッシャーを叩き込んだ！

「ぬおおおっ！」

強烈な斬撃に疲弊したバリアを一気に突破され、海面に落下していくヴェスパス。巨大な水柱が上がり、波紋が現れる。

「やったか…」

警戒しながら、強烈な斬撃を受けたが沈んだ海面を見つめる3体。だが、次の瞬間――
「無駄だ！　無駄だ!!」

海面から姿を現したヴェスパスからは、殆どダメージが感じられなかった。

「くそつ、ウエイトの差がありすぎるか…」

「貴様らの力など、所詮はその程度！　俺の切り札で、とつとあの世へいけ!!」

その言葉と共に全身に力を含めるヴェスパス。すると、その全身からワゴン車サイズの巨大雀蜂が十数匹飛び出し、ヴェスパスの周囲を飛び始める。

「いけ！　我が僕どもよ！」

主の声に従い、勇者達へ向けて突撃する巨大雀蜂。

「ちいっ！」

すぐさま頭部の『17.5mmCIWS』で弾幕を張るネオガイガー。ガイガーEXもそれに続く。

しかし、数匹が撃墜されたものの、殆どの巨大雀蜂は弾幕を掻い潜り、ガイガーEXとネオガイガーを包囲すると、一斉に針を発射した。

全方位からの一斉攻撃。高い機動性を誇るガイガーEX達といえども回避することは出来ず、全身に針の嵐を受けてしまう。

「うわあああああつ！」

大きなダメージを受け、海面へ落下していくガイガーEXとネオガイガー。

「凱兄ちゃん！ 唯斗さん！」

「次は貴様だ！」

そう言いながら、ゆつくりと両腕をネクストガイガーに向けるヴェスパス。巨大雀蜂もネクストガイガーを取り囲む。

「くっ……」

「死ね……ラティオ!!」

だが、ヴェスパスの針が放たれる事はなかった。地上から放たれた攻撃が、巨大雀蜂を次々と撃ち落とし始めたのだ。

「な、何だと！」

思いもよらぬ事態に、慌てて地上へ視線を走らせるヴェスパス。そこには――

「私達がいるって事、忘れてもらっちゃ困るね！」

ルネを乗せたポルコート、そしてGストラライカーを駆るルナの姿が！

「おのれ！ ふざけた事を!!」

怒りの形相で、生き残った巨大雀蜂全てを地上へ差し向けるヴェスパス。

「こいつらはこつちで引き受ける!」

「護君は、新種をお願い!」

そう言い残し、それぞれのマシンを発進させる2人。市街地を舞台に高速バトルが始まった。

5匹の巨大雀蜂から次々と放たれる針を、滑るような動きで回避し続けるポルコート。

「残っていた蜂は9匹。敵は戦力を大体半分に分けたようだね」

「もう少し多く来ると思ったんだけどね。コイツらをさっさと片付けて、あいつの援護に向かうよ!」

「おやおや、随分と彼女の事を気にかけてるんだね」

「そりゃあ、あいつは…って、無駄口叩いてないでさっさと攻撃!」

「了解!」

その声と共に車体を180度回転させるポルコート。同時にボンネットの両端か

ら2丁のショットガンが迫り出す。

「これを受けていただく!」

次の瞬間、連続で火を噴くショットガン。無数の散弾が先頭を飛んでいた巨大雀蜂の頭部へ浴びせられ、その動きを乱し、鈍らせる。それにより後方を飛んでいた他の雀蜂の動きも乱れていく。

「もらった!」

好機到来。ポルコートは、ルーフ内に収納されていた5連装ロケットランチャーを展開し—

「墜ちろ!」

30mmリヴォオルバーカノンと共に発射した。30mmAP徹甲焼夷I弾と小型ロケット弾が次々と巨大雀蜂を撃墜していく。

「敵機全ての撃墜を確認。さあ、彼女の援護に行こうか」

「ああ、急ぐよ!」

残骸と化した巨大雀蜂を尻目に走り出すポルコート。最高速度であいつ〓ルナの援護に向かったのだが…。

「これで終わりよ、ファイア!」

ポルコートが現場に到着した時には、ルナは既に最後の巨大雀蜂を撃墜していた。

「もう片付けちゃってみたいだね…心配して損したよ」

「そんな事ありません。来てくれて嬉しいです」

「Thank you coming for relief」[救援に来てくださり、感謝します]」

「…：フン、お喋りは後だ。戦いはまだ終わってないんだからね」

ルナとウィルブラスターからの感謝の言葉にそっけなく答え、ポルコートに乗り込むルネ。

「すまないね。ルネは素直じゃないから…お礼を言われて照れてるんだよ」

すかさず、ポルコートがフォローを入れるが―

ガンツ！

「バカ！ 余計な事言うな！」

返ってきたのはルネの蹴りだった…。

その頃、ネクストガオガイガーは海上を舞台に、ヴェスパスと壮絶な射撃戦を繰り広げていた。

「落ちろお！」

ヴェスパスの左腕から矢継ぎ早に放たれる針を―

「反中間子砲!」

背面部から放たれる反中間子ビームで全て撃墜するネクストガオガイガー。

「マイクロミサイル、発射!」

そのまま、両脚のミサイルポッドから無数のマイクロミサイルを放つ。複雑な軌道を描き、ヴェスパスへ襲いかかるマイクロミサイル。

「そんな物!」

だが、ヴェスパスは両目から破壊光線を放ち、マイクロミサイルを一気になぎ払う。

戦いは互いに決め手を見出せないまま、膠着状態に陥っていた。そんな中—

「…俺の勝ちだ」

突然、ヴェスパスがそう呟き、力を込め始めた。

「エネルギーの充填は完了した! 今一度我が切り札を使う時が来たのだ!」

「くっ…」

「さあ、地獄へ行けえ!」

完全に勝利を確信し、狂気的笑みを浮かべるヴェスパス。その時!

「俺達を忘れちゃいませんか…? ってえの!」

そんな声と共に2つの影が海上へ飛び出した。ガイガーEXとネオガイガーだ。

「うおおおおおっ!」

直後、咆哮と共に全てのスラスターを全開にして、ヴェスパスにぶつかるネオガイガー。そのまま両手に持ったGブラスタターの銃口をヴェスパスの腹に押し付け――

「この距離ならバリアは意味ないな！ 全弾持つてけえ！」

零距离射撃で2丁のGブラスター、そして両腕のグレネードランチャーを一斉発射した！

「げぼあー！」

腹に幾つもの風穴を開けられ、口から吐瀉物代わりのオイルを吐きながら悶絶するヴェスパス。更にネオガイガーが攻撃している間に高空へ舞い上がったガイガーEXが――

「はあつー！」

落下の勢いをプラスして威力を増した蹴りをヴェスパスの顔面に叩き込んだ！

「ぐはあ!!」

口から生えた牙や鼻を無残に碎かれ、地表へ落下していくヴェスパス。

「つしやあ！ さっきのダメージ、利子つけて返させてもらったぜ！」

無様に墜落していくヴェスパスを見ながら、咆哮をあげるネオガイガー。

「凱兄ちゃん！ 唯斗さん！」

「見事な演技だったぜ、護！」

「ホントホント、ハリウッド俳優も真っ青」

「ど、どういうことだ…」

己の耳を疑いつつも、腹部と顔面に負った傷を再生させていくヴェスパス。

「お前にやられたままつてのが癪に障ったんでな。やられたフリして、隙を窺ってたのや」

「な…」

「護にも協力してもらってな」

「な、な…ふ、ふざけるなあ！」

怒声をあげながら、ネクストガオガイガー達へ突進するヴェスパス。その表情は怒りに満ち溢れ、もはや正常な判断が出来ているとは言い難い。当然、その突進はあっさりと回避され—

「でやあああああつ!!」

逆にガイガーEXとネオガイガーのダブルキックを背中にくらってしまふ。

「護、とどめは任せた！」

「あの野郎をボッコボコにしてくれ！」

「はい！ ドリルクラッシュャー、セットアップ！」

その声と共に両手首を反転させ、収納されていたドリルを装備するネクストガオガイ

ガー。ゆつくりと構えを取り―

「ダブル！ブロウクンスパイラル！」

両腕を射出した。ドリルによって威力を増した2つの鉄拳が、一直線にヴェスパスへと迫る。

「なめるあつ！」

迫り来る鉄拳を撃ち落そうと、狂ったように針を放つヴェスパス。だが、その針も接触した途端全てが砕け散り―

「ツインメーザーキャノン！」

逆に両前腕部の砲塔から放たれるメーザーに全身を焼かれていく。一瞬の間を置いてヴェスパスの腹部に激突する2つの鉄拳。高速回転する2つのドリルが容赦無く腹部を抉り、貫通する。

「うぎやあああああつ!!」

腹に2つの大穴を開けられ、最大級の悲鳴をあげるヴェスパス。その隙に両前腕部を再接続したネクストガオガイガーは―

「反中間子砲！ ツインメーザーキャノン！ マイクロミサイルポッド！ パルスレーザー！―」

全身に装備された火器を次々と起動。

「ロックオン完了！ フル！ブラアアストツ！」

ロックオン完了と同時に一斉発射した！ 無数の火線がヴェスパスに襲いかかる。数秒後、断末魔さえ残せぬまま、新種核だけを残し爆発するヴェスパス。

「ZN—05の消滅を確認！」

「ネオジェイダーから入電。全ゾンダーレギオンの殲滅、完了したそうです」

「戒道君が、新種核の浄解に入りました！」

「一時はどうなるかと思っただが…とりあえずは一安心か」

命達の報告を聞きながら、椅子に座り呟く大河。その言葉にメインオーダールームにいた誰もが頷いた直後、異常を告げるサイレンがけたたましく鳴り響く。

「何事だ！」

「Gアイランドシテイ郊外に空間異常を感知！」

命の声と共にスクリーンに現場の光景が映し出される。

「なんじゃ、あの黒い穴は！」

「ESウインドウか？」

「いえ、それとはまったく異なる物のようです。強いて言うなら…空間の裂け目？」

猛烈なスピードでキーボードを操作しながら、大河の問いを否定する紫苑。

異常事態は凱達も察知していた。

「正樹！ あの黒い穴は一体？」

『わからん！ 如何せん判断材料が少なすぎる…：現段階では、紫苑の言うとおり空間の裂け目としか言いようがない』

「空間の裂け目…まさか、何か出てくるとか？」

「唯斗君、不吉な予想はやめてくれ」

「…すいません」

そんな会話を交わしながら、視線の先にある黒い穴を見つめる凱達。

これが新たな戦いと出会いの始まりとなる事を、この時はまだ誰も知らずにいた…。

君達に最新情報を公開しよう!!

突如発生した時空の裂け目をきっかけに始まる新たな戦い。

そして、新たな仲間との出会いと別れ。

これは、本来決して交わる筈のない2つの世界が交わる事で生まれた『if』の物語。
今、限界を超えた極限バトルの幕が開ける。

勇者王ガオガイガーR公式外伝

ドラえもん 新・のび太と鉄人兵団 くはばたけ 天使たちくAnotherSto

ry

—EPISODE 8. 2—

『異世界からの迷い人』

次回もこのURLにネオ・ファイナルフュージョン承認!!

これが勝利の鍵だ!!

『タイムふろしき』

勇者王ガオガイガーR用語辞典

第9回『シークレットエレベーター』

エクセルベースとGアイランドシティを繋ぐ為、シティ各所に合計8基設置されたシークレットエレベーター。

外見は普通の電話ボックスであり、10桁の秘密コードを入力する事でシークレットエレベーターとしての機能を発揮する。

なお、平時は通常の公衆電話として使用可能。

公式外伝

—EPISODE—8. 2 ～異世界からの迷い人～

♪ザン！♪（GGGのマーク）

全ての始まりは、のび太が偶然北極で発見し、自宅に持ち帰った『青いボール』と『巨大ロボットの足』だった。

それ以来、『青いボール』の発する信号に引き寄せられるように、家の庭へ次々と降ってくるロボットの部品を、秘密道具『逆世界入りこみオイル』で作った鏡の世界『鏡面世界』でドラえもんと一緒に立てるのび太。

やがて、完成したロボットに『ザンダクロス』と名付け、鏡面世界でロボットの操縦を楽しむのび太、ドラえもん、静香の3人だったが、ザンダクロスに恐るべき兵器が組み込まれていると判明した事で、事態は一変する。

安全の為、ザンダクロスを鏡面世界に隠し、その存在を秘密にする事を誓う3人だったが、ロボットの持ち主を名乗る謎の少女リルルに出会ったのび太は、うっかり口を滑らせてしまう。

リルルの言う『ロボットの頭脳』を無くしてしまった負い目もあり、彼女を鏡面世界

へ案内してしまうのび太。だが、リルルはロボットの惑星メカトピアから、地球侵略の尖兵として送り込まれたスパイだった。

鏡面世界での逃走劇の末、現実世界への出入り口である『おざしき釣り堀』が吹き飛び、これでメカトピアの作戦も失敗に終わった。そう安堵したのも束の間、母親の手で物置に投げ込まれていた『青いボール』ロボットの頭脳』から、既に地球侵略軍団全軍がメカトピアを出発している事を知らされる。決戦を覚悟し、戦いに備えるドラえもん達。

秘密道具『おはなしボックス』でひよこ型ロボット『ピツポ（ジユド）』へと生まれ変わったロボットの頭脳も、紆余曲折の末のび太と友情を育み、共に戦う事を決意する。

そして、おざしき釣り堀が吹き飛んだ時の大爆発で重傷を負ったリルルもまた、静香の献身的な介護とピツポ（ジユド）の説得。そしてメカトピアの歴史が人間の歴史をそのまま繰り返している事を知った事で、頑なだったその心を徐々に変化させていく。

ドラえもん達は、地球侵攻を始めた鉄人兵団をトリックを用いて鏡面世界へと誘導。秘密道具を駆使して圧倒的な兵力差をカバーしつつ、無人の街を舞台に奮闘した。

だが、ついにトリックが暴かれ、鉄人兵団は現実世界への出入り口である湖へと向かい始めた。

ドラえもん達は鉄人兵団の侵攻を阻止すべく、鏡面世界への出入り口を利用した湖で

最後の決戦を挑もうとしていた。

—EPISODE—8. 2

【異世界からの迷い人】（タイトルコール）

大量に設置した『改良型山びこ山』。そしてピツポの操るザンダクロスの投入で、鉄人兵団の攻撃を一度は凌いだドラえもん達。

数時間後に始まるであろう2度目の攻撃に備え、ドラえもん、のび太、ジャイアン、スネ夫、ピツポの5人は『壁紙秘密基地』の中で短い休息を取っていた。

「……………」

一言も喋らず、敵の総攻撃を待つ5人。ただスネ夫だけが、落ち着かない様子で部屋の中をウロウロと歩き回っている。

「落ち着けよ、スネ夫！」

そんな彼の様子に堪りかね、声を荒げるジャイアン。だが—

「落ち着いていられる!? こんな時に! もうすぐ鉄人兵団の総攻撃があるってのに。しかも結果が見えてるのに!」

半ばパニック状態のスネ夫は、黙るどころか声を張り上げて反論する。その勢いは流

石のジャイアンも圧倒されるほどだ。その時、のび太がポツリと呟いた。

「わかる！ こんな気持ち、何度か経験したからね。0点しか取れないの解つててテストを受ける時の気持ちだよ」

何とも言えないのび太の表現に啞然となる4人。だが、ドラえもんが勇気を振り絞るように叫ぶ。

「余計なこと考えずに全力を尽くすんだ！ 思いがけない道が開けることもある!!」

数時間後、湖へと進軍する何万もの鉄人兵団に立ち塞がるのび太達。そこには共に戦う事を決意した静香。そして、なんとか同胞達を説得したいと訴えたりルルの姿もある。彼らの後ろには、ピッポが乗り込んだザンダクロスが控えている。

「お前達だけか!? 我々鉄人兵団を相手に、ここまではよく戦つたと褒めてやろう! だが、戦争ごっこもこれで終わりだ! 即刻地獄へ送つてやろう!」

木々が焼き払われ、荒野と化した森に響く鉄人兵団総司令官の声。

「司令官! これ以上の戦いは無意味です! お願いです、地球攻撃を中止してください!」

その非情な声に顔を歪ませながら、説得を試みるリルル。だが――

「リルル! そしてジユド! メカトピアを裏切り、人間に味方する愚か者どもめ!

貴様らも即刻スクラップだ！」

その説得は、司令官の声に一蹴されてしまう。

「リルル…」

「君はよくやったよ…もう、戦うしかない」

「全軍、進め！」

司令官の号令で、前進を開始する無数のロボット兵。

「皆…狙え！」

ドラえもん達も一齐に武器を構え、狙いをつける。その時！

雲ひとつない晴天だった空が、分厚い黒雲に覆われた。幾筋もの稲妻が走り、同時に凄まじい暴風が吹き荒れる。

「うわっ!？」

「なんだ、この暴風は!？」

その場にいる全員の驚きをよそに、暴風は更に吹き荒れる。そして思いも寄らぬ出来事が起こった。

「な、何!?! あの穴!?!」

突然、空に黒い穴が開いた。分厚い黒雲を背景にどんどん巨大化していく穴。そして

「うわっ!？」

「す、吸い込まれる!？」

その穴は、周囲の物を手当たり次第に吸い込み始めた。次々とロボット兵達が吸い込まれていく。やがて――

「きやあああっ!？」

「うわあああっ!？」

「しずかちゃん! スネ夫! リルル!」

静香とスネ夫、そしてリルルが――

「うおおおっ!」

「ドラえもおおんっ!」

「ジャイアン! のび太君! ピツポ!」

ジャイアンとのび太、そしてザンダクロスが穴に吸い込まれていく。

「ふんぬぐぐぐぐぐ…」

ドラえもんは必死に踏ん張り、足下の草を掴みながら、なんとかその場に留まろうとしたが――

「う、うわっ!？」

穴の吸引力は凄まじく、ついに猛烈な速度で吸い込まれ始めた。

「そ、そうか！…これは—」

完全に吸い込まれる直前、何かに気が付くドラえもん。しかし、その言葉を最後まで紡ぐ事も出来ないまま、穴に吸い込まれてしまう。

やがて吸引力を徐々に弱め、消滅する黒い穴。あとには何事もなかったように静まり返った湖だけが残されていた。

「穴が発生してから15分。拡大も止まったし…これからどうなるのやら…」

そう呟きながら、スクリーンに映し出された黒い穴を見つめる正樹。

ZN-05ヴェスパスを撃破した直後、何の前触れもなくGアイランドシティ郊外の上空に現れた黒い穴は、その直径を50mまで拡げた以外、何の変化も起こさず不気味な沈黙を守っていた。

「唯斗君じゃないけど、ホントに何か出てきたりして…まさかねえ」

自らの言葉に苦笑しながら、ペットボトルのミネラルウォーターに口をつけようとす
る正樹。その直後、Gキャリアーのセンサーが何かを察知した。

「い、いきなりか！」

突然鳴り響くサイレンに水を噴出しそうになりながらも、キーボードを操作する正
樹。数秒後—

「唯斗君の予測が的中！ 穴から何か出てくるよ！」

マイクを引つ掴み、導き出された情報を叫ぶ。

「いったい何が出てくるんだ…」

「もしかして、新しい…敵？」

「護！ 唯斗君！ 来るぞ！」

正樹の声に三者三様の反応を示す凱達。直後、穴から飛び出してくる6つの影。

「あれは!？」

「わからん、とにかく行ってみよう！」

凱のその声で一斉に飛び出すガイガーEX、ネオガイガー、ネクストガオガイガー。

「うわあああつ!!」

静かな雑木林に響き渡る絶叫。それと共に、空から青い物体が落下した。

「うう…痛たた…」

地面にぶつけた尻を擦りながら立ち上がる青い物体。ドラえもん。結構な高さから落ちた筈だが、途中生い茂っていた木の枝がクッションになった事と、地面が柔らかい土壌だった事が幸いして、お尻を少しぶつけた以外に怪我らしい怪我はしていない。

「まったく…あんな物に吸い込まれたと思つたら、こんな所に落ちるなんて…：…そうだが、皆は！」

慌てて周囲を探し始めるドラえもん。幸い、全員が近くに落ちていたようで5分もかからずに見つける事が出来た。

「よかった、皆無事みたいだね」

「うん、何とかね…でも、ここはどこなんだろう？ 学校の裏山によく似てる感じだから、外国の山の中とかじゃないみたいだけど…」

「そもそも、あのブラックホールみたいなのは何だったのさ？ あんなのに飲み込まれて、ただ別の場所に飛ばされたなんて事は…絶対に無い筈だね」

「俺達と一緒に吸い込まれた鉄人兵団だつてどうなったのか、わかんないぜ。あれに吸い込まれたつて事は、きつと俺達みたいに出てくる筈だ。街のど真ん中にも現れたら…」

「ジルドもないみたい…どこか別の場所に飛ばされてしまったのかしら…：…」

「とにかく、この雑木林を抜けてみよう。何か解るかもしれない」

口々に疑問や不安を口にするのび太達にそう告げて、歩き出そうとするドラえもん。その時—

「待つて、何か近づいてくる…」

リルルの優れた聴覚が、こちらに近づいてくる何かを察知した。

「何かって、何？」

「解らない…でも、空を飛んでる…向こうから」

「行ってみよう！」

リルルの指さした方向に走り出すドラえもん達。すぐに雑木林を抜け、開けた場所に出た。そこには、今にも着地しようとしている3体の巨大ロボットの姿。

「え…ガイガーEX？」

「ネオガイガーに…」

「ネクストガオガイガー…」

着地したロボットを確認した途端、言葉を失うドラえもん達。それはロボットのパイロット達も同じだった。自分達を見つけた者達を見た途端――

「あ、あれは…」

「そんな…」

「ま、まさか…」

それぞれがコクピット内で驚愕の表情を浮かべ――

「……………ええええええっ?!……………」

驚きの声を同時に上げるのだった。

「サイン…ですか？」

「そう、お願いできるかな？ あ、あと『長瀬唯斗さんへ』って付けてくれると嬉しいんだけど」

「唯斗君、ここは年長者が先だよ。『月村正樹さんへ』って付けてサインを貰えるかな？」
ドラえもんへ駆け寄り、サインを求める正樹と唯斗。その目は、憧れの芸能人に出会ったフアンの様にキラキラと輝いている。

「サインなんて、やった事ないんですけど…こんな感じで良いですか？」

そんな2人に戸惑いながらも、差し出された色紙にサラサラと自分の名前を書くドラえもん。

「ありがとう！ 家宝にするよ！」

「俺は今、猛烈に感動している！」

「凱兄ちゃん、この前からなんとなく思ってたんだけど…正樹さんと唯斗さんって…」

「ああ、2人とも重度のアニメ&特撮オタクだ」

「やっぱり…」

「だが、目の前にいるのはあのドラえもんだ。護も何だかんだ言って、写真の1枚くらい撮りたいんじゃないのか？」

「それは…うん」

サインを受け取り、飛び上がらんばかりに喜ぶ2人を複雑な表情で見つめながら、その声を交わす凱と護。その視線に気がついたのか――

「…コホン」

落ち着きを取り戻し、恥ずかしそうに咳払いをする正樹と唯斗。

「さて、ここからは真面目な話だ…何となく解っているとは思うけど、この世界はドラえもん君達がいいた世界とは別の世界…極めて近く、限りなく遠い世界とでも言えば良いかな？」

「極めて近く、限りなく遠い…それって、パラレルワールドって事ですか？」

「唯斗君、ご名答」

「ドラえもん、パラレルワールドって…」

「以前、もしもボックスで『魔法の世界』を実現させたことがあったよね？ あんな風な

『もしもの世界』って言えば良いかな」

「そう、俺達のいるこの世界から見れば、ドラえもん君達が本来いる世界は『ドラえもん』が実在する、もしもの世界』って事になり」

「僕達の元いた世界から見れば、この世界は『勇者王が実在する、もしもの世界』って事になるんですね」

「そういう事。ちなみに、互いを認知しているという事は、お互いの世界でも相手が何かしらの形で存在している…という事なんだけど…」

「はい、僕達の世界では勇者王…ガオガイガーは、人気アニメのキャラクターなんです」「何ですと!？」

「俺達が、アニメのキャラクター…」

「ちよつと待つてください…えつと…あつた!」

四次元ポケットの中に手をつ突つ込み、何かを取り出すドラえもん。それは1冊のパンフレットだった。

「…これは?」

「去年の冬に公開された、劇場版のパンフレットです」

「げ、劇場版!? ちよ、ちよつと見せてくれ!」

ドラえもんからパンフレットを受け取るや否や、早速目を通し始める正樹。唯斗や護も横から覗き込む。

「E1-02の出現から、E1-01との決戦までを劇場用に再編集した今作は—」

「これ凱さんですね。すごいな…そつくりだ」

「うわあ、僕…なんか格好良く描かれすぎだよ…」

たちまちパンフレットに夢中になる3人だが—

「…3人とも、夢中になるのは後にしようか」

「「ツ!!」」

凱的的確なツツコミに正気を取り戻し、会話が再開される。

「失礼、見苦しいところを見せたね」

「いえ…それでこの世界では、僕達はどういう…」

「一言で言えば、君達の世界での俺達と同じだ。ただし、頭に『国民的』という単語がつけどね」

「国民的アニメ…ですか？」

「そう、現在までに作られた劇場版は40近く、世界中で翻訳版のアニメが放送され、世界で最も知られている日本のアニメ…と言っても過言じゃない」

「うわあ…」

正樹の説明に驚きを隠せないドラえもん達。この世界では自分達の存在がとてつもなく大きな物。そう言われたのだから無理もない。

そんなドラえもん達を見ながらJは――

「よく解らんが…あの青いロボットと子ども達は、そんなに凄い連中なのか？」

「ああ、半端じゃなく凄い奴らだよ」

「何しろ、地球の危機を何度も救った子ども達ですからね」

ルネやルナと会話を交わし、戒道は—

「サイン…欲しいな」

そう、静かに呟いていた。

「しかし、ドラえもん君達はどうしてこの世界に？ 自分の意思で来た訳ではないよう
だけど…」

「あ、それはですね—」

凱の問いに答えようとするドラえもんの声をアラームが遮る。メインオーダール
ムからの通信だ。

「通信？ すまない、ちよつと待っていてくれ」

突然の通信に首を傾げながらも、通信機を手取る凱。直後—

『凱！ 大変よ！』

聞こえてくる命の緊迫した声。

「命、何があつたんだ？」

『鎌倉市上空に、そこにあつたのと同じ空間の裂け目が出現して、大量のロボットが中か
ら出てきたの！』

「大量のロボット!?! 新種か？」

「いいえ、新種やゾンダーではないみたい。大きさは2 m強。飛行能力を持っていて、と

にかく数が多いの。現時点で2000を超えているわ!」
「2000!? わかった、とにかく現場に向かう!」

そう言うと凱は通信を切り―

「鎌倉に謎のロボットが大量に出現したようだ」

周囲へ通信の内容を簡潔に伝える。

「謎のロボットが大量に…それって!」

「間違いない。鉄人兵団だ!」

凱の言葉に顔を見合わせ、声を上げるのび太とドラえもん。ジャイアン達の表情にも緊張が走る。

「鉄人兵団って、もしかしてあの鉄人兵団…」

「あれもこの世界に来てるのか…となると、かなり厄介だぞ」

鉄人兵団という言葉にすぐさま反応する唯斗と正樹。凱達も言葉にこそ出さないが、事態の重大さは十分に理解しているのが表情からわかる。

「とにかく、一刻も早く鎌倉へ向かおう!」

「うん!」

「了解です!」

すぐさま、それぞれの機体に取り込もうとする凱達だが―

「ちよつと待つてくださいい！」

ドラえもんの声がそれを止めた。

「見たところ、ガイガーEXとネオガイガーは、かなりのダメージを受けているみたいですが……大丈夫なんですか？」

「たしかに、さっきの戦闘はかなりハードだったからね。動くくらいならまだしも、戦闘にはちよつと不安が残るかな」

「だが、エクセルベースに戻って補給や修理を受けている暇はない……」

「そうですよ、正樹さん。相手が鉄人兵団という事は、鎌倉の人達にどれだけの被害が及ぶか……」

「それを何とかできる存在が、ここにいないじゃないか。なあ、ドラえもん君？」

「え……あ、そうか！」

正樹の声に一瞬、ポカンとしながらもすぐにその真意を察し、四次元ポケットに手を突っ込むドラえもん。直後――

「スモールライトとタイムふろしき！」

2つの秘密道具を取り出した。

「おおっ！ スモールライトにタイムふろしき。本物だ！」

アニメや漫画で幾度も目にした秘密道具。その本物の出現に、驚きと歓喜を隠しきれ

ない唯斗。その声を背後に感じながら、ドラえもんはスモールライトでガイガーEXとネオガイガーを小さくし、タイムふろしきを被せる。そして待つ事数秒。タイムふろしきを取り、元の大きさに戻すと、そこには新品同然になった2体の姿。

「す、すごい…」

「本物を間近で見られるなんて…生きてて良かった…」

タイムふろしきの効果を目の当たりにし、驚きを隠せない凱達。発案者の正樹ですら

「いや、言ってみるもんだね…」

半ば呆然と呟いていたりする。

「機体のダメージを直すくらいならこの位で良い筈です。でも、消費した燃料や弾薬までは…」

「いや、これで十分だ。ありがとう、ドラえもん君!」

ドラえもんは礼を言うと、自らの機体へ走り出す凱。護と唯斗もそれに続く。直後、ガイガーEX、ネオガイガー、ネクストガオガイガー、ネオジェイダーの4機が鎌倉へと飛び立った。

「さて、俺達もいきますか」

「え?」

「現場、行きたいんだろ？」

そう言つて、Gキヤリアーを指差す正樹。

「あ…」

「乗るかい？」

「「「「お願ひします!!」」」」

鎌倉に到着したガイガーEX達が見たのは、文字通りの地獄絵図。

空を飛び回りながら指から熱線を放ち、街を無差別攻撃する無数のロボット兵。あちこちで火の手が上がり、街は逃げまどう人々でパニック状態にあつた。

「なんて事を…許さねえ！」

「皆、行くぞー！」

ガイガーEXの声と共にロボット兵達へ向かつていく4機。ここに戦いの幕が切つて落とされた。

「Gクレツセント！ ダブルでいっけえ!!」

気合と共にネオガイガーの両手から放たれた2つのブーメランは、独特の軌道を描きながら進路上にいるロボット兵を次々と撃墜し――

「コイツはおまけ！　くらえっ！」

更に頭部の『17・5mmCIWS』が形成する弾幕が、突然の巨大ロボット出現に戸惑っているロボット兵を次々と撃ち落とす。

「これで撃ち止め！　あとは…直接ぶつた斬る！」

約10秒後、CIWSの弾を撃ち尽くしたネオガイガーは、ガイガースラッシャーを抜刀。

「でやあっ！」

指から熱線を放ちながら、自分の周囲を飛び回るロボット兵を次々と叩き落していく。

「ガイガーファング！」

両腕に鉤爪『ガイガーファング』を装備し、ロボット兵の集団に突っ込むガイガーE X。

「はあっ！」

気合と共にその腕が振るわれる度、体を3分割されたロボット兵の残骸が地面へ落ちていく。更に――

「プログレッシブブレード！」

両爪先と踵から鋭い刃を展開させ、蹴りを放てば、一度に3体のロボット兵が撃破さ

れていく。

「プラズマブルーメラン!!」

ネオジェイダーが気合と共に放ったプラズマブルーメランが、進路上にいたロボット兵を一気に薙ぎ払い—

「護! 合わせろ!」

「はい!」

「反中間子砲!!」

続けてネオジェイダーの両足とネクストガオガイガーの背面から放たれた幾筋もの光線が、数十体のロボット兵を飲み込み、跡形もなく消滅させる。

4体の勇者によって次々と撃破されていくロボット兵達。だが—

「くそっ! 3機抜かれた!」

彼らが如何に一騎当千の力を持っていようと、4対2000という戦力比を覆す事は難しく、どうしても討ち漏らしが出てしまう。

攻撃をすり抜けた数十体のロボット兵が地上に降下していく。迫りくるロボット兵に悲鳴を上げる地上の人々。その時!

「そっちはさせん!」

そんな声と共に放たれた火線が、ロボット兵を次々と撃墜していく。「待たせたね。増援の到着だ！」

戦場に響く正樹の声。Gキヤリアー、Gストライカー、ポルコートが到着したのだ。3台のマシンは人々を庇う様にロボット兵へ立ち塞がり、それぞれの火器を撃ちまくる。

ルネとルナ。そしてドラえもん、のび太、ジャイアン、スネ夫の4人もそれぞれの武器でロボット兵に攻撃する。

「皆さん！ 討ち漏らしは、こっちでフォローします！」

「すまない！ 助かるよ！」

増援を得た事で勢いを増したガイガーEX達は、ロボット兵達への攻撃を更に激しくする。

加速度的に減っていくロボット兵の数。その数が500体程になった所で、ロボット兵達の行動が変化した。散発的な攻撃を繰り返しながら、撤退を始めたのだ。数分後、鎌倉の街から完全撤退するロボット兵達。

「なんとか追い払う事が出来たな」

「ええ、でも数が多い分、新種よりも厄介かもしれません…あれが全部じゃないはずだし…」

「その点も含めて、ドラえもん君達とじっくり話し合わないといけない…」
「そうですね…」

破壊された鎌倉の街を修復する為に、総合重層補修艦“玄武王”からカーペンターズが次々と発進するする光景を見ながら、言葉を交わす凱と唯斗。鉄人兵団という新たな敵の出現に気を引き締める勇者達だった。

君達に最新情報を公開しよう!!

新たな敵、鉄人兵団の攻撃に震撼する世界。

その間隙を縫って、奴らが活動を再開した!

国際犯罪組織バイオネットの新兵器が、Gアイランドシティを襲う!

果たして、我らが勇者王は街を守る事が出来るのか!

勇者王ガオガイガー公式外伝

ドラえもん 新・のび太と鉄人兵団くはばたけ 天使たちくAnotherStor

y

—EPISODE 8. 3—

『悪魔になったザンダクロス』

次回もこのURLにネオ・ファイナルフュージョン承認!!

これが勝利の鍵だ!!

『ガオガイガーR・DDモード』

—EPISODE—8. 3 ～悪魔になったザンダクロス～

♪ザン！♪（GGGのマーク）

G アイランドシティ郊外の上空に突如出現した黒い穴。それはこの世界とパラレルワールドとを繋ぐゲートだった。

そこから現れた謎の敵、鉄人兵団を同じパラレルワールドの住人であるドラえもん達と共に退けた我らが勇者王達。

彼らは、情報を整理する為にエクセルベースへ帰還していた。

—EPISODE—8. 3

【悪魔になったザンダクロス】（タイトルコール）

「さあ皆、入って」

「えつと、失礼します…」

凱に先導され、メインオーダールームへ入っていくドラえもん達。そこで彼らを出迎

えたのは、大河長官を始めとするメインオーダールームの面々だった。

「ようこそ！　メインオーダールームへ！」

「あ、えつと…」

「「「よ、よろしくお願ひします!!」「」」」

自分達を歓迎する大河の声に答え、一礼するドラえもん達5人。リルルも戸惑いながらそれに倣う。

「うむ、元氣かつ礼儀正しくてよろしい！」

大河のそんな声を聞きながら、命やスワンに勧められて着席する6人。早速話し合いが始まった。

「じゃあ、ドラえもん君。早速で悪いけど、君達がなぜこの世界に来たのか…それを話してくれるかな？」

「は、」

正樹の問いに答え、これまでの大まかな経緯を話し始めるドラえもん。

「と、言う訳です…」

「ふむ、ドラえもん君達と鉄人兵団との関係はその…ピツポ君？　彼の事を除けば、俺達の世界で描かれている物語と大体同じだね…となると、気になるのは君たちを飲み込んだ黒い穴。その正体か…」

「それは多分…『超時空乱流』だと思います」

「超時空乱流…聞いた事のない現象ですね…」

聞き慣れない言葉に、首を傾げる紫苑。雷牙や猿頭寺達も言葉にこそ出さないが、同じ疑問を感じている。そんな面々を横目に、唯斗が正樹に小声で話しかける。

「正樹さん。超時空乱流ってもしかして…」

「ああ、『のび太の日本誕生』に出てきた時空乱流。おそらくその親戚みたいなものだろうね」

唯斗の問いに小声で答えながら、ドラえもんを見つめ、更なる説明を促す正樹。それに答えるようにドラえもんが再び口を開いた。

「僕達の元いた世界。その22世紀ではタイムマシンが発明されているので、時空に関する研究がかなり進んでいます。それによって明らかになった現象の1つに、時空間乱気流…通称、時空乱流というものがあります」

「時空間乱気流…響きからして、あまり良い物ではなさそうですね」

「はい、時空乱流は時空で発生する乱気流のような物で、ブラックホールのようにあらゆる物を吸い込んでしまいます。そして、それに吸い込まれた人や物は、別の場所や最悪別の時代へと飛ばされてしまいます。昔から言われている神隠しは、単なる失踪や誘拐、もしくはこの時空乱流のどれかで説明がつくそうです」

「なるほど…それでは、超時空乱流とはどのような現象のですか？ 何となく想像は出来ませんが…」

「一言で言うとうと、時空乱流の強力版です。時空乱流を乱気流とするならば、超時空乱流は大型台風。そのあまりの強さの前に、吸い込まれた物は時間や空間だけじゃなく、次元まで飛び越えてしまうんです。22世紀でも事例は数えるほどしかありませんが、報告されています」

「…つまり君達は、その超時空乱流によって、この世界へと飛ばされてしまったということか。むう…」

そう呟きながら腕組みをして考え込む雷牙。正樹や紫苑も同様に考え込んでいる。

「ねえ、ドラえもん…気になってるんだけど…僕達、二元の世界へ帰れるんだよね？」

それを見たのび太が尋ねるが、ドラえもんもぼつの悪そうな顔で俯くばかり…。

「ま、まさか…帰る事が出来ないの？」

「……………」

「そ、そんな!？」

「嘘だつて言ってくれよ！ ドラえもん!」

たちまちパニック状態に陥るのび太達。それを見た護が科学者勢に問いかける。

「雷牙博士、正樹さん、紫苑さん、なんとか皆を元の世界へ帰す事は出来ないんですか？」

だが、科学者勢の反応は芳しい物ではなかった。

「うむ…何しろこの世界では未だ例のない現象じゃからな…」

「その分野に詳しい学者でもいれば良いのですが、新生世界十大頭脳にも、U. S. Nメ
ンバーにも心当たりは…」

雷牙の言葉に続くように頭を抱える紫苑。

「そんな…」

その時、正樹が静かに呟き始めた。

「まあ、次元の壁を突破する事自体は、決して不可能じゃないと思うんだ…」

その呟きに全員の視線が正樹に集中する。

「何か、方法があるんですか？ 正樹さん！」

「凱…E I—25との戦い、覚えてるよな？」

「ああ…」

「E I—25とは奴の潜んでいた並列空間内で戦った訳だけど…凱、E Sウインドウの
存在すら確認されていなかった当時、どうやって並列空間に侵入した？」

「それは、ビッグボルフオッグが残してくれた並列空間の痕跡を…まさか！」

「そう、そのまさか。デイメンジョンプライヤーを使って、閉じてしまったあの黒い穴。
パラレルワールドへのゲートをこじ開ける」

「なるほど！」

「ゲートを開く事が出来れば、あとは僕の道具を使って、何とか元の世界に戻れると思います」

「よかった！ 僕達、元の世界に戻れるんだね！」

「ホント、冷や冷やしたぜ！」

大喜びののび太達。だが、正樹は深刻そうな顔で話を続けた。

「ただし…これには問題がある」

「問題…ですか？」

「ああ、パラレルワールドへのゲートを開く。これは通常の空間修復なんかとは全く違う芸当だからね。難易度はもちろん、ブレイブガオガイガーとプライヤーズにかかる負担や、消費するエネルギーも桁違いに跳ね上がる。ブレイブガオガイガーのパワーをもつてして、どれだけの時間ゲートを維持できるか…」

「正樹さん、多次元コンピュータを使ってシミュレートしてみました。データが少なすぎるので、全て仮定値での計算になります…」

「結果は？」

「ブレイブガオガイガーに搭載しているGSNEXT—RIDE4基を全てレベル10で稼動したとして…ゲートを開けていられるのは………9・24秒が限界です」

「……予想よりかなり短いな……」

「ええ、機体負荷はともかく、エネルギーの消費が大きすぎます。もちろん、仮定値による計算なので、実際とは異なる可能性が高いですが……それでも、そう長い時間開けていけない事は間違いありません」

「10秒にも満たない時間、しかも1発勝負でゲートを通過……かなり難しいですね」

「一体どうすれば……」

皆が落胆する中、唯斗が何かを思いついたように顔を上げた。

「あの、何もブレイブガオガイガーだけにやらせなくてもいいんじゃないでしょうか？
ネクストガオガイガーやガオガイガーRの力も合わせれば、何とかなるんじゃない……」

「力を合わせる……そうか、その手があった！ 紫苑、3機のパワーを合わせた場合、ゲートを開ける時間はどのくらいになる？」

「少々お待ちを………出ました。38.81秒。維持できる時間が約4.2倍になりました」

「……開いたゲートへすぐに飛び込める保証はないし、もう少し余裕を持たせたい所だな……よし、ネオデビジョン艦も使おう。まずは朱雀王を」

「ネオジェイアークを使え」

正樹の言葉を遮るように響くJの声。全員の視線がJに集中する。

うし、俺一人暮らしで、空いてる部屋もあるからどうかかな？　って…思ってたんですけど」

「ふむ、たしかに殺風景な仮眠室で寝泊りしてもらうのは、申し訳ないな…」

「Gアイランドシティのホテルを手配する手もあるが、何かあった時に動き辛いし…ドラえもん君達が良ければ、良いんじゃないかな？」

「そこまでしていただけるなら、ありがたくお言葉に甘えます。皆も良いよね？」

「うん！」

「断る理由なんてあるわけないだろ」

「それじゃあ長瀬さん。僕達、ご厄介になります」

「唯斗でいいよ。じゃあ、改めてよろしく」

ガツチリと握手を交わすドラえもん唯斗。世界の違う者達が友情を結んだ瞬間だった。

「♪」

鼻歌交じりに台所で包丁を振るう唯斗。エクセルベースでのやり取りの後、ドラえもん達と共に自宅へ戻った唯斗は、早速台所に向かい夕飯の準備をしていた。

「あの、唯斗さん、何かお手伝いを…」

「いいよいいよ。皆はお客さんなんだから、ゆっくり休んでて」

手伝いを名乗り出た静香にそう言いながら、唯斗はテキパキと調理を進めていき―
「お待たせー！」

唯斗の声と共に食卓へ運ばれてくる2つの土鍋。

「夜はまだ少し冷えるからね。シチュー鍋にしてみました」

そう言いながら、食卓に置かれた卓上コンロに土鍋をセツトする唯斗。コンロの火を点けると土鍋からグツグツと音が聞こえ始める。

「よし、もう良いかな」

頃合を見て、土鍋の蓋を開けると湯気と共に食欲を誘う香りが周囲に漂う。

「うわぁ、美味しそう…」

「具は鶏もも肉と鮭のぶつ切り、ウインナー、ジャガイモ、玉葱、ほうれん草に人參つてところかな。おかわりはたっぷり用意しているから、たくさん食べてね。それでは…いただきます」

「「「いただきますーす！」「」」」

食前の挨拶をきちんと済ませ、食事を開始するドラえもん達。

「おいしーい！」

「ホント、すごく美味しいです。唯斗さん」

「男の我流料理だけど、喜んでくれて何よりだよ」

のび太達の感想に謙遜しながらも、どこか嬉しそうな唯斗だったが一

「……………」

「リルルちゃん…もしかして、口に合わなかった？」

器に取った鶏肉を一口食べて、不思議な顔をしているリルルに気がつき、その表情がわずかに曇った。口に合わなかったか？と不安になる唯斗だったが一

「いえ、そうじゃないんです…その…『美味しい』って、何ですか？」

リルルの言葉は、唯斗の想像を超えていた。

「どういう…意味かな？」

「有機物をエネルギーに変換するシステムを搭載しているから、こうやって食事も出来るし、味覚センサーで味を感じる事も出来るんです。でも、のび太君達の言う『美味しい』という言葉の意味がわからなくて…」

そう言って俯くりルル。唯斗は少しの間考え込み…。

「これは…正樹さんに相談してみるか」

助っ人を頼む事にした。

「こんばんは〜」

それから約20分後、唯斗宅へやって来る正樹、ルネ、グラナートの3人。

「いらつしやい、正樹さん、ルネさん、グラナートちゃん」

「唯斗さん、本日はお招きいただき、ありがとうございます」

「あ、これはご丁寧に…ホント、すみません正樹さん。色々とお忙しいのに」

「いやいや、ちょうど3人で食事休憩に入る所だったからね。まさに渡りに船。後で唯斗君の手料理、たつぷり食べさせてもらおうよ」

「もう、俺なんかの料理でよかつたら、いくらでも食べてってください。ドラえもん君達もリルルちゃんの事が解決するまで待つ。って言ってますし、一緒に鍋を突付きましよう」

「よし、それじゃ始めようか…唯斗君の話で大体の見当はついてるんだ」

そんな会話を交わしながら、リルルへ手招きする正樹。

「なんでしようか…」

「うん、1つ質問するから、それに答えてくれるかな?」

「はい…」

「リルルちゃんが食事をした回数は、今日の分も入れて今までで何回かな?」

「…これが初めてです」

「…やっぱりね。唯斗君、原因がわかったよ」

「何が原因なんですか? 正樹さん」

答えを知りたがる唯斗を制しつつ、椅子に座る正樹。そしてドラえもん達の顔を見直し、ゆっくりと話し始めた。

「リルルちゃんが『美味しい』という事を理解できない原因は：簡単に言えば『味覚の経験値不足』だ」

「味覚の…」

「経験値不足…」

「そう、皆も経験ないかな？ 初めて食べた食べ物、今までに味わったことのない味

で、戸惑った事」

「あ、あります」

「リルルちゃんの状態にもそれが当てはまる。甘いとか辛いとか、味を情報として知ってはいても、実際に食事をした経験がないから、何を食べても戸惑ってしまう訳だよ」

「なるほど…じゃあ、味覚の経験値を高めていけば良いわけですね」

「そういう事。色々な味の食べ物を食べていくのが確実なんだけど、それじゃ時間がかりすぎるから…今回はちよつと裏技使うよ」

「そう言いながら自前のノートパソコンを起動する正樹。

「実はピギーちゃんの2号機を開発中だね。その子には必要に応じて料理人になってもらう予定なんだけど…そのデータをリルルちゃんに移植する」

リルルの左手中指にケーブルを繋げ、データをインストールする正樹。待つ事10秒弱。

「これでよしと…リルルちゃん、早速だけど何か食べてみてくれるかな？」

「あ、じゃあ鍋を温めますね」

早速コンロに火を点ける唯斗。5分もしないうちに土鍋からグツグツと音が聞こえ始める。

「はい、リルルちゃん」

鍋の具を器に取り、リルルに渡す唯斗。器を受け取ったリルルは、先程と同じように鶏肉を一口。

「…どうかな？」

リルルの反応を固唾を飲んで見守る唯斗達。

「まだ、よくわかりません。でも…これをもっと食べたい。そんな気がします」

「よし！ 成功！ それが『美味しい』って事だよ。リルルちゃん」

「これが…『美味しい』…」

正樹の言葉に器に盛られた鶏肉や野菜をまじまじと見つめるリルル。

「まあ、まだ実感が薄いかもしれないけど、じきになれるからね」

「じゃあ、リルルちゃんの件も解決したし、皆で食べましょう！」

「ああ、食べよう！」

正樹の音が響く中、人数分の器と箸が改めて用意される。

「あ、ルネさんとグラナートちゃんは、フォークとスプーンの方が良いですか？」

「いや、chopsticksでいいよ。練習しているから」

「私も大丈夫です」

「ドラえもん、チョップスティックって何？」

「英語で箸の事だよ」

そんな会話が交わされる中、2度目のいただきますが部屋に響き、食事が始まった。

「うん、美味しい。唯斗君、良い腕してるね」

「ありがとうございます。あ、このスープに軽くトーストしたフランスパン漬して食べてみてください。美味しいですよ」

「どれどれ……たしかに、こりや絶品だ」

スープの滲みたフランスパンを一口齧り、その味に笑みがこぼれる正樹。それを他の皆も正樹の真似をして、一様に破顔する。

そして、リルルも感じ始めたばかりの『美味しい』という感情にどこか戸惑いながらも、箸を止める事はない。

大量に用意されていた鍋の具とフランスパンはどんどん減っていき、ついには殆ど全

てが各人の胃袋に収められた。

「ああ、美味かった…」

「そう言ってもらえると作ったかがあります。でも、まだ終わりじゃないですよね」

「え？」

「鍋にはシメがつき物でしょう？　今準備しますから」

そう言つて、台所に向かう唯斗。戻つてきた彼の両手には、冷やご飯とスパゲッティが…。

「ゆ、唯斗君！　ま、まさか！」

「ええ、鍋が2つあるんでシメも2種類です」

「それは反則だ…」

正樹の声を聞きながら、片方の鍋に冷やご飯を入れる唯斗。具材の旨味が溶け込んだスープをご飯が吸い、極上のリゾットに変わっていく。

そして、もう片方の鍋はスープを少し煮詰め、硬めに茹でたスパゲティを投入。麺全体にスープを絡ませていけば、これまた極上のクリームソーススパゲティに早変わり。

「よし、仕上げだ」

2つの鍋にたっぷりの粉チーズを加え、粗挽きの黒胡椒で味を調える。最後にパセリ

のみじん切りを振ればシメの2品完成である。

「美味いー！」

「美味しいー！」

リゾットとスパゲティに感激の声を上げる正樹達。一方、無言でリゾットやスパゲティを食べるルネ達。

見事な対比であるが、それぞれの心にある思いは『唯斗君(さん)の料理は美味い』で共通していた。

暗い部屋の中、目を覚ます唯斗。時計を見れば時間は午前5時。

「5時間くらいは眠れたかな…」

ベッドの上で軽く伸びをしながら呟く唯斗。夕食を終え、正樹達が帰ってからもドラえもん達とアニメの鑑賞会やゲームで大いに盛り上がり、床に着いたのは午前0時を少し過ぎた頃だった。

「さて、起きるか」

ベッドから抜け出て寝巻きを脱ぎ、トレーニングウェアに着替えると、まだ眠っているであろうドラえもん達を起こさないようにゆっくりと階段を下りていく。

「水でも飲んでいくかな」

そんな事を呟きながらリビングへ入る唯斗。そこには――

「あれ、リルルちゃん」

電気の消えたリビングでソファァーに座っているリルルの姿があった。

「あ、唯斗さん……」

「おはよう、もう起きてたんだ。早いね」

「いえ、私は……その、睡眠を取る必要が殆どないから……」

「ああ、なるほど……ちよつと待ってて、紅茶でも入れてくるから」

そう言つて、台所へ向かう唯斗。5分ほどで淹れたての紅茶の入ったティーカップや砂糖などを載せた盆を手に戻ってくる。

「はい、砂糖は自分で適当に入れてね」

「あ、ありがとうございます」

ティーカップを受け取り、紅茶を一口飲むリルル。少しの間沈黙が場を支配し、唯斗が口を開いた。

「リルルちゃん……やつぱり、ピッポ……じゃないジユド君が心配？」

「……どうして、そう思うんですか？」

「だって、ピッポ君はリルルちゃんにとつて大切な存在なんでしょう？ 聞いたよ、自分の部品を使ってピッポ君を修理した事があるって」

「それは、ただの気まぐれで…」

「気まぐれ…か。でも、今はそうやって心配してるよね？ やっぱり、ジユド君の事が大切なんだよ」

「大切…心配…まだ、よくわかりません…」

「そっか、まあ…すぐに解るようになるよ。昨日の夕ご飯で『美味しい』って意味を知ったようにね」

そう言うのと紅茶を一気に飲み干し、立ち上がる唯斗。

「さて、じゃあ俺はちよつと走ってくるから」

「走ってくる…今からですか？」

「ああ、この8年間、雨の日風の日平日休日関係なく、毎日走っているのが密かな自慢だったりするのだよ」

少しおどけた感じでリルルの問いに答え、玄関へ向かう唯斗。靴を履き、手足に重りを付けると家の前で軽く準備運動をする、

「どの位走るんですか？」

「うーん、最近は25kmくらいかな。時間は40分くらいで…じゃあ、帰ったら朝御飯の準備するから」

「あ、唯斗さん…」

「なに?」

「あ、その…:…いつてらつしやい」

「いつてきます」

リルルに見送られ、走り出す唯斗。徐々に走るスピードを上げ、原付バイク並かそれ以上のスピードで早朝のGアイランドシティを疾走する。

それから約1時間後。

「♪」

25kmのランニングをジャスト40分で終わらせて帰宅した唯斗は、シャワーでサツと汗を流すと台所に立ち、鼻歌交じりに朝食の準備をしていた。

鍋に胡麻油を引き、半月切りにした大根と人参、笹掻きにした牛蒡、石突きを取り、小分けにしたシメジ、一口大に千切り、下茹でした蒟蒻を入れて炒める。

具材に油が回った所で、昆布と鰹の合わせ出汁を注ぎ、灰汁を取りながら暫し煮込む。「さて、今のうちに鮭を…」

冷蔵庫を開き、タッパーを取り出す。蓋を開けば中に入っているのは、ガーゼに包まれ白味噌ペースの漬け地に漬け込まれた鮭の切り身。

ガスコンロのグリルに火を点け、漬け地から取り出した鮭の切り身を並べて、焦がさ

ないように焼いていく。

「うーん…焼き魚と汁物だけじゃ、ちよつと寂しいな…よし、冷奴もつけるか」

木綿豆腐を等分に切り、1つずつ皿に盛る。薬味として小口切りの葱、みじん切りの大葉、すりおろした生姜、鰹節を用意する。

この頃になると、眠っていたドラえもん達も起きだし、着替えや洗顔を済ませて食卓に着き始める。

「おはよう！ よく眠れた？」

「はい、グツスリ眠れました」

「それは良かった。もうすぐ朝ご飯出来るからね」

そう言つて調理の仕上げに入る唯斗。醤油と塩、酒で汁物の味付けを行い、ざく切りにした小松菜を入れて一煮立ち。

「…よし、OK」

最後にもう一度味の確認を行い、コンロの火を消して汁椀に盛っていく。

「はい、お待たせ」

炊き立てのご飯、具沢山の汁物、鮭の西京焼き、冷奴。唯斗特製の朝ご飯がドラえもん達の前に並べられる。

「では…いただきます」

「「「いただきまーす!」」」

食前の挨拶をきちんと済ませ、食事を開始するドラえもん達。

「おいしいーい!」

「ホント、すごく美味しいです。唯斗さん」

「喜んでくれて何よりだよ。いっぱいおかわりしてね」

ドラえもん達の声にそう答えながら、2杯目になる山盛りの丼飯を胃袋に収めていく唯斗。朝から凄まじい食欲である。

「さて、鉄人兵団のせいで学校休みになったし…今日はどうしようか?」

朝食を終え、食器を洗いながらドラえもん達に問う唯斗。

「このまま家でノンビリするのも良いし、Gアイランドシティを散策するつてもありだと思おうよ」

「そうですね…唯斗さん、実は考えている事が—」

唯斗の問いに答えようとするドラえもんの声をGコマンドーのアラームが遮る。メインオーダールームからの通信だ。

「ちよつとごめんね。はい、長瀬です」

Gコマンドーを手に取り、アラームに応答する唯斗。

『おはよう、長瀬君』

「あ、ルナさん。おはようございます」

『朝からごめんなさいね。早速だけど、ドラえもん君達は近くにいる?』

「ええ、全員すぐ近くにいます」

『ちょうど良かったわ、悪いけどすぐにメインオーダールームまで来てくれないかしら』

「事件ですか?」

『ええ、詳しくはメインオーダールームで』

「わかりました。すぐに行きます!」

通信を終えると唯斗は、Gコマンドーをポケットに仕舞い、ドラえもん達の方を向くと――

「何か、事件が起きたみたい。すぐにメインオーダールームへ来てくれて」

ルナからの通信を簡潔に伝えた。

「事件…鉄人兵団ですか?」

「詳しい事はまだわからない。とにかくメインオーダールームへ急ごう!」

「遅くなりました!」

それから約15分後。声と共に勢いよくメインオーダールームへ飛び込む唯斗。ド

ラえもん達もその後が続く。そして、その声に振り返る正樹。

「ああ、唯斗君、ドラえもん君達も、アレを見てくれ」

正樹の声にメインスクリーンに視線を送ると、そこに映し出されているのは1体の巨大ロボットと蝶を模した形状の飛行物体。

「な、何ですか？ あれ！」

「20分前に埠頭へ飛来した。巨大ロボットは全高30m、悪趣味な外見だつて事以外の情報及び目的は不明。ただ、ロボットも飛行物体も一向に動きを見せない。まあ、何か考えが有つての事だとは思うんだけどね」

スクリーンを睨みながら、静かに呟く正樹。その時、命が声を上げた。

「長官！ エクセルベースに向けて、正体不明の怪電波が発信されています！ これは…通信のようです！」

「何!? 卯都木君、通信回線を開いてくれ！」

「はい！」

すぐさま、通信回線が開かれ、ボンデージファクションに身を包み、バタフライマスクで素顔を隠した女性がスクリーンに映し出される。

「ごきげんよう、GGGの皆さん。私はバイオネットの高級幹部、マティーニと申します」

「バイオネットの高級幹部だっ!?」

「データベースの検索完了。マティーニ、本名、年齢、国籍など一切不明。殺人、爆弾テロなど31件の罪状で国際手配されています」

「それで、そのバイオネットの高級幹部さんがわざわざ何の用なのかな? こっちはおたくらに付き合ってもらえるほど、暇じゃないんだよね」

不快感を隠そうともしない正樹の声に、マティーニは不敵な笑みを浮かべ—

「私の用件はただ1つ。勇者王との決闘です!」

高らかにそう宣言した。

「け、決闘!?!」

「おいおい、マジかよ…」

文字通り予想外なマティーニの発言に、驚きを隠せないメインオーダールームの面々。

「30分待ちます。もしも時間内に勇者王が現れなければ、このバイオネット最新にして最強の兵器『Bカイゼル』で、Gアイランドシティを無差別攻撃します! 犠牲を出したくなければ、この申し出受けていただきますしよう!」

その言葉を最後に通信は途切れ、スクリーンには砂嵐が走るばかりになった。

「決闘だと…一方的にふざけた事を!」

「しかも、よりによってブレイブガオガイガーとネクストガオガイガーが定期メンテナンスの真つ最中に仕掛けてくるなんて…作業終了までどんなに急いでも2時間は必要です」

「ブレイブとネクストは…じゃあ、ガオガイガーRは動けるんですね。だったら俺が行きます！ あんな奴ら、正面から迎え撃って叩き潰してやる！」

「待ってください唯斗君。バイオネットが、決闘を申し込む…これは何か裏があるに決まっています」

「ああ、何か罠が仕掛けられていると考えた方がよい」

「もう一つの可能性もあるよ…あのBカイゼルとかいうロボットの力に絶対的な自信がある…っていうね」

血気に逸る唯斗を止める紫苑達。だが、唯斗は止まらない。

「それは百も承知です。でも、このままあれを放っておいたら、Gアイランドシティが攻撃される。出るしかありませんよ。罠なんか正面から叩き潰してやります！」

「…よからう。ガオガイガーR、出撃承認！」

「了解！」

「それじゃあ、僕達も行きます！ 秘密道具でサポートを！」

大河に出撃を願うドラえもん達。だが、それを唯斗が止める。

「ドラえもん君達は残っていてくれ。鉄人兵団が動きを見せるかもしれないからね」

「……わかりました」

「それじゃあ…長瀬唯斗、出撃します！」

その声と共にメイソードールームを後にする唯斗。同時に牛山達が声を上げる。

「こちら整備部牛山！ 玄武王内部にて、長瀬特別隊員のリュシフェルガオーへのフュージョン完了と同時に、ガオガイガーRへの合体作業に入る！ 担当スタッフは準備急げ！」

「参謀部の月村です。デイバイディングドライバーの裏技運用、テストも兼ねて実行するので、こちら準備をお願いします」

「裏技運用？」

正樹の言葉に首を傾げるドラえもん達。

「なあに、大した事じゃないんだけどね…」

そんなドラえもん達に不敵な笑みを浮かべる正樹。この男がこういう顔をする時は、必ず何か企んでいる時である。

それから約10分後。

「時間まであと15分。そろそろ姿を見せる頃ですわね」

埠頭の隅で微動だにしないBカイゼルを眼下に見ながら、不敵に微笑むマティーニ。その時――

「マティーニ様！ レーダーに反応！ これは…勇者王です！」

配下の声が飛行物体のブリッジに響く。直後、スクリーンに映し出されるのは、白き勇者王ガオガイガーR！

だが、ガオガイガーRの様子はいつもと異なっていた。その左腕に装着されているのは――

「まさかあれは…ディバイディングドライバー！」

「うおおおおおっ！」

マティーニが驚きの声を上げる中、左腕にディバイディングドライバーを装着したガオガイガーRは、一気に急上昇。

「いっくぜえ！」

高空で体を反転させ、今度は地表に向かって急降下した。

「ディバイディング！ ドライバー！！」

地面に突き立てられた先端から光が迸り、瞬く間に直径数km、高さ数百mの巨大な戦闘フィールドが形成されていく。

「アレスティングフィールド固定！」

「レプリシヨンフィールド、安定！」

「戦闘フィールド形成完了。ガオガイガーR、DDモード解除。戦闘モードに入ります」

「よし、デイバイディングドライバーの裏技運用……とりあえず成功かな」

「まさか、ガオガイガーRがデイバイディングドライバーを使うなんて……」

「ブレイブとRは、パーツの62%と規格が殆ど共通だからね。ちよつと改造すれば、こういう裏技が可能なのだよ」

スクリーンを見つめながら、のび太の声にそう答える正樹。スクリーンはフィールドに降り立ったガオガイガーRを映し出していた。

「Bカイゼルにスクラップにされる。その為にやって来た貴方の勇氣に敬意を表します。白き勇者王」

「あいにく、こっちはスクラップになるつもりはないね。逆にその不細工なロボットをスクラップにしてやるよ」

「バイオネットの兵器として相応しい姿に改造したBカイゼルを不細工とは……やはり、凡人には天才の考えは理解できないようですね」

「生憎だが、お前の考えなんか理解したく……って、改造？ 改造だと？」

マティーニの発した『改造』と言う言葉に反応する唯斗。僅かな違和感はすぐに大きな疑問へと変わっていく。

「おい！ バイオネット最新最強の機体とか言っていたのに、なんで改造なんて言葉を使った！」

「そ、それは…」

唯斗の言葉に動揺するマティーニ。必死に平静を保とうとするが、焦りの色は隠しきれない。

「どうやら、何か隠しているようだな…上等だ、そいつぶちのめして謎を暴いてやる！」
その声と共にBカイゼルへ向かっていくガオガイガーR。

「はあああつー！」

懐に飛び込むと同時に放った鉄拳が、Bカイゼルを吹き飛ばした。派手に土煙を上げ、地面に倒れるBカイゼル。

「つて、おいおい、最新最強でこの程度かよ？」

あまりにあっさりとは吹き飛んだBカイゼルに拍子抜けの唯斗。その声に反応したのかは解らないが――

「……………」

無言で立ち上がるBカイゼル。同時に全身の装甲にヒビが入り、ポロポロと崩れ落ち

ていく。

「なっ…まじかよ……」

趣味の悪いカラーリングが施された装甲の下に隠されていたBカイゼルの真の姿を見て絶句する唯斗。

「あ、あれは!」

「ザ、ザンダクロス!」

「う、うそだろ!」

メインオーダールームで戦いを見守っていたドラえもん達、そして正樹も思わず声を上げていた。それを見た命が声をかける。

「皆、一体どうしたの!」

「あ、あれは…僕達のロボットです…」

「何ですって!」

「僕達と一緒に戦っていたロボット、名前はザンダクロスと言います…」

「ジユド…」

呆然とした表情で名前を呟くりルル。混乱の中、ただ時間だけが過ぎていった…。

君達に最新情報を公開しよう!!

バイオネットの操り人形となったザンダクロスのパワーに苦戦する勇者王。

辛うじてその挑戦を退けたGGGは、奪還作戦を決行!

作戦に挑むは、最強のドリームチーム!

果たして彼らは、大切な友人を取り戻す事が出来るのか!

勇者王ガオガイガー公式外伝

ドラえもん 新・のび太と鉄人兵団くはばたけ 天使たちくAnotherStory

y

—EPIISODE 8・ 4—

『ザンダクロス奪還作戦』

次回もこのURLにネオ・ファイナルフュージョン承認!!

これが勝利の鍵だ!!

『名刀“電光丸”』

—EPISODE—8. 4～ザンダクロス奪還作戦～

♪ザン！♪（GGGのマーク）

『唯斗さん、聞こえますか？』

ダイバイディングフィールド上でザンダクロスと睨み合うガオガイガーR。そのコクピットに響くドラえもんの声。

「聞こえてるよ、ドラえもん君。まさかザンダクロスが、バイオネットの手に落ちていたとはね…」

『はい、ザンダクロスは僕達と別の場所に飛ばされたみたいでしたから…』

「まったく、何が最新最強だよ。拾った物を勝手に使うな！」

『唯斗さん…お願いが』

「大丈夫、皆^{みな}まで言うな。ザンダクロス、奪還してやろうじゃないの！」

ドラえもんの声を遮る様にそう言うと、気合を入れなおしたガオガイガーRは—
「いくぜ！」

ザンダクロスへ向けて突進。ここに戦いの幕が切つて落とされた！

【ザンダクロス奪還作戦】（タイトルコール）

「……………」

真正面から突っ込んでくるガオガイガーRに対し、無言で両肩のハッチを展開。露出したミサイルポッドからミサイルを乱射するザンダクロス。十数発のミサイルが複雑な軌道を描きながら、ガオガイガーRに迫る。

「雷帝！ 招来!!」

迫り来るミサイルを睨みながら足を止め、ボイスワードを唱える唯斗。同時にガオガイガーRの右前腕部が高速で回転し、青白い稲妻を纏っていく。

「サンダー！ ウィーウィーイップ!!」

次の瞬間、ガオガイガーRの右腕から放たれた稲妻の鞭が、ミサイル全てを撃ち落としました。両者の間で起きる大爆発。

「でやあああつー！」

その爆発の中をガオガイガーRは突進。一気にザンダクロスの懐へ飛び込むと—

「せいっー！」

踏み込みと共に左肘打ちを放つ。完全に隙を突かれる形となり、直撃を受けるザンダ

クロス。その巨体が僅かに揺らいだ。

「はあっ！」

間髪いれず、右の掌底を顔面に叩き込む。強烈な衝撃にザンダクロスが数歩後退する。

「一気に決める！」

ガオガイガーRの攻撃は止まらない。水面蹴りを繰り返し出し、ザンダクロスの体勢を崩すと――

「でやあっ！」

気合と共に、左バックハンドブローと右上段後ろ回し蹴りのコンビネーションを叩き込んだ。ガオガイガーRの全重量を込めた蹴りを受け、吹き飛ばされるザンダクロス。

「やったか……」

構えを解く事無く、倒れたザンダクロスを見つめるガオガイガーR。今の攻撃に手ごたえを感じてはいたが、嫌な予感が拭えないのも事実であった。そして――

「……………」

予感的中した。ゆっくりと起き上がったザンダクロスは、腹部に内蔵されていたビーム砲を展開、発射してきたのだ。

「ちいっ！ プロテクトシールド！」

咄嗟にプロテクトシールドを展開し、攻撃を防御するガオガイガーR。ビームが湾曲空間に激突し、周囲に弾き飛ばされる。

それを見たザンダクロスは再度両肩のハッチを展開し、ミサイルを発射。目から発射するレーザも追加され、圧倒的な火線がガオガイガーRを襲う。

「くそっ！ 下手に反射してザンダクロスを傷つけるわけにもいかないし…どうすりゃいいんだ！」

流石にプロテクトシールドが破られる程の攻撃ではないものの、防戦一方の展開となり、思わず悪態をつく唯斗。

「唯斗さん！」

「ザンダクロスがこれほどの力を持っているとは…」

ザンダクロスの攻撃を防ぐガオガイガーRの姿をスクリーン越しに見ながら、悲痛な声を上げるドラえもんも驚きの声を上げる凱。

「正直、装甲も火力も予想以上だね……」

「このまま防戦一方ではジリ貧です。なんとか手を打たないと…」

これまでの戦闘で得たザンダクロスのデータを解析しながら、浚面で呟く正樹と紫苑。

「リルル！ 何とかザンダクロスを、ピッポを止められないの？」

「それが…さつきから呼びかけているんだけど、ジユドは答えてくれないの…」
のび太の声に申し訳なさそうに答えるリルル。それを聞いた正樹は—

「応答がない……まさかとは思うけど」

何かを思い立ち、すぐさまマイクを掴むと唯斗へ呼びかけた。

「唯斗君、Rのセンサーをフル稼動して、ザンダクロスをスキャンしてくれ！」

『スキャンですか?!』

「そうだ！ 特に頭部を重点的に頼む！」

『了解です！』

プロテクトシールドを展開しながら、ザンダクロスの頭部を重点的にスキャンするガオガイガーR。その情報はすぐさまメインオーダールームへ転送される。

「Rからのスキャン映像来ました！ スクリーンに出します！」

紫苑の声と共にスクリーンに映し出される頭部のスキャン映像。それを見た途端—

「ああっ！」

「やっぱりね…」

驚きの声を上げるドラえもん達と確信を得たように頷く正樹。スキャン映像には、本来そこにいる筈のピッポの姿が写っていないかった。

「ピッポがない……これって……」

「うん、今のザンダクロスは魂のない抜け殻みたいな物……おそらく、バイオネットの連中が遠隔操縦で操っているんだろう。唯斗君、ピッポ君がないなら安心だ。アレを使おう！」

「アレ？ ああ……わかりました！」

正樹の声にそう答え、ザンダクロスの攻撃が途切れる僅かな隙を利用して後退するガオガイガーR。ある程度ザンダクロスと距離を取ると――

「見せてやるよ、サンダーウィップの応用技！ 雷光！ 狂乱!!」

これまでと違うボイスワードを唱え、高速回転する右前腕部に青い稲妻を纏っている。そして――

「ボルト！ パアアラライザアッ！」

ザンダクロスへ右腕を突き出し、その力を解放した。ほとぼしる青白い光がザンダクロスを包み込む。その直後――

「……………」

ザンダクロスに異変が起きた。外見は何ら変わらないものの、その動きはまるで全身が錆付いたかのようにぎこちない。

「な…いったい何が起きているのです！ 直ちに確認なさい！」

巨大な蝶を模した飛行物体。そのブリッジの中央に陣取り、余裕綽々でガオガイガーRとザンダクロスの戦いを見物していたマティーニも、これには驚きを隠せない。周囲の部下に命じて、ザンダクロスの状態をチェックさせる。

「こ、これは…」

「何事ですか！ 早く報告なさい！」

「び、Bカイゼルの遠隔操縦システムが、損傷しています！」

「損傷?!」

「さ、先程勇者王が放った攻撃は、強力な電磁パルスと思われます！ それで遠隔操縦システムが損傷を…」

「な、何という事を…」

部下の報告を聞き、バタフライマスクの下で顔を歪ませるマティーニ。

「見たか！ これぞガオガイガーRの隠し技の1つ、ボルトパラライザーだ!!」

そんなマティーニの様子を知ってか知らずか、右手を掲げて勝ち誇る正樹。

ボルトパラライザー。それは強力なE電磁MPパルスを発生させる事で目標の電子機器を破壊。

その機能を低下させるガオガイガーRの特殊攻撃である。

「今のザンダクロスなら、取り押さええる事も容易い筈。唯斗君、確保を頼む！」

「了解です！」

正樹の声に答え、ザンダクロスへと近づこうとするガオガイガーR。その瞬間、唯斗は悪寒に首筋を撫でられた。

「ちいっ！」

反射的にその場を飛び退くのとほぼ同時にビームが地面をなぎ払う。

「決闘じゃなかったのかよ。横から手を出すのは反則だぜ！」

舌打ちと共に攻撃の主である上空の蝶型飛行物体に悪態をつく唯斗。だがマティーニは――

「たしかに決闘とは言いました：が、1対1と言った覚えはありません！」

悪びれる事無くそう答えると攻撃再開を命じた。飛行物体の全砲門からガオガイガーRへ向けてビームが乱射され、同時に5機の巨大ロボットがダイバイディングフィールドへ降下した。バイオネットが運用する大型機動兵器『AT』だ。

「何だよ、その小学生レベルの言い訳は！」

マティーニの言い訳に呆れながらも、雨の様に降り注ぐビームをホバー移動で掻い潜

り、AT群へ向かっていくガオガイガーR。

「……………」

それを見たAT群も、5機中4機が左腕を突き出しながら前進。ガオガイガーRに向けて小型ロケット弾を連射する。

「なめんな！ このアツ○イもどきども！」

だが、その程度の攻撃でガオガイガーRは止められない。次々と命中するロケット弾を物ともせずATへ接近し――

「でやあつ！」

その鉄拳で、AT4機を次々と撃破していく。

「あと1機！」

4機目を打ち倒し、残る1機を睨みつけるガオガイガーR。すると――

「……………」

戦闘体勢をとっていたATが、突然それを解除したかと思うとザンダクロスの元へ移動。背後から羽交い絞めにするそのまま上昇を開始した。

「待ちやがれ！」

すぐさま追いかけようとするガオガイガーRだが、飛行物体から放たれるビームがその行く手を阻む。

「ちいつー！」

行く手を阻まれ舌打ちするガオガイガーRの目前で、飛行物体に格納されるATとザンダクロス。

「この勝負、ここまでにさせていただきます。今回受けた屈辱は、近いうちに必ずお返ししますわ。それでは、ごきげんよう」

マティーニの声を残し、最高速度で空域を離脱する飛行物体。当然、ガオガイガーも追跡しようとするが――

『唯斗君、追う必要はないよ』

正樹からの通信が、それを止めた。

「何故ですか？ 正樹さん」

『奴らの行き先は、間違いなくバイオネットの基地だ。こちらにも相応の準備をしていないと万が一って事がある。それに基地にはピッポ君が捕らえられているだろうからね。救出作戦も考えないと』

「なるほど……」

『とりあえず、ここちに戻って来てくれ。作戦会議をしよう』

「わかりました。エクセルベースに帰還します」

それから約30分後。メインオーダールームにて、作戦会議が開始された。

「作戦の目的は3つ。ザンダクロスの奪還、ピッポ君の救出、そしてバイオネット基地の破壊だ。基地の破壊に関しては、余裕があれば…という条件付だけどね」

「まずは奪還と救出に専念って事です。バイオネット基地の所在は？」

「サテライトサーチによる飛行物体の追跡は、途中で振り切られました。しかし、諜報部がこれまでに入手していた情報や飛行物体の進行方向、その他諸々のデータを総合した結果…」

紫苑の言葉と共にスクリーンへ映し出される地図に、全員の視線が集中する。

「Gアイランドシティから南に約1400km。南硫黄島の先にある東西3km、南北2kmの無人島。ここが最有力候補です」

「衛星写真を見る限り、普通の島ですね…まあ、カモフラージュしてらんでしようけど」
「ここが怪しいって言うなら、早速乗り込もうぜ！ 違ったならその時考えればいいんだ！」

「そうだね。ここは行動あるのみだよ」

ジャイアンの言葉に同調するドラえもん。のび太達も大きく頷き、同意の意を示す。

「決まりだね。それじゃあ、作戦に参加するメンバーだけど…」

「私に…行かせてください」

正樹の声を遮る様に手を上げるリルル。

「私、ジユドの信号をキャッチして、素早く見つける事ができます。だから…」

「…かなり荒っぽい事になるかもしれないよ。大丈夫かい？」

「…はい！」

「よし、1人目は決まりだ」

「私も行くよ。バイオネット絡みなら本職が必要だしね」

「ああ、こつちから頼むつもりだった。暴れてもらうぜ、ルネ」

「僕も行きます！」

「俺も！」

「志願します！」

続けて手を上げたのは、のび太とジャイアン、そして唯斗。

「唯斗君はともかく、のび太君とジャイアン君。荒っぽい事は…」

「大丈夫です！」

「…OK、じゃあ2人にもお願いするよ…その代わり」

「その代わり？」

「俺も行くぜ」

「正樹さんが!？」

「ああ、スニーキング潜入ミツション。コンピュータや機械に強い人間がいたほうが心強いだろう？」

「でも、正樹さん…荒っぽい事は…」

「心配御無用！ こう見えても、荒事は得意な方でね」

唯斗の不安な声に不敵な笑みを返す正樹。彼の武勇伝を唯斗が知り、大いに驚くのはまた別の話。

「これで6人…あと2人ほど参加してほしいな。そう言う訳で、頼めるかい？ ドラえもん君、ルナちゃん」

「なんとなく、僕も呼ばれる気がしてました。もちろん行きます」

「私もお供します」

「よし、長官！ この最強パーティーで、バイオネット基地に乗り込みます！」

「君達的能力ならば心配はいらないと思うが、十分に気をつけて行動してほしい！ 私からの命令はただ1つ！ 生還せよ！ 以上だ」

「了解！」「了解！」

「へへ、腕がなるぜ！」

大河の言葉に敬礼を返す正樹、ルネ、ルナ、唯斗の4人。それを見たジャイアンもまた、声を上げる。

「それじゃあ、早速準備だ！」

正樹の声が高らかに響き、作戦会議は終了した。

それから2時間後。どこでもドアで南硫黄島まで移動したドラえもん達は、そこからバイオネット基地があると思われる無人島へ向けて、タケコプターで飛行していた。

「しかし、タケコプターで空を飛ぶ日が来るなんて…こういう状況じゃなければ、もっと良いんですけどね」

タケコプターの最高速度で無人島を目指しながら、しみじみ呟く唯斗。

「まったくだねえ…まあ、作戦が完了したら改めて飛ばせてもらおう。ドラえもん君、良いかな？」

「それは構いませんけど…正樹さん、このまま近づいて大丈夫なんですか？ レーダーとかに引つかかるんじゃない？」

「うん、引つかかるよ。でも大丈夫。俺達くらいの大きさだったら鳥と殆ど区別つかないし。何よりコレを被ってるからね」

そう言いながら、自分の頭に被せられた『石ころぼうし』を指差す正樹。

「目視で監視している奴がいても、これを被っていれば気づかれる事なく潜入できる。いやあ、実に便利だねえ」

「島が見えてきたわ!」

リルルの声に全員の視線が前方の島に集中する。あれこそが目的地の無人島だ。

「よし、皆高度を下げて。左手の方に岩場が見えるね? あそこに降りるよ」

数分後、岩場に降り立ち、すぐさま装備の最終点検を行う唯斗達。ドラえもん、のび太、ジャイアンの3人も秘密道具を装備する。

ちなみに装備の内訳は、ドラえもんが空気砲、のび太はショックガンと瞬間接着銃、そしてジャイアンはスーパー手ぶくろである。リルルは指から熱線を放つ能力があるため、武器は必要ないと断った。

「正樹さんも何か使いますか?」

「ああ、大丈夫。自前を幾つか持ってきたから」

ドラえもんの声にそう答えると、左腕にはめたオメガの腕時計を見せる正樹。

「腕時計:まさか正樹さん。007ですか?」

「唯斗君、大正解。俺、ああいうの好きでさ。だから、武器に関しては問題ないよ」

「そうですか:でも、必要になったら遠慮なく言ってください」

「ああ、その時は遠慮なく使わせてもらうよ。さて、そろそろ行こうか。皆準備は良いね?」

正樹の言葉にその場の全員が頷く。

「よし、じゃあるネ。手筈通りに頼むよ」

「ああ、ドラえもん。ポルコートを」

「あ、はい」

ルネの言葉に急いで四次元ポケットに手を突っ込むドラえもん。すぐさま、予めスモールライトで縮小しておいたポルコートが取り出され、スモールライトの復元光線で元の大きさに戻される。

「小さくなつた感想はどうだい？ ポルコート」

「なかなか貴重な体験だったね。今度ルネも経験すると良い」

「興味ないね。それよりも害虫駆除だ。派手に暴れるよ！」

「了解！」

ルネが乗り込むと共に走り出し、一気に海へ飛び込むポルコート。派手な水飛沫を上げながら海上を走り、少し離れた砂浜から再上陸。

「攻撃開始！」

「了解！」

上陸するや否や武装を展開し、巧妙に隠されていたトーチカに攻撃を仕掛けるポルコート。小型ロケット弾がトーチカを吹き飛ばし、それを合図に異常事態を告げるサイレンが周囲に鳴り響く。

『緊急事態！ GGG、獅子リオン・レーヌの女王が攻めてきたぞ！』

『総員！ 直ちに迎撃体制を取れ！ モタモタするなあ！』

岩に偽装したスピーカーから怒鳴り声が響くと、すぐさま岩壁の一部が自動ドアのように開き、そこから10体ほどの簡易ハイブリットヒューマンが飛び出していく。

「…あそこから入れるようですね」

「調べる手間が省けたよ」

獣人達が見えなくなつたのを確認し、岩壁へ近づく唯斗達。

「上手く偽装してますね。さつき開いたのを見てなかつたら、これが開くとは思えませんよ」

「問題はどうかやって開けるか…だね。恐らく、パスワードを打ち込む入力装置か何かが、どこかにある筈だよ」

「探す必要はないですよ。これを使えば…：通り抜けフープ！」

そう言うのと四次元ポケットから通り抜けフープを取り出し、岩壁に取り付けるドラえもん。あつという間に中へと続く抜け穴が完成する。

「……………ホント、秘密道具って便利だねえ」

心底関心した様子で呟きながら、抜け穴を通つて内部に侵入する正樹。ドラえもん達も後に続き、監視カメラに見つからないよう、素早く重機の陰に隠れる。

「第1段階、内部への侵入は成功。これからが第2段階。この見取り図を手に入れるよ」

「見取り図って……どこで手に入れるんですか?」

「一番手っ取り早いのは、このコンピュータシステムから頂いちやう……だね。詰め所を探そう。そこならシステムと繋がった端末がある」

そう言うのと正樹は、着ているコートの内ポケットから携帯電話を取り出すと――

「まずは、邪魔なカメラを壊さないかね」

収納されていたグリップを引き出し、下へと曲げた。それに連動して収納されていた銃口が飛び出し、携帯電話が小型のビームガンへと早変わりする。

「おおっ!」

「すごい……」

「月村正樹特製、光線銃兼用携帯電話。カツコ良く名付けるならモバイルフォンプラスター……略してフォンプラスターってところかな」

そう言うのと重機の陰から監視カメラを狙い撃つ正樹。ルナとのび太もウィルブラスターとショックガンで、周囲の監視カメラを破壊していく。

「これでよし……監視カメラが壊れたから、すぐに下つ端どもが様子を見に来る。さっさと移動しよう」

正樹の声に早速移動を開始する唯斗達。監視カメラを壊しながら進む最中、何度もバ
イオネット構成員と遭遇するが――

「やあやあ、お仕事ご苦労さん…悪いけど、暫く寝てもらおうよ」

石ころぼうしの効果で、こちらの存在がまったく認識されないのを良い事に、次々と
打ち倒していく。

その頃、ルネは砂浜で獣人達を相手に大立ち回りを繰り広げていた。

「くらいな！」

ダダダダダダダダダダダ！

ドグオン！ドグオン！ドグオン！

ルネの声と共に、彼女の持つ2丁のウィルスナイパーが同時に火を噴き、無数の弾丸
が発射される。

瞬く間に射線上にいた簡易ハイブリットヒューマン3体が蜂の巣となり、息絶えてい
く。だが、その場にいた全ての敵を倒すには至らない。何体か弾幕から逃げ延びたの
だ。

「ルネ！ 残りは4体！」

「わかってる！」

迫り来る小型無人攻撃機を30mリヴォルバーカノンとショットガンで次々と撃墜しながら、自分に声をかけてきたポルコートにそう答えると、ルネは銃を握る両手の力を込め直す。

「死ねやあつ！」

直後、生き残った個体の1体が、ルネへと跳びかかった。右腕に装備した超振動カッターを起動し、ルネの体を斬り裂こうとするが――

ズバァ！

それよりも早く、ルネがウイルススナイパー01を振り上げ、銃身下部のブレードで相手の右腕を斬り落とした。

「うぎやあああああつ!!」

傷口から噴水のように血を噴出しながら、悲鳴を上げて地面をのた打ち回る相手に、ルネはウイルススナイパー02の銃口を突きつけ――

ダダダダダン！

脳天に弾丸を撃ち込み、止めを刺す。

「クソがあつ！」

それを見たもう1体が、槍を振り回しながら突進。

「くらええつ！」

ルネを貫こうと鋭い突きを繰り出した。

「甘いんだよ！」

だが、ルネはその突きを正面から受け止め――

「はあああつ!!」

咆哮と共に槍ごと相手を投げ飛ばした。一瞬間を舞い、地面に叩きつけられる簡易ハイブリットヒューマン。

ドグオン！ドグオン！ドグオン！

間髪入れず、ルネはウイルスナイパー01の大口径弾を撃ち込んで止めを刺すと――

「さあ、どんどんかかってきな！ 全員地獄に送ってやるよ！」

残る2体の簡易ハイブリットヒューマンにそう啖呵を切るのだった。

一方、詰め所を目指して基地内部を進んでいた正樹達は、詰め所の前に到着していた。

「ドラえもん君、中に何人いる？」

「えつと……4人ですね。監視カメラが次々壊されているから、だいぶ慌てているみたいですよ」

正樹の問いに秘密道具『透視メガネ』で中を確認するドラえもん。

「よし、唯斗君とのび太君。ドアを開けるから制圧よろしく」

「はい！」

「わかりました！」

「じゃあ、いくよ。5、4、3、2、1、0！」

カウントゼロと共に開かれるドア。突然開いたドアに構成員達が振り向いた直後、のび太は目にも止まらぬ速さで引き金を引いた。ショックガンから放たれた光線が、3人を連続で気絶させ――

「はあっ！」

残る1人も、一気に間合いを詰めた唯斗が振るうウィルブレードの一撃をくらい、壁まで吹き飛ばされる。

「ぐへえ……」

猛烈な勢いで壁に叩き付けられ、蛙の潰れたような声を出して崩れ落ちる構成員。

「安心しろ、峰打ちだ」

そう言いながら、ウィルブレードを鞘に収める唯斗。その場にいた構成員全員を倒した事を確認し、中に入ってくる正樹達。

「唯斗君、お見事。のび太君も神業を見せてもらったよ」

「そんな……このくらい大した事ないですよ」

正樹の言葉に照れながら、ショックガンをクルクルとガンスピしながらポケットに

収めるのび太。

「さて、さっさと情報をいただくよ」

気絶した構成員達の拘束を唯斗達に任せ、端末と向き合う正樹は深呼吸を一つすると

「やりますか」

物凄い勢いでキーボードを叩き始めた。

「外部からのサイバー攻撃には相応の備えをしているようだけど、内部からのアクセスには無用心だねえ……よし、見取り図発見。スクリーンに出すよ」

直後映し出される基地の見取り図に全員の視線が集中する。

「今俺達がいる詰め所がここ。ザンダクロスのいる格納庫がここ」

「ピッポは、ピッポはどこに?」

「ちよつとお待ちを……見つけた。どうやら、資材置き場の中に放り込まれているみたいだね。場所は……ここだ」

詰め所と格納庫に印が付けられていた見取り図に新しく印が付けられる。

「格納庫とは、かなり離れていますね」

「これは二手に分かれるのが最善かな……時間も無いんで、俺がチーム分けしてもいいかい?」

全員が領いたのを確認し、チーム分けを行う正樹。その割り振りは、ザンダクロス奪還組が唯斗、ドラえもん、ジャイアンの3人。ピッポ救出組が正樹、ルナ、のび太、ルルの4人である。

「正樹さん、スペアポケットを渡しておきます。何かあつた時はこれから秘密道具を」
「ありがとう。役立たせてもらうよ」

ドラえもんから受け取ったスペアポケットをコートのポケットに収めた正樹は――
「あ、そうそう。唯斗君にこれを渡すの忘れてた」

そう言いながら、5. 56×45 mm NATO弾によく似た形のアイテムをポケットから取り出した。

「……これは？」

「前に話したよね。ウィルブレードとウィルブラスター、そして凱のウィルマチェットに組み込んだ特殊システムの事」

「えーと……たしか、カートリッジシステム」

「そうそう、それぞれ。システムの調整は済んでただけだね。肝心要のGPカートリッジの方に手間取っててさ。とりあえずこれが最終試作品。実戦データ取りたいから、使ってみて」

「了解です」

カートリッジを受け取った唯斗は、早速ウィルブレードの柄を引き伸ばし、露出した補給口からカートリッジを装填する。

「それじゃあ、ドラえもん君、ジャイアン君。行こうか！」

「はい！」

「おう！」

その声と共に詰め所を飛び出す唯斗達。それを見送った正樹は――

「のび太君達。悪いんだけど、あと3分だけ待ってくれるかな？」

そう言って、再び端末に手を伸ばした。

「良いですけど…何をするんですか？」

「ああ、ちよつとしたプレゼントを贈ろうと思ってね…すこぶる性質たちの悪いコンピューターウイルスとか」

「コンピューターウイルスって、そんな物持って来てたんですか？」

「持つて来てたよ…頭の中に。ウイルスプログラムくらい暗記してらって」

リルルの驚きの声に、自らの頭を指で突付きながらそう答えた正樹は、物凄い勢いでキーボードを叩き始めた。そしてジャスト3分後。

「これでよしと。ウイルスは段階的に基地の機能を破壊していく。監視カメラの無効化に始まり、外に出ている小型無人攻撃機の無力化、格納されているATの無力化 e t

c…」

ウィルスを完成させ、端末からシステム中枢に感染させた正樹は、これ以上ないほど邪悪な笑みを浮かながら端末から離れると、のび太達を連れ、詰め所を後にした。

その頃、唯斗達は――

「どけどけどけえー！」

立ち塞がる構成員達を次々吹き飛ばしながら、格納庫への最短距離を突っ走っていた。

「ったく！ 石ころぼうし脱いだら、10秒たたずに敵が殺到かよー！」

「敵の目を正樹さん達から逸らす為に囿になろう。そう言ったのは唯斗さんですよ！」

ドカンー！」

「それはそうなんだけどね！ はあっ！」

「とにかく目の前の奴、全部ぶっ飛ばしや良いんだ！」

そんな会話を交わしながら、どんどん格納庫へ近づいていく3人。その背後には打ち倒された構成員が山積みとなっている。そして――

「格納庫、到着！」

3人は格納庫に到着した。目の前には数十機のATが整然と立ち並び、その奥にはザンダクロスの姿もある。

「ザンダクロスだ！」

「急いで乗り込もうぜ！」

「ああ、だけどそれは、ちよつと待ったほうが良いかもね…いるのは解ってるんだ。出て来いよ」

ザンダクロスに乗り込もうとするドラえもんとジャイアンを制し、1機のATへ向けてそう言い放つ唯斗。すると――

「気配は消していたつもりだったが…よく解つたな」

ATの陰から漆黒のマントを纏った1人の男が現れた。

「どうやら、ゴール前の番人つて所だな…」

「その通り、我が名はギブソン。マティーニ様専属のボディガードにして、この基地の警備隊長だ」

ギブソンと名乗った男は、唯斗達へ歩み寄りながら腰に下げた2本の剣を抜き、その切っ先を突き付ける。

「一応確認なんだけど、黙って通しては…くれないようだな」

「当然だ」

「なら、仕方ない。2人とも下がっててくれ…あいつは俺が倒す」

ドラえもんとジャイアンを下がらせ、唯斗もウィルブレードを抜いた。沈黙の中、2

人が対峙する。そして――

「いざ、尋常に！」

「勝負！」

2人は同時に地を蹴り、剣を交えた。

キーン！

甲高い金属音が響き、2人は睨み合う。

「今は新種だけじゃなくて、鉄人兵団も相手にしてるんだ。お前らにまで付き合ったらるか！」

「なら、ここで俺に斬られる。楽になれるぞ」

「お断りだね！」

直後、2人は互いに距離を取った。すかさず、唯斗が叫ぶ。

「ウイルブレード！ バイパーフォーム!!」

「System change」[システムチェンジ]

「刃龍はりゆう！ 一閃いっせんつ!!」

バイパーフォームに変形したウイルブレードで放つ必殺の一撃をギブソンへ放った。唯斗が刃の龍と例えた強力な攻撃がギブソンへ迫る。

「ちいっ！」

咄嗟に2本の剣をクロスさせ、攻撃をガードするギブソン。だが、そのガードもすぐに弾かれ、そのまま後方へ吹き飛ばされる。数秒後、高速で壁に激突し、崩れ落ちるギブソン。

「やったか…」

ウィルブレードをブレードフォームに戻しつつ、倒れたままのギブソンを睨む唯斗。

「My Master. In response to that attack, it does not seem to be safe」マスター。あの攻撃を受けて、無事だとは思えません」

「ああ、あいつが普通の人間ならね…」

ウィルブレードの言葉に唯斗がそう答えると―

「フツ、残念だが、俺は普通の人間ではないぞ」

ユラリ…とギブソンは立ち上がった。纏っていた漆黒のマントは散り散りに吹き飛び、その中に隠されていた体が露になる。そこにあったのは生身の肉体ではなく…

「メタルサイボーグか…嫌な予感がしたんだよ」

「生身の体は、もはや脳と内臓の一部のみ…だが、変わりに得たこの強靱なる機械の体。その強さを見せてやる！」

そう叫び、唯斗へ跳びかかるギブソン。

「ちいつー！」

ウィルブレードでギブソンの剣を受け止める唯斗。だが、それを皮切りに、ギブソンの猛攻が始まった。

「くっ…！」

時に左右に動き、時に後退しながら、その攻撃を凌ぐ唯斗。攻撃を防ぎながら、ギブソンの攻撃を分析する。

（2刀流、だけどその練度は達人って程じゃない…だったら、いけるー！）

「どうした？ 防ぐのが精一杯か！」

「冗談！」

唯斗はギブソンの攻撃を撥ね退け、一気に後方へ回り込んだ。そのまま、渾身の一撃を叩き込もうとする。

「っ！」

直後、唯斗は言いようの無い悪寒に首筋を撫でられた。それと同時にギブソンの背中の一部が動き出す。

「ちいつー！」

反射的に唯斗が回避運動に入ったのと、ギブソンの背中の一部が跳ね上がったのは、ほぼ同時だった。

「……隠し腕かよ」

そう呟きながら、ギブソンと距離を取る唯斗。

「いい反応だ……褒めてやるぞ」

唯斗のの動きを褒めながら、唯斗の方へ向き直るギブソン。その背中からは1対のサブアームが伸び、それぞれ剣を握っている。

「2刀流から4刀流かよ……数増やせば良いってもんじゃないぞ！」

「ククク……何とでも言うが良い……この4本の剣で、貴様をバラバラに切り刻んでやる！」
 狂気に顔を歪め、唯斗へ跳びかかるギブソン。4本の剣を使った連続斬撃が唯斗を襲う。

「くそっ！」

さすがに4本の剣を防ぐ事は難しいのか、回避に徹する唯斗。その時――

「うおりやあー！」

そんな声と共に、ドラム缶がギブソン目掛けて投げつけられた。

「甘いー！」

自らへ向かって飛んでくるドラム缶を剣の一振りでも両断し――

「小僧、何の真似だ？ 自殺志願なら叶えてやってもかまわんぞ」

物騒極まりない言葉を攻撃の主であるジャイアンにぶつけるギブソン。

「うるせえ！ ジャイアンズのエースで4番、このジャイアン様にそんな脅しが通用するかよ！」

だが、ジャイアンはその脅しに怯む事無く、近くにあったドラム缶を次々と投げつける。

「馬鹿なガキだ。こんな物何個投げつけようと、俺には通じん！」

飛んでくるドラム缶を次々と両断するギブソン。その間にギブソンと距離を取る唯斗へ――

「唯斗さん！ これを！」

ドラえもんが何かを投げた。咄嗟に手を伸ばし、それをキャッチする唯斗。

「これは！」

「名刀『電光丸』。使ってください！」

「2人ともサンキュー！ さあ、仕切りなおしといこうか！」

ウィルブレードと電光丸の2刀流で、ギブソンへ向かっていく唯斗。

「馬鹿め！ 4対2で勝てると思うか！」

4本の剣を振るい、迎え撃つギブソン。だが――

「はあああああつ！」

「ぬうううううつ！」

2刀流の唯斗と4刀流のギブソン、その攻防はまったくの互角だった。いや、僅かに唯斗が押しているようにも見える。

「1本でお前の2刀流とやりあえたんだ。こつちが2刀流になれば、4刀流とだってやりあえるに決まってるだろ！」

正直、非論理的にも程があるのだが、自信満々の口調で言い放つ唯斗に思わず気圧されるギブソン。

「隙あり！」

その隙を見逃す唯斗ではない。ウィルブレードを振るい、ギブソンのサブアーム、その1本を切り落とす。

「ぬおっ！」

サブアームの切断面からオイルを噴出し、苦悶の表情を浮かべるギブソン。

「おのれえ！」

3刀流で唯斗へ斬りかかろうとするが、それよりも早く唯斗の追撃がもう1本のサブアームも切り落とす。

「これで、腕の数は互角…そろそろケリをつけてやる！」

電光石火に突き刺し、ウィルブレードを構え直した唯斗は軽く息を吸い、叫んだ。

「ウィルブレード！ GPカートリッジ、ロード！」

「Roger, Carttridge system starting. Load Carttridge」了解。カートリッジシステム起動。ロードカートリッジ」

ウィルブレードの声と共にシステムが起動。GPカートリッジに内包されていた高密度のGパワーが開放され、ウィルブレードの刀身を緑色の炎が包み込む。

「おおっ！ こりゃ凄いな…」

「From a system startup to 5 second progress. This system is forced simultaneously to terminate. Remaining time, 50, 49, 48, 47…」システム起動から5秒経過。このシステムは60秒経過と同時に強制終了されます。残り時間、50、49、48、47…」

「つとと、ウィルブレード、カウントダウンはまだしなくて良い：そうだな、残り15秒になったらカウント再開。出来るか？」

「Roger, Countdown is resumed from remaining 15 seconds」了解、カウントダウンは残り15秒より再開します」
「よし…待たせたな。再開といこうか！」

唯斗とウィルブレードのやり取りを警戒し、動けずにいたギブソンへ意地の悪い笑み

を浮かべ、そう言い放つ唯斗。

「ちいつ！ そんなこけおどしが通じると思うなあ！」

そんな唯斗の態度に怒りを露にしたギブソンは、両手の剣を振り上げ、唯斗へ斬りかかった。

「いくぜ！」

迎え撃つ唯斗。ウィルブレードとギブソンの剣がぶつかり合う。直後――

「なっ……」

熱したナイフでバターを切るように、刀身の真ん中から切り落とされるギブソンの剣。あわててもう片方の剣を振るうが、こちらも同じ結果に終わる。

「ちいつ！」

使い物にならなくなった剣を捨て、手甲に仕込まれていた予備の剣を抜こうとするギブソン。だが、それを許す唯斗ではない、

「でやあ！」

気合と共にギブソンの腹へ渾身の力で蹴りを見舞い、壁に向けて吹き飛ばす。

「ぐはあ……」

猛烈な勢いで壁に叩き付けられ、蛙の潰れたような声を出すギブソン。

My Master. Remaining time 15 seconds. Co

unt down is resumed 「マスター。残り時間15秒。カウントダウンを再開します」

「よし、これで決める！」

再開されたカウントダウンを聞きながら、フラフラのギブソンへ突進する唯斗。最高速に達した所で地面を蹴り、空中前転――

「はああああ……せいやあああああつ！」

気合と共に、空中からの落下で勢いを増した袈裟切りを放った！

「ぎいやあああああつ！」

ガードを試みた両腕は見事に切り落とされ、左肩から右の脇腹にかけて深い傷を負ったギブソンは、最大級の悲鳴を上げながら、床をのた打ち回る。それを見ながら、オイルブレードを振るい、刀身についたオイルを落とす唯斗。

「3, 2, 1, 0. The end of the time limit. It goes into compulsive cooling of a system from this」3、2、1、0。制限時間終了。これよりシステムの強制冷却に入ります」

同時にオイルブレードもシステムの制限時間を迎え、峰の付け根にあるダクトパーツからカートリッジを排出、水蒸気を噴出して強制冷却に入る。

「な、なぜだ…脆弱な人の体を捨てて…無敵の体を手に入れた…それなのに、なぜ、お前のような……」

「人の体を捨て、力を得た。その事に慢心し、技を磨く事を忘れた。そんな奴に負けるわけねえだろ。いつでも相手になってやる。腕磨いて出直してこい」

息も絶え絶えなギブソンの呟きをそう切り捨て、ウィルブレードを鞘に納める唯斗。

「唯斗さん、ソイツは……」

「ああ、大丈夫。命まではとってないよ。さあ、ザンダクロスへ急ごう」

ドラえもんの不安そうな問いに答えると2人を促し、ザンダクロスへ走り出す唯斗。2人もあわてて後をついていく。その足音を聞きながらギブソンは――

「あのような若造に負け、情けをかけられるなど……なんと屈辱!」

屈辱に顔を歪めると、奥歯に仕込んでいたスイッチを噛み砕いた。そして、5秒後。

「唯斗さん! アイツ!」

「……馬鹿野郎が……」

背後で響く爆発音を聞きながら、3人はザンダクロスへ一直線に進んでいった。

その頃、正樹達は――

「……(イ)だ」

ピツポが閉じ込められていると思われる資材置き場の前に到着していた。

「ジユド！ ジユド！」

友の名を呼びながら、扉を叩くリルル。だが、中からは何の反応もない。

「たぶん、石ころぼうしの効果で、ピツポ君も気がついてないんだね：帽子を脱ぐよ。ルナちゃん、のび太君、帽子を脱いだら、すぐに敵が来る。扉を破る間、迎撃よろしく」

「はい！」

正樹の言葉に答え、前後を固めるルナとのび太。そして、4人が一齐に石ころぼうしを脱ぐと――

「いたぞお！ 侵入者だ！」

「捕らえる必要はない！ 即刻射殺しろ！」

5秒たたずに構成員が接近してきた。それぞれの銃を撃ちまくり、それを阻むルナとのび太。

「2人とも30秒だけ持ち堪えてくれ！」

そう言いながら、正樹は左腕の腕時計を操作。レーザー光線を発射し、扉を溶断し始める。リルルも指からの熱線でそれを手伝った事で、扉の溶断は20秒ほどで殆ど終わり――

「おりゃ！」

正樹の蹴りで、完全に破られた。

「えっと、ジユド君…いるかな？」

そう言いながら、資材置き場に侵入する正樹。直後—

「こんのお！」

ぬいぐるみのような物体が、正樹に体当たりを仕掛けてきた。

「ぐほお！」

「どうだ！ 参ったかピヨ！」

どてっ腹に衝撃を受け、ひっくり返る正樹を見て、勝ち誇るぬいぐるみ。その姿にリルルが声を上げた。

「ジユド！」

「リルル…：…リルル！」

声を上げてリルルに飛びつくピツポ。そのまま声をあげて泣き始める。

「リルル！ よかった、無事だったピヨ！」

「ええ、貴方も無事でよかった…」

「いやはや、無事再会出来て何よりだよ…」

そう言うのと、腹を摩りながら立ち上がる正樹。敵を片付けたルナとのび太も駆け寄ってくる。

「ピッポ！ よかった！ 無事だったんだね！」

「のび太！」

「この子がピッポ君？ 想像していたより可愛いわね」

「失礼な！ 僕はこう見えても男だピヨ！ って言うか、誰ピヨ！」

「僕達の強い味方だよ。この人達のおかげで、助けに来れたんだ」

「そうだったピヨ……さつきは悪かったピヨ」

「いいって、気にしなさんな。さあ、早く唯斗君達と合流しよう」

そう言いながら全員を外へ促す正樹。そして、出口に差し掛かった所でコートのポケットから少し大ぶりのUSBメモリを取り出すと、側面に備えられた小さなボタンを連続で5回押した。

「Blasting system starting」[爆破システム起動]

USBメモリから電子音声が流れたのを確認し、それを資材置き場の奥に投げ捨てる正樹。それから10秒後、USBメモリは大爆発を起こし、資材置き場を火の海に変えた。

「月村正樹特製、高性能爆薬内臓USBメモリ。名付けるなら……ボムメモリってところかな」

資材置き場に置かれていた様々な火気厳禁の資材各種。炎がそれらに引火し、次々と

爆発炎上する音を聞きながら、不敵に呟く正樹。

かくして、ピッポを加えた正樹達は、遭遇する構成員達を次々倒しながら、基地の奥へと進み始めた。

一方、唯斗達は—

「さあ、いくぜ！」

無事にザンダクロスのコクピットに辿り着き、格納庫の破壊を始めていた。

「ザンダクロス！ パンチ！」

威勢の良い声と共にボタンを押す唯斗。だが、ザンダクロスはパンチを放つ事はなく、代わりに両目からレーザーを発射した。放たれたレーザーは前方にあったATに直撃し、破壊する。

「あ、間違えた…！」

「唯斗さん、大丈夫なんですか？ やっぱり、サイコントローラーを使った方が」

「なあに、大丈夫大丈夫。ここならどれだけ壊しても問題ないし、こう言うのは実際に動かしてこそでしょう！」

気を取り直して、レバーを前に倒す唯斗。すると、ザンダクロスが前進を始めた。

「OK OK、大体わかった。伊達にガオガイガーRの操縦とゲームで鍛えてる訳じゃな

いー！」

そう言いながらレバーやボタンを操作する唯斗。それに従い、ザンダクロスはパンチやキック、腹部のビーム砲を次々と放ち、起動前のATを破壊していく。

「あのロボットが動いているぞ！ 侵入者が動かしているんだ！」

「迎撃システムはどうした！ ATを早く動かせ！」

「だめだ！ システムが滅茶苦茶に破壊されてる！ ウイルス攻撃を受けたんだ！」

ザンダクロスが暴れまわる格納庫。何とか状況を改善しようと奮闘する構成員達だが――

「おい！ お前ら！ さっさと逃げないとまとめて吹っ飛ばすぞ！」

ザンダクロスからの脅しめいた言葉を聞き、我先に逃げ始める。格納庫内が無人と化したのを確認した所で唯斗が叫ぶ。

「仕上げだ！ ザンダクロス！ フルバースト！」

その声と共に全身の火器を一斉発射するザンダクロス。ミサイル、ビーム、レーザーの嵐が、残っていたATを次々とスクラップへ変えていく。

「よし、これでATは全部撃破つと……ジャイアン君、操縦交代。格納庫、派手に壊しちゃおう」

「おう！ 任せとけ！」

唯斗から操縦を代わり、凶暴な笑みを浮かべるジャイアン。すぐさま、ザンダクロスによる派手な破壊活動が再開された。

「無人攻撃機、全機制御不能！」

「迎撃に出た簡易ハイブリッドヒューマン、全機反応ロス！
獅子の女王リオン・レウスに倒された模様！」

「監視カメラ、未だ機能回復しません！ ウイルスに基地内のシステムの52%が侵食されています！」

司令室の中央に陣取り、次々ともたらされる凶報を苦虫を噛み潰したような顔で聞き続けるマティーニ。つい30分前まで抱いていた余裕などもはや欠片も残っていない。
そこへ—

「マ、マティーニ様！」

「今度は何事です！」

新たな凶報がもたらされた。怒りを隠す事無く、マティーニは目の前の構成員を怒鳴りつける。

「は、はい…ギ、ギブソン様が…」

「ギブソンがどうしたのです！」

「格納庫内で侵入者と戦闘に入り……撃破されました」

「な、ギブソンが……」

「はい、侵入者はその後、Bカイゼルに搭乗した模様で……」

「それから？ 早く続きを報告なさい！」

「は、はい！ Bカイゼルの攻撃で、格納されていたAT24機は全て大破！ 格納庫自

体も滅茶苦茶です！」

「な、なんとという事を……どこから侵入されたかわからない。侵入者が何処にいるかわからない。お前達は何をやっているのです！」

怒りの言葉を喚き散らしながら、手にした鞭で目の前の構成員を殴り倒すマテイ

ニ。その時――

「ファイア！」

そんな声が聞こえると同時に扉が吹き飛ばされ、4人の男女が踏み込んできた。同時に、それぞれの武器でマテイニを除いた構成員全員を倒してしまう。

「Bonjour Mademoiselle. Comment allez-vous？」
「こんにちは、お嬢さん。お元気ですか？」

気絶した構成員を容赦なく踏みつけながら、流暢なフランス語でマテイニへ問いかける正樹。その顔はこれ以上ないほど意地悪な笑みを浮かべている。

「侵入者とは貴方がたでしたか：プロフェッサー月村」

「俺達以外にも、あと3人いるけどね。今、格納庫破壊の真っ最中。そして、俺達は：お前を逮捕しに来たんだよ」

そう言うのとフオンブラスターの銃口をマティーニへ向ける正樹。ルナ達もそれぞれの武器を向ける。

「大人しく投降するならそれでよし、抵抗するなら容赦無く撃つ」

真剣な顔つきでマティーニに投降を促す正樹。だが、マティーニは—

「生憎、投降の意思は欠片もございません！」

そう言うと同時に正樹達に背中を向け、走り出した。

「逃がすか！」

正樹達も警告なしで発砲するが、天井から降りてきた透明な隔壁が銃撃を防いでしま

う。
「厚さ15cmの特殊隔壁。そんな豆鉄砲では破る事などできません。それでは、ごきげんよう」

芝居がかった動きで正樹達に一礼すると、壁に偽装されていたスロープで司令室から脱出するマティーニ。

「皆下がつて！ ウイルブラスター！ システムチェンジ！ バスターフォーム!!」

「System change」[システムチェンジ]

正樹達を下がらせると同時に、ウィルブラスターをバスターフォームへ切り替えるルナ。

「ファイア!!」

次の瞬間、放たれた強力な光弾が隔壁に巨大な穴を開ける。

「逃がしたか…大方、この先に脱出用の飛行機か何かがあるんだろう」

舌打ちしながらスロープを覗き込む正樹。スロープの中は真つ暗で何も見えないが、微かにエンジン音のようなものが聞こえる。

「逃げられたのは痛い仕方がない。唯斗君達と合流して、ここから脱出しよう。そろそろ仕込んだウイルスが最後の悪さをする頃だ」

『機密保持の為、自爆システムが起動しました。この基地は30分後に自爆します。機密保持の為、自爆システムが起動しました。この基地は30分後に自爆します。機密保持の為—』

「始まったか。皆、急ごう!」

基地中に響き始めたアナウンスを聞き、3人を促す正樹。4人が司令室を後にするのはその直後だった。

それから10分後。

破壊されつくした格納庫で唯斗達と合流した正樹達は、すぐさまザンダクロスに乗り込み基地を脱出。

ルネとポルコートを回収し、エクセルベースへの帰路についていた。

「マティーニは逃がしてしまったが、ピッポ君もザンダクロスも無事奪還。あの基地もあと20分足らずで木っ端微塵。作戦は大成功だね」

「まったくですね。リルルちゃん、ピッポ君と再会できて良かったね」

「ええ、ありがとうございます」

唯斗の言葉に笑顔を浮かべてそう答えるリルル。

「それにしても、ホツとしたら腹が減ったぜ！」

「ホント、随分暴れまわったから、お腹ペコペコだよ！」

「家に帰ったら、腕によりをかけてご飯作るから、もう少し待っててね」

「メニニューは何ですか？ 唯斗さん」

「そうだな…あんかけ焼きそばなんてどうだい？」

「うわあ、美味しそうですね」

コクピット内で交わされる賑やかな会話。その時、突然ザンダクロスの動きがガクン

と止まり、空中に静止した。

「つと、なんだ？」

正樹が計器をチェックするが、反応しない。その時――

『リルル…』

コクピット内に響くピツポの声。

「ジユド、どうしたの？」

『レーダーを見てほしいピョ』

その声に全員の目がレーダーに向けられる。そこには、何かの影が大量に映っていた。

「これは、まさか…」

正樹がそう呟いたその時、ザンダクロスが方向転換し、メインカメラの最大望遠で影の正体を捉えた。

「鉄人兵団！」

無数の影の正体。それは、我が物顔で空を飛ぶ鉄人兵団だった。

「あれは…本隊だわ。でも、どうしてこんなところに…」

「進行方向から考えて…あの基地に向かっているんじゃないかな？」

「基地に？ どうして？」

「きつと、基地を確保する為…」

のび太の問いに静かに答えるリルル。

「私を地球に送り込まれたのも、地球に前線基地を建設させる為……侵略には足がかりとなる前線基地。それも出来る限り大きな基地が必要になるわ」

「なるほどね。どこで知ったか知らないけど、あそこを攻め落として、自分達の基地にする。そんな所だろう」

「基地の自爆に巻き込まれて全滅してくれたら助かるんですけど…」

「自爆まであと17分…多分、プログラムは解除されるだろうね。鉄人兵団ならそこそお手の物だろう。ま、構う事は無いさ。エクセルベースに戻ろう」

「大丈夫なんですか？」

「あの基地の機能は相当低下している。いくら鉄人兵団でも、基地の機能を回復させるには相当な時間が必要だ。こっちもその間に対策を練ろう。第一、この戦力差じゃ分が悪すぎる」

「そうですね…」

「それじゃあ、ピッポ君。全速で飛ばしてくれ」

『わかったピョ』

その声と共にエクセルベースへの飛行を再開するザンダクロス。

基地へと向かっていく鉄人兵団は、これから先起こるであろう戦いの激しさを感じさせるに十分だった。

君達に最新情報を公開しよう!!

ザンダクロスの奪還。それは、鉄人兵団との決戦の幕開けでもあった。

決戦に備え、大改造が施されるザンダクロス。

刮目せよ！生まれ変わったその勇姿を！

一方、鉄人兵団にもある変化がおきようとしていた。

勇者王ガオガイガー公式外伝

ドラえもん 新・のび太と鉄人兵団くはばたけ 天使たちくAnotherStory

y

—EPISODE 8. 5—

『誕生！ ザンダクロス・ブレイズ!!』

次回もこのURLにネオ・ファイナルフュージョン承認!!

これが勝利の鍵だ!!

『ザンダクロス・ブレイズ』

主題歌&挿入歌

主題歌&挿入歌

勇者王ガオガイガー 主題歌 『勇者王再誕!!』

作詞：SS | TAKERU 曲：『勇者王誕生!—神話ヴァージョン—』対応

♪ガガガッ ガガガッ ガオガイガー!

♪ガガガッ ガガガッ ガオガイガー!

♪駆ける! 正義の勇者たち 吼える魂 愛の牙

♪地球を照らすGストーン 遙かな未来 目指すため 今こそ走り出せ!

♪人の命を弄ぶ 悪のゾンダー 迎え討て!

♪ガガガッ ガガガッ ガオガイガー!

♪ガガガッ ガガガッ ガオガイガー!

♪ファイナルフュージョン承認だ! 今だ!超人合体だ!

♪閃光還元！ 『ダイヤモンド・パニッシャー!!』

♪祈り！願ひ！希望の風！ 誕生！次代の命を護りし 鋼の勇者王！

♪ガッガッガッガッ ガオガイガー！

♪集え！無敵のロボ軍団 結ぶ絆に 愛の加護

♪運命さだめを紡ぐGとJ 奇跡の価値を示すため 今こそ出撃だ！

♪いつか目指した地平線 越えて未来を掴むため

♪ガガガッ ガガガッ ガオガイガー！

♪ガガガッ ガガガガッ ガオガイガー！

♪ファイナルフュージョン承認だ！ 今だ！超人合体だ！

♪究極神技！ 『ブレイブダイナマイト!!』

♪息吹き！鼓動！熱血！闘志！ 誕生！不滅の伝説生みだす 光の勇者王！

♪ガッガッガッガッ ガオガイガー！

♪ガガガッ ガガガッ ガオガイガー！

♪ガガガッ ガガガガッ ガオガイガー！

♪ガガガッ ガガガッ ガオガイガー！

♪ガガガッ ガガガッ ガオガイガー!

♪世界!地球!無限の宇宙! 誕生!ぜったい最強無敵さ 僕らの勇者王!

♪ガツガツガツガツ ガオガイガー!

ブレイブガオガイガー テーマソング 『勇者王見参!!』

作詞:SS | TAKERU 曲:『魔神見参!!』対応

♪何より熱く 燃やせ勇気の炎を

♪戦いの彼方に 平和信じて 敵を討て!

♪暗闇を引きつれて 奴らはやってくる

♪人々の絶望を 嘲笑うために

♪たとえこの身が 砕け散っても

♪勇気の光は潰えない 何があっても

♪「ブロウクンファントム!」

♪音速おとより速く 放て 正義の鉄拳こぶしを

♪ 新たなる守護者よ Oh please get peace again
 ♪ 大地を揺るがし 走れ 無敵の勇者王
 ♪ 機界の悪魔へ 熱き光の 矢を放て!!

♪ 血塗られた咆哮が 大地に鳴り響く

♪ 人々の平穏を 奪い尽くすために

♪ 高鳴る鼓動は 獅子の魂

♪ 傷つくことなど恐れない それが勇気さ

♪ 「ブレイブハート!」

♪ 雄々しく強く 振るえ 光の鉄槌

♪ 金色の勇者王 Oh You can win again

♪ 何より熱く 燃やせ勇気の炎を

♪ 戦いの彼方に 平和信じて 敵を討て!

♪ 音速おとより速く 放て 正義の鉄拳こぶしを

♪ 新たなる 勇者王 Oh please get peace again

♪ 何より熱く 燃やせ勇気の炎を

♪ 戦いの彼方に 平和信じて 敵を討て！

設定資料集

キヤラクター編その1

獅子王凱

初登場：—EPIISODE—00—プロローグ—

GGG参謀部機動部隊隊長にして、本作品『勇者王ガオガイガーR』に登場する3人の主人公の1人。26歳。獅子座のA型。

機界新種との戦いの果て、超進化人類エヴォリユダーとなった元地上最強のサイボーグ。

外見こそ普通の人間だが、精密機械へのアクセス能力やサイボーグだった時を上回る身体能力を持ち、更には2時間程度なら宇宙服なしで宇宙空間を活動可能。

本編の4年前、ついに命と結婚（職場での事を考え、夫婦別姓）。そのラブラブっぷりは今でも凄まじく、GGG内でも評判である。

5年の月日が、彼に年齢相応の落ち着きを与えてくれたが、戦闘時は相変わらず熱血で先走りやすい。その為いつも命をハラハラさせている。

天海護

初登場：—EPISODE—00〜プロローグ〜

GGG特別隊員にして、本作品『勇者王ガオガイガー』に登場する3人の主人公の1人。15歳。天秤座のO型。

原種大戦後、全宇宙を機界新種の脅威から救うべく、ギャレオンと共に宇宙へと旅立つ。

その旅路の途中、機界皇帝インフェルノを頂点とする機界33新種の軍勢（ほんの一部）の脅威に晒されていた『星間連合』と出会い、GSTーンと関係技術を供与。

その後、星間連合の技術で強化改修された『Vギャレオン』、そして勇者王『ネクストガオガイガー』を駆って、機界33新種の軍勢（ほんの一部）と戦い、これを退ける。

だが、インフェルノの次なる目標が地球である事を知り、急遽地球へと帰還した。

5年間で身長と体重が大幅に増加しているが、その性格は昔と変わらず元気で素直。

長瀬唯斗ながせゆいと CV：緑川光さん

初登場：—EPISODE—03〜勇者王再誕!!〜

本作品『勇者王ガオガイガー』に登場する3人の主人公の1人。18歳。牡羊座の

A型。

機界31原種との木星決戦時に他界した両親が、旧GGG研究開発部の研究員（獅子王麗雄博士の側近）だった為、ゾンダー戦役の時から凱や麗雄・雷牙両博士と面識があった。

私立創星学園高等部に通う普通の高校3年生だったが、メカノイド『ネオガイガー』、更には勇者王『ガオガイガー』を操縦してZN-01を撃退した事から、大河長官へGGG入隊を直訴。特別隊員として入隊を許可される。

現在は、Gアイランドシティにある実家にて1人暮らし。

半ば偶然の産物とはいえ、疑似エヴオリュダーとでも言うべき存在となつてサイボーグだった頃の凱並の身体能力を得たり、護と握手した際に妙な感覚を覚えるなど、彼自身に何かしらの秘密があるようだが、现阶段では不明。

月村正樹 つきむらまさき CV：子安武人さん

初登場：—EPIISODE—00〜プロローグ〜

護が宇宙へ旅立つてからGGGへ入隊したメンバーの1人で、参謀部部长兼第2研究開発部部长。26歳。射手座のAB型。

凱とは小学校、命とは高校からの付き合いで親友（悪友ともいう）。

機界31原種の地球襲来をきっかけに結成された国際組織『U・S・N』国際科学者連合創立メンバーの1人にして、新生世界十大頭脳最高の頭脳の持ち主。なお、十大頭脳の中での通称は『皇帝』。

基本的に飄々とした物腰で、自他共に認める天才ではあるが、効率や常識より浪漫や格好良さを重視する面があり、誰かが手綱を握らなければ何処までも突っ走っていくある意味危ない人物。

なお、本来ならば新生世界十大頭脳の主席なのだが、「集団を纏めるのが面倒くさい」の一言で、次席に留まっている。

ルナ CV: ?

初登場: | EPISODE | 03 | 勇者王再誕!! |

護が宇宙へ旅立つてからGGGへ入隊したメンバーの1人で、GGG参謀部機動部隊副隊長を務める謎の女性。年齢は推定22歳前後。

常に顔の上半分を覆うタイプの特殊金属製マスクを装着して素顔を隠しており、その正体は不明。

ルナの正体を知っているのは、組織の中でも現在の所大河、凱、火麻、正樹、雷牙の5人だけである。

その黒尽くめのコスチュームは一見頼りなく見えるが、実は最新テクノロジーの粋を集めて作られた逸品である

専用の超高性能バイク『Gストライカー』で颯爽と現場に現れ、適切かつ冷静な指示を送る。

武器の扱いや格闘術にも優れ、その戦闘能力はGGG隊員の中でもトップクラス。その正体は、物語の中で明らかになる予定。

ふじみやしおん
藤宮紫苑

CV：置鮎龍太郎さん

初登場：—EPISODE—000〜プロローグ〜

護が宇宙へ旅立つてからGGGへ入隊したメンバーの1人で、GGG医療部部长兼第2研究開発部副部长を務めるクールな美青年。24歳。乙女座のO型。

GGG入隊前は世界有数の大病院にして、『死者復活以外のあらゆる病気、怪我を治療可能』と称えられる大病院、藤宮総合病院の第1外科部長を務めていた。

母親がイギリス人とフランス人のハーフである為、灰色の髪の毛と青い瞳を持つ。

正樹同様、国際組織『U.S.N』国際科学者連合創立メンバーの1人にして、新生世界十大頭脳末

席でもある。十大頭脳内での通称は『騎士』。

戦略家としての実力も超一流で、堅実だが柔軟な作戦を立てる事を得意とする。

また、紅茶に対して並々ならぬ拘りを持っており、絶品の紅茶を淹れる事はGGG内で常識となっている。

卯都木命

初登場：—EPISODE—00—プロローグ—

GGG機動部隊所属のオペレーター。26歳。水瓶座のO型。

本編の4年前、念願かなって、凱と一緒にになった（職場での事を考え、夫婦別姓）。

童顔と少女趣味、そしてやや引込み思案で涙もろい所は相変わらずで、私室はピンク気味。

また、凱とのラブラブっぷりは、見ている側が恥ずかしくなるほどらしい…。

大河幸太郎

初登場：—EPISODE—00—プロローグ—

GGG長官。51歳。蠍座のO型。

冷静な判断力と何者にも負けない実行力、強い正義感と信念、熱い情熱、限らない優しさと勇気を兼ね備えた好漢であり、全GGG隊員の尊敬と信望を集めている。

いささかナチュラルハイな部分があり、特に戦闘指揮を行っている時はオーバーク

シヨンが目立つ。現在、新承認ポーズを考案中……らしい。

獅子王雷牙

初登場：—E P I S O D E—000プロローグ

G G G スーパーバイザー。78歳。蛇遣い座のA B型。

故獅子王麗雄博士の実兄にして凱の伯父、そしてルネの実父である。

本編の1年前に正樹達へ世界十大頭脳の称号を譲渡。その後も正樹達若き科学者を教え導く為、現役を続行している。

性格は相変わらずファンキーでハイテンシヨン。7人の女性と関係を持ち、合計28人の子どもをもうけた事はあまりにも有名。

猿頭寺耕助

初登場：—E P I S O D E—000プロローグ

G G G 諜報部部长。33歳。牡羊座のA B型。

G G G 全オペレーターを統括するチーフオペレーターを兼任しており、その卓越した頭脳は新生世界十大頭脳の面々にも一目置かれるほど。

ワーカーホリック気味な事が災いして、その風貌は不潔の一言であるが、交際相手で

あるフランスの対特殊犯罪組織シャッセール所属の生体医工学者パピヨンノワールと会う前後だけは清潔な見た目になる。

諜報部所属の勇者ロボ、ボルフォッグとの強い信頼関係は今でも健在。その息のあったやり取りは、職人芸の域に達しつつある。

牛山一男

初登場：—E P I S O D E—003プロローグ

G G G 整備部部长。 28歳。牡牛座のO型。

G G G のあらゆるメカに精通し、メンテナンス、各ツールの調整を統括している。

温和な性格で、植物の世話が趣味。メインオーダールームに美しい花々が絶えないのは彼のおかげである。

また、日本茶を淹れるのが抜群に上手く、その点でも女性隊員達から高い評価を得ていたりする。

スワンIIホワイト

初登場：—E P I S O D E—003プロローグ

G G G 第1研究開発部所属オペレーター。30歳。乙女座のA型。

英語混じりの怪しげな日本語を操る天真爛漫な美女。その見事なプロポーションは美女揃いのGGGでも1、2を争う。

スワヒリ語やヘブライ語にも堪能な語学のエキスパートだが、いずれも微妙に英語訛りが入ってしまうのが玉に瑕。

第5章より、護が操るネクストガオガイガーの合体プログラムドライブを担当する事となる。

スタリオンⅡホワイト

初登場：—EPIISODE—000〜プロローグ

GGG第1研究開発部部长。34歳。射手座のA型。

獅子王雷牙博士の右腕的存在である優秀な科学者で、新生世界十大頭脳に推薦された事もあるが、個人的な事情により辞退している。

妹であるスワンとの仲は良好で、暇を見つけては雷牙博士を加えた3人で、GGG隊員を観客にバンド活動を行っている。

みさわともや
三沢智也

CV：保志総一郎さん

初登場：—EPIISODE—01〜緑と赤そして青（前編）

GGG整備部主任。24歳。牡牛座のA型。

堅実な仕事売りの実直な技術屋。新しい発想をするのは苦手だが、そこにある物を応用する事には長けている。

一男がGGG内で最も信頼する人物の一人で、一般整備部員からの信頼も厚い。丸眼鏡と常に帽子を反対にかぶっているのが特徴。

グラナート⇨カーデイフ⇨月村 CV：南央美さん

初登場：—EPIISODE—01—緑と赤そして青（前編）—

GGG参謀部員。15歳。魚座のO型。

若いののに冷静な観察眼と優秀な頭脳を持ち、ぼーよみの台詞が魅力の美少女。

月村、そしてカーデイフの性からわかるように、参謀部部长兼第2研究開発部部长である月村正樹、フランスの対特殊犯罪組織シャッセール所属のルネ⇨カーデイフ⇨獅子王とは、『他とはちよつと違った親子』である（詳細は現在制作中の外伝参照）。

彼女の立てる作戦は、完璧な戦力比較と計算によって立てられた一部の隙も無い物であるが、反面やや柔軟性に欠ける為、正樹や紫苑の調整が必須である。

仕事中は別だが、プライベートでは正樹の事を『パパ』、ルネの事を『ママ』と呼んでいる。

第5章より、唯斗が操るガオガイガーの合体プログラムドライブを担当する事となる。

戒道幾巳

初登場：—EPISODE—01—緑と赤そして青（前編）—

：赤の星から来た浄解者。14歳。双子座のAB型。

5年間でかなり身長が伸びており、長身の美青年になった。服装も『あの』服装からカジュアルな物に変わっている。

星間連合に助けられた事がきっかけで、護と協力して機界33新種と戦う事を決意する。

クールを装っているが、心の底には結構熱いものが流れている気配あり。

ソルダートJ

初登場：—EPISODE—01—緑と赤そして青（前編）—

：Zマスターとの戦いでかなりの傷を負ったが、なんとか生き残った赤の星の戦士。年齢不詳。

相変わらずプライドは高いが、以前と比べると少しは人当たりが良くなった。

今回は凱の他にも唯斗を始めとする実力者達が揃っている事が、内心嬉しいらしい。。。

星間連合に助けられた事がきっかけで、GGGと協力して機界33新種を殲滅すべく行動している。

文字通り『目にも留まらない』スピードと、両腕に一振りずつ装備された専用必殺剣^{ラディアント・リップ}の切れ味は更に磨きがかかっている。

ルネ・カーデフ・獅子王

初登場：—EPISODE—07　　〈復活〉

：GGG参謀部機動部隊隊員。24歳。誕生日及び血液型は非公開。

皆さんご存知、凱の従姉妹であるサイボーグ。GGGの組織再編成に伴い、シャツセルからGGGへ移籍した。

美しくも苛烈で誇り高い戦いぶりから『獅子^{リオン}の女王^{クイーン}』のコードネームが与えられている事はあまりにも有名。

父親である獅子王雷牙博士との関係は、以前に比べるとかなり改善されているが、それでも『父』と呼ぶ事は憚られるのか、『じい』呼ばわりするのが関の山である。

参謀部部长兼第2研究開発部部长である月村正樹とは恋人関係、参謀部所属のグラ

ナートIIカーディフII月村とは、『他とはちよつと違つた親子』である（詳細は現在制作中の外伝参照）。

パピヨン・ノワール

初登場：—EPIISODE—07　　く復活く

：GGG第2研究開発部員。29歳。誕生日及び血液型は非公開。

GGGの組織再編成に伴い、ルネ同様シャッセルからGGGへ移籍した。

優秀な生体医工学者であると同時に、ルネの肉体的・精神的なケアを行える数少ない人材としても有名。

また、自分自身に関連する事象限定ではあるが、過去・現在・未来を脳内である程度観測することができる『センシングマインド』という特殊能力を持つ。

なお、彼女がどのようなにして猿頭寺耕助と出会い、交際に至るようになったのかは、GGG七不思議の一つと言われている。

綾瀬^{あやせしん}仁　　CV：宮野真守さん

初登場：—EPIISODE—07　　く復活く

：GGG諜報部主任。26歳。山羊座のO型。

元内閣情報調査室副室長。GGGの組織再編成に伴い、諜報部へ引き抜かれた。

社交的な性格で、常に女性への気配りを忘れない生粋のフェミニスト。一方で敵に対しては全く容赦をしない冷酷さも併せ持っている。

武器の扱いや格闘術にも優れ、独自に改造を施した制服やスーツには、数種類の小型手榴弾やダーツ型爆弾、ワイヤーなどを仕込んでおり、その戦闘能力はGGGでもトップクラスである。

キヤラクター編その2

インフェルノ CV：三木眞一郎さん

初登場：—EPISODE—003プロローグ

『地獄』の名を冠し、自らを機界皇帝と称する機界33新種の頂点にして絶対の支配者。

常に白銀の仮面と漆黒のマントを身につけており、その素顔及び体型は不明。

また、—EPISODE—02：緑と赤そして青（後編）に登場し、オービットベースを破壊した個体を始めとする影武者を数多く有しており、本物のインフェルノが姿を現す事は極めて稀と言われている。

全宇宙の機界昇華を企て、配下である32体の新種と数千基の機界城を使って、惑星アスタリアを始めとする多くの星を昇華。そして今、その魔の手を地球へと伸ばしている。

ドラグス CV：鈴木健一さん

初登場：—EPISODE—03〜勇者王再誕!!〜

地球に侵入した新種全27体のリーダー格にして、機界33新種の中での四天王的存在『機界四騎士』の筆頭。

人間態は透きとおるような銀髪を持ち、微笑を絶やさない細身の美少年。

現在はアジトとして利用している大型クルーザーの中でビリヤードに興じるなど、怠惰な日々を過ごしているが、一言で周囲を凍りつかせるなど、内に秘めた冷徹さはかなりの物。

その真の姿は—EPIISODE—07〜復活〜での、GGGとZNN—04バダスとの戦いの最中に初登場。ドラゴンと人を掛け合わせた文字通り『龍人』と呼ぶべき物で、ゲームのルールに違反したバダスを一撃で撃破。その圧倒的な実力の一片を見せ付けた他、自分達機界33新種が、機界昇華に至る手段として、殺人ゲームを行っている事をGGGに暴露した。

ウルフェス CV：稲田徹さん

初登場：—EPIISODE—03〜勇者王再誕!!〜

地球に侵入した新種全27体の1体で、機界33新種の中での四天王的存在『機界四騎士』の第2位。

人間態は抜き身の刃のような雰囲気纏った長身の青年。

アジトとして利用している大型クルーザーに常駐しており、その真の姿は未だ不明。

ステイングス　CV：三石琴乃さん

初登場：『EPIISODE』03「勇者王再誕!!」

地球に侵入した新種全27体の1体で、機界33新種の中の四天王的存在『機界四騎士』の第3位にして紅一点。

人間態は長い栗色の髪を持つ細身の美女。

アジトとして利用している大型クルーザーに常駐しており、その真の姿は未だ不明。

ザイノス　CV：松本保典さん

初登場：『EPIISODE』03「勇者王再誕!!」

地球に侵入した新種全27体の1体で、機界33新種の中での四天王的存在『機界四騎士』の第4位。

人間態は筋肉質の体を持つ大柄な男性。

『EPIISODE』04「着装(前編)」にて、自身ならびに配下のゲーム参加権を取得。地球人をターゲットにした殺人ゲームを開始している。

ローゼス CV:久川綾さん

初登場:—EPISODE—04〜着装(前編)〜

地球に侵入した新種全27体の1体で、ドラグスの秘書的役割を担っている。

人間態は白いドレスを着た黒髪の美女。

GGGに撃破された新種の再生巨大化及びそのプログラムを無差別破壊モードに移行させる権利を有しており、GGGの前に度々姿を現している。

その真の姿は未だ不明だが、人間態のままでも強力な衝撃波を放つ事が出来るなど、その実力は極めて高いと思われる。

スパイダス

初登場:—EPISODE—03〜勇者王再誕!!〜

地球に侵入した新種全27体の1体で、地球上で始めて姿を現した新種。GGG内でのコードネームはZN—01。

最初から巨大な姿で現れた為、人間態は不明。

地球の蜘蛛によく似た特性を持っており、4つの目から放つ破壊光線、背中から放たれる伸縮自在な蜘蛛の足、口から放つ蜘蛛の糸が主な武器。

陽動作戦によってGGGが出撃し、手薄となったGアイランドシティに出現。

意気揚々と破壊活動を行おうとするが、突如出現したネオガイガー、そして新勇者王ガオガイガーRに叩きのめされた挙句、ガオガイガーRの必殺技『バーストヘルアンドヘブン』でその核を抉り取られ、護の手で浄解される。

実はスパイダスのGアイランドシティ襲撃も陽動作戦の一環であり、スパイダスが撃破される間にドラグス達26体は地球への潜入を果たしていた。

ウルフェス曰く「人数合わせで入れられた補欠。口だけは達者な未熟者」

バトラス

初登場：—EPIISODE—04—着装（前編）—

地球に侵入した新種全27体の1体にしてザイノス配下。地球上で殺人ゲームを開始した記念すべきファーストプレイヤー。GGG内でのコードネームはZN—02。

当初より怪人の姿で活動していた為、人間態は不明。

スパイダスが撃破された日の夜より行動を開始。夜の闇に紛れて若い女性8人を殺害した後、朝を待つてGアイランドシティ・ショッピングエリアに出現。逃げ惑う人々を無差別に殺害していくが、凱、J、ルナの3人に撃破される。

ローゼスの手によって再生巨大化した後は、ブレイブ、ネクスト、Rの3大勇者王。そしてネオジエイダーと一戦を交える。

地球の蝙蝠によく似た特性を持つており、大気中をマツハ6で飛行できる他、主な武器として両腕と両足に装備した鉤爪や地球では使用しなかったが両目から放つ破壊光線を持つ。更に切り札として超指向性原子分解攻撃、通称『ソニックビーム』がある。

ソニックビームの一撃でブレイブガオガイガーの右下腕部、そして右肩と翼を破壊するが、「撃たれた後に避けるのが難しいなら、撃たせなければ良い」という考えに至ったガオガイガーによってソニックビームの発信源である喉を潰され、ブレイブガオガイガーの必殺技『ブレイブハート』によって撃破された。

パンジャス

初登場：—EPISODE—06〜疾走〜

地球に侵入した新種全27体の1体にしてザイノス配下。GGG内でのコードネームはZN—03。

人間態はレザールの上下に身を包んだ短髪の女性。

バトラスが撃破されてから3日後に行動を開始。手始めにGアイランドシティ郊外にある廃工場でバイクに乗った5人組の男を惨殺。

その後、『制限時間内に70の獲物を己の爪で斬殺する』というルールを設定し、Gアイランドシティの各所で一般市民を殺害していたが、34人目を殺害した所でGGG諜

報部第3小隊に発見され、戦闘となる。

一旦は最高速度320kmという新幹線以上の俊敏な動きで追跡を振り切るも、捜索が大規模である事を悟り、標的を一般市民からGGG隊員に変更。遭遇した諜報部第5小隊を皆殺しにした後、再び遭遇した第3小隊と戦闘となり、小隊長の池田隊員以外を殺害するも、月村正樹特製のスーパーバイク『Gチェイサー』を駆る唯斗に池田隊員の殺害を妨害されてしまう。

その後暫くの間Gチェイサーとの壮絶なデッドヒートを繰り返すが、下等生物と蔑んでいた人間が自身と互角の速さを持つ事に逆上。

怒りに任せ、唯斗へ襲いかかるものの、密かに後方から付いて来ていたルナによって撃墜され、そのまま埠頭まで輸送。凱、唯斗、ルナの3人に撃破される。

ローゼスの手によって再生巨大化した後は、ガイガーEX、ネクストガオガイガー、ガオガイガーと一戦を交える。

地球の豹によく似た特性を持っており、地上を時速800kmで走行できる脚力と、一振り度高層ビルを両断できる四肢の鋭い爪を武器とする他、切り札として両手の指一本一本が、高出力のビーム砲兼ビームソードに変化する。

ビームソードの一振りで、ガオガイガーのヘッドギアを破損させ、左の鍬形を切り落とす事に成功するが、最終的には両腕を白羽取りされた上に押し折られ、更にネクス

トガオガイガーの必殺技『フルブラスト』『ヘル・アンド・ヘブンウィータ』を連続で受けた事で撃破された。

バダス

初登場：—EPIISODE—06〜疾走〜

地球に侵入した新種全27体の1体にしてザイノス配下。GGG内でのコードネームはZN—04。

パンジャスが撃破されてから5日後に行動を開始。

自ら課したルールの詳細は不明だが、ビルの屋上から男性を投げ落として殺害していた。

1人目の殺害直後、偶然殺害現場に居合わせ、諸々の事情から素手での戦闘となったルネ・カーディフ・獅子王を一方向的に甚振り、2人目の獲物として止めをさそうとするが、GGG諜報部主任綾瀬仁に阻止される。

仁との戦闘を経て、GGG機動部隊との戦闘に突入。配下のゾンダーソルジャーを尽く倒されたことで、その場から逃走を図るも、月村正樹から専用装備『Gクラステクター・セイバータイプ』と『ウイルスナイパー01&02』を受け取ったルネによって阻止されてしまう。

その後、ルネと1対1の戦いとなるが、先程とは逆にルネによって叩きのめされ、容易く撃破されてしまう。

ローゼスの手によって再生巨大化した後は、ブレイブガオガイガーと一戦を交える。

地球の蝗によく似た特性を持っており、地上を時速630kmで走行し、一跳びで500mを跳躍する脚力と、両目から放つ破壊光線を武器とする他、格闘戦も得意としていたが、ブレイブガオガイガーの前には全く歯が立たず、増援で現れたガオガイガーの一言に逆上。ゲームのルールを破り、地球上に機界城を召喚しようとする。

だが、それはドラグスによって阻止され、必死の弁明も空しく、ドラグスの手で粛清された。

なお、使用しなかったが切り札として、周囲の物体を取り込み作り出した蝗型生体ミサイルを全方位に間断なく発射する能力を持っていた。

ヴェスパス

初登場：—EPIISODE—06〜疾走〜

地球に侵入した新種全27体の1体にしてザイノス配下。GGG内でのコードネームはZN—05。

人間態はラッパ―風の服装に身を包んだドレッドヘアの男。

パンジャスが撃破されてから7日後に行動を開始。

『口の針を使って、1ヶ所につき10の獲物を撃ち殺す。これを繰り返して、制限時間内に120の獲物を仕留める』というルールを設定し、夜間Gアイランドシテイの各所で一般市民60人を殺害。残る60人は日中に殺害する事を宣言し、翌朝行動を再開。

しかし、『一番最初に殺人を行った場所を起点に、一筆書きで星形多角形を描くように移動し、新たな殺人を行う』という行動パターンをGGGに解析されていた為、急遽目標をGGG機動部隊に変更し、攻撃を開始する。

だが、能力が解析されていた事もあり、自慢の針は一発も命中しないまま、新しいボディに生まれ変わったポルコートの攻撃で撃破される。

ローゼスの手によって再生巨大化した後は、ガイガーEX、ネオガイガー、Vガイガーと一戦を交える。

地球の雀蜂によく似た特性を持っており、大気中をマツハ5で飛行できる他、右腕からは10発限定だが射程と威力に優れた大型の針を、左腕からは速射性を重視した小型の針を放つ他、両目から放つ破壊光線を武器とする。

更に切り札として雀蜂型の自立式攻撃端末を体内で生成する能力を持つ。この端末は一度に14基まで生成可能で、撃破されても時間を置けば再生成可能。

左腕から放つ針による弾幕で、ガイガーEXとネオガイガーのファイナルフュージョンを妨害。更に端末を使った全包围攻撃でガイガーEXとネオガイガーにダメージを与え、一時戦線離脱させることに成功するも、ルナ、ルネ、ポルコートが増援に駆けつけた事、そしてガイガーEXとネオガイガーが戦線復帰した事で戦況は一転。最終的にはネクストガオガイガーの必殺技『フルブラスト』を受けた事で撃破された。

メカニックス編その1

ブレイブガオー

初登場：—EPIISODE—01—緑と赤そして青（前編）—

ガオガイガーに代わる地球圏防衛戦力開発計画。通称『GRプロジェクト』による新型スーパーメカノイドの建造にあたり、ギャレオンに替わってスーパーメカノイドの核となるべく月村正樹が設計開発した新型ガオーマシン。

人型への変形を前提として設計されたため、従来のどのガオーマシンとも一線を画する形状をとっているが、フアントムリングを利用した慣性制御により類希な機動力を発揮するほか、換装無しで大気圏内外を問わず航行することができる。

パイロットの獅子王凱とフュージョンして、戦闘形態であるガイガーEXに変形する。

型式：ガオーマシン

パイロット：獅子王凱

AI型式：BRAVE

全長：22.2m

全幅：21.4 m

全高：5.4 m

重量：88.5 t

動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブver2.8×1

GSNEXT-RIDEクラス：機密

構造：アルティメットフレーム

出力：over187,552kW(255,000馬力以上)

巡航飛行速度：4321.8 km/h(マツハ3.5)

最高飛行速度：6791.4 km/h(マツハ5.5)

推進機関型式：ウルテクドライブ

バリアシステム：GパワーバリアシステムVer2.1

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4.871×10⁶~13J相当

物理防御システム：ネクストレーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：5.981×10⁶~7J相当

武装

25mm機関砲

：両翼基部に合計2基装備された機関砲。

主に敵機への威嚇・牽制やミサイル迎撃等の近接防御に使用される。

ガイガーEX エクセリオン

初登場：『EPIISODE1』緑と赤そして青（前編）

獅子王凱がブレイブガオーとフュージョン、変形することで完成するメカノイド。

開発コンセプトは、『絶対的な機動性と格闘戦能力をもつて正面突破を可能にできる機体』。

頭部の17.5mmCIWS以外の全武装を近接戦用装備に統一。

射撃系装備を装備しなかった事で生じた設計的余裕に推進剤を追加し、更に光学系装備を装備しなかった事で余裕の生じたジェネレーター出力を、全て推進機関に集中させた事で、驚異的ともいえる突進性能を誇る。

ガイガーと同様に腕部にドリルガオーEXを分割装備した『ドリルガオー装着モード』、背面にステルスガオーEXを装備した『ステルスガオー装着モード』をとることもできる。

ドリルガオーEX、ライナーガオーEX、ステルスガオーEXの3機のEXガオーマシンとファイナルフュージョンして、ファイティングメカノイド・ブレイブガオガイ

ガーとなる。

なお、これは余談ではあるが、このあまりに古臭く極端すぎる設計コンセプトは、開発発表当時『これからの機動兵器に求められるのは高い汎用性。時代の流れに逆行した機体等、戦場では何の役にも立たない』と、多くの国連軍関係者から失笑を買った事は有名な話である。

だが、機体完成後に行われたGGGと国連軍の合同訓練において、国連軍はその戦力の約7割をガイガーEX1機に撃破されたのは、更に有名な話である。

型式：メカノイド

パイロット：獅子王凱

AI型式：BRAVE

全高：23.3m

重量：88.5t

動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブver2.8×1

GSNEXT—RIDEクラス：機密

構造：アルティメットフレーム

出力：over300,083kW(408,000馬力以上)

最高走行速度：370km/h

最高飛行速度：1728・72 km/h (マッハ1.4)

推進機関形式：ウルテクドライブ

バリアシステム：GパワーバリアシステムVer2.1

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4・871×10⁶~13J相当

物理防衛システム：ネクストレーザーコーティングG装甲

物理防衛システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：5・891×10⁶~7J相当

フュージョン所要時間：23・166秒

特殊装備

GFシステム

：正式名称G-Forcefieldシステム。

四肢にGパワーの力場を纏う事で、格闘攻撃力を飛躍的に上昇させる。

武装

17・5mmCIWS

：頭部に2基装備されたCIWS。近接防衛火器システム

一般的なCIWSよりも小口径だが、弾芯や炸薬の改良、装弾数の増加、発射サイクルの高速化等により、同等以上の威力を獲得している。

主に敵機への威嚇・牽制やミサイル迎撃等の近接防御に使用される。
 ガイガーファンク

：両前腕部に装備された鉤爪状の近接戦闘用装備。

ガイガーEXの主攻撃用装備である。

ニー・インパルサー

：両膝部に装備された錐状の近接戦闘用装備。

普段は膝の内部に収納されており、必要に応じて展開する仕組みになっている。

プログレッシブ・ブレード

：両爪先と踵に内蔵されている近接戦闘用高振動ブレード。

高振動を発するブレードを展開する事で、相手を蹴り上げると同時に切り裂く。

ステルスガオーEX

初登場：—EPIISODE—01（緑と赤そして青（前編））

GRプロジェクトの一環で開発された新ガオーマシンのうちの一機。

全幅30m以上の垂直離着陸型ステルス爆撃機である。

両翼下部の巨大なエンジンユニット等、基本的な構造やシルエットは初代ステルスガオーに酷似しているが、機能的には多分の改良が加えられており、その外観もより洗練

されたものとなっている。

ブレイブガオガイガーへのファイナルフュージョン時には背面翼、両前腕部を構成する。

型式：ガオーマシン

全幅：35.4 m

重量：125.0 t

動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブver2.8×1

GSNEXT—RIDEクラス：機密

構造：アルティメットフレーム

出力：over132,390 kW (180,000馬力以上)

最高飛行速度：1975.68 km/h (マッハ1.6)

推進機関型式：スクラムGタービンジェットVer2.4×2 / ウルテクドライブ

バリアシステム：GパワーバリアシステムVer2.1

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：3.321×10⁶ ~ 13J相当

物理防御システム：ネクストレーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4.241×10⁶ ~ 7J相当

特殊装備：マルチパイロン
備考・オプション武装を装備する事で、戦闘攻撃機として運用可能。

ドリルガオーEX

初登場：—EPIISODE—01—緑と赤そして青（前編）—

GRプロジェクトの一環で開発された新ガオーマシンのうちの一機。

連装採掘錐突撃戦車型ガオーマシンで、ファイナルフュージョン時には脚部を構成する。

旧ドリルガオーからの最大の変更点は、ドリルの回転方式の変更、即ち各ブロックをそれぞれ独立に回転させるようにした点と、ドリルにブレードを設置し、更なる攻撃力増強を図った点である。

これ以外には、もちろん機体の基本性能は格段に向上しているものの、ステルスガオーEXやライナーガオーEXの様に機体の外観における大きな変化はない。

これは旧ドリルガオーが1機動兵器として、また巨大メカノイドの1パーツとして、非常に高い完成度を持つていた事の証明である。

旧ドリルガオー同様、機体は左右に分割可能で、更にそれぞれを独立して長時間に渡って運用できるようになっている。

この機能を用いた緊急回避行動はもちろんのこと、左右それぞれをガイガーEXの腕部に装着、攻撃力および防御力の増強を図る『ドリルガオー装着モード』も健在である。

型式：ガオーマシン

全幅：18.4 m

重量：298.0 t

動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブver2.8×1

GSNEXT—RIDEクラス：機密

構造：アルティメットフレーム

出力：over187,552 kW (255,000馬力以上)

最高走行速度：175 km/h

推進機関型式：ウルテクドライブ

バリアシステム：GパワーバリアシステムVer2.1

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：3.811×10の13乗J相当

物理防御システム：ネクストレーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4.522×10の7乗J相当

武装

ドリル

：機首に装備された一対のドリル。

使用の際は目標に肉薄する必要があるので、強力な破壊力を誇る。

また、ドリルの回転によって先端部にGパワーのバリアが発生し、ドリル自体の摩滅損傷を可能な限り減少させている。

ライナーガオーエ X

初登場：—E P I S O D E — 0 1 — 緑と赤そして青（前編）

GRプロジェクトの一環で開発された新ガオーマシンのうちの一機。

新幹線型であった旧ライナーガオーからデザインを一新、未来的なデザインのロケット型となった。

ファイナルフュージョン時には両肩部を構成する。

形式：ガオーマシン

全高：13.2 m

全長：24.6 m

重量：128.5 t

動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブ v e r 2.8 × 1

G S N E X T — R I D E クラス：機密

構造：アルティメットフレーム

出力：over 95, 615 kW (130, 000馬力以上)

最高飛行速度：35191.8 km/h (マッハ28.5)

推進機関型式：ウルテクドライブ

バリアシステム：Gパワーバリアシステム Ver 2.1

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：3.281×10⁶ ~ 13J相当

物理防御システム：ネクストレーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4.190×10⁶ ~ 7J相当

ブレイブガオガイガー

初登場：『EPIISODE 1』緑と赤そして青（前編）

メカノイド『ガイガーEX』・ドリルガオEX・ライナーガオEX・ステルスガオEXがファイナルフュージョンして完成する新たな勇者王。

ファントム&ウォールリングの発展型であるネオファントム&ウォール両リングを標準装備している。

更に動力機関にはGSライドの発展型である『GSNEXT-RIDE』を、推進機

関にはウルテクエンジンの発展型『ウルテクドライブ』を搭載。

それに、エヴォリユダー化した獅子王凱の能力がプラスされ、ガオガイガー（ウルテクエンジン搭載仕様）を凌駕する戦闘能力を誇る。

なお、ブレイバガオガイガーの正式名称はBattle・Revolution・Advanced・Victory・Excellent・GOGAIGERであり、『戦闘において革命的に進歩し、勝利する素晴らしき勇者王』を意味する。

型式：ファイティングメカノイド

パイロット：獅子王凱

搭載AI型式：BRAVE

全高：32.0m

重量：640.0t

動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブver2.8×4

GSNEXT-RIDEクラス：機密

構造：アルティメットフレーム

出力：over19,858,466kW（27,000,000馬力以上）

最高走行速度：200km/h

最高飛行速度：6420.96km/h（マッハ5.2）

推進機関形式：ウルテクドライブ

バリアシステム：GパワーバリアシステムVer2.1
プロテクトシールド
(ウォール)

バリアシステムによって耐久可能な最大エネルギー負荷：9.118×10⁶～15J
相当

物理防御システム：ネクストレーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：9.637×10⁶～8J相当

ファイナルフュージョン総所要時間：62.328秒

特殊装備

GFシステム

：正式名称G-Forcefieldシステム。

四肢にGパワーの力場を纏う事で、格闘攻撃力を飛躍的に上昇させる。

使用ハイパーツール

デイベイディングドライブ

：旧GGG研究開発部が開発した超ハイテクツール。

対機界文明の作戦における周辺地域への被害、主に建造物および人的被害を抑制するために使用される。

ある一点に対し、エネルギーを放出させ、反発空間と固縛空間を円または球状に発生させることができる。

この二つの空間の相互作用により空間が湾曲され、周囲の物体を空間ごと凝縮移動、その結果半径数十キロ、深さ約300メートルの何も無い空間を地上に作り出し、その空間を戦闘フィールドとすることで、周囲への被害を最小限に食い止めることができる。

この空間は一定時間経過するとレプリシオンフィールドが消滅し、凝縮移動していた周囲の物体は破損する事なく、空間ごと元の位置に修復される。

ただし、この際、フィールド内に異物があると、ブラックホール並みのエネルギーの均衡が崩れ、そのエネルギーの放出により大爆発、周囲の物体をも跡形も無く消滅させてしまう。

ガトリングドライバー

：旧GGG研究開発部が開発した超ハイテクツール。

戦いの場が宇宙に広がった事に伴い開発された宇宙用デバイディングドライバー。ただし、その使用法は旧来のものとやや異なるものとなり、空間湾曲形態も『押し広げる』のではなく『回転させる』ものへと変更されている。

デバイディングドライバーの目的は戦闘による周辺への被害の防止であるが、半径

約10kmという広大な戦闘空間を以って、敵の逃亡を容易にさせないことも含まれている。

このガトリングドライバーはその目的を戦術の一面にまで集約、昇華したもので比較的弱いディバイディング・コアを多数目標に打ち込むことにより、空間、即ち目標の身体を回転湾曲させ、その一切の行動を抑止するものである。

なおこのガトリングドライバーにも『ブラックホールに匹敵するほどのパワー』は健在であり、その応用として一定の空間を回転、集約することにより、『重力レンズ』を形成。ソリタリーウエーブなどのエネルギーの流れを収束することが出来る。

デイメンジョンプライヤー

：旧GGG研究開発部が開発した超ハイテクツール。

異常空間の一部を一種のアレスティングフィールドで拘束、続いて単一指向性レプリジョンフィールドによって宇宙空間まで放り上げる。

基本的には空間修復の為のツールであるが、旧GGG機動部隊が対E1-01時に使用したフォーメーション攻撃『プラチナフォーメーション』のように目標のバリアシステムを空間ごと排除する等の攻撃手段としても用いられる。

マーグハンド

：ゴルデューマーグがセーフティを解除され、分離変形するツール形態の1つ。

頭部と分離した胴体部がキューブ状に折りたたまれ、内部より巨大な掌部が展開、ブレイブガオガイガーの右腕に装ハンマーコネク着することでブレイブガオガイガーにハンマーヘル・アンド・ヘヴンを使用可能にする新たな右腕となる。

なおマীগハンド装着中、ブレイブガオガイガー本来の右腕は、背面のステルスガオーEXに接続されている。

マীগハンドはゴルディオオンハンマーによって発生する重力波活断ウェーブの固有振動を緩衝し、ガオガイガーと自身をこれから保護している。

また機界文明の機動兵器の中核である核を捕獲する目的でゴルディータンク形態時に使用されるタイヤの中心部に『マীগネイル』を、またこれを回収するためのクローが装備されている。

クローは1基につき2本のネイルを同時回収できる為、ガオガイガーは条件さえ揃えば理論上最大4つの核を同時回収する事が可能。

また装着したマীগハンドをロケット噴射にて射出、目標に衝突させる『ゴルディオンマグナム』なる裏技も存在する。

ゴルディオオンハンマー

：正式名称グラヴィティシヨックウェーブジエネレイティングツール。

柄の部分にはマীগキャノンが内蔵されている。ヘル・アンド・ヘヴンに替わる新た

な必殺技で、ブレイブガオガイガーの右腕に装備される。

ゴルディオンハンマーはまず強力な重力波を目標に照射する。強力な重力波の中では重力が大きく変動する為に、この変動にさらされた物体は粉碎される。同時に衝撃波のようなほぼ垂直に立ち上がる波面を作り出し叩き付けることにより目標を光子レベルまで分解、完全に破壊する。

その威力は絶大で、初使用時にはガオガイガーの右半身を犠牲とせねばならなかった事はあまりに有名である。

理論上、この攻撃に耐えうる物質は存在しない。正に史上最強。勇者王の名に恥じない必殺技である。

武装

プロテクトシールド

：ブレイブガオガイガーの両前腕部に装備された防御用装備。空間を湾曲させ、ごく薄い防御空間を形成する。

この空間は強い反発効果を有しており、ここに到達した光学攻撃の蓄積、反射が可能。また砲弾やミサイル等の物理的攻撃も高い確率で防御空間を突破する事はできず、プロテクトシールド表面においてほぼ完全に防御される。

プロテクトウォール

：ブレイブガオガイガー胸部から展開される高密度エネルギーリング『ネオ・ウォールリング』。ブレイブガオガイガーの両前腕部に装着して放つ強化型プロテクトシールド。

プロテクトシールドの防御空間を更に強力に、更に広範囲に、かつ二重三重に形成することが可能となる。

ただし、使用にはネオ・ウォールリングを展開し、前腕部に装着しなければならぬ為、即応性という点ではプロテクトシールドに劣っている。

ドリルニー

：ブレイブガオガイガーの膝部に装備された近接格闘用装備。

ドリルガオEXのドリルにより攻撃力を倍加した膝蹴りで、旧ガオガイガーの物と比較して、ドリルの回転方式の変更、即ち各ブロックをそれぞれ独立に回転させるようにした点と、ドリルにブレードを設置し更なる攻撃力増強を図った事から、時としてブロウクンマグナムをも上回る攻撃力を発揮する。

その用途は主に奇襲や追い討ちであるが、目標の格闘攻撃に対する交差攻法としても有効に用いられている。

これは攻撃をドリルニーで防御する事で、目標が攻撃に使用した部位を破壊、すなわち目標の攻撃能力を奪う事ができる、極めて攻撃的な防御方法である。

ブロウクンマグナム

：ブレイブガオガイガーの近距離および中距離戦闘用の装備。両前腕部を高速回転させ射出、目標を文字通り『粉碎』する。

射出された前腕部は先端の拳部分に強力なGパワーによる力場を発生させており、機界文明のバリアシステムをも力づくで突破することが可能。

拳部分と前腕部分は互いに反転しており、これにより射出後の軌道を安定させているが、ある程度ならばパイロットである凱の意志により軌道を変更することができる。

目標に命中した後は、自動的にブレイブガオガイガーに再接続される。

ブロウクンファントム

：ブレイブガオガイガーの胸部から展開される高密度エネルギーリング『ネオ・ファントムリング』。これを両前腕部に装着して放つ強化型ブロウクンマグナム。

装着された『ネオ・ファントムリング』は自身が高速リニア回転することで強力な力場を発生させる。この力場は物体を『空間的に』破壊することができる。ブロウクンマグナムの威力を大幅に増大させることができるのである。

更にこの力場がブロウクンマグナム自身への攻撃を防ぐバリアシステムをも兼ねている為、ブロウクンマグナムの欠点であった『射出されたブロウクンマグナム自体は無防備な状態である』をも克服している。

ゴルディオンマグナム

・ゴルディオンハンマー及びマーグハンド装着仕様においてのみ可能な、一種の裏技。
ブロウクンマグナムなどと同様に、右腕に装着された対グラヴィティシヨックウエー
ブ防御ツール・マーグハンドをロケット噴射にて射出、目標に衝突させることでこれを
破壊する。

ブロウクンマグナムやブロウクンファントムのように回転することがないため、バリ
アに対する貫通力は低いですが、その巨大な質量そのものが武器となり、目標を粉砕する。

TV版第43・2話『金の牙、銀の爪』で当時サイボーグだった凱が咄嗟の機転を働
かせ、使用したのが最初である。

ちなみに、推進用のロケットはこのために装備されたものではなく、本来ゴルディ
マーグにハンマーコネクトのための短期飛行を行わせるためのものである。

これはゴルディーマーグ開発の段階において明らかに想定されていなかった使用法
である。

こうした各種ツールに対するGGG機動部隊、特に獅子王凱の応用能力の高さは特筆
に価するだろう。

ゴルディオンハンマーは一撃必倒の究極ツールであり、これによって破壊できないも
のは理論上存在しない。

だが、万が一ゴルディオオンハンマーの使用が封じられるようなことがあった場合、ゴルディオオンマグナムは意外な武器となってGGGを勝利へと導くだろう。

必殺技

プラズマホールド

：プロテクトシールド展開の際に発生する反発的防御フィールドを反転させ、その内部に目標を捕縛、フィールドの反発作用によって敵の行動を封じる。

その際フィールド内では激しい電離現象が生じ、これが目標の電子機器を破損させる付随的効果もある。

ヘル・アンド・ヘブン

：右掌に攻撃エネルギー、左掌に防御エネルギーをそれぞれ集中させた後、掌を組み合わせることで両者を集中融合、同時にファイナルフュージョン時に発生させるEMトルネードを利用して目標を拘束。

そこへ融合エネルギーを両掌に集中させたブレイブガオガイガーが突撃、目標の核を摘出すると同時に掌に集中させた融合エネルギーを目標機体内で解放、目標を内部から完全に破壊する。

ブレイブハート

：EPIISODE 01（緑と赤そして青（前編））にて初使用したブレイブガオ

ガイガーオリジナルの必殺技。

物質化寸前まで圧縮したGパワーで作り出した光の矢を胸部から発射する。

追尾機能こそ皆無であるものの、極めて高い速度と切断・貫通性能を持ち、半端な敵ではまともに反応さえ出来ず、ほぼ棒立ちで攻撃を受ける事となる。

ハンマーヘル・アンド・ヘヴン

：ブレイブガオガイガーの最強必殺技。

装着したマーズグハンドからマーズグネイルを取り出し、これをゴルディオハンマーで目標の核に打ち込む『ハンマーヘル』と、打ち込まれ目標の核を捕捉したマーズグネイルを、マーズグハンドに装備されたクローで引き抜くと共にゴルディオハンマーで目標の機体を完全消滅させる『ハンマーヘヴン』からなり、これによりガオガイガーは中枢にある獅子王凱に消費エネルギー以外の負担を与えること無しに、しかも同時に最大4つの核を回収することが可能となった。

高速の突進から放たれるこの攻撃を回避しきることは困難であり、またネイルを打ち込まれた機界文明の管理下にある機体はネイルから発せられるGパワーのエネルギー粒子によって機能不全を起こし、逃亡することは実質上不可能。

更にゴルディオハンマーの一撃によって目標の機体を消滅させることで目標の爆発による被害を未然に防ぐ事が可能である。

まさに勇者王の名に恥じない最強の必殺攻撃といえよう。

Vギャレオン

初登場：—EPIISODE—01—緑と赤そして青（前編）—

宇宙へ旅立った護が宇宙で出会った新たな仲間『星間連合』。その星間連合によつて強化・武装改造を施され、飛躍的なパワーアップを遂げたギャレオン。

それが新たなギャレオン『Vギャレオン』である。

攻撃力、防御力、機動性全ての面で強化前を上回っており、その戦闘能力は旧ガオガイガー（ウルテクエンジン搭載前）に匹敵する。

護少年とフュージョンする事で戦闘形態であるVガイガーに変形する。

型式：メカライオン

全長：9・8 m

重量：120・0 t

搭載AI型式：GALEON（Cain）

動力：ウルテクエンジン一体化型オリジナルGドライブ×1 ネオGドライブ×1

GSライドクラス：機密

構造：ネオシームレスマウント

出力：over 209, 617 kW (285, 000馬力以上)

最高走行速度：470 km/h

巡航飛行速度：5186, 16 km/h (マッハ4.2)

最高飛行速度：7655, 76 km/h (マッハ6.2)

推進機関形式：Gインパルスドライブ ウルテクブースター

バリアシステム：改良型Gパワーバリアシステム

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷・5. 138×10⁶ 13 J相当

物理防衛システム：改良型レーザーコーティングG装甲

物理防衛システムによって耐久可能な最大衝撃負荷・6. 441×10⁶ 7 J相当

特殊装備

ギャレオンローア

：ギャレオンの咆哮。

これにはゾンダーバリアを分解する作用があり、これによりVギャレオンはバリアに阻まれる事無く新種に接近することが可能になる。

その原理の詳細は極秘扱いとなっているが、おそらくはGパワーの振動によって新種のバリアを形成するレプリクションフィールドを崩壊させているものと思われる。

ウルテクブースター

：ウルテクエンジンを応用した急加速用ブースター。

普段は背面に内蔵されており、使用時に展開される。

起動する事により最高で60秒間、Vギャレオンに爆発的な推進力を与える。

装備

ギャレオンファング

：ギャレオンの口腔内に装備された牙状武器。

強化前よりも大型化しており、ゾンダーレギオン程度であれば装甲を易々と噛み千切る事が出来る。

ちなみに噛み付いている間もバリア分解作用を持つギャレオンローアーを使用することが出来る。

ギャレオンクロー

：ギャレオンの四肢先端に装備された爪状の近接戦闘用武器。

強化前よりも大型化しており、引き裂くというよりも叩きつけるようにして、目標を破壊する。

バリア分解作用のあるギャレオンローアーと併用するのがセオリー。

レーザーチャージングブレード

：ギャレオンの両前足にそれぞれ一本ずつ装備されたブレード。そのままの状態でも優れた切れ味を誇るが、エネルギーを纏わせる事で切れ味をさらに上昇させる事が出来る。

Vギャレオンはこのブレードを展開したまま高速で目標に接近し、目標を切断する戦法を得意とする。

ブレードキャノン

：レーザーチャージングブレードの柄部分に装備された小口径ビームキャノン。連射性と命中精度に優れた装備である。

Vガイガー

初登場：—EPISODE—02—緑と赤そして青（後編）—

護少年がVギャレオンとフュージョン、変形することで完成するメカノイド。正式名称はヴィクトリーガイガー。

敏捷性に優れ、近接戦を主体に戦う。

基本的に護少年の意志で動くが、危機に際してはギャレオンが強制的に制御する場合もある。

ウイングガオー、ストライクガオー、ソニックガオー、ブリッツガオーの4機のネク

ストガオーマシンとネクストフュージョンして、ファイティングメカノイド・ネクストガオガイガーとなる。

型式：メカノイド

パイロット：天海護

AI型式：G A L E O N (C a i n)

全高：23.5 m

重量：120.0 t

動力：ウルテクエンジン一体化型オリジナルGドライブ×1 ネオGドライブ×1

GSライド及びネオGSライドクラス：機密

構造：ネオシームレスマウント

出力：over 323, 619 kW (440, 000馬力以上)

最高走行速度：380 km/h

最高飛行速度：2469.6 km/h (マッハ2.0)

推進機関形式：Gインパルスドライブ ウルテクブースター

バリアシステム：改良型Gパワーバリアシステム

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：5.138×10⁶、133J相当

物理防御システム：改良型レーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷・6・441×10⁶ J相当

フュージョン所要時間：23・166秒

特殊装備

ギャレオンローア

：胸部から放たれるギャレオンの咆哮。

これにはゾンダーバリアを分解する作用があり、これによりVガイガーはバリアに阻まれること無く新種に接近することが可能になる。

その原理の詳細は極秘扱いとなっているが、おそらくはGパワーの振動によって新種のバリアを形成するレプリシオンフィールドを崩壊させているものと思われる。

ウルテクブースター

：ウルテクエンジンを応用した急加速用ブースター。

普段は背面に内蔵されており、使用時に展開される。

起動する事により最高で60秒間、Vガイガーに爆発的な推進力を与える。

武装

ガイガークロウ

：Vガイガーの両前腕部に装備された鉤爪状の近接戦闘用武器。

通常は前腕部に収納されており、戦闘時に展開して使用する。

基本的にはギャレオンクローと大差無いが、フレキシブルな攻撃が可能。

より攻撃力の高いレーザーチャージングブレードが存在する為、サブウェポンとして位置付けられている。

レーザーチャージングブレード

：Vガイガーの両肘部分にそれぞれ1本ずつ装備されたブレード。そのままの状態でも優れた切れ味を誇るが、エネルギーを纏わせる事で切れ味をさらに上昇させる事が出来る。

装備箇所の関係上、刀身が腕の延長線上に存在する形となる為、一般的な刀剣とは用法が異なる。

ブレードキャノン

：レーザーチャージングブレードの柄部分に装備された小口径ビームキャノン。連射性と命中精度に優れた装備である。

ウイングガオー

初登場：—EPISODE—02—緑と赤そして青（後編）—

『星間連合』が作り出した重戦闘機型ガオーマシン。

高い火力と機動性を併せ持つ高性能機で、単独でもかなりの戦闘能力を誇る。ネクストガオガイガーへのネクストフュージョン時には背面翼、両肩、ヘッドギアを構成する。

型式：ガオーマシン

全長：24.3 m

全幅：35.4 m

重量：150.0 t

動力：ネオGドライブ×1

ネオGSライドクラス：機密

構造：ネオシームレスマウント

出力：over 239,037 kW (325,000馬力以上)

最高飛行速度：4321.8 km/h (マッハ3.5)

推進機関型式：ネオウルテクエンジン

バリアシステム：改良型Gパワーバリアシステム

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：3.551×10⁶ J相当

物理防御システム：改良型レーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4・392×10⁶ J相当
 武装

パルスレーザー砲×6

：機首先端部に単装2門、主翼付け根部分2連装2門、合計6門装備された小型レーザー砲。

連射性に優れ、主に牽制に使用される。

大口径ビームキャノン×1

：機首下部に1門装備された大型ビーム砲。

連射は利かないが、長い射程と高い攻撃力を併せ持つ。

2連装反中間子砲×1

：機体上部に1基装備された砲塔。

反中間子ビームを目標に対して放射し、目標の装甲強度などとは無関係に原子をその構造そのものから破壊する。

砲塔の可動域はかなり広く、後方や上方への砲撃も可能。

ストライクガオー

初登場：—EPIISODE—02—緑と赤そして青（後編）—

『星間連合』が作り出した特殊戦車型ガオーマシン。火力と防御力に優れ、パワーバトルを得意とする。

ネクストガオガイガーへのネクストフュージョン時には両前腕を構成する。

型式：ガオーマシン

全幅：12.8 m

重量：184.0 t

動力：ネオGドライブ×1

ネオGSライドクラス：機密

構造：ネオシームレスマウント

出力：over 220,650 kW (300,000馬力以上)

最高装甲速度：220 km/h

推進機関型式：ネオウルテクエンジン

バリアシステム：改良型Gパワーバリアシステム

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：3.921×10⁶~13J相当

物理防御システム：改良型レーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4.618×10⁶~7J相当

武装

ドリル

：機首に装備された一対のドリル。

使用の際は目標に肉薄する必要があるので、強力な破壊力を誇る。

また、ドリルの回転によって先端部にGパワーのバリアが発生し、ドリル自体の摩擦損傷を可能な限り減少させている。

ツインメーザーキャノン

：機体両側面に装備された2連装メーザー砲。

1門で旧キングジェイダーの装備していた5連メーザー砲の20%の威力を誇る。

ソニックガオー&ブリッツガオー

初登場：―EPISODE―02―緑と赤そして青（後編）―

『星間連合』が作り出した完全同型の高速戦闘機型ガオーマシン。

機動性に優れ、ドッグファイトを得意とする。

ネクストガオーガイガーへのネクストフュージョン時には、ソニックガオーが右脚を、ブリッツガオーが左脚をそれぞれ構成する。

型式：ガオーマシン

全幅：9・8 m

重量：78・0 t

動力：ネオGドライブ×1

ネオGSライドクラス：機密

構造・アルティメットフレーム

出力：over99, 292 kW (135, 000馬力以上)

最高飛行速度：7408・8 km/h (マッハ6・0)

推進機関型式：ネオウルテクエンジン

バリアシステム：改良型Gパワーバリアシステム

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：3・688×10⁶～13 J相当

物理防御システム：改良型レーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4・227×10⁶～7 J相当
武装

パルスレーザー砲

：機首先端に2門装備された小型レーザー砲。

連射性に優れ、主に牽制に使用される。

マイクロミサイルポッド

：両翼に1基ずつ装備された3連装ミサイルポッド。

Gパワーをチャージした特殊ミサイルを連射可能。

ネクストガオガイガー

初登場：—EPIISODE—02—緑と赤そして青（後編）—

メカノイド『Vガイガー』・ウイングガオー・ストライクガオー・ソニックガオー・ブリッツガオーの5機がネクストフュージョンして誕生する新たな勇者王。

『星間連合』のオーバーテクノロジーにより、他の2体と同等もしくはそれ以上の戦闘能力を持つ。

武装は両腕を射出する『プロウクンスマツシャー』、両肩の防衛結界展開装置『プロテクトフィールド』、背面部に2基装備された2連装反中間子砲等多彩。

また、ハイパーモードが発動すると、機体の強制冷却を行う為に両肩の装甲が一部変形し、同時に両肩に収納されていた放熱フィンと頭部のフェイスガードが展開される。

必殺技は『ヘル・アンド・ヘブン・ウィータ』と『フルブラスト』。

型式：ファイティングメカノイド

パイロット：天海護

搭載AI型式：GALEON (Cain)

全高：31.8m

重量：610.0t

動力：ウルテクエンジン一体化型オリジナルGドライブ×1 ネオGドライブ×5

GSライド及びネオGSライドクラス：機密

構造：ネオシームレスマウント

出力：over20,593,965kW (28,000,000馬力以上)

最高走行速度：230km/h

最高飛行速度：8026.2km/h (マツハ6.5)

推進機関形式：Gインパルスドライブ ネオウルテクエンジン

バリアシステム：改良型Gパワーバリアシステム プロテクトフィールド

バリアシステムによって耐久可能な最大エネルギー負荷：9.557×10⁶~15J

相当

物理防御システム：改良型レーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：9.348×10⁶~8J相当

ネクストフュージョン総所要時間：62.328秒

特殊装備

ギャレオンローア

：胸部から放たれるギャレオンの咆哮。

これにはゾンダーバリアを分解する作用があり、これによりネクストガオガイガーはバリアに阻まれること無く新種に接近することが可能になる。

その原理の詳細は極秘扱いとなっているが、おそらくはGパワーの振動によって新種のバリアを形成するレプリシオンフィールドを崩壊させているものと思われる。

武装

プロテクトフィールド

：両肩に装備された防御用装備。

プロテクトシールドよりも広範囲に防御空間を形成する事が可能で、その防御力はプロテクトウォールに匹敵する。

使用時には二重構造となっている両肩装甲の上層部が展開し、下層部に収納されているフィールド発生器が露出する。

プロテクトシールドやプロテクトウォール同様、この空間は強い反発効果を有しており、ここに到達した光学攻撃の蓄積、反射が可能。

また砲弾やミサイル等の物理的攻撃も高い確率で防御空間を突破する事はできず、プロテクトフィールド表面においてほぼ完全に防御される。

ただし、使用には両肩装甲を展開し、フィールド発生器を露出させなければならない為、即応性という点ではプロテクトシールドに劣っている。

マイクロミサイルポッド

：両脛に合計4基装備された3連装ミサイルポッド。

Gパワーをチャージした特殊ミサイルを連射可能。

パルスレーザー砲

：両膝に合計4基装備された小型レーザー砲。

射程と連射性に優れ、主に牽制に使用される。

ブロウクスマツシャー

：ネクストガオガイガーの近距離および中距離戦闘用の装備。前腕部を高速で射出し、目標を文字通り『粉碎』する。

射出された前腕部は先端の拳部分に強力なGパワーによる力場を発生させており、機界文明のバリアシステムをも力づくで突破することが可能。

ある程度ならばパイロットである護の意志により軌道を変更することが出来る他、回数制限があるものの、射出中にツインメーザーキャノンを発射する事も可能。

左右両方の腕で射出可能だが、専ら右腕が使用され、左腕が使用されるのは稀。

目標に命中した後は、自動的にネクストガオガイガーへ再接続される。

ドリルクラッシュャー

：両前腕部に収納されたドリルを展開する事で完成する接近戦用兵器。

機体出力向上に伴い、回転スピードが更に上昇したドリルは敵のあらゆる装甲を一瞬で突き破り、更には正面から迫る殆どのエネルギー系攻撃の軌道を逸らしてしまう。

ただし、この武装使用中はマニピレーターが使用不能になるという欠点も存在する。

2連装反中間子砲

：ネクストガオガイガーの背面部に2基装備された砲塔。

反中間子ビームを目標に対して放射し、目標の装甲強度などとは無関係に原子をその構造そのものから破壊する。

旧キングジェイダーの2連装反中間子砲1基にほぼ匹敵する威力を誇る。

ブロウクンスパイラル

：ドリルクラッシュャーを展開した状態で放つ強化型ブロウクンスマッシュャー。

威力だけでなく、バリアに対する貫通力も格段に上昇しているが、ブロウクンスマッシュャーに比べて命中率で若干劣っている。

ブロウクンスマッシュャー同様、射出中にツインメーザーキャノンを発射する事も可能。

なお、左右の腕を同時に発射する際は『ダブルブrouクンスパイラル』と呼称される。ツインメーザーキャノン

：両前腕部に装備された2連装メーザー砲。腕と一体化している為、取り回しに優れる。

合体による出力上昇で威力が増しており、両腕からの同時発射は旧キングジェイダーの5連メーザー砲にほぼ匹敵する威力を誇る。

また、ブrouクンスマツシャー及びブrouクンスパイラル発動時にも発射が可能。

必殺技

ヘル・アンド・ヘブンウィータ

：別名、真のヘル・アンド・ヘブン。

護少年がゾンダークリスタルの集合体、すなわちマスタープログラムを浄解する際に使用した。

通常のヘル・アンド・ヘブンと原理は同じであるが、エネルギー融合の際に唱える「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ」という呪文の最後にラテン語で『生命』を意味する「ウィータ」という言葉が加わること、そして融合したエネルギーを両掌に纏わせて突撃するのではなく、光線状に放射するのが特徴である。

通常のヘル・アンド・ヘブンが格闘戦用兵器ならば、この技はMAP兵器のようなも

のである。

フルブラスト

・2連装反中間子砲、ツインメーザーキャノン、マイクロミサイルポッド、パルスレーザー砲を一齐発射する攻撃の通称。

通常は複数の敵に対しての広範囲殲滅攻撃として使用されるが、火力の全てを単体に集中する事も可能。

リユシフェルガオー

初登場：—EPIISODE—03—勇者王再誕!!—

ガオガイガーに代わる地球圏防衛戦力開発計画。通称『GRプロジェクト』による新型スーパーメカノイドの建造にあたり、ギャレオンに替わってスーパーメカノイドの核となるべく、月村正樹がブレイブガオーと並行して設計開発した新型ガオーマシン。

人型への変形を前提として設計された為、従来のどのガオーマシンとも一線を画する形状をとっているが、ファントムリングを利用した慣性制御により、類希な機動力を発揮するほか、換装無しで大気圏内外を問わず航行することができる。

パイロットの長瀬唯斗とフュージョンして、戦闘形態であるネオガイガーに変形する。

型式：ガオーマシン

パイロット：長瀬唯斗

AI型式：Lucifer

全長：29.5 m

全幅：21.8 m

全高：5.5 m

重量：95.5 t

動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブ Ver 2.8×1

GSNEXTRIDEクラス：機密

構造：アルティメットフレーム

出力：over 183,875 kW (250,000馬力以上)

巡航飛行速度：3827,88 km/h (マツハ3.1)

最高飛行速度：6297,48 km/h (マツハ5.1)

推進機関型式：ウルテクドライブ

バリアシステム：Gパワーバリアシステム Ver 2.1

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4.922×10⁶ 13J相当

物理防御システム：ネクストレーザーコーティングG装甲

物理防御システムによつて耐久可能な最大衝撃負荷：6・257×10⁶ J相当
武装

25 mm機関砲

：両翼基部に合計2基装備された機関砲。

主に敵機への威嚇・牽制やミサイル迎撃等の近接防御に使用される。

7連装ロケット弾ポッド

：両翼下に2ヶ所ずつ装備されたハードポイントに装備可能なオプション装備。

装填されているロケット弾は誘導機能を持たない為、主に地上の目標への攻撃などに使用される。

なお、ネオガイガーへの変形時には強制排除される。

3連装ミサイルポッド

：両翼下に2ヶ所ずつ装備されたハードポイントに装備可能なオプション装備。

誘導性能に優れた小型ミサイルを発射可能で、高速で飛行する目標への攻撃などに使用される。

なお、ネオガイガーへの変形時には強制排除される。

ネオガイガー

初登場：—EPIISODE—03〈勇者王再誕!!〉

長瀬唯斗がリユシフェルガオーとフュージョン、変形することで完成するメカノイド。

接近戦に特化したガイガーEXとは異なり、この機体は近く中距離戦を得意としており、いかなる状況下においても確実に敵にダメージを与える為、実体・実弾系兵器を中心とした武装を機体各所に装備している。

また、ガイガーと同様に、腕部にネオドリルガオーを分割装備した『ドリルガオー装着モード』、背面にネオステルスガオーを装備した『ステルスガオー装着モード』をとる事もできる。

ネオドリルガオー、ネオライナーガオー、ネオステルスガオーの3機のネオガオーマシンとネオ・ファイナルフュージョンして、ファイティングメカノイド・ガオガイガーRとなる。

優れた能力を持つ本機であるが、獅子王凱機動隊長以外にパイロットが見つからず、更に機体の相性の問題から、獅子王凱機動隊長がガイガーEXを選択した事で、エクセルベースの格納庫に封印されていたが、長瀬唯斗との出会いにより、対機界33新種戦の中枢を担う事となる。

型式：メカノイド

パイロット：長瀬唯斗

AI型式：Lucifer

全高：23.3m

重量：95.5t

動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブver2.8×1

GSNEXT—RIDEクラス：機密

構造：アルティメットフレーム

出力：over294,200kW(400,000馬力以上)

最高走行速度：360km/h

最高飛行速度：1481.76km/h(マッハ1.2)

推進機関形式：ウルテクドライブ

バリアシステム：GパワーバリアシステムVer2.1

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4.922×10⁶~13J相当

物理防御システム：ネクストレーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：6.157×10⁶~7J相当

フュージョン所要時間：23.166秒

特殊装備

GFシステム

：正式名称G | Force fieldシステム。

四肢にGパワーの力場を纏う事で、格闘攻撃力を飛躍的に上昇させる。

武装

17. 5mmCIWS

：頭部に2基装備されたCIWS。近接防衛火器システム

一般的なCIWSよりも小口径だが、弾芯や炸薬の改良、装弾数の増加、発射サイクルの高速化等により、同等以上の威力を獲得している。

主に敵機への威嚇・牽制やミサイル迎撃等の近接防衛に使用される。

ヒートブーメラン『Gクレツセント』

：両肩装甲の一部を分離・展開させて使用するヒートブーメラン。

持ち手の部分にコンデンサーを内蔵しており、両肩から分離・展開した時点で刀身を加熱。赤熱化させて対象を溶断する。

弧を描く独特の軌道で軌道上の標的を切り裂き、手元に戻ってくる為、複数の敵との交戦や格闘戦時のフェイントに有用であり、相手が一度回避したとしても、弧を描いて戻る軌道が再び背後から奇襲するため相手の虚を突く事が出来る。

グレネードランチャー

：両前腕部に装備された2連装グレネードランチャー。標準状態の装弾数は片側4発。

グレネードと名付けられているが簡易的な推進装置と追尾装置が組み込まれており、実質的には短距離誘導ミサイルである。

的確な状況で運用すれば、ゾンダーレギオン程度の目標ならば致命傷を与える事も十分可能。

また、追加パックを装着する事で装弾数を16発に増やす事が可能。その場合、ネオ・ファイナルフュージョン実行時に強制排除する必要がある。

専用ハンドガン『Gブラスター』

：ネオガイガー専用設計されたセミオート式大型ハンドガン。2丁装備されており、基本的に2丁拳銃で使用する。

装弾数は7発とやや少ないが、弾丸にはGパワーをコーティングした特製の徹甲弾を使用しており、バリアを展開していない状態ならば、巨大化した新種にも相応のダメージを与える事が出来る。

普段は予備マガジンと共に両大腿部に格納しており、必要に応じて装備する。

専用ソード『ガイガースラッシャー』

：戦艦の装甲をも切り裂くという驚異的な切れ味を持った実体剣型近接戦闘用装備。ロングソード

リユシフェルガオーの機首を鞘としており、普段は左腰にマウントされている。

ネオステルスガオー

初登場：|EPIISODE|03|勇者王再誕!!|

GRプロジェクトの一環で開発された新ガオーマシンのうちの一機。

全幅30m以上の垂直離着陸型ステルス爆撃機である。

両翼下部の巨大なエンジンユニット等、基本的な構造やシルエットは初代ステルスガオーに酷似しているが、機能的には多分の改良が加えられており、その外観もより洗練されたものとなっている。

ガオガイガーRへのネオ・ファイナルフュージョン時には背面翼、両前腕部、ヘッドギアを構成する。

型式：ガオーマシン

全幅：35.4m

重量：111.0t

動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブver2.8×1

GSEXT|RIDEクラス：機密

構造：アルティメットフレーム

出力：over128，712kW（175，000馬力以上）

最高飛行速度：2222・64km/h（マツハ1・8）

推進機関型式：スクラムタービンジェットVer2・4×2／ウルテクトドライブ

バリアシステム：GパワーバリアシステムVer2・1

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：3・251×10⁶～13J相当

物理防御システム：ネクストレーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4・051×10⁶～7J相当

特殊装備：マルチパイロン

備考：オプション武装を装備する事で、戦闘攻撃機として運用可能。

ネオドリルガオー

初登場：―EPISODE―03「勇者王再誕!!」

GRプロジェクトの一環で開発された新ガオーマシンのうちの一機。

連装採掘錐突撃戦車型ガオーマシンで、ネオ・ファイナルフュージョン時には脚部を構成する。

旧ドリルガオーからの最大の変更点は、ドリルの回転方式の変更、即ち各ブロックを

それぞれ独立に回転させるようにした点と、ドリルにブレードを設置し、更なる攻撃力増強を図った点である。

これ以外には、もちろん機体の基本性能は格段に向上しているものの、ネオステルスガオーやネオライナーガオーの様に機体の外観における大きな変化はない。

これは旧ドリルガオーが1機動兵器として、また巨大メカノイドの1パーツとして、非常に高い完成度を持つていた事の証明である。

旧ドリルガオー同様、機体は左右に分割可能で、更にそれぞれを独立して長時間に渡って運用できるようになっている。

この機能を用いた緊急回避行動はもちろんのこと、左右それぞれをネオガイガーの腕部に装着、攻撃力および防御力の増強を図る『ドリルガオー装着モード』も健在である。

型式：ガオーマシン

全幅：18.4 m

重量：282.0 t

動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブ ver 2.8×1

GSNEXT—RIDEクラス：機密

構造：アルティメットフレーム

出力：over 183,875 kW (250,000馬力以上)

最高走行速度：180 km/h

推進機関型式：ウルテクドライブ

バリアシステム：GパワーバリアシステムVer2.1

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：3.655×10⁶～13J相当

物理防御システム：ネクストレーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4.353×10⁶～7J相当

武装

ドリル

：機首に装備された一対のドリル。

使用の際は目標に肉薄する必要があるものの、強力な破壊力を誇る。

また、ドリルの回転によって先端部にGパワーのバリアが発生し、ドリル自体の摩滅損傷を可能な限り減少させている。

ネオライナーガオー

初登場：—EPIISODE—03—勇者王再誕!!—

GRプロジェクトの一環で開発された新ガオーマシンのうちの一機。

新幹線型であった旧ライナーガオーからデザインを一新、未来的なデザインのロケット型となった。

ネオ・ファイナルフュージョン時には両肩部を構成する。

形式：ガオーマシン

全高：13.0 m

全長：24.2 m

重量：111.5 t

動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブ Ver 2.8×1

GSNEXTERIDEクラス：機密

構造：アルティメットフレーム

出力：over 91,937 kW (125,000馬力以上)

最高飛行速度：37044 km/h (マッハ30.0)

推進機関型式：ウルテクドライブ

バリアシステム：Gパワーバリアシステム Ver 2.1

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：3.119×10⁶ J相当

物理防御システム：ネクストレーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：4・021×10⁶7J相当

ガオガイガー

初登場：—EPIISODE—03〜勇者王再誕!!〜

メカノイド『ネオガイガー』・ネオステルスガオー・ネオライナーガオー・ネオドリルガオーがネオ・ファイナルフュージョンして完成する新たな勇者王。

ブレイブガオガイガー同様、ファントム&ウォールリングの発展型であるネオファントム&ウォール両リングを胸部に標準装備している。

更に動力機関にはGSライドの発展型である『GSNEXT—RIDE』を、推進機関にはウルテクエンジンの発展型『ウルテクドライブ』を搭載しており、ガオガイガー（ウルテクエンジン搭載仕様）を上回るスペックを記録している。

また、パーツの62%及び規格の殆どをブレイブガオガイガーと共通化しており、簡単な改造を施す事でディバイディングドライバ等のハイパーツールも運用可能。

更に格闘戦に使用する部分以外の装甲を極限まで削減した結果、機体サイズからは予想できないほどの高い機動性を獲得した。

この事は逆を言えば、攻撃が命中した場合の被害が大きくなる、打たれ弱いということだが、開発者である月村正樹博士曰く「勇者王に選ばれた者ならば、自前の動体視力

と反射神経でその位カバーできる」との事。

ちなみに、ガオガイガーのRはRebirth再誕のRである（実はRevolution革命の意味も含んでいる）。

型式：ファイティングメカノイド

パイロット：長瀬唯斗

搭載AI型式：Lucifer

全高：32.0m

重量：600.0t

動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブver2.8×4

GSEXT-RIDEクラス：機密

構造：アルティメットフレーム

出力：over16,548,722kW(22,500,000馬力以上)

最高走行速度：210km/h

最高飛行速度：7161.84km/h(マッハ5.8)

推進機関形式：ウルテクドライブ

リアシステム：GパワーリアシステムVer2.1プロテクトシールド

(ウォール)

バリアシステムによって耐久可能な最大衝撃負荷：8・129×10⁶～15J相当
 物理防御システム：ネクストレーザーコーティングG装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：8・257×10⁶～8J相当

ネオ・ファイナルフュージョン総所要時間：62・328秒

特殊装備

GFシステム

：正式名称G—Force fieldシステム。

四肢にGパワーの力場を纏う事で、格闘攻撃力を飛躍的に上昇させる。

使用ハイパーツール

デイベイディングドライバー

：—EPIISODE—8・3～悪魔になったザンダクロスにて初使用したハイパーツール。

本来はブレイブガオガイガー用のハイパーツールだが、規格の殆どをブレイブガオガイガーと共通化させている為、簡単な改造を施す事で運用可能。

性能等はブレイブガオガイガーの同名ハイパーツールを参照。

武装

プロテクトシールド

：ガオガイガーRの両前腕部に装備された防御用装備。空間を湾曲させ、ごく薄い防御空間を形成する。

この空間は強い反発効果を有しており、ここに到達した光学攻撃の蓄積、反射が可能。また砲弾やミサイル等の物理的攻撃も高い確率で防御空間を突破する事はできず、プロテクトシールド表面においてほぼ完全に防御される。

プロテクトウオール

：ガオガイガーRの胸部から展開される高密度エネルギーリング『ネオ・ウオールリング』。両前腕部に装着して放つ強化型プロテクトシールド。

プロテクトシールドの防御空間を更に強力に、更に広範囲に、かつ二重三重に形成することが可能となる。

ただし、使用にはネオ・ウオールリングを展開し、前腕部に装着しなければならぬ為、即応性という点ではプロテクトシールドに劣っている。

ドリルニー

：ガオガイガーRの膝部に装備された近接格闘用装備。

ネオ・ドリルガオアのドリルにより攻撃力を倍加した膝蹴りで、旧ガオガイガーの物と比較して、ドリルの回転方式の変更、即ち各ブロックをそれぞれ独立に回転させるようににした点と、ドリルにブレードを設置し更なる攻撃力増強を図った事から、時として

ブロウクンマグナムをも上回る攻撃力を発揮する。

その用途は主に奇襲や追い討ちであるが、目標の格闘攻撃に対する交差攻法としても有効に用いられている。

これは攻撃をドリルニーで防御する事で、目標が攻撃に使用した部位を破壊、すなわち目標の攻撃能力を奪う事ができる、極めて攻撃的な防御方法である。

ブロウクンマグナム

：ガオガイガーRの近距離および中距離戦闘用の装備。両前腕部を高速回転させ射出、目標を文字通り『粉碎』する。

射出された前腕部は先端の拳部分に強力なGパワーによる力場を発生させており、機界文明のバリアシステムをも力づくで突破することが可能。

拳部分と前腕部分は互いに反転しており、これにより射出後の軌道を安定させているが、ある程度ならばパイロットである凱の意志により軌道を変更することができる。

目標に命中した後は、自動的にブレイブガオガイガーに再接続される。

ブロウクンファントム

：ガオガイガーRの胸部から展開される高密度エネルギーリング『ネオ・ファントムリング』。これを両前腕部に装着して放つ強化型ブロウクンマグナム。

装着された『ネオ・ファントムリング』は自身が高速リニア回転することで強力な力

場を発生させる。この力場は物体を『空間的に』破壊することができ、ブrouクンマグナムの威力を大幅に増大させることができるのである。

更にこの力場がブrouクンマグナム自身への攻撃を防ぐバリアシステムをも兼ねている為、ブrouクンマグナムの欠点であった『射出されたブrouクンマグナム自体は無防備な状態である』をも克服している。

必殺技

プラズマホールド

：プロテクトシールド展開の際に発生する反発的防御フィールドを反転させ、その内部に目標を捕縛、フィールドの反発作用によって敵の行動を封じる。

その際フィールド内では激しい電離現象が生じ、これが目標の電子機器を破損させる付随的効果もある。

ブrouクンバースト

：―EPIISODE―05 着裝（後編）にて初使用した強化型ブrouクンファントム。

通常のブrouクンファントム（右）を撃ち出した直後、左前腕も発射。2つを連結合体させる事で、質量及び回転数を増加させている。

通常のブrouクンファントムと比較して目標に与える衝撃は220%、バリアに対す

る貫通力は260%上昇している。

ただし、威力の上昇と引き換えに追尾機能は約半分にあがり、使用には的確な状況判断が求められる。

サンダーウィップ

：―EPIISODE―05〜着装（後編）〜にて初使用したガオガイガーオリジナルの必殺技。「雷帝招来」のボイスワードによって発動する。

右前腕、もしくは左前腕を超高速回転させる事で電撃を発生させ、それを鞭のように振るって目標へ叩きつける。

この技には雷龍の特殊装備『雷盾』レイドウインの技術が応用されている。

ストームトルネード

：―EPIISODE―07〜復活〜にて初使用したガオガイガーオリジナルの必殺技。「旋風強襲」のボイスワードによって発動する。

右前腕、もしくは左前腕を超高速回転させる事で小規模な竜巻を起こし、目標を吹き飛ばす。

この技には風龍の特殊装備『攪拌槽』ジャバダレンジの技術が応用されている。

ボルトパラライザー

：―EPIISODE―8、4〜ザンダクロス奪還作戦〜にて初使用したガオガイガー

Rオリジナルの必殺技。「雷光狂乱」のボイスワードによって発動する。

右前腕、もしくは左前腕を超高速回転させる事で発生させた電撃をEMP電磁パルスに変換して目標へ照射する。

EMP電磁パルスに物理的な破壊力や拘束力はなく、プラズマホルドの付随的効果として存在していた電子機器の破損に特化した特殊攻撃である。

この技もサンダーウィップ同様、雷龍の特殊装備『雷盾』レイドウインの技術が応用されている。バーストヘル・アンド・ヘブン

：—EPIISODE—03〜勇者王再誕!!〜にて初使用したガオガイガーR版ヘル・アンド・ヘブン。

両前腕を超高速回転させる事で紅蓮の炎を発生させ、それで両腕を包みながら放つ改良型ヘル・アンド・ヘブン。

これを喰らった敵は核を抉り出されると同時に着火。超高温の火柱となり一瞬で炭化、崩れさる。

ガオガイガーRはブレイブガオガイガーと比べて機体重量が軽く、また機体出力でも劣っている為、衝突の破壊力ではブレイブガオガイガーのヘル・アンド・ヘブンに一步劣るものの、炎を纏う事で総合的な威力はほぼ互角となっている。

メカニック編その2

エクセルベース

初登場：—EPIISODE—03〜勇者王再誕!!〜

2005年9月にZX—01・巨腕原種、ZX—02・鉄髪原種、ZX—03・顎門原種の襲撃を受けて破壊された旧GGGペイタワ―基地。

諸々の事情から機界31原種の脅威が去った後も事実上放置されたままであったが、2008年4月によりやく国連主導による再建計画がスタート。

2010年4月よりGGG日本支部としての運用がスタートしていたが、機界城J—55及び機界皇帝インフェルノ（の影武者）との戦いでオービットベースが全壊。間一髪離脱したヘキサゴンを収納し、4隻のネオデイビジョン艦を接続した事から、急遽GG本部基地として運用される事になり、名称も上記のものに改められた。

なお、エクセルは『優れる』を意味する動詞『exce—』から取られており、間違っても某表計算ソフトの事ではない（笑）。

基地を構成する資材の約7割をペイタワ―基地の残骸から流用しており、その規模は旧ペイタワ―基地の15%増し（月村正樹談）。

現在、機界33新種への対応と並行して、GGG本部基地としての機能付加が急ピッチで行われている。

蒼龍王そうりゅうおう

初登場：—EPIISODE—01—緑と赤そして青（前編）—

ネオデビジョンI。正式名称は『高速汎用射出母艦』。

旧GGGのエリアI・三段飛行甲板空母及びエリアII・強襲揚陸補給船、デビジョンI・高速転槽射出母艦イザナギの流れを汲むミラーカタパルト空母にして、聖獣艦隊の旗艦。

機動部隊及びハイパーツールの輸送を主任務とする。

効率よく連続射出出来る様に改良された『リボルバーミラーカタパルト』1基と通常カタパルト3基を装備。

最短の場合、機動部隊の展開を僅か数十秒で完了する事ができる。

更に高度な管制機能も有しており、遠隔地での長期作戦及び通信・電波障害の危険性がある作戦においては、現場での直接指揮を可能とする。

艦首のミラー粒子砲、艦尾両舷の2連装メーザー砲など武装も充実しており、艦隊旗艦として相応しい攻撃力を有している。

型式：高速汎用射出母艦

所属：国際連合

管轄：Gutsy Galaxy Guard機動部隊

全長：475.7m

構造重量：127.400t

稼働時重量：150.400t

主動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブver2.8（搭載数は機密事項）

副動力：太陽光発電システム

主推進器：ウルテクドライブ

最大出力：機密事項

航行速度：機密事項

装備：リボルバーミラーカタパルト×1、電磁式カタパルト×3

武装

連装レーザー砲

：艦橋両脇に2連装12基、3連装8基、合計48門搭載された対空防衛用レーザー

砲。

レーザー連動による自動追尾照準、予測射撃が可能。

2連装レーザー砲

・艦尾両舷上部に1基ずつ、計2基搭載されている2連装のレーザー砲。右舷が1番、左舷が2番と呼称される。

通常は格納されており、使用時にせり上がる沈胴式となっている。

設置場所の関係から射線が取れない場合も多いが、かなりの威力を誇り、2基の同時斉射で旧キングジェイダーの5連レーザー砲に匹敵する。

ミラー粒子砲

：リボルバーミラーカタパルトを応用した蒼龍王の主砲。

固体に近い密度にまで圧縮したミラー粒子を超高速で射出し目標を破壊する。

蒼龍王のミラー粒子砲は、三段飛行甲板空母やイザナギのそれよりも出力の向上と安定が図られており、射程・威力共に主砲として相応しい性能を誇る。

朱雀王^{すざくおう}

初登場：—EPIISODE—01—緑と赤そして青（前編）—

ネオデビジョンⅡ。正式名称は『超級機甲戦術艦』。

圧倒的な火力と高い防御力を誇り、その戦闘能力はネオデビジョンフリート随一。基本的に最前線での砲撃戦や支援砲撃を任務としているが、いざという時は防御力を

活かして被弾した味方の盾となる。

型式：超級機甲戦術艦

所属：国際連合

管轄：G u t s y G a l a x y G u a r d機動部隊

全長：560.0m

構造重量：212.000t

稼働時重量：245.700t

主動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブver2.8（搭載数は機密事項）

副動力：太陽光発電システム

主推進器：ウルテクドライブ

最大出力：機密事項

航行速度：機密事項

武装

連装レーザー砲

・艦橋両脇に2連装18基、3連装12基、合計72門搭載された対空防衛用レーザー

砲。

レーザー連動による自動追尾照準、予測射撃が可能。

垂直ミサイル発射管

垂直発射システム

：艦尾中央に搭載されているVLS。

1基8セルを12基、合計96セルが搭載されており、用途に応じて対空、対地、対艦など多様なミサイルを発射可能。

ミサイル発射管

：艦首及び艦尾両舷に各8門、両舷側面に各16門、合計32門搭載されたミサイル発射管。

垂直ミサイル発射管同様、用途に応じて対空、対地、対艦など多様なミサイルを発射可能。

45cm径3連装砲

・艦橋前方に2基、後方に1基、合計3基搭載された実体弾砲。前方の物が1〜2番、後方の物が3番と呼称される。

通常は格納されており、使用時にせり上がる沈胴式となっている。

戦艦大和の46cm砲に匹敵する大口径砲の威力は凄まじく、直撃を受ければ新種のバリアシステムでも防御は難しい。

また、レーザーやレーザーでは不可能な曲射や、時限信管を用いての時間差攻撃など実弾ならではの利点も多く見られる。

2 連装レーザー砲

・艦尾両舷上部、艦底部、側面部に1基ずつ、計6基搭載された2連装のレーザー砲。右舷が1〜3番、左舷が4〜6番と呼称される。

41cm径3連装砲同様、通常は格納されており、使用時にせり上がる沈胴式となっている。

設置位置の関係から射線が取れない場合も多いが、かなりの威力を誇り、6基の同時斉射で旧キングジェイダーの10連レーザー砲を上回る。

艦首重力衝撃波砲

：艦首に搭載されている朱雀王最強兵器。

ZX-07・腕原種的能力を参考に開発されており、艦のエネルギーを重力衝撃波に変換して照射。目標を粉碎する。

直径30kmクラスの小惑星を完全破壊出来るだけの威力を誇るが、発射準備に最短で180秒を有する上に、発射後は一時的に艦の出力が大幅に低下するなど、欠点も多い。

また、その威力の高さからゴルディオンハンマーと同レベルのセキュリティが設定されている。

プロテクトシールドシステム

：艦体防御の為の特殊装備。

空間を湾曲させ、ごく薄い防御空間を形成し、艦周囲に展開する。

この空間は強い反発効果を有しており、ここに到達した光学攻撃の蓄積、反射が可能。また砲弾やミサイル等の物理的攻撃も高い確率で防御空間を突破する事はできず、プロテクトシールド表面においてほぼ完全に防御される。

びやっこおう
白虎王

初登場：—EPIISODE—01—緑と赤そして青（前編）—

ネオデビジョンⅢ。正式名称は『超電脳統帥艦』。

旧GGGのエリアV・多次元諜報潜水艦、デビジョンⅢ・百式司令部多次元艦スサノオの流れを汲む高速諜報艦。

各種センサーと多次元コンピュータを駆使して速やかに情報を収集、解析することを目的としている。

他のネオデビジョン艦同様、推進システムとしてウルテクトドライブを装備。短期間の惑星間航行および、単独での大気圏の突入・離脱を可能にしている。

武装としては地上でも使用可能に改良されたハイパーリフレクタービーム等が装備されている。

また、聖獣艦隊に共通するが、艦体制御の殆どの部分をコンピューターに任せており、必要運用人員の低減が図られている。

特に白虎王は、究極的には諜報部所属の勇者ロボのみによる運用も可能となっており、その傾向が顕著である。

型式：超電脳統帥艦

所属：国際連合

管轄：Gutsy Galaxy Guard 諜報部

全長：455.2 m

構造重量：78.400 t

稼働時重量：100.400 t

主動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブver2.8（搭載数は機密事項）

副動力：太陽光発電システム

主推進器：ウルテクドライブ

最大出力：機密事項

航行速度：機密事項

武装

連装レーザー砲

・艦橋周辺に2連装4基、3連装4基、合計20門搭載された対空防御用レーザー砲。
レーザー連動による自動追尾照準、予測射撃が可能。

ミサイル発射管

：艦首両舷に各4門、両舷側面に各8門、合計24門搭載されたミサイル発射管。

用途に応じて対空、対地、対艦など多様なミサイルを発射可能。

F・FミラーS

：正式名称Free Fly Mirror Second。

白虎王に搭載されている多数の小型浮遊反射板。ミラー粒子が安定蒸着されており、諜報部所属の勇者と多次元コンピュータのコントロールによって連結・展開して一枚の巨大なミラーを形成、白虎王より発射された大出力ビーム砲を増幅・反射して目標に対し照射する。

各ミラーの個々の角度を偏向させる事で、ビームの軌道予測を困難に出来る他、拡散させて広域攻撃を行う事も可能である。

また艦前面に展開して、敵性体からの攻撃を防ぐ防御壁とすることもできる、攻防一体の武装である。

推進システムの改良により、スサノオのF・Fミラーでは事実上不可能だった重力圏内の飛行も可能としている。

ハイパーリフレクタービーム

・白虎王に装備された大口径ビーム砲と、これと対になる改良型小型浮遊反射板群F・FミラーSからなる攻撃システムの通称。

基本的な機能や運用法は、スサノオのリフレクタービームとほぼ同じだが、F・FミラーSの使用により、大気圏内での使用も可能となっている。

また、リフレクタービームでは不可能だった短時間での連続照射も冷却機関等の改良で、ある程度可能となっている。

玄武王
げんぶおう

初登場：―EPIISODE―01―緑と赤そして青（前編）―

ネオデイビジョンIV。正式名称は『総合重層補修艦』。

旧GGGのエリアIV・水陸両用整備装甲車、デイビジョンIV・全域双胴補修艦アマテラス及びデイビジョンII・万能力作驚愕艦カナヤゴの流れを汲む移動工作艦。

ネオデイビジョン最大のサイズを誇る船体は三層構造となっており、上層がカーペンターズ収納ブロック、中層が整備・補給ブロック、下層が資材・武器庫ブロックに分けられている。

また資材・武器庫ブロックは勇者ロボ達の待機室も兼ねており、アマテラスに装備さ

れていたメタルロッカールームと同様の機能を備えている。

なお、宇宙空間において整備エリアは低重力に設定されており、整備の負担を減らしている。

型式：総合重層補修艦

所属：国際連合

管轄：Gutsy Galaxy Guard機動部隊

全長：565.0m

構造重量：282.200t

稼働時重量：304.500t

主動力：ウルテクエンジン一体化型Gドライブver2.8（搭載数は機密事項）

副動力：太陽光発電システム

主推進器：ウルテクドライブ

最大出力：機密事項

航行速度：機密事項

装備：カタパルト×1

武装

連装レーザー砲

・艦体各所に2連装6基、3連装4基、合計24門搭載された対空防御用レーザー砲。
レーザー連動による自動追尾照準、予測射撃が可能。

メカニック編その3

ネオジエイアーク

：Vギヤレオン同様、星間連合の手で強化改造が施された新生ジエイアーク。

超弩級戦艦の名に相応しく、メガジエイクオース、反中間子砲、ESミサイル等、船体各所に強力かつ多数の武装が施されている。

更に目視以外の如何なるセンサーも無効化する高いステルス性、大気圏内はもとより、高圧の深海、灼熱のマグマ、酷寒の宇宙といった様々な極限状況下でも航行を可能にする高い防御力。更には戦艦と呼ぶには似つかわしくないほどの機動力も備えられている。

また、その機能の殆どを生体コンピュータ『トモロー0117』に制御させる事により、ごく小人数での運用が可能。

艦橋を含めた主砲塔部分は分離する事で、一撃離脱の高速攻撃艇ネオジエイバードとして運用することができる。

型式：超弩級宇宙戦艦

パイロット：ソルダートJ002

搭載AI形式：トモロ―0117

全長：107.5m

重量：32750+1000（メガクオースの重量）t

内蔵タンク容量：機密

搭載AI形式：トモロ―0117

動力：ハイパージュエルジェネレーター×10

ハイパージュエルジェネレータークラス：機密

構造：強化型単一構造結晶装甲

出力：over514,849,125kW（70,000,000馬力以上）

巡航航行速度：4,345,200km/h（マツハ3550）

最高航行速度：111,384,000km/h（マツハ91000）

推進機関型式：メガインパルスドライブ

バリアシステム：フィールドジェネレイティングアーマー

バリアシステムによって耐久可能な最大エネルギー負荷：35.774×10¹⁵

J相当

物理防御システム：強化型単一構造結晶装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：33.852×10⁹J相当

特殊装備：ESウインドウ空間転移装置 光子エネルギー変換翼

武装

連装レーザー速射砲

：艦体各所に2連装8基、単装2基、合計18門搭載された対空防衛用レーザー速射砲。

搭載された生体コンピューター『トモロ—0117』の制御により、自動追尾照準、予測射撃が可能。

4連装ES爆雷投下管

：艦底部各所に各6基、合計24門装備された爆雷投下装置。

空間転移型爆雷、通称ES爆雷を投下可能。

光を取り込み物質を精製する光子エネルギー変換翼の働きにより、装填速度にこそ限界があるものの、ほぼ無限に等しい投下が可能。

4連装無限ミサイルランチャー

：艦両舷側面に各3基、合計24門搭載された小型ミサイル発射管。

光を取り込み物質を精製する光子エネルギー変換翼の働きにより、装填速度にこそ限界があるものの、ほぼ無限に等しい発射が可能。

発射される小型ミサイルは、敵に対する攻撃よりも弾幕展開による敵への牽制など防

御目的に使用されることが多い。

3 連装 E S ミサイル発射管

：艦上部に2基、合計6門装備されたミサイル発射管。

空間転移型ミサイル、通称 E S ミサイルを発射可能。

光を取り込み物質を精製する光子エネルギー変換翼の働きにより、装填速度にこそ限界があるものの、ほぼ無限に等しい投下が可能。

2 連装反中間子砲

：ネオJアーク（ネオキングジェイダー）及び、ネオジェイバード（ネオジェイダー）の主砲。

艦上部中央に4基が、左右2基ずつ並列装備されている。

反中間子ビームを目標に対して放射し、目標の装甲強度等とは無関係に原子をその構造そのものから破壊する。

地球で開発された反中間子フィールド発生ツール、モレキュルプレーネと原理的には同一であるが、こちらはより広範囲に、しかも光線状にして発射することができ、中間子の対消滅速度も格段に早いものとなっている。

星間連合の手で改良を受け、旧ジェイアークの物と比較して威力、連射速度共に約25%上昇している。

メガJクオース

：ネオJアークの艦首に装備される巨大な錨状の必殺兵器。

破壊力、貫通力、射程に優れ、射出されると真紅の火の鳥に変化し、変幻自在の軌道を描いて目標を破壊、その核を回収した後、自動的に帰還する。

射出時にメガJクオースを取り巻く炎は、Jパワーの放出であり、それ自体が強固なバリアであると同時に強力な破壊力を生み出す。

そうした運用形態上、速射性に欠けるのが唯一の欠点である。

星間連合の手で改良を受け、旧ジェイアークの物と比較して貫通力が約30%上昇している。

ネオジェイバード

：ネオジェイアークの艦橋と主砲台が分離したブラクアウト高速攻撃艇。

小型である分、ネオジェイアークよりも運動性に優れている。またこの状態でも主砲である反中間子砲を使用する事が出来る為、攻撃力の点でも優秀である。

ただし、ネオジェイバード分離後のジェイキャリアーは火力が激減する為、分離運用には大胆かつ慎重な判断が求められる。

また、光子エネルギー変換翼を持たない為、継戦能力という点では一定の限界を持つ。

る。
ソルダートJがフュージョン、スタンドアップする事によりネオジェイダーに変形す

型式：高速攻撃艇

パイロット：ソルダートJ002

搭載AI形式：Soldato-J002

全長：17.6m

全幅：41.6m

重量：207.5t

内蔵タンク容量：機密

動力：ハイパージュエルジェネレーター×2

ハイパージュエルジェネレータークラス：機密

構造：強化型単一構造結晶装甲

出力：over 275, 812kW (375, 000馬力以上)

巡航航行速度：4, 896, 000km/h (マツハ4000)

最高航行速度：37, 944, 000km/h (マツハ89000)

推進装置：メガインパルスドライブ

バリアシステム：フィールドジェネレイティングアーマー

バリアシステムによって耐久可能な最大エネルギー負荷：13・277×10⁶ J相当

物理防御システム：強化型単一構造結晶装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：12・582×10⁶ J相当
武装

3連装ESミサイル発射管

：艦首両舷に2基、合計6門装備されたミサイル発射管。

空間転移型ミサイル、通称ESミサイルを発射可能。

レーザー速射砲

：艦首上部に2基、合計2門搭載された対空防御用レーザー速射砲。

射程と連射性に優れ、主に牽制に使用される。

2連装反中間子砲

：ネオJアーク（ネオキングジェイダー）及び、ネオジェイバード（ネオジェイダー）の主砲。

艦上部中央に4基が、左右2基ずつ並列装備されている。

反中間子ビームを目標に対して放射し、目標の装甲強度等とは無関係に原子をその構造そのものから破壊する。

地球で開発された反中間子フィールド発生ツール、モレキュルプレーネと原理的には同一であるが、こちらはより広範囲に、しかも光線状にして発射することができ、中間子の対消滅速度も格段に早いものとなっている。

星間連合の手で改良を受け、旧ジェイバードの物と比較して威力、連射速度共に約15%上昇している。

ネオジェイダー

：ソルダートJがネオジェイバードとフュージョンして完成するメカノイド。

外見はわずかに大型化した以外特に違いはないが、『星間連合』の改修によって、その基本性能は大幅に上昇している。

また、新型遠距離兵器『プラズマブーメラン』が追加された。

型式：可変式コアロボット

パイロット：ソルダートJ002

搭載AI形式：Soldato-J002

全高：25.5m

重量：207.5t

内蔵タンク容量：機密

動力：ハイパージュエリジェネレーター×2

ハイパージュエリジェネレータークラス：機密

構造：強化型単一構造結晶装甲

出力：over 551, 624 kW (750, 000馬力以上)

最高走行速度：420 km/h

最高飛行速度：183, 600, 000 km/h (マッハ150000)

推進装置：プラズマウイング

バリアシステム：フィールドジュエリジェネレイティングアーマー

バリアシステムによって耐久可能な最大エネルギー負荷：13. 277×10⁶~15

J相当

物理防御システム：強化型単一構造結晶装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：12. 582×10⁶~9 J相当

武装

3連装ESミサイル発射管

：両舷脛に2基、合計6門装備されたミサイル発射管。

空間転移型ミサイル、通称ESミサイルを発射可能。

装備箇所の関係上、発射の際はネオジェイダーの足を相手に向ける必要がある。

レーザー速射砲

：両爪先に1基ずつ装備された小型レーザー速射砲。

射程と連射性に優れ、主に牽制に利用される。

プラズマブーメラン

：星間連合の手によって追加装備された近く中距離用装備。

プラズマをJパワーで収束してブーメラン状にした物で、消費エネルギーと比較して威力が高く、使い勝手がよい。

メガプラズマソード

：ネオジェイダーの両腕に装備された近接格闘用武装で、いわゆる『ビームサーベル』。プラズマをJパワーによって収束して剣状にした物と思われる。

実体型の近接専用武器、例えばウィルマチェットやウィルブレード等は、いかに材質が強固とはいえ、鋭利な刃先などは特に刃こぼれなどの損耗が生じ易い。

それに対してプラズマソードは、刃自体に切断力があっても実体がないために刃こぼれが生じず連続使用が可能である点において優れている。

同じ構造のものをソルダートJ自身も両腕に装備しているが、ソルダートJのそれは特に『ラディアントリッパー』という愛称が銘打たれている。

その切断力、殺傷力は絶大で、ソルダートJ自身の戦闘能力とあいまって新種の装甲

をバリアごと両断する。

2 連装反中間子砲

・ネオJアーク（ネオキンググジエイダー）及び、ネオジエイバード（ネオジエイダー）の主砲。

両脚に2基ずつ、合計4基が装備されている。

反中間子ビームを目標に対して放射し、目標の装甲強度等とは無関係に原子をその構造そのものから破壊する。

地球で開発された反中間子フィールド発生ツール、モレキュルプレーネと原理的には同一であるが、こちらはより広範囲に、しかも光線状にして発射することができ、中間子の対消滅速度も格段に早いものとなっている。

星間連合の手で改良を受け、旧ジエイダーの物と比較して、威力、連射速度共に約15%上昇している。

ネオキンググジエイダー

・ネオジエイダーとネオJアーク・キャリアーモードがメガフュージョンして完成するジャイアントメカノイド。

ネオジエイダー同様、その外見はわずかに大型化した以外特に違いはないが、『星間連

合』の改修によって、その基本性能は大幅に上昇している。

また、最強武器であったJクオースは貫通力を強化したメガJクオースに改良されている。

型式：ジャイアントメカノイド

パイロット：ソルダートJ

搭載AI形式：トモロ―0117

全高：101.5m

重量：32750+1000（メガJクオースの重量）t

内蔵タンク容量：機密

動力：ハイパージュエルジェネレーター×10

ハイパージュエルジェネレータークラス：機密

構造：強化型単一構造結晶装甲

出力：over275,812,031kW（375,000,000馬力以上）

最高走行速度：215km/h

最高飛行速度：104,040,000km/h（マッハ85000）

推進装置：背面部メガインパルスドライブ

バリアシステム：フィールドジェネレイティングアーマー

バリアシステムによって耐久可能な最大エネルギー負荷：35・774×10⁶ 15 J相当

物理防御システム：強化型単一構造結晶装甲

物理防御システムによって耐久可能な最大衝撃負荷：33・852×10⁶ 9 J相当

特殊装備・ESウインドウ空間転移装置

武装

連装レーザー速射砲

：全身に2連装8基、単装2基、合計18門搭載された対空防御用レーザー速射砲。

搭載された生体コンピューター『トモロ—0117』の制御により、自動追尾照準、予

測射撃が可能。

4連装ES爆雷投下管

：全身に6基、合計24門装備された爆雷投下装置。

空間転移型爆雷、通称ES爆雷を投下可能。

光を取り込み物質を精製する光子エネルギー変換翼の働きにより、装填速度にこそ限界があるものの、ほぼ無限に等しい投下が可能。

4連装無限ミサイルランチャー

：全身に6基、合計24門搭載された小型ミサイル発射管。

光を取り込み物質を精製する光子エネルギー変換翼の働きにより、装填速度にこそ限界があるものの、ほぼ無限に等しい発射が可能。

発射される小型ミサイルは、敵に対する攻撃よりも弾幕展開による敵への牽制など防衛目的に使用されることが多い。

3 連装E Sミサイル発射管

：両腕に2基、合計6門装備されたミサイル発射管。

空間転移型ミサイル、通称E Sミサイルを連射可能。

光を取り込み物質を精製する光子エネルギー変換翼の働きにより、装填速度にこそ限界があるものの、ほぼ無限に等しい投下が可能。

2 連装反中間子砲

：ネオJアーク（ネオキングジェイダー）及び、ネオジェイバード（ネオジェイダー）の主砲。

片腕に2基、合計4基8門装備されている。

反中間子ビームを目標に対して放射し、目標の装甲強度等とは無関係に原子をその構造そのものから破壊する。

地球で開発された反中間子フィールド発生ツール、モレキュルプレーネと原理的には同一であるが、こちらはより広範囲に、しかも光線状にして発射することができ、中間

子の対消滅速度も格段に早いものとなっている。

星間連合の手で改良を受け、旧キングジエイダーの物と比較して威力、連射速度共に約25%上昇している。

5連レーザー砲

：ネオキングジエイダーの両手、各五指に装備されている強力なレーザー砲。

星間連合の手で改良を受け、旧キングジエイダーの物と比較して威力、連射速度共に約25%上昇している。

両手同時に使用すれば『10連レーザー砲』となる。

メガJクオース

：ネオJアークの艦首に装備される巨大な錨状の必殺兵器。

破壊力、貫通力、射程に優れ、射出されると真紅の火の鳥に変化し、変幻自在の軌道を描いて目標を破壊、その核を回収した後、自動的に帰還する。

射出時にメガJクオースを取り巻く炎は、Jパワーの放出であり、それ自体が強固なバリアであると同時に強力な破壊力を生み出す。

そうした運用形態上、速射性に欠けるのが唯一の欠点である。

星間連合の手で改良を受け、旧キングジエイダーの物と比較して貫通力が約30%上昇している。

最新

メカニック編その4

Gチエイサー

初登場：—EPIISODE—06〜疾走〜

月村正樹が半ば趣味で開発していたスーパーバイク。

カテゴリーとしてはデュアルパーパスに分類され、オンロードとオフロード、その両方で100%の性能が発揮されるように設計されている。

また、前後の車輪を90度倒す事でホバー形態となり、水上や低空でも運用可能。

だが、サイボーグやエヴォリユダー、もしくはそれに準ずる身体能力を持つ者が使用する事を前提に開発した為、常人が使用する事はまず不可能。

ZN—03パンジャスとの戦闘中、長瀬唯斗に譲渡され彼の愛車となった他、新たに製作された2台がそれぞれ獅子王凱と綾瀬刃専用マシンとして、ZN—05ヴェスパス戦において実戦投入されている。

全長：2.25m

全幅：0.90m

全高：1・30 m

重量：195 kg

動力：Gモーター×1

GSNEXT | RIDEクラス：機密

出力：over 331 kW（450馬力以上）

最高走行速度：340 km/h

瞬間最大速度：355 km/h

最高飛行速度：220 km/h（ホバー形態時のみ）

限界上昇高度：7・55 m（ホバー形態時のみ）

搭乗可能人員数：2人

特殊装備

マトリクスシステム

：電気信号により、特殊磁気加工した塗装面の色彩を自在に変えることができる特殊装備。

バイクが使用してもあまり実用性はない装備だが、正樹の『カッコいいから！』という思いから搭載された。

エアブレーキ

：最高速走行からの急停止時に使用される特殊装備。
 車体後部から小型のパラシュートを展開して急減速を行う。

G ストライカー

初登場：—E P I S O D E—03（勇者王再誕!!）

月村正樹が開発し、GGG機動部隊副隊長ルナが使用するスーパーバイク。

Gチエイサーを上回る馬力とスピードを誇り、その気になれば水上をも突っ走る事が出来る文字通りの怪物マシン。

オンロードでの追跡や、一撃離脱戦法に向いているが、悪路に弱く小回りが若干効き
 難しい事、そしてサイボーグやエヴォリユダー、もしくはそれに準ずる身体能力を持つ者
 でなければ乗りこなせないのが欠点。

旧ガンマシンと同型のAIを搭載しており、ある程度なら無人での運用が可能。

全長：3.25m

全幅：0.95m

全高：1.25m

動力：Gモーター×1

G S N E X T—R I D Eクラス：機密

出力：over 515 kW (700馬力以上)

最高走行速度：400 km/h (地上走行時)。水上走行時は280 km/h)

瞬間最大速度：415 km/h (地上走行時)。水上走行時は295 km/h)

搭乗可能人員数：2人

特殊装備

エアブレーキ

：最高速走行からの急停止時に使用される特殊装備。

車体後部から小型のパラシュートを展開して急減速を行う。

武装

ウエポンバインダー

：フロントフォーク部分に合計2基装備された多目的ガンポッド。

上下2つの銃口を持ち、上の銃口からはパルスレーザー、下の銃口からは20 mm口

ケット弾を発射可能。

3連装ロケットランチャー

：車体前部に装備されたロケットランチャー。

普段はカウル内部に収納されており、使用時にポップアップする。

G キャリアー

初登場：―E P I S O D E―04 ㄱ 着裝（前編） ㄱ

：GGGが誇る大型特殊車両。一般的なトレーラー式車両同様、トラクターとトレーラーで構成されている。

トレーラー部分にGチェイサーとGストライカーを搭載し、現場に輸送する他、正樹と数名のバックアップクルーが搭乗する事で簡易指令室としても機能する。

また、備え付けの簡易メンテナンスシステムを使用する事で、Gクラステクターの応急修理やメンテナンスを行う事も可能。

ただし、車体が大型である為、狭い道を走れないという欠点がある。

全長：14.8 m

全幅：5.20 m

全高：3.68 m

動力：Gモーター×6

G S N E X T―R I D Eクラス：機密

出力：over 5884 kW（7500馬力以上）

最高時速：240 km/h

武装

ピンポイントプロテクトシールド

：Gキヤリアーに装備された防御用装備。空間を湾曲させ、ごく薄い防御空間を形成する。

出力の関係上、車体全体を覆う事が出来ない為、発生箇所を移動させて要所要所をピンポイントで防御する方式を採用した事からこの名前がついた。

この空間は強い反発効果を有しており、ここに到達した光学攻撃の蓄積、反射が可能。また砲弾やミサイル等の物理的攻撃も高い確率で防御空間を突破する事はできず、プロテクトシールド表面においてほぼ完全に防御される。

7・62mmマシンガン

：トラクターのフロントバンパー部分に単装2基装備された機関銃。

主として、車体に接近する敵の迎撃に使用される。

遠隔操作式複合兵装システム

：トレーラーの車体上部に搭載されたRWS。遠隔操作式無人砲塔。

砲塔左右に2連装式12・7mmマシンガン2基、中央に単装式40mmグレネードマシンガン2基を搭載している。

主として、車体に接近する敵の迎撃に使用される。

ポルコート・ヌーヴオー

初登場：―EPISODE―08〜飛翔〜

フツヌシ事件の際に大破し、通常動力のローバーミニにAIとイオンセンサーを搭載する形で再生、通常任務へ復帰していたポルコート。

ルネIIカーディフII獅子王と共にGGGへ移籍した際、前々から性能低下による戦闘能力の不足を痛感していた彼は月村正樹に対し、変形機構の再搭載を直訴。

予算の都合上、変形機構の再搭載は却下されたものの、その代わりに新たなボディを取得。高性能戦闘用マシンとして復活を遂げた。

従来のローバーミニでは積載能力に限界があった為、車体をアストンマーチン・DB SV12をベースにした新型ボディに変更している。

ちなみに、正式名称はポルコート・ヌーヴオーであるが、周囲からは今までどおりポルコートと呼ばれている。

搭載AI型式：GBR―10PORCAUTO

全長：4.75 m

全幅：1.94 m

全高：1.30 m

重量：2.25 t

動力：GSNEXT-RIDEX1

GSNEXT-RIDEXクラス：機密

出力：over1471kW（2000馬力以上）

最高走行速度：430km/h（地上走行時。水上走行時は310km/h）

瞬間最大速度：445km/h（地上走行時。水上走行時は325km/h）

特殊装備

ホログラフィックカモフラージュ

：自らの機体に反射する光を、内蔵ミラーコーティングの応用で自在に屈折させ、周囲の景色に溶け込むように機体を隠蔽する特殊装備。

ミラーコーティングにより自らが発するあらゆる電磁波や熱を遮断することができるため、高い隠密性を獲得することが可能である。

ただし、それは見えただけで実際に『消えた』わけではない為、手に触れば『何がそこにいる』ことが確認できる。

また、レーダーやソナーには探知されてしまうし、匂いも消せない為、イオンセンサー等を使用した場合の探索には無力化してしまう。

しかし、新種との戦闘においては、有視界戦闘が基本であるため、ホログラフィックカモフラージュは有効な装備となっている。

内蔵ミラーコーティング

：文字通り、機体内部に搭載したミラーコーティングシステム。

AIの指令によって任意に機体表面をミラー粒子でコーティングできる。

これにより、ポリコートは高い防御能力と隠密性を獲得している、

イオンセンサー

：改造前からポリコートに装備されている特殊装備。

イオンとは+あるいは-に電荷を帯びた原子や原子団の事で、通常多くの原子や分子は電氣的に中性（電荷の+、-が等しい状態）である。

しかし、なんらかの理由によって電子を失い、または得ることによってその電子の数の分電気量を帯びる。これをイオン化という。

電子は-の電荷を帯びているため、電子を失った場合、原子あるいは分子の電荷は+へ傾き、陽イオンとなる。

逆に電子を得た場合、原子あるいは分子は-の電荷を帯び陰イオンとなる。

イオンセンサーはこの電位差反応を選択的に察知し、『臭い』を感じることで目標の電磁的、光学的欺瞞を看破し、その位置を特定することが出来るのである。

ちなみにポリコートのAIには人間の感覚に合わせた形で『臭い』に対する感情が認識される。

よって、例えば『悪臭』は不快感となってポルコートに認識される。更にイオンセンサーは人間の嗅覚よりも遙かに過敏であり、その感じ方は一層強いものとなっている。

武装

5. 56mmマシンガン

：フロントグリル部分に2基装備されているマシンガン。主として、接近する敵の迎撃に使用される。

ポルコートの擬装性を損なわないよう、普段はフロントグリル内部に収納されており、使用時にのみ展開する仕組みとなっている。

パルスレーザーガン

：フロントバンパー下部に2基装備されているレーザー砲。5. 56mmマシンガン同様、主に接近する敵の迎撃に使用される。

ポルコートの擬装性を損なわないよう、普段は外からは見えない様収納されており、使用時にのみ展開する。

自動追尾式ショットガン

：ボンネットの左右に1基ずつ装備されたショットガン。口径は10ゲージ（19.6mm）。

弾丸は主にダブルオーバック（9粒弾）を使用するが、状況に応じてスラッグ弾も使

用する。

普段はボンネット内に収納されており、使用時にのみポップアップする。

30mmリヴォルバーキャノン

：後部トランクに内蔵された機関砲。ポルコートの武装の中で最長の射程を誇る。

ポルコートの擬装性を損なわないよう、使用時にのみ展開される仕組みとなっている。

弾丸はA P I 徹甲焼夷弾が使用される。

5連装ロケットランチャー

：ルーフ部分に装備された口径40mmの連装ロケットランチャー。

他の銃火器同様、使用時にポップアップする仕組みとなっている。

発射されるロケット弾は正樹曰く『特別仕様の逸品』で、主力戦車を除く全ての地上・航空兵器を撃破できるだけの威力を誇る。